
斉天大聖
カンピオーネ!
Campione Ⅶ
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

VII　斉天大聖

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
斉天大聖
Campione VII


孫悟空
アニー
J・P・S
エリカ
護堂
祐理
羅濠


「ジョン・プルートー・スミスの参戦は、君を冥府に導く運命の先ぶれと思うべきだ」
「ひとりより、ふたり、ふたりより三人……っていうのを知ってるか?」
ふたたび戦場ヶ原に降り立つ斉天大聖
しかし今回は、衝撃で地形が変わった。
黒き猪にまたがり、
竜を従えた斉天大聖の勇姿が大地を抉り、
土と緑と花々を吹き飛ばして、
クレーターを穿ったのだ。
大穴の底で大聖は騎獣の腹を軽く蹴り、
地上に登らせた。
黒き魔鳥も舞い降り、
黒き衣の男に変化していく。
地上では乙女と少年のふたり連れが
こちらに駆けてくるところだった。
「さあて神殺しども、最後までつき合ってもらうぞ!」
斉天大聖は眼下の宿敵たちへ快活に呼びかけた。
「待たせましたね大聖、そして我が弟よ」


「ふ、無事のご復活、何よりです」
「これはいわば等価交換よ。おたがいの裸を鑑賞し合っただけなのですもの」
「こ、こちらを見ないでください、護堂さん！」
「えーと……。じゃあさ、お詫びに王様も恵那のを見ていいよ？」

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。

万ま里り谷やひかり

祐理の妹。媛巫女見習い。

羅ら濠ごう

《五嶽聖教》教主。

陸りく鷹よう化か

羅濠の直弟子。

アニー・チャールトン

ロスのチャンピオンの協力者。

沙さ耶やの宮みや馨かおる

正史編纂委員会東京分室室長。

Contents

第１章　孫行者、聖域を大いにかき乱す
第２章　三妖、倭国の霊山にて一堂に会す
第３章　草薙護堂、猴王の版図に足を踏み入れる
第４章　黒き英雄現れ、大聖は鋼の真価を示す
第５章　媛たちに難が及び、二王は盟約を交わす
第６章　神と神殺し、両雄矛を交えて決戦す
第７章　神々と神殺したち、激戦の果てに雌雄を決す
終　章

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
斉天大聖
Campione VII

第１章　孫行者、聖域を大いにかき乱す

1

　すでに陽ひは落ち、宵よいの口を迎えた日につ光こう東とう照しょう宮ぐう。

　神しん君くん・徳とく川がわ家いえ康やすを祀まつる奥おく社しやは、拝はい殿でんや本ほん殿でんから二〇〇メートルほど離れている。

　この一角は、すでにただの禿はげ山であった。こぢんまりとした社やしろも、鬱うつ蒼そうと茂っていた杉の木々も跡あと形かたもなく吹き飛んでしまった。

　その禿げ山を空中から見下ろす少女がいた。

　宙に浮かぶ黄金色の雲を踏みしめ、白びやく衣えに緋ひ袴ばかまの巫み女こ装しよう束ぞくをまとう。

　顔はサルに擬ぎした面で隠している。手に握るのは如によ意い金きん箍こ棒ぼう。何の変哲もない鉄の棒に見えて、数々の武ぶ功こうを打ち立てた伝説的な武器だ。

「ふむ。我われにふさわしき装束を、今すこし整えるとするかね」

　少女——否いな、万ま里り谷やひかりの体を乗っ取った斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうは言った。

　巫女装束が黄色い衣ころもに改まる。黒と緑の刺し繍しゆうで飾り立てられ、裾すそは足首に届くほど長く、左右に大きな切れ目が入っている。その下は紅あかい細袴ズボン。

京きよう劇げきで『靠こう』と呼ばれる衣装であった。

猿えん猴こうの面もずらし、ひかりの顔と、火か眼がん金きん睛せい——緋色の眼球と金の瞳ひとみが露あらわになった。

「よし、よし。これでだいぶらしくなった。待たせたのう、諸君！」

これを見上げるのは草くさ薙なぎ護ご堂どうと羅ら濠ごう教きよう主しゆ、そしてエリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャール、陸りく鷹よう化か。五名の人間たちだった。

「神殺しがふたりもおるとは厄やつ介かいなことよ。……いや。ある意味では好都合と言うべきか。ふふふ、天は我われに味方しておるのやもしれぬ」

胡乱うろんなことをつぶやいた途端、斉天大聖の神力が爆発的に高まった。

何だ、このパワーは!?　護堂は驚きよう嘆たんした。今まで遭そう遇ぐうしたメルカルト、アテナ、ペルセウスなど——いかなる神々をも凌しのぐ力だ！

「何かの役に立つかもしれぬ。この蛇へびめの身柄もいただいておくかね」

禿げ山に横たわる、傷だらけの美少女。たしかアーシェラという名前だったか。

斉天大聖は黄金の雲の上から如意金箍棒を伸ばして、地上の魔女を小こ突づく。アーシェラの体は一瞬で消え失せてしまった。まるで手品だ。

「姿はともかく、どうやら《鋼はがね》としての本ほん地じを取り戻したようですね。……よいでしょう、大聖。今こそ決着をつけましょう！」

棒を元の長さに戻した大聖へ、羅濠教主が鋭く言った。

しかし、ふらついている。ダメージがまだ抜けていないようだ。

ひかりを救うために、護堂も挑いどみかかりたいところだった。

だが体は動かない。『鳳おおとり』の化け身しんを使ったあとの硬直がはじまったのだ。心臓にもギリギリと痛みが走る。

「護堂、このまま戦うのは相当に厳しいと思うわよ」

「ええ。奪われた万ま里り谷やひかりの体を取り戻したいところですが、あなたも羅濠教主も今は休息し、力を蓄たくわえなくては。退却すべきです」

　脇わきからエリカが警告し、リリアナが進言する。

　護堂も同感だった。しかし、斉天大聖が許してくれるかどうか。

「では、古き因いん縁ねんにケリをつけるかね。ただし、まとめて始末をつけさせてもらうがのう」

　案あんの定じよう、斉天大聖はひかりの顔で笑い、ひかりの声で告げた。

　黄金の雲に乗ったまま、地上を見下ろしている。ただし、その目が捉とらえるのは羅濠教主と草薙護堂のふたりだけ。他の人間たちは一いつ顧こだにしていない。

「至いたれる哉かな、坤こん元げん。萬ばん物ぶつ資とりて生ず。乃すなわち順したがいて天を承うく。地勢は坤なり！」

　斉天大聖は片手で印を結び、口こう訣けつを唱となえた。

　変化はいきなりだった。石だ。禿げ山と化した日光東照宮・奥舎の地面が石となり、固まっていった。雪で大地が白く染め上げられるように——。

　護堂たちの立っていた地面は、瞬またたく間まに灰色の石で覆おおわれてしまった。

「ははははは！　石せき山ざん巌がん窟くつの秘法を以もつて、おぬしらを閉じ込めてくれるわ！」

　奥社周辺の杉林——まさしく林立する木々が次々と石化する。東照宮奥社を中心に、波紋のように石化現象は広がっていった。

　しかも、護堂の体がゆっくり地面に——石のなかに沈む。まず足

首まで、次ついで膝ひざ、すぐに腰、やがて胸、しまいには頭まで。おまけに隣を見れば、絶世の佳か人じんたるカンピオーネまでいっしょに沈んでいくところだった！



「く——！　わたくしたちを封印するつもりですか⁉」

「ははッ、ご名答じゃ！　手負いとはいえ、おぬしら神殺しは侮あなどれぬ……いや、むしろ手負いの方が恐ろしいという、道理の通じぬ連中じゃからのう。せっかく甦よみがえったのじゃ、敢あえて火中の栗を拾う必要もあるまいて！」

　羅濠教主の叫びに、斉天大聖はひかりの声で答えた。

「——護堂！」「草薙護堂⁉」「師し父ふ⁉」

　エリカとリリアナ、そして陸鷹化の叫びを聞いたときには、完全に沈みきっていた。

　石のなかは無明の闇やみ。しかし、隣で沈む佳人の姿は見て取れる。

「孫悟空は神しん仙せん術じゆつの極意を得た神じん通つう無む限げんの神。《鋼》の軍神でありながら、術に長たけた呪じゆ法ほうの神でもあります。このような手で我らを陥おとしいれるとは、油断しました」

　闇のなかで羅濠教主がつぶやいた。

　胸の痛みを堪こらえながら答えようとすると、教主はフッと微笑ほほえんだ。

「先の戦いで力を使い果たしましたか。後先を考えぬ思い切りのよさは若き戦士の特権とはいえ、その程度の代だい償しようでわたくしに勝利するとは……さすがですね、草薙王よ」

「お、俺が勝った？　バカを言わないでください」

「よいのです。形の上では引き分けであっても、わたくしとあなたの経歴を鑑かんがみれば勝敗は明らかでしょう。わたくしほどの名手が、あなたのような若じやく輩はいの一手で倒されたのは度どし難がたい不覚。この羅ら濠ごう、己おのれの心を偽いつわるような愚ぐ物ぶつではありません」

　魔教教主はやや憮ぶ然ぜんとした表情になった。

「武ぶ林りんの至し尊そんとして認めましょう。先ほどの仕し合あい、たしかにわたくしの負けであると」

　痛みに耐えながら護堂は呆あきれた。さっきの死闘も、彼女にとっては仕合だったのだ。剣道の試合で『一本取られた！』と悔しがるようなものか。

「ところで草くさ薙なぎの王おう、あなたは水や空気がなくとも生き延びる術の心得はありますか？」

「あるわけないですよ。俺は神様と戦うこと以外、基本的に普通の人間です」

　唐とう突とつな質問に答えたら、教主はすこし考え込んだ。

「そうですか……。ならば、地上に戻るのはあなたの方がよさそうですね」

「戻る!?　ここから脱出できるんですか!?」

「ええ。大聖の術が完成するまで、今すこしの猶ゆう予よがあります。わたくしに残された気を振り絞れば、我らのどちらかだけなら地上に戻すことも可能でしょう」

　思いがけない教主の言葉。しかし、護堂は即座に反論した。

「でも、それだと教主が幽かくり世よに残ることに！」

「かまいません。感じませんか、草薙王よ？　空気がすこしずつ薄まっています。捕らえた我らに水や食糧を分けあたえるほど、大聖は慈じ悲ひ深くもないでしょう」

　護堂も勘かんはいい方だが、羅濠教主の方が遥はるかに鋭えい敏びんなようだ。

　指摘を聞いてゾッとした。たしかに、あのサルが捕ほ虜りよを歓かん待たいする理由などない。

「その点、わたくしは武林の至尊にして道どう家けの頂点に立つ者。その程度の荒あら行ぎようは、一〇〇年も昔に克こく服ふくしております。この場はわたくしが残りましょう」

「み、水や空気がなくても生きられるってすごいですけど、でも！」

「よいのです。ここでわたくしがあなたを見捨て、ひとり地上へ舞い戻れば……考えるだにおぞましい結果となるでしょう！」

「お、おぞましい？」

「ええ。先の仕合でわたくしに勝ったばかりのあなたをを見捨てれば、世人はきっと敗北を怨えんじての行いと噂うわさし、この羅濠を英えい傑けつの道に背そむく卑ひ劣れつ漢かんと見なすはず。武林の至尊たる我が誉ほまれのために、わたくしはあなたを救わねばならないのです！」

「あー……なるほど」

　豊かな胸をそびやかす教主に、護堂はうなずいた。

　人助けのありがたみがうすれる宣言である。やはり、異様にプライドが高い人なのだ。

「無論、わたくしもおとなしく雌し伏ふくするつもりはありません。必ず脱出を果たすつもりです。……草薙王。わたくしが戻るまでの間、名みよう代だいとして斉せい天てん大たい聖せいとしっかり戦うのですよ」

　助ける代わりということか、上から目線で命じられた。

　しかし、護堂は首をかしげた。この石いし牢ろう、言うほど易やす々やすと破れるものだろうかと。

「……問題ありません。わたくしは道家の頂点にも立つと申したばかりでしょう。必ずや牢ろう獄ごくの綻ほころびを見つけ、打ち壊してみせます。妙な心配などせぬように」

　こちらの懸け念ねんを察したのか、ムッとした表情で教主は釘くぎを刺した。

「では参りましょう。——大たい聖せい北ほく斗と七しち元げん君くん、能よく凶きよう神しんの厄やくを解く！」

　教主は月げつ琴きんの音色にも似た美声で謡うたい、長方形の紙

切れを取り出した。複雑な模様と『八はつ卦け之の精せい急きゆう急きゆう』の六字が大たい書しよされている。これを投げた。

　紙切れは白い虎とらとなり、宙を飛んで護堂へ襲いかかる。

　虎は大きな口と牙きばを使って、護堂の襟えり首くびを器用につまみ上げた。そのまま護堂の体ごと上昇する。

　ゆっくり沈んでいく羅濠教主との距離は、あっという間に広がった。

「武ぶ運うんを祈ります、草薙王よ！　英雄たるにふさわしい戦いぶりを示しなさい！」

　絶世の美少女はあくまで上から目線のまま、護堂に別れの言葉を告げた。

2

　何もない闇やみの空間を、護ご堂どうは空飛ぶ白びやつ虎ことといっしょに上昇した。

　その間、おそらく数十秒。唐とう突とつに闇やみを抜け出て、地上へ躍おどり出る。

　石化した東とう照しよう宮ぐう奥おく社しやの跡地。万ま里り谷やひかりを乗っ取った斉せい天てん大たい聖せいは、悠ゆう然ぜんと雲に乗ったままだった。地上ではリリアナが見慣れぬ薙なぎ刀なたのような武器を構え、エリカは傷ついた体でクオレ・ディ・レオーネを握る。陸りく鷹よう化かは両手の掌しようを開いていた。

　彼女たちの視線が、帰き還かんした護堂に向けられた。

　ここまで引っぱってくれた白虎は、役目を終えて煙のように消え失せる。

「無事だったのね、護堂！　でも、羅ら濠ごう教きよう主しゆは!?」

「お、俺を助ける代わりに、下に落ちていった。本人は自力で脱出するって言ってたけど」

　エリカの問いかけに端折はしよった説明をする。

　硬直中なので、話すだけで一苦労なのだ。すると陸鷹化が訳知り顔でうなずいた。

「師し父ふらしい言いぐさです。草薙さまを見捨てて自分ひとりで戻ったら、悪い噂になるとか考えたんでしょう」

　師の人となりを把は握あくしているらしい。みごとに正解してみせた。

「——ほう。ひとり逃のがしてしまったか。思い通りにはいかんものじゃのう」

　雲に乗った斉天大聖が如によ意い金きん箍こ棒ぼうを振り上げた。

　息を呑のんだところで、リリアナが護堂のそばまでやってきた。

「みんな、集まれ！　ふもとまで飛んで、万里谷祐ゆ理りたちと合流しよう！」

　超高速で空を翔かける『飛ひ翔しよう術じゆつ』。あれを使うつもりなのだろう。

　しかし、逃げ切れるかどうか……。孫そん悟ご空くうの空飛ぶ雲が魔女術よりも遅いとは、あまり期待できまい。護堂が懸け念ねんした瞬間だった。

「ふふん、逃げても無駄じゃよ。この孫さま、電光石火の早はや駆がけには自信があってのう。十じゆう万まん億おく土どの端から端までもひとっ飛びで——くはっ⁉」

　目に見えぬ一撃を受けたかのように、斉天大聖が雲の上で膝ひざをついた。強大無比な神力はそのままだが、体が自由にならないらしい。

「よくわからないが、チャンスのようだ！」

　大聖の急変を見て、リリアナが護堂の体を抱え込んだ。

　エリカと陸鷹化も近寄ってくる。全員は青い光に包まれ、飛び立った。

　飛翔術は目的地を決めてから飛ばねばならず、見知らぬ場所には移動できない。

　だが、それでもおそろしく便利な魔術だ。一行は東照宮の本ほん殿でんと拝はい殿でん、唐から門もんや神しん厩きゆう舎しやも飛び越えていく。東照宮、二ふた荒ら山さん神じん社じや、輪りん王のう寺じの敷地内にある建造物、杉林、土や草花、泉の水など、全てが石となっていた。

　ふもとにある表おもて参さん道どうへ着陸。祐理とプリンセス・アリスが駆け寄ってきた。

「万里谷！　すまない、ひかりがあのサル、斉天大聖に体を取られて……！」

「はい、もう存じております。姫様が幽――あの御力で護堂さんと教主の戦いをのぞかれて、何が起きたのかを教えてくださったのです」

　謝罪しようとしたら、祐理に遮さえぎられた。

　幽ゆう体たい離り脱だつの特技を持つプリンセスもうなずきかけてくる。

「この山のほとんどが強い神力に侵おかされています。羅濠教主と草くさ薙なぎさまを封じ込めるため、斉天大聖が石の牢獄に変えた結果です。数カ月、もしかしたら数年がかりで解かい呪じゆを施ほどこさなくては、おそらく教主さまを救い出すことは――」

　アリスの言葉に、皆が周囲を見回す。石化はふもとまで到達していた。

　東照宮の入り口に立つ鳥とり居い。すぐそばの五ご重じゆうの塔とう。神しん域いきへと至る表参道。杉並木。砂利と土から成る地面。道の端に設けられた排水溝。

　視界内の全てが石となっていた。例外は彼ら自身のみだった。

「……でも、その割りにあなたはお師し匠しよう様を心配してないようね？」

　エリカが訊たずねたのは陸鷹化だった。

　皆が不安そうにするなか、彼はひとりだけのほほんとした顔つきであった。

「だって、閉じこめられただけで死んじゃいないんだろ？　だったら、師父は自力で牢屋をぶち破る方に賭けたっていいな」

　端正な顔立ちの美少年は行儀悪く頭をかいて、つまらなそうに言った。

「あら、その根拠は？」

「ないよ、そんなの。でもさ、そちらの王様が同じ境遇になったとするだろ？　姐ねえさんたちも多分、心配はするけど死んだとか思わないんじゃないか？　それといっしょだよ」

　陸鷹化の言いぐさにエリカは目を丸くし、それから微苦笑した。

　リリアナも祐理も顔を見合わせ、深々とうなずく。人を化け物みたいに言うなと、護堂は文句をつけたくなったが。

「そんなことよりさ、ずっと不思議だったんだけど……。夕方までここにいた人間たちはどこに行った？　師父と草薙さまが戦ってた辺りから、全然姿を見てないぞ」

　そういえば、たしかに。陸鷹化の指摘で、ようやく護堂はそこに思い至った。

　気配が近づいてきたのは、ちょうどこのときだった。

　石化した杉林の奥から、小さな動物たちが近寄ってくる。——サルだ。

　しかも一〇〇匹近くいる。おびただしい数のサルたちが石となった杉の幹に隠れたり、枝に乗ったりして、護堂たちに注目していた！

「何だ、こいつら？　斉天大聖が野生のサルを呼び出したのか？」

「にしたって、数が多すぎますね。イヤな感じですよ」

　護堂と陸鷹化の疑問に答えてくれたのは、霊視力を持つ祐理だった。

「この猿たちは——いえ、この方々は人間です。斉天大聖さまの神通力で、人間が猿に変えられてしまったのです！　おそらく、さきほどまで日につ光こう山さんにいた観光客のみなさんや、街の方々ではないかと……」

　震える声で媛ひめ巫み女こが語る。『まつろわぬ神』が顕あらわれた土地では、非現実な超自然現象がしばしば発生する。今回は人がサルに変わる現象か！

　護堂が絶句すると、聞き覚えのある声が闇やみ夜よに響き渡った。

『我が王国の民たみよ、聞けぃ！　我のもとより仇きゆう敵てきたる神殺しとその一味めが逃げ出した！　そやつらを捕らえ、引っ立ててきた者に褒ほう美びをくれてやるぞ！』

　ひかりの声だが、剽ひようげたイントネーションは斉天大聖のものだ。

　サルたちがざわつく。連中の視線は護堂たちに注そそがれており、殺気立ってきた。

「彼らが襲ってきたら、剣に物を言わせて斬きり破る……のはまずいわよね、騎士としては」

「ああ。なるべく傷つけないように無力化すべきだろうな」

　エリカが愚ぐ痴ちるようにつぶやくと、リリアナも憂ゆう鬱うつそうに言う。対して、もうひとりの戦闘要員である陸鷹化は飄ひよう々ひようとしていた。

「ま、連中を殴り殺しても懐ふところは痛まないけど、さすがに気は咎とがめるかな。何なら僕が車を調達しますので、とっとと逃げ出しましょうか？」

「調達？　陸くんだっけ、君たちは車でここまで来たのか？」

護堂が訊たずねると、陸りく家け御おん曹ぞう司しは人の悪い笑顔を浮かべてみせた。

「いいえ。でもほら、持ち主がエテ公になったヤツがその辺の駐車場にいくらでもあるじゃないですか。選び放題ですよ。幸い、我が陸家にはそういうのが得意な舎しゃ弟ていも多いんで、僕もいろいろ心得があります。鍵かぎの始末も運転の方も、何とかしてみせますよ」

こいつ、本当にいいところのお坊ちゃんなのか？　疑問に答えたのはエリカだった。

「この子について誤解があるといけないから言っておくけど、聞くところによると香ホン港コン陸家って先祖代々の無法者だそうよ。はぐれ者とかヤクザでもいいけど」

「やだなエリカ姐ねえさん。もうすこし上品に『侠きよう客かく』と呼んでくれよ」

くくっ。陸鷹化がほくそ笑む。

「ま、三さん侠きよう五ご義ぎや水すい滸こ伝でんの昔から英えい雄ゆう好こう漢かん、武ぶ侠きようの類たぐいは無法の星に生まれた輩やからってことさ。ご先祖様の職歴をたどると『賊ぞく』のつく仕事はあらかた網もう羅らできるぜ。あ、でも奸かん賊ぞくだけはいないのが陸家の自慢なんだ」

「つまり盗賊、山賊、海賊、馬賊、匪ひ賊ぞくという辺りか……」

由ゆい緒しよ正しき無法者を前にして、リリアナがかえって感心した口調でつぶやいた。

「背に腹は代えられないというが、選択の余地があるときにわざわざ法を犯すこともないだろう……。エリカ、また飛翔術を使う。しばらく時間稼ぎを頼む」

「わかったわ。いい避難先を見つけて頂ちよう戴だいね」

エリカがうなずくと、リリアナは目をつぶった。土と地ち鑑かんのない場所で飛翔術を使うときは、視覚を出張する術などで移動先を確認しなくてはならないのだ。

「黑くろ金がねの炉ろに火ひ種だねを投ず。紅あかき車輪の精せい髄ずいを我が手に！」

　エリカが言こと霊だまを唱となえると、護堂一行の周囲を焔ほのおが取り巻いた。

　高さ一メートルほどの焔が、壁のようにサルたちの視線と殺気を跳はね返す。猿軍団をこれで牽けん制せい・防御するつもりなのだろう。

　数匹の血けつ気き逸はやったサルが飛びかかってくると、焔の壁は二倍近くふくれあがる。

　紅い舌で舐なめ取られて、サルたちはきぃきぃ啼なきながら群れに戻った。

『……ほほう。我が眷けん属ぞくどもが元は同どう胞ほうだと見抜きおったか。なかなか鋭いのう。ならば、新たな趣向を用意せねばならんか——』

　ふたたびひかりの、否いな、斉天大聖の声。

　猿知恵よりも上等な悪知恵を持っているようだ。しかし、彼が襲撃してくる気配はない。やはり何らかの理由で戦闘不能になったのか？

　護堂が考え込んでいると、いきなり祐理がきょろきょろ周囲を見回した。

「何か霊視したの、祐理？」

「は、はい、エリカさん。危険な何か、警戒すべき脅きよう威いが近づいてきます。すぐそこまで来ているはず——みなさん、上です！」

　護堂も上へと視線を転じ、驚いた。

　漆しつ黒こくの夜空からサルが降ってくる。体毛はオレンジがかった赤しやく銅どう色いろ。そして、サイズが普通ではなかった。ズン！　着地するなり轟ごう音おんが響き、大地が揺れる。

　表参道に降り立ったサルは、周囲に立つ杉の木よりも背が高かっ

た。

　身の丈たけ一二、三メートルというところか。体型も逞たくましい。手が長くて短足。ずんぐりむっくりの巨体は、ゴリラやオランウータンに近かった。

　あれが相手では、エリカが作った焔の壁も役に立つまい。

「今までの猿たちとはちがう――あれは神獣よ！　斉天大聖に仕つかえる猿の神獣。多分、竜にも匹敵する強さを持つ、とてつもなく強大な！」

　エリカの警告を受けて、護堂はリリアナを見た。

　銀髪の騎士は目を閉ざしたまま。飛翔の準備は整っていないようだ。

　しかも、また一匹、天から大ザルが降ってきた。エリカたちでも神獣に勝つことは至難だという。その難敵が二体も降こう臨りんした。いよいよ絶体絶命の状況に陥おちいったようだ。

3

　ズンズンと石の大地を揺らしながら、二匹の巨きょ猿えんが歩み寄ってくる。

　それを見ながら陸りく鷹よう化かが言った。

「ここは体を張るしかないようですね。草くさ薙なぎさま、僕がまず打って出て、やつらを引きつけます。その隙すきに落ち延のびてください」

「待ってくれ。今日出会ったばかりの君に、そこまでさせられないよ」

「いえいえ。草薙さまが師し父ふの代わりに戻られたのなら、名みょう代だいも同然。あなたのために働かなかったら、あとで僕はものすごい折せつ檻かんをされるでしょう。これは保身のためです」

　さらりと言う少年に同情した。考えてみれば、あの女性が師し匠しようなのだ。今まで相当な苦労をしてきたのではないか？

　もっとも、ふてぶてしく笑う陸鷹化を見て、すぐに考えを改めたが。

「それに羅ら翠すい蓮れんもその弟で子しも、足手まといを抱えて戦うのに慣れちゃいないのですよ。好きに飛び回らせてもらいます。——それでいいだろ、姐ねえさんたち？　まさか、僕の足についてこられるなんて自うぬ惚ぼれちゃいないだろうね？」

　この大たい言げんに、ふたりの女騎士は不ふ承しよう不ぶ承しようという感じでうなずいた。

　神しん童どう、天才と呼ばれる彼女たちにここまで言ってのける気性と実力。やはり、あの師にしてこの弟子あり。何だかんだ言って似合いの師弟かもしれない。

　方針を表明した少年は、石化した杉林に跳ちよう躍やくした。

　翼つばさある鳥のごとき飛ひ翔しよう。彼の動きはサルたちにとって、格好の合図となった。

　身の丈たけ五〇センチから一メートル程度の猿軍団が、少年に殺到する。小さいとはいえ、獣けものである。運動神経と軽けい捷しようさでは人間を凌りよう駕がし、鋭い爪つめもあれば牙きばも持つ。

　しかし、陸鷹化はサルよりもすばやく、敏びん捷しようだった。

　あざやかに杉の枝から枝へと飛び移り、次々と飛びかかってくる猿軍団の攻撃を器用にかいくぐる。逆に人差し指や中指によるデコピンで、サルどもの額ひたいを打ち、腹部を弾はじく。喰くらった連中はことごとく昏こん倒とうし、あるいは吐と瀉しや物ぶつを吐き散らしながら悶もん絶ぜつしていく。

　突出した陸鷹化に惹ひかれて、二匹いる巨猿の片方が動きだした。

　杉林を強引にかき分けながら、一直線に少年のいる木を目指す。その辺りにいた小ザルたちは蜘く蛛もの子を散らすように逃げていった。

　ついに巨猿が長いリーチを伸ばして、獲え物ものをつかみ取ろうとした。

　ひらりと隣の木に飛び移る陸鷹化。彼は巨猿を惹ひきつけながら、ムササビのごとく枝から枝へ飛ぶ。すぐに杉林の奥へ消えてしまった。

　木々（今は石柱も同然だが）を無造作に倒しながら、巨猿もそれを追う。

　一〇メートルを超す巨体は突風じみた速さ、台風じみた破壊力で、石化した杉林を破壊していく。しかし、この巨猿はまだもう一匹いるのだ。

「東方より光あり、神秘なる御み業わざはかくあれかし！」

　いきなり言こと霊だまを唱となえ、手のひらを巨猿に向けたのはプリンセス・アリスだった。

　強烈な閃せん光こうが彼女の手からほとばしり、巨猿の眼球を灼やいた。

　ルァァアアアアアアンッ！　大ザルの咆ほう哮こうが響く。

「ア、アリスさん、今のは!?」

「聖なる巫み女こに仇あだなす者を退しりぞける、光の恩おん寵ちよう――なのですが、神獣相手では目くらまし程度にしかなりません。でも、これでお別れのご挨あい拶さつをする余裕ができました」

　自称プリンセスは悠ゆう揚よう迫せまらざる優ゆう雅がさを見せた。

　すぐそばで大ザルが手足を振り回し、雄お叫たけびをあげているのだから、たいした度胸だ。

「先ほどの子が申し上げたように、早く脱出なさいませ、草薙さま。魔王カンピオーネといえども、そのご様子ではしばしのご休息が必要でしょう」

　護堂はうなずいた。たしかにボロボロなのだ。

『鳳おおとり』の副作用がなくても、羅ら濠ごう教きよう主しゆに痛めつけられたせいで満足に動けないだろう。

「この騒動の顛てん末まつを見届けたいと思っているのですが……申し訳ありません。わたしの方もシンデレラの魔法が解ける時間になってしまいました」

　プラチナブロンドの美女は微笑ほほえみながら言った。

「呪じゆ力りよくを激しく消しよう耗もうしてしまいましたので、この体を保たもつのも、そろそろ限界です。意識を一度、本体の方に戻して休養を取ります。こちらに戻ってこられるのは……そう、何日かあとになるでしょう」

　そういえば、彼女はロンドンの自宅から霊体だかアストラル体だかを飛ばしているのだ。

　上う手まく動かない体に鞭むち打うって、護堂はきっちりと頭を下げた。

「わかりました。あとはこっちで始末してみせますので、遠慮なく休んでください。今日は本当にありがとうございました」

「いえいえ。こちらこそ、あなたのお人柄にふれることができて幸いでした」

　アリスは茶目っ気たっぷりにウインクしてみせた。

「あ、そうそう。エリカたちにも言っておきましょう。これから見ることは内密にお願いしますね。わたしも草薙さまの秘密をいろいろ内緒にしますから」

　冗談めかした要請にエリカは優美に一礼し、ついに目的を達したらしいリリアナも閉ざしていた目を開け、恭うやうやしくかしこまる。

　高貴な女性に対するような立ち居振る舞い。プリンセス・アリスは本当にいいご身分の貴婦人なのだろうか？　護堂に疑問を残して、姫君は忽こつ然ぜんと消え失せた。

「今のはまさか、幽体分離か!?」

「そういえば、叔お父じ様が前に言っていたわね。プリンセスは上うわ辺べからは想像もつかないほどの曲くせ者ものだって。いろいろ切り札をお隠しになられているのね……」

　リリアナが事情に気づくと、エリカも感慨深げにつぶやいた。

　ともかく、これで残ったメンバーは青と紅の大騎士に万ま里り谷や祐ゆ理り、そして草くさ薙なぎ護ご堂どう。

「何だかんだで、いつもの面子メンツになったなァ」

　三人の少女を前にして、護堂がつぶやいたとき。

　ガアアアアアアッ!!　視覚が回復したらしい。巨猿が突進してきた！

「リリィ！」

「わかってる！　近寄れ、万里谷祐理！　すぐに飛ぶぞ！」

「は、はいっ。わかりました！」

　エリカに促されてリリアナが指示し、祐理も即座に言われたとおりにしてみせた。いつもの顔ぶれになった一行を青い光が包みこむ。今日、二度目の飛翔術。

　ふたたび飛び立つ。石化した聖域はたちまち眼下に。

　標的を逃して怒り狂う大ザルも。その周囲で啼なきわめく小ザルの群れも。おそらく陸鷹化を追っているらしい、林を突き崩しながら激走する大ザルの片割れも。

　斉せい天てん大たい聖せいに乗っ取られたひかりが乗る黄金の雲を、護堂は一瞬だけ見た気がした。

　どこからともなく言霊が聞こえてくる。

『なむからたんのう、たらやーやー。なむおりやー、ぼりょきーちーしふらーやー。ふじさとぼーやー、もこさとぼーやー。もーこーきゃーるーにーきゃーやー』

　念ねん仏ぶつのようだ。まちがいなくひかりの——大聖の声だっ

た。

　この言霊、どんな効能があるのだろう？　いやな予感がしてたまらない護堂だった。

　手負いの神殺しが青い光に乗って飛んでいく。

　飛翔にかけても天下無む双そうの斉天大聖・孫そん悟ご空くう。本調子であれば即座に追いつき、撃げき墜ついできるところだが——。大聖は口くち惜おしさを噛かみしめながら、言霊を誦しようした。

　絶大な神力を得たのはいいが、体が言うことを聞かない。

　禍まが祓はらいの巫み女こを依より代しろにしたことで、このような陥かん穽せいにはまってしまうとは……。

　だが、せっかくの力を無駄にはすまい。大聖は一心不乱に言霊を唱えた。今の神力ならば、あの術——《鋼はがね》の軍神たる彼にとっても難しい大法が成じよう就じゆできるはず。

　完全なる斉天大聖となるためにも、今は戦いよりこちらに専念しなくては。

4

　忍びの技と、陰おん陽みよう道どうおよび修しゆ験げん道どうが混こん淆こうした呪じゆ術じゆつ。それが甘あま粕かす冬とう馬まの本領である。

　万ま里り谷や祐ゆ理りや清せい秋しゆう院いん恵え那なのような、良血の術者ではない。

　呪法に縁ゆかり深い家系の出だが、諜ちよう報ほう活動、あるいはもっと陰いん惨さんな仕事に従事してきたヤクザな呪術使いの末まつ裔えいである。ＲＰＧよろしく集団パーテイで活動するより

も、単独行動の方が技能的にも心情的にも向いていた。

　隠おん行ぎよう術じゆつ——己の姿を保護色のごとく周囲に同化させる呪術。

　得意技のひとつで身をひそめながら、甘粕は東とう照しよう宮ぐうの戦いを見届けた。陸りく鷹よう化かが林のなかに消え、プリンセス・アリスが去り、草くさ薙なぎ護ご堂どうと少女たちは飛ひ翔しようした。

　すると、一〇〇匹以上いそうな小ザルたちが動き出した。

　東照宮を離れて西の方角へ。ロマンチック街道の名前も持つ国道沿いに、サルの群れは移動していく。あの先にあるのは、男なん体たい山さんをはじめとする日につ光こう連山だ。しかも、さっきまで草薙護堂たちを狙ねらっていた大ザルまで同じ方角へ飛び立った。

　膝ひざをたわめ、大きくジャンプすると、そのまま流れ星のように西へ飛ぶ。

　さすがは神しん獣じゆうというべきか、一〇メートルを越す巨体のくせに神しん出しゆつ鬼き没ぼつらしい。

「……草薙さんたちが逃げたのは北の方角だから、追いかけていったわけではない、と。ってことは民族大移動して、どこかに根ね城じろを作るつもりですかねー」

　ぼそりと甘粕はつぶやいた。

　東照宮近辺にいた観光客、宗教関係者、近隣の店舗で働いていた人々は全てサルに変へん化げしたらしい。残っている人間は今や甘粕ひとりだ。

『なむからたんのう、たらやーやー。なむおりやー、ぼりょきーちーしふらーやー。ふじさとぼーやー、もこさとぼーやー。もーこーきゃーるーにーきゃーやー』

　風に乗って、陀だ羅ら尼にが聞こえてくる。

　陀羅尼とは仏教系呪術における呪じゆ文もんの意である。眷けん属ぞくは去ったというのに、王である大聖はこの地に留とどまって

陀羅尼を誦しようしている。

　何が狙いなのだろう？　甘粕は東照宮を離れ、日光の街へ向かった。

　日光東照宮は駅から近い。

　徒歩でも二〇分程度で到着できるだろう。甘粕はこの近辺を見て回った。

　屋根から屋根へ飛び移る。エリカたちテンプル騎士が『跳躍』と呼び、武ぶ侠きようたちが『軽けい功こう』と呼ぶ体術。甘粕たちは『猿さる飛とび』と呼んで常用している。陸鷹化や清秋院恵那には及ばないが、彼も超人的な身軽さを持つのだ。

「特にめぼしい変化はなし……と。斉せい天てん大たい聖せいの支配力は、それほど広範囲に影響を及ぼすものではないのか、まだ本気でないだけなのか……」

　戸数にして六〇〇〇世帯ほどの、閑かん静せいな日光市街。

　外出する人間や車でそれなりに賑にぎわい、平和そのもの。人々がいきなりサルに変身して阿あ鼻び叫きよう喚かんの巷ちまたになったりもしない。ごく平穏な三連休の初日、土曜の夜の情景だった。

　甘粕は駅前を離れ、東照宮の方向へ戻った。

　大だい谷や川がわの岸に沿って、風のように駆ける。朱しゅ色いろの橋が見えてきた。

　神しん橋きようと呼ばれる名所である。大谷川にかかる木造の橋。緩ゆるい円えん弧こを描いている。あざやかな朱色に塗られているので、夜目にも目立つ。

　どうやら人間のサル化が起こったのは、東とう照しよう宮ぐう近辺の一部のみらしい。

　状況を確認した甘粕は、神橋のたもとで携帯電話を取り出した。

『――というわけでして。現場周辺はこんな案あん配ばいです』

「了解。ひかりを使って猿えん猴こう神しん君くんは孫そん悟ご空くうに戻ったわけだ。しかも仲間を増やすなんて厄やつ介かいだねー。……でも、甘粕さんはおサルになっていないんだよね？」

　公道をひた走る、目立たない乗用車の後部座席。

　携帯電話によって、沙さ耶やの宮みや馨かおるは腹心からの報告を受けているところだった。

『はい。私だけでなく、エリカさんや祐ゆ理りさん、リリアナさんも。一定以上の呪力を持つ者のみがサル化を免まぬかれるのでしょう』

「じゃあ、日光山の委員会関係者はどうなった？」

『見かけませんね。無事なら何らかのアクションがあってもおかしくないでしょう。サルになったと見ても、的まと外はずれじゃなさそうです』

「増ぞう援えんを呼ぶなら、媛ひめ巫み女こか甘粕さんクラスが望ましいってわけか」

『ええ。近場にいる帝てい都との師し範はん代だいをかき集めましょう。関東一円の関係者から緊急招集する感じで。あと式しき部ぶのおえら方にも声をかけて、術使いも呼ばないと。ああ、栃とち木ぎ県警や国土交通省なんかにも話を通す必要がありますね。……で、あとはやっぱり』

「うん。理り不ふ尽じんな危険はすくなそうだし、いきなり切り札を出すのもアリかな」

　馨は隣にすわる媛巫女筆頭に目を向けた。

　沙耶宮家別べつ邸ていの蔵くらから引っぱり出した日本刀を抱えて、清秋院恵那が眠っている。来きたる戦いに備えて、体力を蓄たくわえているのだ。当座は宇う都つの宮みや辺りで待機させて、遊軍として活用するつもりだったのだが――。

『ええ、神獣らしき巨大ＵＭＡも出没していることですしね。下へ手たに出し惜しみするより、思い切って戦力を集中させるのはアリ

だと思いますよ』

「貴重な意見、感謝するよ。検討してみよう」

『いえいえ、どういたしまして。では仕事に戻ります』

　馨が携帯をしまうと、いつのまにか目覚めていた恵那に声をかけられた。

「ひかりが斉天大聖に捕まったって？」

「あいかわらず耳がいいね、恵那は」

　寝ていたかと思いきや、聞き耳を立てていたらしい。馨は苦笑した。

「でも、話が早くて助かるな。どうだい恵那？　向こうでは神獣まで顕けん現げんして、草薙さんも追い詰められているらしい。そこに飛び込んで、エリカさんたちより役に立てる自信はある？」

　男装の媛巫女は微笑を口元にたたえながら言った。

　意外に思われることも多いが、馨は文ぶん武ぶ両りよう道どうの才人だ。媛巫女としての霊力でも武芸でも、ただ一名以外に後おくれを取った記憶はない。

「もちろん。エリカさんは頭がいいし、リリアナさんも魔女の腕がいい線いってるけどね。腕比べをすれば、最後に勝つのは恵那に決まっているよ」

　術でも剣でも、馨を唯ゆい一いつ上回る媛巫女筆頭。

　最強の手札が請うけあうのを聞いて、馨は方針に微修正を施ほどこした。

　上司への報告を終えて、甘粕は携帯電話をしまった。

　そろそろ草薙護堂のところに顔を出してみよう。あと万ま里り谷やひかり——猿猴神君改め、斉天大聖に乗っ取られた媛巫女見習いの状況も確認しなくては。救出が可能かどうか、見捨てなければな

らないかを見極めるのだ。

　もっとも、あの魔王様は前者以外の選択肢を認めないだろうが……。

　苦笑したところで、甘粕は看かん過かできない異変を発見した。

　彼の眼前には朱塗りの神橋がある。

　日光はもともと、山やま伏ぶしたちが修行場とした峨が々がたる霊れい峰ほうの連つらなる地。そこを流れる大谷川の景観には、深しん山ざん幽ゆう谷こくの趣おもむきが漂う。この川の水量が増していた。

　中ちゅう禅ぜん寺じ湖こを水源とする大谷川は美しい渓けい流りゅうだが、水量豊かとは言えない。

　しかし、今は大雨が降ったあとのように轟ごう々ごうと流れている。何が起きたのだ？

　甘粕はさりげなく視線を左右に動かした。

　この場所に初めて橋が架かかったのは一〇〇〇年以上前。平へい安あん時代、人じん跡せき未み踏とうの地であった日につ光こう山さんと男なん体たい山さんに初めて分け入った勝しよう道どう上しよう人にんのために造られたといわれる。神橋はその故こ事じを再現する世界遺産なのだ。

『なむからたんのう、たらやーやー。なむおりやー、ぼりょきーちーしふらーやー。ふじさとぼーやー、もこさとぼーやー。もーこーきゃーるーにーきゃーやー』

　甘粕は万里谷ひかりの声を聞いた。嫋じよう々じようたる響きの陀だ羅ら尼にだった。

『おん、さーはらはーえーしゅうたんのうとんしゃー。なむしきりーといもーおりやー。ぼりょきーちーしふらーりんとうぼー、なーむーのーらー』

　詠えい唱しようが進んでいく。すると、大谷川の水面から裸の男が浮かび上がってきた。

　肌は蒼あお黒ぐろく、病的に痩やせ細っていた。ほとんど骨と皮だけだ。

　その形ぎよう相そうはまさに鬼。つり上がった目は紅あかく、ギラギラと輝いている。口は左右に大きく裂け、鋭い牙を生やしていた。

　勝道上人の伝説にいわく。日光の地を開山しようとした上人の前に、大谷川の激流が立ちはだかった。弱り果てた上人が祈き念ねんすると、対岸に鬼き神しんが顕あらわれ、川に橋を架けたという。これが神橋の由来だ。

　そして、鬼神が勝道上人に名乗った神としての名。それは——

「深じん沙しや大だい将しよう⁉　ってことは、神獣どころじゃない！」

　甘粕が愕がく然ぜんとした刹せつ那な、蒼黒い鬼神は高らかに吠ほえた。

　ゥゥウオオオオオオオォォォォッ！

　それは『まつろわぬ神』が誕生した産うぶ声ごえ。斉天大聖の陀羅尼に応こたえる雄お叫たけびであった。

　しかも、咆ほう哮こうに合わせて大谷川の流れが爆発した。

　洪水のような鉄砲水が上流から押し寄せてくる。この大水は神橋を易やす々やすと押し流し、たもとにいた甘粕まで呑のみ込んでしまった。

第２章　三妖、倭国の霊山にて一堂に会す

1

　日につ光こう市街から車で数十分ほど北上すると、霧きり降ふり高こう原げんに到着する。

　赤あか薙なぎ山さんや丸まる山やま、美しい渓けい流りゆうの霧きり降ふり川がわなどの自然に恵まれた高原地帯である。ハイキングコースはもちろん、スキー場や牧場、ゴルフ場なども点在する。

　護ご堂どうたちが逃げ込んだのは、霧降高原にあるキャンプ場の近くだった。

「痛っ。まだ結構痛むな……」

　ログハウスのテラスで木の椅い子すに腰かけながら、護堂は愚ぐ痴ちった。

　高原のキャンプ場。近くの炊事場からはいい匂においが漂ってくる。数組の家族客、そしてリリアナと祐ゆ理りが夕食の準備をしているのだ。

　夜空を見上げれば、秋の星座がきれいに瞬またたいていた。

　すばらしい眺ちよう望ぼうである。ただし、護堂の気分はよいものではなかった。

　教主との戦いで受けたダメージは甚じん大だいだった。普通なら数十カ所の骨折と各種内臓の破裂で死んでいるはずだ。今もあちこ

ちに激痛が走り、吐はき気けも込み上げてくる。

　それに何より、ひかりのことが心配だった。

　斉せい天てん大たい聖せいの依より代しろにされて人質も同然。すぐにでも助けに行きたいところだが――

「さすがにそうするわけにはいかないしなァ……」

　ため息をつく。ここで事の軽けい重ちようを見み誤あやまって、ひかり救出に猪ちよ突とつ猛もう進しんするのはたやすい。

　だが、そう振る舞うには修しゆ羅ら場ばに慣れすぎてしまった。

　そもそも斉天大聖＝万ま里り谷やひかりはどこにいるのか。あの子の体から神を引っぺがすにはどうすればいいのか。さっき目撃した、すさまじい神力をいかに攻略すべきか。

　問題点が多すぎる。まず為なすべきは、それらに答えを見み出いだすことなのだ。

　羅ら濠ごう教きよう主しゆが不在である以上、ひかりを救出できる人材は草くさ薙なぎ護堂のみ。そんな立場の男が、感情にまかせて暴走するなど許し難がたい愚ぐ行こうだ。

　……と、理性と責任感は訴えており、護堂もそれを遵じゆん守しゆするつもりだった。

　しかし、ここで感情論に走れない自分が疎うとましくもあった。普通に、そして平和に暮らしてきた人間は、こういうときに取り乱すのが普通だろうに……。

「そうだ、沙さ耶やの宮みやさんに電話をかけてみるか」

　自己嫌けん悪おをひとまず保留して、携帯電話を取り出した。

　今、必要なのは情報だ。登録済みの番号をコールすると、すぐ通話になる。

『よかった、ちょうど連絡しようと思っていたところなんですよ。ああ、例の教主さまとの戦いの結果とか、その後の顛てん末まつとかはすでに存じております。ご説明は不要ですよ』

「もしかして、甘あや粕かすさんが？」

　沙耶宮馨かおるの物言いから、護堂は推すい察さつした。

　忍者の末まつ裔えいだという彼なら、重要情報を逐ちく一いち報告していても不思議ではない。

『ご名答です。……ただあの人、一時間ほど前から連絡が取れなくなっています。行方不明と断じるべきか、目下検討中です』

　正せい史し編へん纂さん委い員いん会かい・東京分室室長の肩書きを持つ媛ひめ巫み女こは、物もの憂うげにささやいた。

『おかげで、ぼくも日につ光こうに向かうことになりました。ですから草薙さん、明朝にでも落ち合いましょう。それまでゆっくりと休まれて、鋭えい気きをお養やしないください。神の顕けん現げんとあってはカンピオーネが頼みの綱つなですからね』

「沙耶宮さんもこっちに来るんですか？」

『甘粕さんがいれば、宇う都つの宮みや辺りで待たい機きして、彼の報告を聞きながら判断を下す態勢でよかったんですけどね。現場の状況について、なるべく精度の高い情報が欲しいんですよ』

　甘粕冬とう馬まはかなり上司に信頼されているらしい。

　他の人間に報告させるくらいなら、自みずから現地に赴おもむくと馨は言っているのだ。

『今は日光に人員を集めているところです。そうそう、恵え那なも先に現地入りさせました。そのうち草薙さんのところにも顔を出すでしょう』

「清せい秋しゆう院いんが！」

『はい。例によってフラフラして、すぐには現れないでしょうがね。でも勘かんのいい娘こです。いい場面にはきっと駆けつけてきますよ。……ああ、ひかりの処遇はあなたの判断におまかせします。自由にしてくださって結構です。全責任はぼくが負います』

「……俺に、あの子を見捨ててもいいって言うんですか？」

　口調が冷たくなるのを護堂は止められなかった。

　さっき自分に感じたのと同じ嫌悪感が、馨に対しても込み上げてくる。

『逆に、他の誰を——平へい穏おんに暮らしている一般市民を見殺しにしてでも、あるいは犠ぎ牲せいにしてでもひかりを救えとあなたが望まれるなら、ぼくたちはそれに従いますよ。……草薙さん、これはあなたにだけ許された特権であり責務なんですよ』

「特権と責務？」

『はい。あるいは王の仕事というべきかもしれませんね。つまり、決断です』

　馨の言わんとするところを護堂は理解した。

　どんな方法で事件解決に取り組むか、草薙護堂が決めろと言っているのだ。カンピオーネはただの戦士ではなく、力を以もつて頂点に君臨する『王』なのだからと。

　重すぎる決定権を委ゆだねられて、電話は終わった。

「護堂さん、もうすぐお夕飯ができますよ」

　テラスに戻ってきた祐ゆ理りに声をかけられた。

　巫み女こ装しよう束ぞくを着ていた彼女も、長袖のブラウスとフレアスカートに着替えている。連れの少女たちは何やら魔術を使って、置き去りにした荷物を呼び寄せたのだ。

「なあ万里谷、ひかりのことだけどさ」

「そのことについては、さきほどエリカさんたちとも話をいたしました。ひかりの禍まが祓はらいによって大聖さまが『弼ひつ馬ば温おん』の呪じゆ縛ばくを中和しているのなら、あの子の身が危険になる恐れは当分ないだろう。誰よりも大聖さまがひかりを守護されるだろうからと……」

　祐理は毅き然ぜんと、そして明めい晰せきな口ぶりで答えた。

「だから、いたずらに焦あせって護堂さんのご判断を狂わせるべき

ではないと、エリカさんもリリアナさんもおっしゃっていました。私も媛巫女として、おふたりの意見は正しいと思います」

　凛り々りしさと責任感に富む、『媛』の称号にふさわしい言葉だった。

　妹のピンチにも、祐理はそれほど動じていないようだ。……いや。本当にそうなのか？　動じてないように見せかけているだけかもしれない。

「そういえば、エリカのヤツはどこだ？　あいつは料理してないだろ？」

「キャンプ場を利用されている他の方々とお話をされています。……もうすっかり大人気で、すごいですよ？　うちはこれから夕食の準備だとエリカさんがおっしゃったら、お肉やお魚ですとか、果物やお菓子まで差し入れしていただきましたから」

　東とう照しよう宮ぐうとはちがい、この辺りは平穏無事そのものだ。エリカもいつもどおり巧たくみな社交術を発揮しているらしい。

「そうか。……あいつの方はだいぶよくなったみたいだな。よかったよ」

　エリカも決して軽傷ではなかったが、治ち癒ゆの魔術が効いたようだ。

　しかし、そこで祐理が眉まゆをひそめた。

「あいつの方はとおっしゃいましたね？　護堂さんの方はまだよくないのですか？」

「え？　いや、ボチボチ治ってきてはいるんだ。心配いらないって」

　失言に気づき、あわてて護堂はごまかした。

「嘘うそをおっしゃってはいけません。どうして元気なふりをなさるのですか？」

「それはその、何て言うかさ——」

　問いただす祐理の唇は、つややかな桜色だった。

　生々しい記憶が甦よみがえってくる。天あまの 叢むら 雲くもの劍つるぎの事件で治療してもらったとき。ついさっき、羅濠教主が倒した神についての教えを授かったとき。

　体の具合が悪いと言えば、『あの方法』で治す流れになるかもしれないではないか！

「ご、護堂さん。わ、私には媛巫女として、あなたに協力する義務がありますが……」

　祐理もそこに思い至ったらしい。端正な美び貌ぼうが真っ赤になった。

「な、何度も何度もあのような行為に耽ふけるのは、やはり抵抗があると言いますか、かんたんには決心しづらい部分があります！」

「そうだよなッ。うん、わかってるよ！」

　よかった。あれは避けられそうだ。安あん堵どした直後、問題発言が出た。

「ですが……もし、本当におつらいのであれば……やはり、御力になって差し上げたいとも思います。何といっても妹のために、私たちのために傷ついたのですし、あなたのためにできることがあるのなら、やっぱり——」

　うつむき、恥じらいながら。しかし、すこしだけ誘いをかけるように。

　差しゅう恥ちでうなじまで紅あかくしながら、祐理は言った。

「やっぱり私は……あなたと……」

　護堂は生なま唾つばを呑のみこんだ。言い淀よどむ祐理は凶悪なまでに魅み惑わく的だった。

　もちろん治療を受けたいのが本音だ。しかし、そのためにあれを強要したりはできない。ダメに決まっている。護堂はさまざまな想おもいを抱えて沈黙した。

祐理はそれをどう解釈したのか。

思い詰めた表情になり、戸惑い、逡しゆん巡じゆんし、そして小さくうなずいた。

「こ、ここは人目があります。あちらに入ってもかまいませんか……？」

ログハウスのなかを見つめながら、ささやく。

え!?　この言葉の意味は、やはり——。護堂は絶句した。

「ちょっと待ってもらえるかしら？　その役目まで祐理に任せるのは、すこし不公平だと思うのよね。もっと公平に役割分担しましょう」

「エリカさん!?」

いつのまにか『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』がテラスのすぐ外に立っていた。

赤みがかった金髪を王冠のようにかかげるエリカ。いつもどおりの華麗さと向き合って、なぜか護堂はぎくりとした。

「わたしも祐理も、護堂との恋を楽しむ時間はなるべく均等に振り分けるべきだと思うの。やっぱり、そういう面での不平等が集団の和を乱すわけだし。——ねえ祐理。あなた、今日はもう護堂といろいろしているわよね？」

「——!?　エリカさん、どうしてそれを!?」

世知に疎うとく、気性のまっすぐな祐理は隠しごとが苦手だ。ごまかそうなどとは一切せず、あっさり認めてしまった。

「小学生でも解ける方程式よ。羅濠教主との戦いで護堂は『剣』を使った。つまり、誰かが彼に知識を授けたということ。そして今日、その機会があったのはひとりだけだもの」

「そ、それはたしかにそうですが……」

「だから、今日はもういいでしょう？　せっかく護堂と愛を確かめ合える機会なんですもの、わたしに譲って頂ちよう戴だい。次はも

ちろん、祐理が優先でかまわないから——」

　本人を前にして、何という話をするのだ⁉

　愕がく然ぜんとした護堂は椅子から立ち上がり、逃げ出そうとした。

　だが、さりげなく近づいてきていたエリカに肩を押さえられた。優雅に手を乗せているだけに見えるのに、すさまじい重圧。あいかわらずのバカ力だった。

「待たせたわね、護堂。でも、もう結論は出たから情熱的な時間を過ごしましょう？　ふふ、あなたの感触をこうしてたしかめるのもひさしぶりだわ」

　護堂の膝の上に、妖あやしく微笑しながらエリカがすわる。

　やわらかな膝ひざ裏うらの感触とあたたかさ、心地よい重みがのしかかってくる。

「さ、力を抜いて。あなたの傷、すぐに治してあげるから」

　しなだれかかりながらのささやき。当然、体も押しつけられる。護堂の胸とぶつかって、エリカの豊かな胸元がゴム鞠まりのようにつぶれた。

「おまえ、まさかここでするつもりか⁉　万里谷が見ている前で！」

「ええ。善は急げよ。あなたの気が変わらないうちに……」

「変わるも何も、こんなことをする気はもともとな——んぐっ！」

　ついにエリカの唇くちびるで口をふさがれてしまった。今日つけているグロスのせいか、彼女の唇はつやつやと輝いている。かなり粘ねばつきのある味わいだった。

　金髪の美少女は護堂の唇をついばみ、舐なめ回す。舌も絡からめてきた。自然と唾だ液えきがこぼれ、ふたりの口内で混じり合う。粘ねん着ちやく質しつのグロスも拭ぬぐい去られてしまった。

「ねえ護堂、すこしはあなたの方からもわたしにキスして頂戴。こ

ういうのも悪くないけど、この間みたいに荒々しいあなたも素敵だと思うわ。……ふふっ。実はね、あのときのことを思い出すと、今でも胸がどきどきするの。ねえ、お願い……」

　じゃれるように接せつ吻ぷんの雨を降らせながら、エリカがせがんできた。

　いつもは鋭気と聡そう明めいさに満ちた双そう眸ぼうが、とろんとゆるんでいる。珍しく隙すきだらけの表情が、たまらなく可愛かわいい。だが、これでは本来の目的を達していないではないか！

　視界の隅にいる祐理がどこか悲しげに目を伏せている。

　ダメだ！　エリカの甘い拘こう束そくから転げ出るようにして、護堂は脱出した。

「護堂、まだ治ち癒ゆの術をかけていないわよ！　何をしているの!?」

「い、いや。こういうのはやっぱりよくないと思うんだ。戦うために必要だからって、こんなふうに何度も、その……キスとかしたりさ！」

「そんなの今さらじゃない？　この間だって、わたしに永遠の忠ちゅう誠せいを誓わせたくせに」

　エリカに指摘されて、護堂はうなだれた。あのあと、勢いにまかせて何てことを……と煩はん悶もんしたのは苦い思い出だ。しかも、まずいことに祐理が愕がく然ぜんとしていた。

「え、永遠の忠誠とは一体、どういう……？」

「そういえば、祐理にはまだ話していなかったわね」

　フフンとエリカは自慢げに微笑み、とろんとした目つきのまま語った。

「護堂ったら、わたしに言ったの。たとえ世界が滅びようと、俺と最後まで運命を共にすると誓えって。あのときの護堂、荒々しくて、とても雄お々おしくて素敵だったわ。もちろん、いつもの護堂も好きだけど、ああいうのもたまにはいいかもしれないわね」

「ご、護堂さん、いつのまにエリカさんとそこまで……！」

「まったく騒々しい……。何の騒ぎだ、一体？」

　祐理が数日前に七なな雄お神じん社じやでも見た、苦悩にまみれた表情を浮かべたとき、凛々しい声と、香こう辛しん料りようのいい匂においが割り込んできた。

　完成したカレーの鍋なべを持って、リリアナがやってきたのだ。

「いや、その、たいしたことじゃないんだけどな……」

　エリカがそっぽを向き、祐理が恐きよう縮しゆくするなか、ひとり護堂は釈しやく明めいを行った。

　事のあらましを聞いて、リリアナはふぅとため息をついた。

「まったく……あなたの寵ちようを争って、女たちが揉もめ事を起こす。わたしが憂ゆう慮りよしていた事態です。やはりわたしが第一の騎士として、常にあなたを補佐する必要があるようですね」

　ダメ亭主をなじるような口ぶりでリリアナは告げた。

「でしたら、今回の問題を解決する妙案がわたしにあります。申し上げましょうか？」

「ああ、教えてくれ。頼む」

　護堂はうなずいた。魔女であるリリアナは、経けい口こう摂せつ取しゆ以外でカンピオーネに術をかける方法を知っているのかもしれない。期待に胸が高鳴る。

「ここはわたしがあなたとせ、接せつ吻ぷんを交かわし、治癒の術を施ほどこすべきだと思います。この役目を愛人たちが奪い合うからいけないのです。わたしが第一の騎士として術をかける。それが唯ゆい一いつにして最良の解決策でしょう」

「それじゃあ何の解決にもならないんだよ！」

　忠実かつ有能だが、ときどき残念なところのある騎士に、護堂は強く言い切った。

2

　結局、護ご堂どうは誰の治療も受けないまま夕食になった。

　いつものように一晩寝れば大丈夫だろうと、痩やせ我が慢まんすることに決めたのだ。

　今日の献こん立だてはキャンプ料理の定番カレーライスとバーベキュー。エリカがもらってきたというイワナやニジマスの塩焼き、山菜のおひたしなども並び、かなり豪勢だ。

　敢あえてログハウスのなかではなく、外で食べる。

　アウトドアを楽しみに来たわけではないが、これも食卓の彩いろどりというものだろう。

　だが、料理に舌した鼓つづみを打ちながらも、護堂のテンションは低かった。

　斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうと戦うのはいい。自分以外にどうにかできる人間がいないのなら微力を尽くすまで。問題は、いずれ誰かとキスをしなければいけないことだ。斉天大聖についての知識を得て、神殺しの『剣』を生みだすために。

　これまでは突発的に事件が起きたため、なし崩くずしで少女たちの唇くちびるを奪ってきた。

　今回はちがう。近い未来、斉天大聖との戦いは必ず発生する。

　その未来に備えなければならないのだ。相手はエリカか祐理か、それともリリアナか。誰になるにせよ、自分は何と言って彼女たちにあの行為を強しいればいいのか……？

　護堂の陰気さに引きずられたのか、夕食はしめやかな雰ふん囲い気きだった。

「おなかもふくらんだことだし、そろそろ現実的な問題を話し合いましょうか」

　こういうときに空気を変えるのは、やはりエリカだった。

「といっても斉天大聖との戦い、案外あっさり勝てるかも……なんて、わたしは思っているけど。みんなはどう？」

「あれだろ。俺にとどめを刺しかけて、急にやめたときの」

　エリカの言わんとするところを察して、護堂は言った。

「ええ。あれは大聖にとって、労せずしてカンピオーネを討うつ千せん載ざいーいち遇ぐうの好機だったはずよ。なのに彼は、そのチャンスを不意にしてしまった」

「たしかに不自然だったな。あそこで手を緩ゆるめる理由などないはずなのに」

　数時間前の記憶を探るように、リリアナが眉み間けんにしわを寄せた。

「まず考えられるとすれば、体調の問題か。そういえば、斉天大聖は『弼ひつ馬ば温おん』の呪じゆ縛ばくを打ち消すためにひかりの体を奪ったのだったな」

　この指摘に身を乗り出したのは、依より代しろの姉である祐理だった。

「だとしたら、ひかりの霊力には限界があります。神を封じるほどの大呪術、全て消し去れるはずがありません。力を使えば消しよう耗もうもするはずです。もしかしたら、あの子の体が疲れて禍まが祓はらいを使えなくなったとき、大聖さまはふたたび『弼馬温』の影響下に入るのでは？」

「ええ。だから護堂との戦闘を避けた。これは虫のよすぎる想像でもないと思うわよ」

　祐理の予測にうなずきながら、エリカがまとめるように言った。

「ただ、どういう展開になるとしても、護堂が大聖に勝つためには『剣』の言こと霊だまを使わなければいけないでしょうね。問題はここだわ。わたしとリリィは中国の神である斉天大聖がどんな神格なのか知らないもの。祐理はどう？」

「私も大まかなところは存じ上げていますが、決して詳しいわけでは……」

「となると、万里谷祐理の霊視が、かの軍神の素す性じようを見抜くことが唯一の望みか」

　リリアナが難しい顔で考え込んだ。

　霊視によって天てん啓けいを受けるか否いなかは、完全に運うん否ぷ天てん賦ぷだという。しかし、たぐいまれな祐理の霊視力は、かなりの高確率で神の性質を見抜くだろう。だが、いつ啓示が降りてくるかは読めない。五分後かもしれないし、五年後かもしれない。

「今まで私が神々のご素性を霊視できたときは、いずれも神やカンピオーネであられるヴォバン侯こう爵しやく、羅ら濠ごう教きよう主しゆのおそばにいたときです。ですから、今度もきっと——」

　祐理が静かに、しかし強い決意を込めて言った。

　普段は霊視の力を積極的に使おうとしない彼女だが、今回は様子がちがう。やはり、妹を助けようと必死なのだろう。護堂も力になってやりたかった。

　しかし、斉天大聖の神格を読み解いたあとの儀式がひどく悩ましい。

「……それにしても、何でサルのくせに《鋼はがね》なんだろうな？」

　魔術の契ちぎりについて考えまいと、護堂は疑問を口にした。昼間から気になっていたのだ。

　……やはり神々との戦いから逃れられない以上、神様のうんちくを聞きたくないという願いは捨てねばならないのか。悩みの種は尽きない。

「そうですね……ヨーロッパで《鋼》と縁ゆかりの深い獣けものといえば、やはり竜。そして蛇へびです」

　リリアナが考え込みながら言うと、エリカもうなずいた。

「そうね。ペルセウスの例でも明らかな通り、《鋼》の英雄は竜蛇を屈くつ服ぷくさせ、その力を奪い取る戦士の神。でも、猿と結びついた事例はなかったはずよ」

「竜と蛇を屈服させるからこそ、斉天大聖さまは猿えん猴こうの神であらせられるのです」

　と言ったのは、日本の媛巫女である祐理だった。

「昼間、東とう照しよう宮ぐうの神しん厩きゆう舎しやでも申し上げましたが、日本や中国では古来、猿が馬を守護するという伝承があります。すぐれた駿しゆん馬めを古くは『竜りゆう馬ま』と呼んだように、竜と馬は非常に近しい存在なのです。『天馬は乃すなわち神竜の類たぐい、今天馬已すでに来きたる、これ竜必ず至るの効しるしなり』という詩もあるほどです」

　つまり、竜と馬は互換可能らしい。リリアナも口を挟はさんできた。

「姿形はちがいますが、東洋にも西洋にも竜は存在します。ご存じですか？　この聖獣はそもそも中央アジアにルーツを持ち、元はほとんど同じ姿だったのです。欧州の竜の原型となった古代シュメールの竜などが、その典型ですね。中国の竜も時代をさかのぼるほど、シュメールの竜と酷こく似じした形状になるはずですよ」

「……もしかして、それって馬に似ているとか？」

「はい。太たい古この昔、竜は『角つのの生えた馬』とも呼ぶべき姿でした。時代が下るにつれて、地じ母ぼ神しんの象しよう徴ちようである『蛇』と融ゆう合ごうして鱗うろこや長い胴体を獲得し、手足が短くなります。西洋ではさらに翼つばさを手に入れ、東洋では逆に手足が極端に縮ちぢみ、現在の形状に行き着くのです」

　竜と蛇はもともと異なる種族であったのが、鋼の英雄たちに駆く逐ちくされる敗者の運命ゆえか、いつしか大同小異の同どう胞ほうとなったのだと、リリアナは結んだ。

「大聖さまといえば『西さい遊ゆう記き』——物語の登場人物のように思われるかもしれませんが、実際にはさまざまな信仰、伝承と結びついた由ゆい緒しよある神格です。三さん蔵ぞう法ほう師しさまの取経にまつわる昔話は古くから日本にも伝わっています。能の

演えん目もくにもあるくらいです」

　祐理に教えられて、護堂は驚いた。

「能って、観かん阿あ弥み・世ぜ阿あ弥みとかの？」

「はい。『大だい般はん若にゃ』や『三蔵法師』ですね。世阿弥の時代にはすでに存在したといわれます」

　孫そん悟ご空くうの厄やっ介かいさに感じ入ると、エリカが訴えた。

「じゃあ、楽観的な話はここまで。ここからは悲観的な話をしてもいいかしら？　大聖の依り代になったひかりのことよ」

「それって、あの子を助けられないときの話か？」

　悲観的という言葉でピンときた。沙さ耶やの宮みや馨かおるも最後にほのめかした問題だ。

　万里谷ひかりの肉体は斉天大聖に支配されている。あの猿神をぶちのめして、奪い返すつもりではいたが、狙ねらい通りにいくかどうか——。

「ええ。あの子は可愛かわいらしいし、なかなか見どころもありそうだから、わたしも是非助けてあげたいと思っているわ。でも、正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいはそうじゃないでしょうね」

「ああ。沙耶宮さんは最悪見捨ててもいいくらいのことは言ってたよ」

「でしょうね。わたしが委員会の幹部でも、同じ判断を下すわ。護堂がひかりの救出にこだわって、大聖と本気で戦わないのがいちばん怖いもの。逆を言えば、女の子ひとりの犠ぎ牲せいで『まつろわぬ神』を倒せるなら、ものすごく分のいい取り引きになるわよ」

　エリカは真剣な表情だった。これはおそらく、ぎりぎりの状況で優先順位をまちがわないための質問なのだ。草薙護堂はどこまで覚悟を固めているのかと。

　リリアナは眉まゆをひそめ、祐理は心配そうに問答を聞いてい

た。高こう潔けつな騎士であるリリアナ・クラニチャールには認めがたい論ろん旨しなのだろう。万里谷祐理にとっては、妹を見殺しにすることが良策なのだと言うに等しい。

　護堂が考え込んでいると、エリカは肩の力を抜いて微笑んだ。

「ま、今言ったことはあくまで最悪の可能性。斉天大聖と戦ってもいないうちから、あれこれ悩んでいても仕方ないわ。今日はもう休みましょう。わたしたちに必要なのは、明日からの戦いに備えて力を蓄たくわえることよ」

3

　いろは坂ざかを越えると、そこはもう中ちゆう禅ぜん寺じ湖こである。

　北岸には男なん体たい山さんがそびえ立つ。標高二四八六メートル。

　この頂いただきに初めて登り詰めたのは、日につ光こう開かい山ざんの祖そ・勝しよう道どう上しよう人にんだという。

　天てん応おう二年、西せい暦れきでいえば七八二年。二度も登頂に失敗していた勝道は『我もし山頂に至らざれば菩ぼ提だいに至らじ』と覚悟を決め、三度目の正直に挑いどみ、ついに悲願を成じよう就じゆした。

　実は火山でもある。山頂付近の土や岩は鉄分を多くふくんでおり、赤茶けている。日光連山は火山・鉱山の宝庫、日本有数の火山帯なのだ。

　そして、火山と鉱石は《鋼はがね》の軍神にとって産うぶ湯ゆのようなもの。

「我が力を高めるのに、これほどふさわしき地は他にあるまいて……」

　その山頂で、斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうはつ

ぶやいた。

　体と声は万ま里り谷やひかりだが、内に宿る人格と神力はまつろわぬ猿さる神がみのそれ。赤茶けた岩のひとつに腰かけながらのひとり言であった。

　さらに、最も高い標高点にある大岩には錆さびた神剣が突き刺さっていた。

　岩に突き立つ神剣は長さ三メートルほど。あるいはアーサー王とエクスカリバーの伝説を思い出す者もいるかもしれない。

「来たか三さん弟ていよ。おぬし、結構前に顕けん現げんしておったようじゃが、ずいぶんゆっくりと参ったのう。どうしたのじゃ？」

　斉天大聖が不思議そうに言った。

　彼が見つめる先には、登山道を上ってくる異い形ぎようの怪人の姿があった。

　肌は蒼あお黒ぐろく、逆立てた髪の毛は焔ほのおのように紅あかい。目は吊つり上がり、口は大きく裂け、小さな髑どく髏ろを九つもつないで首飾りとする。簡素な僧そう衣えをまとっていた。

　彼の名は深じん沙しや神しん。甘あま粕かす冬とう馬まが最後に『深沙大将』と呼んだ神であった。

「大だい兄けい、遅ち参さんつかまつりました」

　悪あつ鬼きのような外見の割りに、深沙神の話しぶりは穏やかだった。陰気で、思い詰めた自殺志願者めいた雰ふん囲い気きでもあったが。

「途中で二に兄けいと出くわし、いざ共に往ゆかんという話になりまして」

「ほう。あやつもすでに顕現しておったか」

「は。遠えん路ろはるばる、ふたりで歩いて参りましたところ、二兄は言われました。『なあ三さん弟てい、ひさしぶりに娑しや婆ばへ出たのだ。ここらで息抜きするのも悪くなかろう』と。身み共ど

もは『悪いと思いまする』と申しました。すると二兄は『莫ば迦か者もの！　仏・法・僧の三宝を以もつて至上とする。これぞ仏道の教え。だが世間は広い。酒・博ばく奕ち・女。乳・尻しり・ふともも。この世にはいくつもの三宝があり、それがしたちを待っておるのだ』と」

　深沙神は陰気に語る。ただし、二兄なる者の台詞せりふのところだけ陽気な口調になる。陰いん々いん滅めつ々めつたる言動の割りに、芸達者な面もあるらしい。

　これを聞いて斉天大聖・孫悟空、感じ入ったようにつぶやいた。

「ほほう。やたらとなまぐさい三宝だのう。で、その浮うわついた三宝を求めて、おぬしらは寄り道をしておったのか？」

「は、左さ様ようで。身共は途中でつきあい切れなくなり、先を急ぐことにいたしました」

「ええい、相も変わらず考えなしのヤツめ！　山神よ出ませいッ。ひとっ飛びして、愚ぐ弟ていめに我の声を送り届けてこい！」

　斉天大聖は印を結んで、木こ霊だまの精せいを呼び出した。現げん世せで受肉することもできない、ごくごく弱い神格である。無形無色の幽体しか有さず、たいした力も備えていない。

　が、お目当ての神を捜し、山びこのようにメッセージを届ける程度の芸はできる。

　木霊の精に指示して、待つことしばし。

「――兄者、兄者！　ひどいではござらぬか！」

　ようやく第三の妖よう神しんが、黒い雲に乗って飛んできた。

　でっぷり肥こえた、恰かつ幅ぷくのよい体格である。しかし、脂し肪ぼうの下には尋じん常じようならざる筋肉が息づいている。そして、この者の顔は『猪いのしし』であった。

　鼻はな面づらが長く、顔中がみっしりと短い黒毛で覆おおわれている。

　目はつぶら。ちょこんと三角型の耳が突き立ち、ごく小さな牙き

ばが鼻の両りよう脇わきから生える。

「それがし、ようやく賑にぎ々にぎしい人里を見つけたでござるよ。ひさしぶりの娑しゃ婆ば、存分に愉たのしませてもらうわいと舌なめずりしておったら早はよう来いなどと——！　殺せつ生しょうでござる！」

　文句を言いつのるのは、黒こく猪ちょ精せい・猪ちょ剛ごう鬣りょうであった。

「ええい、やかましい。おぬしも俗ぞく世せへの執しゅう着ちゃくがいつまでも抜けぬヤツよのう……」

「いやいや。酒に美食に女に富ふう貴き、これなくしては生きている甲か斐いもござらぬよ。兄者の方こそ、サルくさいばかりで潤うるおいに欠ける生き様を改めるべきでござろう。もそっと紅べにやら白おし粉ろいやらの匂においにまみれていなくては。……それはそうと兄者」

「何じゃい、二に弟ていよ」

「此こ度たびはやけに可愛かわいらしゅうなり申したな。……白はく玉ぎよくのごとき容かん貌ばせ、まことに美愛でござる。くくく、唇くちびるのぷっくりしたるはまさしく桜桃さくらんぼ。ちと体つきが小さいのも、それはそれで興きよう趣しゆが尽きぬ——」

　猪剛鬣は黒雲から地上に飛び降りた。

　赤茶けた岩にすわる万里谷ひかりの顔かたちに、ねっとりした視線を投げかける。対して斉天大聖、やにわに足下の小石を蹴け飛とばした。

「哈ハァ！」

　小石はぴゅーっと宙を飛んで、猪剛鬣の額ひたいにぶち当たった。

「あ痛ッ!?　ひどいでござるよ、兄者」

「なに、おぬしの気き色しよく悪い目つきに身の危険を覚えただけじゃ。気にするな」

「気にしますわい！」

「ところで大兄。『弼ひつ馬ば温おん』の呪じゆ縛ばくを免まぬかれるため、その娘の体を依より代しろにされたとお見受けいたしましたが……あまり居心地はよろしくないようですな」

　深沙神が暗い口調で声をかけると、斉天大聖はうなずいた。

「まあのう。『弼馬温』は我から神通力と美び猴こう王おうの気き概がいを奪い、人じん畜ちく無む害がいなサルへと貶おとしめる呪縛。この巫女の体を奪って解いたのはいいが……こやつの力が頻ひん繁ぱんに切れおる」

「切れると申しますと？」

「我が斉天大聖としての己を保てるのは、この巫み女こ の禍まが祓はらいがあればこそ。しかし、所しよ詮せんは人の娘よ。霊術を使えば消耗し、休息させねばならぬ。巫女の体を休ませている間、自由に身動きすることもかなわぬ。じゃが、おぬしたちを助すけっ人とに呼ぶことができたのは僥ぎよう倖こうじゃ」

　この弱点を早急に克服せねば、命取りになる。

　だから斉天大聖は陀だ羅ら尼にを誦しようし、二柱の同盟神を呼び出した。

　孫悟空の弟弟子である猪ちよ八はつ戒かいこと猪ちよ悟ご能のう、そして沙さ悟ご浄じよう——。この両名は起き源げんを遡さかのぼれば天界の神々へと至る。大聖はとっておきの大法を用いて、彼らを『まつろわぬ神』猪ちよ剛ごう鬣りようと深じん沙しや神しんとして顕現させたのである。

　尚なお、名前がちがうのは、『悟』字を持つ法ほう名みようは彼らが三蔵法師に『まつろわされた』あとで授かったものだからだ。

　猪剛鬣と深沙神は、彼らがまつろわぬ者であった頃の旧名であった。

「おぬしらの神通力も貸せぃ。我はこれより『弼馬温』を破るぞ。呪縛を弱める程度では駄目なのじゃ。我の自由を阻はばむ元げん凶きよう、根こそぎ叩き壊してくれるわ」

「なるほど。たしかにそれがようござるな」

「は。承知つかまつりました」

　兄貴分の命令に猪剛鬣がにんまり笑い、深沙神はうっそりとうなずく。

　斉天大聖は神剣の突き立った岩に近づいていった。

「乾かんは健けんなり。坤こんは順じゆんなり。震しんは動どうなり。巽そんは入にゆうなり。坎かんは陥かんなり。離りは麗れいなり。艮こんは止しなり。兌だは説せつなり！」

　神剣の刀身を掴つかみ、言こと霊だまを唱となえる。

　錆さびついた鉄の棒も同然だった神器は瞬またたく間に消え失せた。万里谷ひかりの肉体を借りた斉天大聖に吸収されたのだ。

　それを契けい機きに、男なん体たい山さんの宿す霊気・神気が猿えん王おうにして鋼はがねなる軍神のもとに集つどった。

「遥はるか西方より伝わりし鋼の叡えい智ちよ、鉄の神かむ威いよ！　剣神の系けい譜ふを礎いしずえに、我・孫そん大たい聖せいは大いなる破は邪じやの呪法を為なさん！」

　男体山と神剣より莫ばく大だいな神力を吸い取り、大聖が吠ほえる。

　その背後に焔ほのおが顕あらわれた。たたら場で燃えさかる灼しやく熱ねつの劫ごう火かさながら、焔の柱となって轟ごう々ごうと高温を撒まき散らす。

「なうまくさんまんだー、ばーざらだんせんだー。まーかろしゃーだーそわたや、うんたらたーかんまん。なうまくさんまんだー、ばーざらだんせんだー。まーかろしゃーだーそわたや、うんたらたーかんまん」

　大聖が言霊を唱えると、猪剛鬣と深沙神もこれに合わせた。

「なうまくさんまんだー、ばーざらだんかん。なうまくさんまんだー、ばーざらだんかん」

「おん、あふるあふる、さらさらそわか。おん、あふるあふる、さらさらそわか。おん、あふるあふる、さらさらそわか。おん、あふるあふる、さらさらそわか」

　孫そん悟ご空くう・猪ちよ八はつ戒かい・沙さ悟ご浄じよう――三柱の妖神は一心不乱に言霊を誦しようする。

　彼らは道教世界に出しゆつ自じを持ちながら、仏法にも帰き依えした混こん沌とんたる神格。彼らが操あやつる雑多な言霊は、その複雑な形成過程に由来する。

　詠えい唱しようをつづけること数時間。東の地平線より太陽が昇りはじめた。

　朝日を拝おがみながら、斉天大聖は火山の霊気と神剣の威、義弟たちの神力を練り合わせ、ついに『剣』を産みだした。焔に包まれた長剣が、右手に燦さん然ぜんと顕あらわれる。

　これぞ倶く利り伽か羅ら剣けん。貪とん瞋じん痴ちの三毒を斬きり裂く、智ち慧えの剣である。

　草薙護堂が操るウルスラグナの『剣』と似にて非ひなる、降ごう魔ま調ちよう伏ぶくの神剣であった。尚、大岩に突き刺さる倶利伽羅剣は不ふ動どう明みよう王おうの象徴である。

「兄者、珍しいものを造ったでござるな」

「我と同じく外とつ国くにより渡来した《鋼》の剣よ。この地と縁深き坊主が連れてきた神ゆえな、ちょうどよく拝はい借しやくできたのじゃ」

　猪剛鬣の言葉に、大聖はいいかげんに答えた。不動明王信仰を中国より輸入したのは弘こう法ぼう大だい師し・空くう海かいである。日光の地名を創設したのは彼だともいう。また日光開山の祖・勝しよう道どう上しよう人にんの伝記を『二ふ荒たら山さん碑ひ』に遺のこしたのも彼であった。

「さあ、あらゆる厄やく災さいを斬り裂く破は邪じや顕けん正せいの刃やいば――人間の巫み女こごときが使う禍まが祓はらいなど比べものにならぬぞ。こやつで『弼ひつ馬ば温おん』を斬り裂き、我を自由の身としてくれるわ！」

　倶利伽羅剣を東の空にかざすと、刃やいばから焔がほとばしった。

　智慧の剣より生まれた焔は、大呪術『弼馬温』を打ち破るための武器でもある。

「ですが大兄。よろしいのでしょうか？」

「何じゃい、三弟よ。せっかく格好よく決めているところじゃ、手短にな」

　焔を操りながら問う義兄に、深沙神は暗い声で伝えた。

「は。では申し上げまする。三〇〇年もの間、この地に根づいてきた大呪法。しかも人間だけでなく、幽かく世りよに住まう神々や呪法師どもまで参加した術です。そんなものをいきなり解こうとして、妙なことにはならぬのでしょうか？」

「心配性じゃのう、我が義弟よ。そのようなことあるはず――」

　言いかけて、斉天大聖は万里谷ひかりの可愛らしい顔を不安で曇らせた。

「あるはずない……こともない、かもしれんのう」

「つまり、あるかもと？」

「そうはっきりと申すな！　我らは神々、でんと構えておればよいのじゃ！」

「あいや、兄者。あれを見るでござる。何か起こり申した」

　猪剛鬣が東方を指さす。朝焼けが日光の山々を、その頂いただきにかかる雲を、下界の中禅寺湖や人間どもの街を暁あかつきの色に染め上げている。

「ほ！　わざわざ我を抑えに来おったか！」

　朝焼けのなか、天より美青年の姿をした霊体が舞い降りてきた。

　中国の武将めいた鎧よろいをまとい、手には三みツ叉またの矛ほこを握っている。しかも彼には切れ長の双そう眸ぼうだけでなく、

額にも『目』があった。

　美びゞびしい三つ目の武将。それが『弼馬温』の呪縛が具現化した姿であった。

「ははあ。顕聖の神たる二じ郎ろう真しん君くんを象かたどるとは、凝こっておることよ！」

「大兄、お下がりください。ここは我らが守りまする！」

　猪ちよ剛ごう鬣りようと深じん沙しや神しんが言いざま、斉天大聖を背後に庇かばう。

　かつて大聖が地上へ出たときは、この霊体が彼を西さい天てん宮ぐうに連れ戻した。今回もそれを再現しようとしている。しかし、今回は義弟ふたりがいた。

　三ツ叉の矛を振るう『弼馬温』の霊体に対して、猪剛鬣は九歯のまぐわ、深沙神は鋼の芯を埋め込んだ宝ほう杖じようで立ち向かう。

　義弟たちに守られながら、斉天大聖は倶利伽羅剣を大きく振りかぶった。

　東天に投じる。ヒュン！

　流れ星が落ちるように、焔に包まれた剣は飛んでいった。空を駆け、やがて落下し、地上に突き刺さった刃は、日光に仕掛けられた大呪術『弼馬温』を引き裂き、雲うん散さん霧む消しようさせた。

　三つ目の武将も消え失せたので、すぐに斉天大聖は叫んだ。

「よし、邪魔者は消えた！　あとは我ら義兄弟の力をひとつに合わせ、この地に我らの手で王おう道どう楽らく土どを築くのじゃ！　手はじめに我が部民を集め、かつての花か果か山さん、水すい簾れん洞どうのごとく不死の恵みを授けてやろうかの！」

「ううむ、ならばそれがしは乳ちち尻しりふとももにござる！　女によ人にんなくして、何が王道楽土か！」

「あー……身共は特には。ですが、お付き合いいたしまする」

　大呪法を崩した勢いに乗って、三妖神は気勢を上げた。

「ところで大兄、『弼馬温』を破った以上、巫女の体に留まる必要もございますまい。脱ぎ捨てられてはいかがでしょう？」

「うむ。これで我も元通り——にならん。なぜじゃ!?」

　末まつ弟ていに進言されて、斉天大聖は体をひとゆすりした。

　しかし、何も起こらなかった。万里谷ひかりの体から抜け出せない！

「その巫女の体に、思いのほか馴な染じんでしまったようですな」

「ま、しばらくそのままでも特に困らんのでは？」

　義弟たちはのんきに言った。基本的に行き当たりばったりの面々なのだ。だが、それについては長兄も大差ない。

「ううむ。いずれ時が経たてば、かさぶたが落ちるようにさくっと剥はがれるやもしれぬか」

　いいかげんにつぶやいた直後、予期せぬ変化が起きた。

　猪剛鬣と深沙神の動きが止まり、硬直する。そのまま石になってしまった。二柱の妖神をかたどった石像の前で、斉天大聖は憮ぶ然ぜんとした。

「顕現の術が切れおったか。なかなか全てが上う手まくいかぬことよ」

　仕方ない。必要になったときは、また術をかけるとしよう。

　肩をすくめて大聖は真しん言ごんを唱え、義弟たちの石像を縮めさせた。小指ほどのサイズになったところで、ふところにしまい込む。

「さあて、これで準備は整った。派手に遊ぶとしようかのう！」

　男体山の頂より、下界を見下ろす。

　まさに『坤ひつじさるをかへりみれば一大湖あり。東西に闊ひろからず南北に長く遠し。銀雪を地に敷き、金花は枝に発ひらく。池

鏡に私なし、万ばん色しよく誰か逃れん。山さん水すい相あい映えいじてたちまちに絶ぜつ腸ちようを看みる』。

　と、かつて空海が『二荒山碑』に記した絶景であった。

　ここでいう一大湖が中禅寺湖である。ただし、冬ではないので銀雪はない。

　ひかりの目と顔で雄大な景観を見下ろしながら、斉天大聖は神通力を解き放った。世界に変化を及ぼす強制力が、男体山の周辺に広がっていく。

　さらに、周囲の火山岩より次々とサルたちが生まれた。

　昨日、幽かく世りよの厩うまやでも放った神しん使しどもである。彼らの体毛は金色がかっていたり、赤しやく銅どう色いろに近かったりと、金属質な色合いだった。

　まさしく石より産まれた霊れい猴こうたち。その数は数百にも達しそうだ。

「我が眷けん属ぞくどもよ、孫さまに仕えるためによくやってきた！　ぬしらの器うつわを合わせ、我のために捧ささげよ！　かつて天軍を脅おびやかした大聖さまの武ぶ勲くんを仰あおぎ見て将となせ！」

　大聖が号令するなり、小ザルどもは仲間同士でくっつき合い、ぶつかりはじめた。途端に彼らの体は融ゆう合ごうしてひとつになり、大きくなる。

　小ザルが一〇〇匹もくっつき合う頃には、身の丈たけ十数メートルの大ザルになっていた。

　日光東照宮に降り立った巨猿型の神獣である。

　この大ザルは結局、六匹も誕生した。足よりも手の方が長く、ゴリラに似た体型だ。

「よし往ゆけ。この地に仇あだなす者がやってきたならば、おぬしらが先せん鋒ぽうじゃ。迎え撃て！」

　六匹の大ザルは、巨体に似合わぬ俊しゆん敏びんさで下界へ走り

出した。

　それを見届けてから、大聖はごろりと地面に寝転んだ。あれこれ大仕事をこなしたので、ちょっと疲れたのだ。一休みして、力を蓄たくわえなくては。

　……この一幕の裏で、天に斉ひとしき大聖ですら気づかぬ些さ事じがあった。

　山頂から数百メートル下方に身を隠し、成り行きを見守る少年がいることに。武ぶ林りんの奇才である彼は、この距離でも子細を見分けられるのだ。

　どうにか発見されないまま一部始終を見届けて、彼はひそやかに下山をはじめた。

　彼の名はもちろん陸りく鷹よう化かであった。

4

　その夜、草くさ薙なぎ護ご堂どうはなかなか眠りにつけないでいた。

　戦いに備えて休養をたっぷり取らねばならないのに、どうしてそうなったのか？　理由は就寝前の一幕にあった。

　ログハウスの一室を寝床と決めたあとで、エリカが同じ部屋に入ってきたのだ。

「お、おまえ、いつまでいっしょにいるつもりだよ⁉　俺はもう寝るんだぞ！」

「ひさしぶりにひとつ屋根の下で夜を過ごすんだから、機会は有効に活用しないと。ねえ、今夜は同じベッドで眠るのもいいと思わない？」

　護堂の詰きつ問もんに、エリカは無む邪じゃ気きな笑顔で言ったものだ。追い出そうとしたら、リリアナと祐ゆ理りまでやってき

た。しかも、事情を聞いた銀髪の騎士はこう提案した。

「エリカも困ったものですね。草薙護堂、こんなに騒々しくてはゆっくり休めないでしょう。わたしもこの部屋で眠り、あなたの休息をお守り申し上げることにします！」

「み、みなさん、不ふ謹きん慎しんですっ。歳とし頃ごろの男女が同じ部屋で眠るだなんて！」

　祐理は顔を真っ赤にして叫んだ。

　全くその通りだと護堂は賛同したものだが、あとが良くなかった。

「私もご一緒しますから、はしたないことは慎つつしんでくださいねッ！」

　と、麗うるわしい媛ひめ巫み女こは宣言したのである。かくしてシングルのベッドがひとつしかない部屋に、三組の布ふ団とんが運び込まれる次第となった。

「万ま里り谷やまで何を言い出すんだよ!?」

「し、仕方のないことですから……。みなさんだけで同じ部屋にいらしたら、どうなってしまうかわかりません。だ、だから私もごいっしょするんですっ」

　常識人であるはずの少女へ詰め寄った返事がこれであった。

　眠れぬ夜はこうしてはじまった。せまい寝室に四人で眠るのだから、人口過密もいいところである。護堂はひとつだけのベッドに横たわったものの、目が冴えて眠れない。

　同じ部屋で眠る三人をどうしても意識してしまう。

　就しゆう寝しんする直前、彼女たちは寝ね間ま着きに着替えていた。リリアナと祐理は自宅から持参したらしい、無難なパジャマである。しかし、普通であれば見る機会のない格好だ。飾り気のない薄布をなぜか護堂は正視できなかった。そしてエリカが問題だった。

　彼女はいつものように、下着姿で布団に入ったのだ。

　カンピオーネの視力は闇やみをも見通す。だから、ちょっと目を凝こらせば、エリカの布団からはみ出る白い肌に寝乱れる金髪が視界に入ってしまう。護堂は布団をかぶり、なんとかして眠ろうと努めた。懸けん命めいに目を閉じる。

　女子たちの寝息や時折洩もれる寝言がとにかく悩ましい。

　だが、心は昂たかぶっていたものの、疲れ切った体は睡眠を求めていたらしい。次第にうとうとしはじめた。熟じゆく睡すいとは言い難がたい二、三時間の睡眠。

　気がつくと、明け方近くだった。窓から薔ば薇ら色いろの曙しよ光こうが差し込んでいる。

「——な、何だ、体が……」

　ベッドのなかで護堂は愕がく然ぜんとした。

　体がだるい。節ふし々ぶしに鈍どん痛つうが走る。吐き気もする。初めて味わう苦痛だった。

「もしかして、昨日さんざん殴なぐられたせいか!?」

　そういえば、羅ら濠ごう教きよう主しゆに打たれるたび体の芯しんにダメージが蓄ちく積せきする気がしたのだ。勘かんちがいではなかったようだ。護堂は改めて教主のすさまじさを思い知った。

「万里谷……どこに行ったんだ？」

　二度寝を諦あきらめたところで、祐理の寝姿がないことに気づいた。

　エリカとリリアナはすやすやと眠っているのに、媛巫女だけがいない。彼女が使っていた布団の上に、きちんと折おり畳たたまれた寝間着が置かれていた。

　朝の散歩にはまだ早い時間だが……。

　いぶかしみながら、護堂も静かに部屋から抜け出した。

　ログハウスからも出て、新鮮な朝の空気を吸い込む。山々の稜りよう線せんからは朝日が顔をのぞかせていた。すばらしい夜明けの

光景。

　しかし、これでまた斉せい天てん大たい聖せいとの戦いに近づいた。

　だというのに、草薙護堂はいまだに煮え切らないままであった。

「結局、俺の覚悟が決まってないからダメなんだよなァ……」

　ぼそりとつぶやいて、護堂は人の気配を感じた。

　白びゃく衣えと袴はかまをまとった媛巫女がこちらへ歩み寄ってくるところだった。

「――お目覚めでしたか、王よ」

「どこ行ってたんだ、万里谷……」

　質問しかけて、護堂は気づいた。祐理の様子がおかしい。

　茫ぼう洋ようとした顔つき。目の焦点も合っていない。しかも、この目は――玻は璃りの色！

「王の御ご憂ゆう慮りょにひとつ、お答えを供しましょう。あなたが手にされた智ち慧えの剣は、此こ度たびのいくさにもお役に立ちましょう。あの御力は神を斬きるのみに非あらず。神の霊れい威いをも斬るゆえに、降ごう魔まの利剣たるのです。幼き巫女を虜りょ囚しゅうとする猴こう王おうの呪じゅ縛ばくすら、必ずや斬り裂きましょう」

　玻璃色の瞳ひとみを妖あやしく揺らめかせて祐理が語る。

　霊視による託たく宣せん。以前、ヴォバン侯こう爵しゃくとの戦いでも聞いたことがある。

　だが、この目の色はまるで幽かく世りょにいた玻璃の媛君だ。そういえば彼女が言っていたではないか。媛巫女たちは、彼女と血を同じくする遠い末まつ裔えいだと！

「ですが、どうかお忘れなきように。斉天大聖さまは無双の武もの人のふであらせられます。大聖さまに利剣を打ち込めるか否いなかは、あなたさまの武勇と御覚悟次第。なかなかに難しき仕し儀ぎと

相成りましょう。——あら？　私、何を申し上げていたのでしょう？」

　祐理の目が元に戻った。いつも通りの黒い瞳で、彼女は我に返っていた。

「俺が気にしていたことの答えを、ひとつ教えてくれたよ……」

　護堂は賛さん嘆たんしながら答えた。

　エリカやリリアナの魔術に比べると地味だが、やはり祐理の力は驚異的だ。

　あやふやな状況でも、常に明確な指針をあたえてくれる。ときには問題を根本的に解決する秘策さえ導みちびき出してくれる。

「そうでしたか。でしたら、早起きして瞑めい想そうをした甲か斐いがあります」

「え？　どうしてそんなことを？」

「昨日から護堂さんがいろいろとお悩みだったようなので……何かご助言ができればと思ったんです。何か啓けい示じを授さずかれれば幸さいわいだと、心を研とぎ澄すませていました」

　朝焼けのなかでしっとりと微笑ほほえむ祐理は、このうえなく美しかった。

　霊視とは気まぐれな天のささやきを受け取るだけの術。自みずから啓示を得ようとするのは不ふ謹きん慎しんだ——と、いつか言っていた祐理がここまでしてくれるとは。

　護堂は彼女に感謝し、そして強く思った。

　この娘の妹を、自分にもなついていたひかりを絶対に救い出したいと。

　肚はらの底から湧わき上がってきた衝しよう動どうを噛かみしめていたら、唐とう突とつに祐理がささやいた。

「実は、昨日の夜から護堂さんに申し上げようかどうか、悩んでいたことがあるんです」

「万里谷が俺に？」

「はい。私も、そして見習いとはいえ、ひかりも武むさし蔵野のの媛巫女です。『まつろわぬ神』が世に災わざわいを振りまくときには、この世を神々から守るために身しん命めいを賭とさねばなりません。ですから、神の依より代しろとなった時点で、妹のことは諦めなければいけないのです」

　悲しげに目を伏せながら、祐理がつぶやいた。

「ですから、本当はこんなことを申し上げてはいけないと――頭ではわかっております。でも、どうしても、護堂さんに聞いていただきたくて……」

　祐理がはっきりしない。意味のないことを言うばかりで本題に入らない。

　だが、その態度で逆にわかった。まじめで誠実で、そして聡そう明めいな祐理には、それを口にすることの無責任さが理解できているのだ。だから躊ちゆう躇ちよしてしまう。

　もういい。もうわかった。護堂は彼女を楽にさせてやりたいと思った。

「……万里谷。俺は必ずひかりを助けるよ。沙さ耶やの宮みやさんや委員会の連中が何を言おうと知ったことじゃない。日につ光こうの街や人が巻き込まれてたって後回しだ。俺はまず、万里谷ひかりをあのサル野郎から奪い返す。これはもう決定事項だ」

　言い切ると、なぜか心が晴れやかになった。

　俺は今、重大な結論を出したのかもしれない。そんなことを思う護堂だった。

「ご、護堂さん……ありがとうございます。私は――」

　涙ぐみながら、祐理が頭を下げる。

　お願いだから妹を助けて欲しい。無言の訴えを汲くみ取った護堂への謝しや辞じだった。

「べつに礼を言われることじゃないぞ。俺はまだ斉天大聖と戦って

ないんだから。追い詰められたりしたら、今の言葉を忘れて、あのサルをひかりごとぶちのめすかもしれないだろ？」

「いいえ。護堂さんは決してそんな真ま似ねをされません。私にはわかります」

　祐理が静かに断言した。

　それは全てを見通す霊れい眼がんの巫女にふさわしい、確信に満ちた物言いだった。

「もしかして霊視したのか？」

「そうかもしれません。理由はわかりませんが、護堂さんは必ずひかりを――親しい女性を見捨てないという気がしますから。でも、これが霊視だとしても、たぶん半分だけです」

　半分？　妙な言い回しに首をかしげる。どういう意味だろう？

「もう半分は、私が護堂さんを信じているからです。媛巫女としてではなく、万里谷祐理としてお願い申し上げます。どうか、妹をお救いくださいませ」

　淑しとやかに頭を下げての嘆たん願がん。そして、祐理は決然と言った。

「良い機会ですから、ここで伝えさせていただきます。私は今回の事件がどのような形で終わろうとも、この後もあなたと添そい遂とげたいと願っております。あなたの神を殺あやめし者としての道が果はつるときか、あるいは私の生が終しゆう焉えんを迎える日まで――」

「そ、それはどちらかが死ぬときまでってことかっ？」

　大げさな言い回しに驚くと、麗うるわしい媛巫女はひっそりとうなずいた。

「はい。あなたは今までがそうだったように、これからも平穏とは無縁の生を送られることでしょう。どのような形で終わるにせよ、私は最後までお供させていただきたいと思っております。この願い、お聞き入れくださいますか？」

突然の申し出。呆ぼう然ぜんとする護堂に対して、祐理は桜のつぼみがほころぶような淡い笑みを向けてくれた。

「ご返事はすぐでなくとも結構です。いつまでもお待ちいたしますので……」

優美に一礼して、彼女はログハウスに戻っていった。

アニー・チャールトンがアーシェラ生存の報を聞いたのは三日前だ。

年長の親友にして協力者でもあるジョー・ベストが『さる高貴な筋から情報提供があった』と報しらせてくれたのだ。

どうやってかは不明だが、宿敵である魔女が生きていた。しかも、うわさに聞く最さい凶きょうのカンピオーネを中国から呼び寄せ、日本で何かを行おうとしている。アニーは飛行機のチケットをすぐに予約した。迅じん速そく果か断だんは彼女の得意技なのだ。

成なり田たに到着したのは昨日の夕方。現場はエキゾチックな観光地だという。

レンタルで車を調達したアニーは、東京へ向かった。ホテルに一泊し、長時間のフライトで疲労した体を休めてから現地入りする予定だった。

しかし、携帯に入ったベスト教授からの連絡を聞いて、予定を改めた。

さる高貴な筋（おそらくグリニッジの元議長であろう）が続報を届けてくれたのだ。日光なる小都市に『まつろわぬ神』が顕けん現げんしたと。ホテルでの休息を中断して車中の人となり、慣れない道路、慣れない右ハンドルと格闘しながら現地へ急行。

疲労も時差ボケもある。しかし、怠なまけたりはしない。

アニー・チャールトンは責任感と正義感の強い女なのだ。数時間かけて夜道をドライブ。現地入りしたのは事件が発生した翌日の早朝だった。

「たしか日本にもＳＳＩに相当する組織があったはずね。できれば彼らと接触して、情報を集めたいところだけど――」

　車を走らせながら、アニーはつぶやいた。

　数年前に訪日した経験もあり、この国の事情にはそこそこ通じている。速すみやかに事件の詳細を把は握あくして、元げん凶きようを叩たたきたいところだった。

　そういえば、日本にもカンピオーネが誕生していたはずだ。

　はたして彼は出しゃばってくるだろうか？　まあ、神殺しが『まつろわぬ神』との戦いに駆り出されるまで、数日から数週間かかるのが通例だ。その間に決着をつければ、ややこしい事態にはならないだろうが。

「彼が早く目覚めるといいのだけど。いろいろ情報を持っていそうだし」

　バックミラーを見て、後部座席に横たわる青年の状態をたしかめる。

　大だい谷や川がわという渓けい流りゆうの付近で昏こん倒とうしているのを、すこし前に発見したのだ。所持品を調べたところ、呪術に関係すると思われる品々がいくつも確認できた。

　日本のＳＳＩ（たしか正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいだったか）の構成員かもしれない。

　アニー・チャールトンは知らない。青年の名は甘あま粕かす冬とう馬ま。消息不明だった正史編纂委員であることを。

第３章　草薙護堂、猴王の版図に足を踏み入れる

1

　十月ともなれば、中ちゆう禅ぜん寺じ湖こは紅あかく色づいた山々で四方を囲まれる。

　湖こ畔はんには飲食店、おみやげ屋などが集まる。ホテルや旅館にも事欠かない。この辺りは中善寺温泉とも呼ばれる温泉地なのだ。

　そんな土地に異変が生じていた。サルがいる。一匹や二匹ではない。

　道を歩くのもサル、観光客向けのおみやげ屋や食堂にいるのもサル。親ザルと子ザルがのんびり家族連れで歩いていたり。何かを盗んだらしいサルを、棒きれを持ったサルの一団が追い回していたり。どこもかしこもサルばかりであった。

「やっぱり全員が元は人間……斉せい天てん大たい聖せいの力でおサルに変えられたんだろうなー」

　猿王国の様子を眺めながら、清せい秋しゆう院いん恵え那なはつぶやいた。

　中禅寺湖近くの林にまぎれ、適当な枝に飛び乗って敵情視察をしていたのだ。

　三〇分ほど前にいろは坂ざかを越えたばかりである。自動車などの乗り物は使わず、猿さる飛とびの体術で山中を走破したのだが、途中では神しん獣じゆうとおぼしき大ザルに追い回された。

　切り抜けられたのは、恵那の武芸と野生の勘かんがあればこそだ。

「こりゃ馨かおるさんに報告しといた方がいいのかな？」

　珍しく殊しゅ勝しようなことを思いついて、携帯電話を取り出す。

　バッテリーが切れていた。恵那は肩をすくめて、電話機をしまいこんだ。

「ま、あの人たちのことだから、恵那の定時報告なんか最初から当てにしてないよね。それより、王様たちが来る前にもっといろいろ見とこうかな」

　肩に掛かる細長い袋には、二尺しやく三寸ずんの大刀が収めてある。

　かつての相棒・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと比べれば、ずいぶんと短い。しかし、得え物ものとしてはこちらの方が適正サイズだ。あの神刀はさまざまな意味で規格外だった。

　もうすぐ相棒を奪い取った少年がやってくる。恵那の心は自然と浮き立ってきた。

　事件発生後、二日目の朝。

　沙さ耶やの宮みや馨は護堂たちの泊まったキャンプ場まで車を回してくれた。

　石せき化かした日につ光こう東とう照しよう宮ぐうに、約一二時間ぶりに戻ってきた。明るい日の下で眺めると、つくづく異様な景観である。東照宮・輪りん王のう寺じ・二ふ荒たら山さん神じん社じやの周辺は厳げん戒かい態勢にあった。

　ロープを張り巡らせ、制服の警官が目を光らせ、一般人の入出が禁止されていた。

「詳細は今でっちあげている最中ですが、諸事情が重なって東照宮その他は緊急の修復工事を実施中……という設定で閉へい鎖させ

ています」

　と語ったのは、護堂たちを出迎えてくれた沙耶宮馨である。

「斉せい天てん大たい聖せいは昨日、居合わせた観光客と地元民をサルに変えた模様です。その辺りの店をのぞいても、誰もいません。まあ、大量消失であって大量虐ぎゃく殺さつでないのは不幸中の幸さいわいですが」

　先導するのは沙耶宮馨だった。護堂はその隣。

　ふたりの後ろには祐理、エリカ、リリアナの三人が続く。

　歩いているのは二荒山神社へと至る西参道である。たくさんのみやげもの屋が軒のきを連つらねている。ここも警官によって閉鎖されており、しんと静まりかえっていた。

「それにしても、委員会って警察も動かすことができたんですね……」

　居心地の悪さを感じながら、護堂は言った。

　ものものしい制服の人々、あるいは背広のくせに堅かた気ぎに見えない人々が、そこかしこでせわしなく動き回っている。

「それはそうですよ。正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいは自衛隊や警察関係、今でいう神じん社じゃ庁ちよう、文もん部ぶ科か学がく省しよう、あと国こく土ど交こう通つう省しようや環かん境きよう省しようなんかとは明めい治じの頃から昵じつ懇こんの間柄です。ぼくらの先せん達だつと満まん州しゆう鉄道、旧陸軍の蜜みつ月げつぶりを語り出したら、一大歴史巨編になります。調べると結構面白いですよ」

　物騒なことを朗ほがらかに語る馨だった。

「あれで甘あま粕かすさんは国家公務員ですし。ま、あの人の場合、公こう安あんに勤務していた時期があったり、とある神社でエセ神職やってたり、あやしい経歴をいろいろ隠し持ってますけど」

「――そうです、馨さん！　甘粕さんはその後、どうされましたか？」

知人の名前を聞いて、祐理が割り込んできた。

護堂も馨の返答を待った。昨晩の話では消息不明とのことだったが。

「すまない祐理、そういえば報告がまだだったね。今朝早く無事に保護されたよ。この件については面白い話もあるから、あとで説明しよう」

なぜか微苦笑しながら馨は言った。

ふたりで話をしましょうと誘われたので、護堂はエリカたちと離れて、馨といっしょに二荒山神社を歩きだした。全てが石となった世界だ。

木造の建物も、生い茂る杉林も、土の地面、湧わき水も、全てが石化している。

「甘粕さんの報告だと、この下に羅ら濠ごう教きよう主しゆが閉じ込められた……といいますか、生き埋めになっているんですよね？　無事でいらっしゃるでしょうかね？」

石で塗ぬり固められた地面をつま先で小こ突づきながら、馨はつぶやいた。

「ははははは！　たかが半日生き埋めになった程度で、師し父ふが死ぬわけないだろ！　そんなやり方であの人を殺すつもりなら、三年は必要だね！」

笑い飛ばしたのは、石化した杉の木から飛び降りてきた陸りく鷹よう化かである。

彼は左の拳こぶしを右の掌しようで包み込み、護堂に頭を下げた。

「陸鷹化、遅ち参さんつかまつりました。崇すう敬けい措おくあたわざる王者であらせられる草薙護堂さま、御おん身みは齢よわいを天と斉ひとしくし、その御ご威い光こうは遍あまねく天下を平定なさることでしょう」

流りゆう暢ちような美び辞じ麗れい句くに護堂は目を白黒させた。

「陸くんだっけ……？　もっと普通に話してくれていいんだぞ」

「これはすいません。師父に仕込まれたせいで、カンピオーネの方々にはとりあえず勿もつ体たいぶった挨あい拶さつをするのが癖くせになってまして。何せ、あの方の機き嫌げんを損そこねるたび、僕は死の危険に立ち向かわなきゃいけませんからね」

　普段の労苦が偲しのばれる告白をしてから、陸鷹化は言った。

「ではお言葉に甘えて、好きに話させていただきましょう。ああ草薙さま、この陸鷹化のことは呼び捨ててくださって結構ですよ。何なら師父のように愛称でもかまいませんが」

「そうか。じゃあ鷹化と呼ばせてもらおうかな」

　相手が歳とし下したの同性であるせいか、陸鷹化の言葉をすんなり受け入れられた。

　やはり男の方がつきあいやすくていい。改めて実感する護堂であった。

「沙耶宮さん、こいつは羅濠教主のお弟子で——」

「存じ上げています、陸りく少しよう侠きようですね。お目にかかったのは初めてですが、ぼくらの業界では有名人です。おそらく、あちらもぼくの顔と名前はご存じでしょう」

　紹介しようとしたら、馨はウインクしてみせた。

「ぼくと草薙さん……ふたりきりで責任者会議をするつもりでしたが、まあ、陸少侠も中国側の責任者ということでいいでしょう。状況をご説明します。斉天大聖は日光市街から奥日光に移動しています」

　馨は上着のポケットから日光の地図を取り出した。

「中禅寺湖から奥おく湯ゆ本もとにかけての一帯が奥日光と呼ばれます。現在、このエリアに足を踏み入れた普通の人間は、たちまちサルに変わっていくそうです」

　地図上に指を走らせながら、美び貌ぼうの委員会責任者は語る。

「自動車を使って奥日光に入れるルートは、第一と第二いろは坂、群ぐん馬まとの県境である金こん精せい峠とうげ、あと西にし沢ざわ方面くらいですね。この辺りには機動隊をやって封ふう鎖さささせています」

「俺たちが向こうに行くときは、通してもらえるんですよね？」

「それはもちろん。ただ、どのルートにも例の大ザルが出現するので、注意してください。ぼくらの送り込んだ斥せつ候こうが遭そう遇ぐうしています。……そういえば陸少侠も昨夜、神獣と追いかけっこをしたんですよね？」

「あの大ザル、途中で僕を諦あきらめたのさ。だから、今度はこっちがあとを追いかけてやった」

　くくっと狷けん介かいな笑顔で陸鷹化がほくそ笑んだ。

　軽けい功こう卓たく越えつ。超人的な脚力を持つ彼だからこそ可能な追跡行だったはずだ。

「デカいくせにすばやいから、苦労したよ。でも向こうまで行ったおかげで、帰りにいいものを見られたぜ。——草薙さま。今日の明け方ですがね、奥日光の霊山に只ただならぬ量の気が集まっていたんで、ちょっと見てきたんですよ」

　陸鷹化は男なん体たい山さいで目撃した一部始終を語った。

　新たな敵の出現、強敵の足あし枷かせが失われたことを、護堂はこうして知ったのである。

「猪ちよ八はつ戒かいと沙さ悟ご浄じようまで顕けん現げんしましたか……。かなり厄やつ介かいなことになりましたね」

「鷹化、ひかり——大聖に体を奪われた女の子はどうだった？」

　馨が憂ゆう鬱うつそうに言う隣で、護堂は勢い込んで訊たずねた。

　呪じゆ法ほうの縛しばりがなくなった以上、ひかりの禍まが祓はらいはもう必要ないはずだ。

「それが妙なんですが、斉せい天てん大たい聖せいはあの姿のまま

寝込んじまいましてね。……遠くから聞いた限りでは、巫み女この体から出られなくなったとか言ってましたが」

　陸鷹化の報告に、護堂はホッとした。

　ひかりの状況が今までと大差ないなら、状況はまだ最悪ではない。

「……ですが草薙さん、ひかりが向こうの人質も同然なのは変わらないですよ。斉天大聖を討うつ際にあの子が妨さまたげになる恐れは――」

「沙耶宮さん、そいつを言うのはなしですよ」

　護堂はすばやくさえぎった。

　昨夜のエリカと同じ警告をするのだろう。ならば、聞く必要はない。

「俺はひかりをあのサルから奪い返して、必ず助けます。その他のこと――『まつろわぬ神』を倒すとか、困ってる人たちを救うとかは、全部あとまわしです。だから、今言いかけたことを俺に説明してくれる必要はないですよ」

「……なるほど。それがあなたのご結論ですか」

　なぜか馨は興味深そうに言った。

　いつも気取っている彼女にしては、珍しく飾り気のない物言いだった。

「迷惑な神様がいて、俺にしか倒せないから俺が戦うのはいいんです。かまいません。でも、俺の力は俺だけのものだ。誰かの自由にさせるつもりはない。俺が気に入らないことに使う気はないし、そのことに文句を言われても聞く気もないんです」

　ひどいことを言っているなと自覚しつつも言い切った。万を救うために一を切り捨てる。その論理はわかる。だが、頭で導みちびき出した答えに従わねばならない法はない。

「女の子ひとり見捨てて、もっとたくさんの人を助ければいいとか言うヤツは、自分で神様と戦えばいい。俺の知ったことじゃない。

でも、俺にどうにかして欲しいなら、俺の流儀に合わせてもらう。要はそれだけの話です。他人の力を当てにするなら、四の五のうるさいことを言うなってことですよ」

「ご尤もつともな仰おおせですねェ。草薙さま、それこそまさに魔王のお言葉です」

　魔ま教きよう教きよう主しゆの直じき弟で子しに賞賛されて、護堂はすこし恥ずかしくなった。

　今の自分の言いぐさ、好き放題に振る舞っている他のカンピオーネ――羅ら濠ごう教きよう主しゆやヴォバン侯こう爵しやく辺りの主張とたいして変わりない。

「まったくです。草薙さんがどうなさるおつもりでも全責任を持つつもりでしたが……なかなか面白くなってきましたね。いや、実は『ひかりを犠ぎ牲せいにしてもいいから、俺は斉天大聖を倒す』とか言われたらヤだなと思っていたんですよ！」

　あろうことか、馨までにこやかに言い出した。

「ぼくはこれでも伊だ達てと酔すい狂きようが信条でして。ついでに、可愛かわいい女の子も大好きです。でも組織の責任者として、柄がらじゃないのに真ま面じ目めなことを言わなきゃダメな時もあるんですよ。……ですが、今回は魔王陛へい下かの御命令。従わないわけにはいきませんからね！」

　人の悪い笑顔で委員会の責任者がほくそ笑えむ。

　陸鷹化といっしょに全面的賛成を訴える姿は、まるで悪あく代だい官かんと癒ゆ着ちやくした御用商人である。いや、世界に仇あだなす魔王とその郎党というべきか。

　カンピオーネとして、またひとつダメな方向にステップアップしてしまった……。

　うなだれる護堂のそばで、馨が携帯電話を取り出した。着信があったようだ。

「草薙さん、行方不明だった人がこちらに到着したそうです。顔を見に行きませんか？　ちょっと面白い客人もいっしょなんですよ」

しばらく話をしていた馨は、電話を切るなり言った。

行方不明者というのだから甘粕のことだろうが、面白い客人とは何だろう？　いぶかしみながら、護堂は馨のあとに続いた。

当然のように陸鷹化も同行する。やってきたのは東照宮前の表参道。

エリカ、リリアナ、祐理の三人が背広姿の青年と向き合っていた。やはり甘粕だった。

「……ああ草薙さん。恥ずかしながら、ようやく戻って参りました」

護堂に気づいて、甘粕が挨あい拶さつしてきた。

力ない口調である。よく見れば顔色も悪い。背広のよれ具合も普段よりひどかった。

こんなに弱っている彼を見るのは初めてだ。

護堂は彼の後ろにいる白人女性に気づいた。燃えるような赤毛のショートヘア。知性と意志の鋭さを宿す、整った顔立ち。身にまとうのはレザーのジャケットとパンツ。

非の打ち所のないクールビューティ。そんな雰ふん囲い気きの女性だった。

「こ、こちらはアニー・チャールトンさん。いい、意識不明のままずぶ濡ぬれになった私をたまたま見つけて拾ってくださった、い、命の恩人です」

ぶるぶる震え、鼻水をすすりながら、甘粕は同行者を紹介した。

氷を思わせる美女は「アニーよ。よろしく」と、きれいな日本語で挨拶した。



2

甘あま粕かす冬とう馬まとアニー・チャールトン。

ふたりを囲むのは草くさ薙なぎ護ご堂どうと万ま里り谷や祐ゆ理り、エリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャール、そして沙さ耶やの宮みや馨かおると陸りく鷹よう化かである。思わぬ大所帯となった。

ぶるぶる震えながら、甘粕は深じん沙しや神しん顕けん現げんに立ち合う前後のことを語ってくれた。

「もしかして、そのときに怪け我がでもしたんですか？　調子悪そうですよ？」

「い、いえ。傷は治ち癒ゆの術でとっくに完治したのですが、ずぶ濡れのまま何時間も昏こん倒とうしていたせいで、すっかり風か邪ぜをひきまして。ひどい熱なんです」

そういえば病気を治す術は、外傷を癒いやす術ほど劇的な効果はないらしい。

エリカから聞いた魔術のうんちくを、護堂は思い出した。

「アニーさんに助けてもらえなかったら、は、肺炎を起こしていたかもしれません。この方はロサンゼルスから来た、あ、あちらの魔術師さんらしいですよ」

「単たん刀とう直ちよく入にゆうに言うと、あたしは神しん祖そアーシェラの行方ゆくえを追って日本まで来たの」

甘粕の言葉を引き継ぐように、アニーが言った。冷たい美び貌ぼうに似合う明めい晰せきな声だった。

「もしかして、あなたは善の魔術師なの？」

「ええ。邪じや術じゆつ師しの陣営に属したことは、過去に一度も

ないわね」

　エリカの質問に、赤毛のクールビューティがうなずく。善の魔術師。聞き慣れない言葉に、護堂は興味を持った。

「諸もろ々もろの歴史的経けい緯いがあるため、北米には魔術師があまりいないのです。しかもあちらには、欧おう州しゆうでは正派の魔術結社に抹まつ殺さつされるような『邪術師』と呼ばれる輩やからがいます。彼らと敵対する魔術師は、敢あえて『善』の陣営であることを標ひよう榜ぼうするのです」

　と、リリアナが解説してくれた。

「アーシェラが中国のカンピオーネに利用され、ふたたびレヴィアタンとなった状況はアマカスから聞いたわ。斉せい天てん大たい聖せいという神が少女の体に憑ひよう依いして顕現したことも。そして、あなたたちがこの事件の解決に当たっているチームだとも」

　アニーが居合わせた面々を見回しながら告げる。

「隠す必要もないことだから、最初に言っておきましょう。あたしはロスのチャンピオンに依頼されて、アーシェラの生死を確認するためにやってきたの。あの魔女が死んでいるのなら、もう任務は終わったとも言える。でも、こんな異変の現場に居合わせて素通りするつもりはないわ。あなたたちに協力させてちょうだい」

「ロスのチャンピオン？　では、あなたは――」

「ジョン・プルートー・スミスさまの部下なのですか⁉」

　驚くリリアナと祐理を、アニーは静かにたしなめた。

「部下ではなく協力者と呼んで欲しいわね。彼はたしかに王のごとくロスに君くん臨りんする存在だけど、未いまだかつて己の王国を築いたことはないわ。それがジョン・プルートー・スミスのスタイル。忘れないで」

「そういう次第ですので、草薙さんとお引き合わせしたわけです。この際、日米友好条約を結ぶのも悪くないかもしれませんよ」

　いたずらっぽく訴える馨の美貌を、護堂はちらりと見た。

「奥おく日につ光こうでサルにならないでいられるのは、相応の呪じゅ力りよくを持つ遣つかい手てだけです。彼女の身元保証人である北米の三さん賢けん人じんに確認したところ、アニー・チャールトンならば問題ないとのコメントが返ってきました。能力的には問題ない人材のはずですよ」

　馨はアニーに向き直り、ここで護堂の紹介をした。

「ミズ・チャールトン、こちらが対策チームのリーダー、草薙護堂さんです」

　正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの幹部は、草薙護堂が日本のカンピオーネだと言わなかった。明らかにわざとだ。情報公開は護堂の判断にまかせるという意味なのだ。

　猫の手も借りたい今、アニーの申し出は非常にありがたい。

　だが、この一晩で状況はさらに悪化している。彼女を巻き込んでもいいものか。

「……とりあえず、アニーさんのことを決める前に報告しておこうか」

　沙耶宮馨が斥せつ候こうを放って得た現地情報。

　陸鷹化が目撃した男なん体たい山さんでの三神集結。『弼ひつ馬ば温おん』の消失。

　そういった新情報を、護堂はひととおり皆の前で語った。全すべてを聞いてエリカは大きくうなずき、リリアナは悩ましげに頭を振った。妹の救出がさらに困難になったと知って祐理の表情は凍りつき、甘粕の顔色はもうすこしだけ悪くなった。

　そして、アニー・チャールトンは――。

「そう。それは大変な状況ね。だとしたら、一刻も早くあたしたちは現場に向かって、事件の解決に取り組むべきだわ。そうじゃない、ゴドー？」

　表情も変えずに言った。静かな口調からは、明確な意志と誠実さを感じる。

　この人なら信じてもいいのでは？　北米のカンピオーネの協力者だという女性は、そう思わせる不思議な何かを持っていた。彼女の問いかけに護堂はうなずいた。

　それから一時間後。

　正史編纂委員会が呼んだパトカーに乗って、護堂たちはいろは坂の入り口にまで連れてこられた。まさか、こんな形で白黒ツートンカラーの公用車に乗る日が来るとは——。

　ちょっと感かん慨がいにふける護堂であった。

　馨が言った通り、いろは坂は機動隊の警官とパトカーで封鎖されていた。

　だが、正史編纂委員会のスタッフという触れこみの護堂たちには関係ない。ここで車を乗り換えた。悪路にも強そうなＳＵＶで色はシルバー。委員会が用意してくれたものだ。

　運転席にはアニー・チャールトン。護堂は助手席に乗り込んだ。

　後部座席にはエリカとリリアナ、祐理がすわる。

　風か邪ぜっぴきの甘粕、委員会の総責任者である馨、そして陸鷹化は日光市街に残る。他のふたりはともかく、戦闘要員である香ホン港コンの武ぶ侠きようには同行して欲しかったのだが——。

「野暮用がありましてね。僕はこちらに残らなければいけないんですよ」

「そうか……。いっしょに来てもらえると助かったんだけどな」

　断られた護堂は肩を落とした。いつもの面子メンツにアニーまで加わるのだ。できれば男子の味方が欲しかったのだが。

「申し訳ありません。いえ、師父がここに生き埋めになってますからね。すこしは救出のために努力しておかないと、いろいろ怖いんですよ」

「鷹化は師し匠しよう思いなんだな。羅ら濠ごう教きよう主しゆが

心配なのか」

　殊しゆ勝しような面もあるのだなと感心したら、陸鷹化はかぶりを振った。

「いいえ。まったくもって心配なんざしていません。師父のことです、石いし牢ろうを自力でぶち破って出てくる可能性だってありますし。でも、弟子として三日くらい救出作業に従事しておかないと、あとで『師といえば親も同然だというのに、何と情けの薄い子でしょう！』なんて拗すねられるかもしれません。アリバイを作っとくに越したことはないんですよ！」

　この傲ごう岸がん不ふ遜そんな少年を、ここまで警戒させるとは。

　羅濠教主があたえたトラウマの数々を想像すると、不ふ憫びんでならない護堂であった。

「——やはり『目』を飛ばしても弾はじき返されますね。沙耶宮馨が言った通り、この峠とうげを越えないと魔術による偵察もできないようです」

　これから車を出すという矢先、後部座席で目をつぶっていたリリアナが言った。

「目だって？」

「リリィに魔女の目を使ってもらったのよ。昨日も役に立ったでしょう？」

　と、エリカが補足した。視覚を飛ばす魔女術『魔女の目』。虚こ空くうに第三の目を作り、それを動かして遠方を見通す術だという。

「物見の術を使える委員会の方も、奥日光に『目』を飛ばすことはできなかったそうです。斉天大聖さまの神力がこの辺りの空気に満ちているのが先ほど霊視できました。おそらく、これが結界の役を果たしているのでしょう」

　祐理も霊視の結果を教えてくれた。

「ゴドー、あなたはまだ若いのにたいした人のようね。《赤しやく

銅どう黒くろ十じゅう字じ》の『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』に《青せい銅どう黒くろ十じゅう字じ》の魔女、そして日本の霊視術師までチームに加えているなんて。……あなた自身は、どんなスキルを持っているのかしら？」

「あー……まあ、その辺はおいおい話します」

　運転席のアニーに感心されて、護堂はごまかした。いずれ正体を明かすかもしれないが、急ぐ必要はない。そうこうするうちに車は走りだした。

　いろは坂は、いろは四八文字と同じ数のカーブを有する峠とうげ道みちである。

　傾斜もきつく、すさまじい急カーブが連続する。男体山のまっただなかを上下動するので、山の自然を眺めながらのドライブとなる。

　初めて経験するであろう難所を、アニーは丁てい寧ねいな運転で踏とう破はしていく。

　紅や黄に色づいた山の木々。あとすこしで見頃を迎えるはずだ。この時期、渋滞を起こすことさえある坂道を順調に登る。カーブを一〇ほど過ぎると、『Ｕ』の字に似た急カーブへ差しかかった。その手前に、巨大なサルが木をかき分けながら現れる！

「昨日の神しん獣じゅうよ！」

　エリカが叫んだ瞬間、アニーが動いた。ブレーキを踏んで急停車。すばやく運転席の窓を開け、右手を外に。そこに細い銃じゅう身しんのリボルバーが顕あらわれた。

　ＢＡＮＧ！　躊ちゅう躇ちょなくアニーは撃った。

　銀の火花が散り、銀色の軌き跡せきを描きながら銃弾は巨きょ猿えんの毛皮に呑のみ込まれた。おそらく何らかの魔力を秘めた攻撃だったのだろう。

　しかし巨猿は何事もなかったように、太く長い腕を伸ばしてくる。

「アニー・チャールトン、神獣にその程度の魔術攻撃は効かな

い！」

　リリアナが警告する。そこでバックミラーに映る影に護堂は気がついた。だが、警告の声を発する前に祐理が叫んでくれた。

「う、後ろにも来ています！　みなさん、気をつけてください！」

　後方からも巨猿が出現する。挟はさみ撃うちされる形になった。

　こんな山道で二体の神獣と遭そう遇ぐう。普通なら絶体絶命の窮きゆう地ちだ。アニーはそれでも冷静さを失わず、闘志あふれる目で前後の神獣をにらむ。なるほど、アメリカのカンピオーネが協力者に選ぶだけはある。

　そして護堂は、ある感覚に気がついた。後部座席の少女たちに目配せする。

　最初に反応したエリカは、銀髪の少女に手振りで降りろと指示。すぐにリリアナはドアを開け、騎士ふたりで連れ立って下車する。護堂も車を降りた。

「あなたたち、何をするつもり？　早く戻りなさい！」

「ご安心ください、アニーさん。ここは護堂さんたちの力で切り抜けてみせます」

　戸惑うアメリカ人に祐理が説明している。

　それを聞きながら、車外の三人はそれぞれの言こと霊だまを唱となえた。

「鋭く近寄り難き者よ！　契けい約やくを破りし罪ざい科かに鉄てつ槌ついを下せ！」

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！　主よ、何なに故ゆえ我を見捨て給たもう！」

「ダヴィデの哀あい悼とうを聞け、民たみよ！　ああ勇士らは倒れたる哉かな、戦いの器うつわは砕けたる哉！」

　まず護堂が『猪いのしし』を呼んだ。

　羅濠教主との戦いから、一日が過ぎていたようだ。巨猿二匹に挟み込まれながら、護堂は黒き巨獣が呼び出せることに気づいたのだ。

　足場がよいところなら、『猪』だけでカタがついただろう。しかし、こんな山道では暴れん坊も好きに動き回れない。だから、騎士たちがダヴィデの言霊で追撃を阻そ止しする。

　エリカはクオレ・ディ・レオーネを呼び出し、鋼こう鉄てつの矢に変形させた。そこに言霊を宿らせ、鉄弓を呼び出す。矢をつがえる。

　リリアナはヨナタンの弓を創つくり出し、青き光の矢を準備した。

『猪』が前方の巨猿に飛びかかり、紅と青の騎士が後方の巨猿を牽けん制せいする。

　黒き神獣と共に、巨猿の片割れは斜面を転落していく。後方より飛びかかろうとする残りの一匹は、二騎士の弓矢を警戒。これで活路が開けた。

　騎士たちは車に戻り、護堂も続こうとした。途端に足がもつれて倒れ込んだ。

「な、何だっ？　体が……」

　体がだるい。思うように動かない。初めて味わう感覚に、護堂は戦せん慄りつした。

『猪』を使った直後にこうなった。もしかして昨日のダメージのせいか!?　そういえば、今朝も相当きつかった。体を動かすうちに気が紛まぎれてきたのだが……。

　そんな護堂に、一度は怯ひるんだ後方の大ザルが剣けん呑のんな視線を投げてくる。

　――いや。危険は後ろだけではなかった。

　前方に新たな巨猿が現れた。まさかの三匹目。ふたたび挟み込まれてしまった！

「護堂さん！」「護堂！」「草薙護堂！」「ゴドー、早く戻って！」

　新たな巨猿がずんずんと接近してくる。無防備な護堂とシルバーのＳＵＶを見下ろして、大きく腕を振り上げる。言霊を聞いたのは、この瞬間だった。

「八や雲くも立つ出いずも雲や八え重垣がき、妻つま籠ごみに——八重垣作る、その八重垣を。清せい秋しゆう院いん恵え那な、推すい参さん！」

「恵那さん——！」

　快活にして不敵な名乗り。それを聞いて祐理が顔を輝かせる。

　色づきはじめた紅葉のなかから制服姿の少女が飛び出してきた。手に持つのは日本刀。身にまとうのは渦うず巻まく烈れつ風ぷう。太た刀ちの媛ひめ巫み女この登場だった。

　バカでかい大ザルの手の前に、恵那は立ちはだかった。

　彼女の周囲で風が勢いを増す。小型の竜巻たつまきさながらであった。そこには小なりとはいえ、明らかな神力が宿っている。恵那は神がかりの術を使い、守護神であるスサノオの神性——暴風神の権能を駆使しているのだ！

　この竜巻は神獣である巨猿の手を払いのけた。

　ありえない失態。巨猿が獰どう猛もうに吠ほえ、鋭い牙きばを口からのぞかせた。ここから紅ぐ蓮れんの焔ほのおがほとばしり、恵那と護堂をもろともに灼やき尽くそうとする。

　しかし、太た刀ちの媛巫女を守護する暴風神の竜巻は、この焔をも退しりぞけた。

「山やま畑はたにつくりあらしのえのこ草……阿あ南わの鳴なる門ととたれかいふらん——！」

　恵那が風のごとき身軽さで跳躍し、巨猿の肩に飛び乗った。

　大刀を一いつ閃せん。大きな左目に深々と突き刺す。オオオオオオオオォォォォォォォンンッ！

　苦く悶もんの咆ほう哮こうが、巨猿の口から轟とどろく。

　その間に外へ出たエリカが護堂の体を抱え上げ、車に連れ込む。後方から改めて迫ろうとする巨猿に、リリアナが二発目のヨナタンの弓を撃ち込んで牽けん制せい。

　恵那に片目をつぶされた方の巨猿は怒りにまかせて手足を振り回す。しかし遠近感が狂ったのか、まったく的まと外はずれ。悠々と地上に飛び降りた恵那が車へやってきた。

「アニーさん、早く出してくださいッ！」

　巫女仲間が乗り込むのを待って、祐理が訴えた。

　アニー・チャールトンはすばやくアクセルを踏む。かくしてシルバーのＳＵＶは窮きゆう地ちを切り抜け、巨猿たちから遠ざかる。

　助けられた護堂は、朦もう朧ろうとする意識のなかで女性陣の声を聞いた。

「大丈夫、王様!?　そろそろ来る頃だと思って、峠を見張っていてよかったよ！」

「もしかして、いえ、やはり彼はチャンピオン。カンピオーネとも呼ばれる魔王その人なのね……！　あなたも彼のスタッフというわけ？」

「すたっふ？　ちがうよ。恵那はそんなのじゃなくて、王様の女。まあ、はっきりとした関係じゃないから、内縁の妻みたいな感じ？　でも恵那だけじゃないよ。ここにいるのは、みんな王様の女だもん」

「な、ななな内縁の妻!?　全員、彼の女!?　そ、そういえば日本のチャンピオンは若くして恐ろしい色好みだと前に聞いたような——こ、こういうことだったのね！」

　ちがうんですアニーさん、誤解しないでくださいと護堂は訴えたかった。

　しかし言葉にはできなかった。意識を失ったのだ。

3

暑い。ぼんやりと覚かく醒せいした護ご堂どうは、そんなことを思った。

まわりで女子の声が聞こえる。何か話しているようだ。うっすらと目を開ける。煙がもうもうと沸わき起こっていた。まさか火事場？

いや、これは湯気か。まばたきを何度か。頭がはっきりとしだした。

「あ、王様が起きたよ」

「護堂、大丈夫？　体の方は治っているようだけど」

右前方からエリカ、左前方から恵え那なの声。湯気が晴れてきた。五ご官かんと頭脳が正常に機能をはじめる。そして、護堂は心の底から驚きよう愕がくした。

「なな！　な、何だよこれは⁉」

開口一番に絶叫した。暑いのも道理、露天風呂のなかだった。

護堂は熱い湯に肩まで浸つかり込んでいた。背中は露天風呂を囲む岩にもたれている。当然のことながら、裸である。腰のまわりには大きめのタオルが巻きつけてあった。

そして、すぐ前方にいる美少女ふたり。

金きん髪ぱつ碧へき眼がんのエリカ・ブランデッリ。黒髪黒目の清せい秋しゅう院いん恵え那な。どちらもバスタオルで胸元を覆おおっていた。しかし、ふたりのスタイルの見事さは薄布越しでもはっきりと見て取れる。

エリカの方がＢＷＨ表記におけるＢとＨのサイズは大きそうだ。

だが、それで恵那の肉体が所有する圧倒的な量感が損そこなわれるわけではない。

バスタオルで締めつけられたせいか、二少女の胸の谷間が強調されている。温泉が濁にごり湯であれば、まだよかった。だが残念ながら、極めて透明感の高い湯質だった。

ふたりの肢し体たいと護堂の間を阻はばむものはバスタオルのみ。

これを直視してはまずい。視線を無理矢理に奥の方へ向ける。すると、さらにふたりの少女がいることに気づいてしまった。

「ど、どうやら回復されたようですね。ぶ、無事のご復活、何よりです」

「こ、こちらを見ないでください、護堂さん！　お願いしますっ！」

もちろんリリアナ・クラニチャールと万ま里り谷や祐理だった。そして、こちらのふたりもバスタオル一枚というあられもない格好だった。

リリアナは冷静沈着に振る舞おうとしている。

だが、白い全身は羞しゅう恥ちで真っ赤だった。それでも凛り々りしく、護堂の視線から逃れようとしない。起き伏ふくに乏とぼしいくせに、ほのかなふくらみがしっかりと確認できる。

華きや奢しやな白人美少女だけが持ちうる、あやしい妖よう精せいの魅力。

ガラス細工にも似た、壊れやすいがゆえの貴重な美がそこにはあった。

対して祐理は、必死に身をよじっていた。

正面から見られるのを防ごうとしているのだ。しかし、その試こころみはあまり上う手まくいってない。横を向いてもすばらしいスタイルは視認できるからだ。

エリカや恵那ほど、祐理は豊満ではない。だが、十二分に女性的な体つきである。

適度にふくらみ、唯ゆい一いつの衣料であるバスタオルを押し上

げる胸。ふたつの隆起はため息が出るほど美しい形だった。腰からお尻にかけての芸術的な丸み。細いくせにしっとりとやわらかそうなふともも。どれも申し分ない。

　美しいラインと量感の絶妙な均きん衡こう。その一点において最高の水準にあった。

「ふ、ふふふふふ……そうか、わかったぞ」

　非現実的な光景を前にして、護堂は笑いながらつぶやいた。

「これは夢だ。いつも抑よく圧あつされた生活を送っている俺は、ついにこんな夢を見るようになってしまったんだ！　そうにちがいない！」

「何言ってるの、護堂。これ以上ないくらいに現実じゃない」

「そうそう。ほら、痛いでしょ？　全部本当に起きていることなんだって」

　そばにいるエリカに言われ、恵那に頬ほおをつねられた。痛い。

「そうか、現実なのか……。じゃあ訊きくけど、ここはどこだ？」

「中ちゅう禅ぜん寺じ湖この温泉だよ。この辺りは斉せい天てん大たい聖せいのせいでおかしくなっててさ。その煽あおりで放棄された温泉旅館がいくつかあるんだ。そのひとつに潜もぐり込んだの」

　恵那がすらすら答えてくれた。だが、まだ疑問は残っている。

「俺は何で温泉に入っているんだ？」

「ほら。王様、倒れちゃったじゃない？　ゆっくり休んでもらおうと思って」

「恵那さんが湯とう治じという風習を教えてくれたのよ。この際だから試ためしたらどうだって」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こと金髪の騎士から回答を聞いて、護堂は天を仰あおいだ。夕暮れが近いらしい。だいぶ陽ひが傾いている。

「それで意識不明の俺を風呂に放り込んだのか……」

「大丈夫。溺おぼれさせないように、最初から恵那と祐理もいっしょに入るつもりだったから。実はね、山ごもりのときによく温泉に入るんだ。……そうしたらエリカさんもつきあうって。いざ入ろうとしたら、向こうのリリアナさんまで」

「ほら。昨日、露天風呂に入ろうって言っていたでしょう？　いいチャンスだと思ったの」

「い、意味がある行為だと思えなかったので、止やめさせようとしたのです！　しかしエリカと清秋院恵那は言うことを聞きませんでした。騎士として仕方なく、怪しげな民間療法を監視するためにこうして――！」

「わ、私はいっしょに来ないとダメだと恵那さんに強要されて……！　ご、誤解しないでくださいねっ。私はただ恵那さんがハメを外しすぎないようにつきあおうと考えただけで！」

　入浴の理由を自己申告する少女たち。

　ツッコミどころは多いが追及すまい。今、それよりも追及すべきなのは――。

「なあ。もうひとつ訊くけど、誰が俺をこんな格好にしたのさ？」

「それは、言い出しっぺの恵那が責任を持って」

「わたしも手伝ったわ。護堂の愛人としては、当然よね」

「お、おまえたち、ななな何てことをしてくれたんだ。そ、それじゃあやっぱり」

　鋭くにらみつける。物もの怖おじなど知らぬはずのふたりは、珍しく視線を逸そらした。

「あー……うん。ごめん王様。…………見ちゃった。よく考えたら、温泉に入れさせるには、そうしなきゃダメだったんだよね。まあ、途中からは勢いで脱がせちゃった」

「そうね。で、脱がせた以上は見ないわけにはいかないし……」

恵那が告白すれば、エリカも微妙に照れながら言う。

「あ、でも王様って結構鍛きたえてるよね。かっこいい体だったよ。腹ふつ筋きん割れてるし」

「そもそも、護堂だってわたしの一いつ糸しまとわぬ素肌を見ているでしょう？　これはいわば等価交換よ。おたがいの裸を鑑賞し合っただけなのですもの」

このような事態を招いた諸もろ々もろの要因を、護堂は呪のろいたくなった。

エリカはひさしぶりに見るツンとした表情だ。だが、恵那の方はすまなそうな顔をした。

「えーと……。じゃあさ、お詫わびに王様も恵那のを見ていいよ？」

そんな爆弾発言付きで。へ？　護堂の頭は、数秒間フリーズした。

「エリカさんがおあいこだって言うなら、恵那もそうしなきゃ。ほら、ゴメン。お詫わびのしるし。――でも考えてみれば、王様が相手なら最初からこうでもよかったんだよね。ま、まだ怖いけど、そのうち胤たねとかもらったり、いろいろするわけなんだしっ……」

恵那が自みずからバスタオルをほどいた。湯のなかで薄布が広がっていく。

みっしりと重量感のある、それでいて限りなくやわらかそうな、つつけば押し返してきそうな弾力を秘めた胸のふくらみ。その先端の桜色。

ウエストのくびれは細く、なまめかしく、さらにその下には――。

「あら、恵那さんって意外に大だい胆たんなのね。普段はともかく、こういうことには消極的なのかもって、実は疑っていたのだけど」

冷ややかにエリカが言う。皮肉にこもる優雅さが、いつもよりすくなかった。

　もしかしたら、イレギュラーな要素の多い清秋院恵那を、エリカ・ブランデッリは危険人物として警戒しているのかもしれない。

「うん。やっぱりさ、あんまり男の子と仲良くしたこともないしね。話でしかそういうのって知らないし……でも、だからって逃げてたらダメだもんね！」

「そう——ね……。恵那さんはいいことを言ったわ。たしかに、最初からこうでもよかったものね。気づかなかったわたしも、すこし迂う闊かつだったかしら……」

　エリカまでタオルに手をかけた。どうして対抗心を剥むき出しにする!?

　脳内で絶叫する護堂の前に、女神のごとき肢し体たいが露あらわになった。

　衣服の下からでも激しく存在を誇示するバストは、湯のなかでしどけなく浮き上がり、否いやが応おうでも直視せざるをえない。小振りのメロンを思わせるふくらみの突端は薄紅色の果実のように色づいている。ウエストは上下の部分に比べて驚くほど細く、くびれは悩ましい。そして、腰の辺りから一気に盛り上がる臀でん部ぶの丸みは扇せん情じよう的てきでありながら、どこか可か憐れんで——。

「ほら。祐理もそれ、取っちゃおうよ」

「やや、やめてください恵那さんっ。お願いです、どうか放して！」

「せ、清秋院恵那！　無む体たいな真ま似ねはやめるんだ！　それ以上の非道はわたしが許さない！」

　恵那は裸のまま祐理にしがみついていった。

　幼なじみの媛巫女がまとうバスタオルをはぎ取りにかかる。泣きそうな顔で逃げようとする祐理。しかし、布の端っこをつかまれた。玉の肌が露になる。それを阻はばもうとしたリリアナのタオルもはらりとほどけそうになり——。

　護堂はもう見るのをやめた。

ザバンッと湯から飛び出し、脱衣所めがけて全力疾しつ走そうする。

こんな場所に居続けてはいけない。逃げよう。欲求と情動を抑おさえ込みながら、護堂は男としての矜きよう持じを全まつとうすべく駆けた。

4

幸さいわい、護ご堂どうの衣服は脱衣所のかごに入っていた。

手近にあったタオルで適当に体を拭ふき、大おお慌あわてで着替える。そのまま廊ろう下かとエントランスを走る。恵え那なの言った通り、露天風呂は旅館の施設だったようだ。

外に出て建物を見る。こぢんまりとした隠れ家風の温泉旅館であった。

とにかく落ち着かなくては。しばらく外を歩くことにした。

旅館は広こう壮そうな湖みずうみのほとりにあった。まちがいなく中ちゆう禅ぜん寺じ湖こだろう。周囲の山々は紅葉による赤と黄色で彩いろどられている。清明な湖水とあいまって、得も言われぬ秋の美景を堪たん能のうすることができた。

中禅寺湖を取り巻くように店が点在している。ホテルに旅館、小こ洒落じやれた洋風のレストラン、喫茶店など。店と店の間は結構距離が空いていた。

ここで護堂は、目の前を歩くサルに気づいた。

背の高さは八〇センチ程度。赤ら顔のところを見ると、ニホンザルのようだ。

視線が合った。きぃ、ききぃ。挨あい拶さつするように短く啼なくと、サルはそのまま歩いていく。

その方向には交差点があった。

そういえば、教えてもらったではないか。奥おく日につ光こうにいる普通の人間は、ことごとくサルに変えられたと。胸騒ぎを覚えて、護堂は走り出した。

さっきのサルを追い越し、交差点までたどり着く。一般道だというのに、大きな赤い鳥とり居いが立っていた。交差点の信号と比べても、二倍近い高さだった。

中禅寺湖の見どころのひとつ、赤鳥居だろう。ということは、ここがメインストリートのはず。観光客向けのみやげもの屋、食堂など、さまざまな商店が並ぶ大通りだった。

その景色を眺めて護堂は嘆たん息そくした。まさしく猿王国だった。

——ききぃ！　ききっ。ききき、きき、ききぃ！

——ききゃきゃっ？　ききゃっ。くききき、きぃぃききっ！

あちこちでサルの啼き声が聞こえる。中禅寺湖の温泉街は、サル化した人々であふれかえっていた。種類も豊富だ。ニホンザル、アカゲザル、テナガザル、マントヒヒ、チンパンジー、オランウータン、マウンテンゴリラ等々——。

護堂には判別できない種類もいる。彼らはこちらを見ても、騒ぎ立てたり逃げたりもしなかった。まるで人に慣れた都会のハトだ。

サルたちは中禅寺湖畔を占せん拠きよし、なかなか人間らしく振る舞っていた。

デジカメでパシャパシャ写真を撮とったり（デジカメは逆さで、レンズは見当ちがいの方向を向いていたが）。店に入って店員らしいことをやっていたり（レジのなかの紙し幣へいをつまみ上げてムシャムシャかじっていたが）。食事を注文したり（ソバのどんぶりに手を突っ込んで、手づかみで食べていたが）。

サルが人間の真ま似ねをしているような、戯ぎ画が的な光景である。

これはこれで面白い芸かもしれないが、見ているうちに怒りが込み上げてきた。彼らがもともと人間だったことを考えると、あまり洒落になっていない。

「彼らは人間だったときの記憶を、すこしは持っているのかもしれないわね」

　後ろから声をかけられた。

　アニー・チャールトンが近づいてくるところだった。

「どうやら回復したようね、ゴドー……」

「はい。たっぷり寝たおかげか、もう何ともないです」

　護堂はうなずいた。体はすっかり軽くなっている。不快感もない。

　しかし、なぜだろう？　アニーのまなざしはきつく、汚物を見るような視線だった。

「そのせいだけではないわ。……さっき、あなたのガールフレンドたちが争うように治ち癒ゆの術をかけたのよ。誰があなたとキスをするか、揉もめに揉めて。結局、隙すきを突いたエナが寝ているあなたの唇くちびるを奪い、術を——！」

「そ、そんなことがあったんですか」

　しかも、その現場をアニーに見られるとは。護堂は大いに恥じ入った。

「神獣を軽く蹴け散ちらす魔力……あなたがチャンピオンだと聞いて、納得したわ。でもゴドー、あなたときたら神より簒さん奪だつした権能を使って、何人もの少女をステディに——いえ、慰なぐさみ者にして、欲望のはけ口にしているのね！　恥を知りなさいっ！」

　慰み者⁉　言うに事欠いて、なんという暴言。護堂はすぐさま反論した。

「清秋院の言ったことを本気にしないでくださいよ！　あいつらはみんな俺の仲間で、友達で、いかがわしい関係とかじゃないんです！」

「まるでスキャンダルを暴ばく露ろされた政治家みたいな口を利きくのね」

アニーの視線と表情は氷のごとく冷え切っていた。

「断っておくけど、あたしはさっきの旅館で催されたあれを知っているのよ。今さら説得力のない言い訳をしても無駄じゃないかしら」

「あ、あれ!?」

「せ、世間にはああいう乱れたパーティーがあると、うわさでは聞いていたけど……。自分の身近で行われるとは夢にも思わなくて、建物から逃げ出してしまったわ。でもまさか、歳とし頃ごろの男女が五人も集まって、みんな裸でバスルームにこもるだなんて……！」

嗚あ呼あ。アニーは露天風呂の騒ぎを知っていたのか。

あの破は廉れん恥ち極きわまりない混浴を。ちょっと言い逃れできない大乱行を。

「す、すこしうるさかったかもしれませんが、信じてください！　俺たち、変なことは何もしていないんですよ！」

「あれが変じゃないだなんて、バカを言わないでっ。普段どれほど退たい廃はいの限りを尽くしていれば、そんな戯ざれ言ごとを口にできるのかしら。恐ろしい子！　あ、あんな乱らん痴ち気き騒ぎ、ドラマのなかだけの出来事だと思っていたわ！」

あからさまに取り乱しているクールビューティ。アニー・チャールトンは意外にも、こういう方面に免めん疫えきがないようだった。

護堂は結局、彼女が落ち着くまで五分ほど待った。

「……あ、あなたの人じん倫りんに反する行為に言いたいことはいろいろあるけど、ひとまず棚上げしましょう。それよりゴドー、あなたのようなチャンピオンがこんなに早く事件解決に当たっているとは驚いたわ」

ふたたびクールな口調に戻って、アニーが言った。しかし、その美び貌ぼうからは冷たい刃めいた鋭さが失せていた。さっきの動転から立ち直っていないようだ。

「普通、あなたたちが出てくるのはもっと核心に近づいてからでしょう？　欧おう州しゆうの魔王たちはそうしているわよ」

　アニーはどうやら、見た目よりも遥はるかに不器用な人間らしい。

　何とか立て直そうとする彼女の努力に、護堂は気づかないふりをした。それが武士の情けというものだ。

「今回はたまたま近くで事件が起きたのもあります。でも事情をよく知らないのに、命いのち懸がけでケンカするのはゴメンですよ。相手が神様なら尚なお更さらです。だから横おう着ちやくしたくないんです」

　素知らぬ顔で持論を語る。

　そういえばサルバトーレ・ドニは神と戦う以外、本当に何もしないらしい。あのアホと比べれば、草くさ薙なぎ護堂は相当な働き者だろう。

「アニーさんのお仲間はどうなんですか？　まず協力者を送り込んでくるくらいだから、やっぱり横おう着ちやくなヤツだとか？」

「そうね……。あたしはまあまあ勤勉な方だと思っているけど」

　アニーはオーバーに肩をすくめてみせた。

「彼を『美お味いしいところにだけ駆けつける』とか『結果オーライ』とか言う人もいるわ。でも仕方ないわね。それもジョン・プルートーのスタイルですもの」

「俺とはあんまり気が合わない感じですか……」

「どうかしら。彼もあなたも常識を重んじないという点では一致しているから、意外と上う手まくいくかもしれないわよ。——でも、今は日米間の友好関係よりも、あの人たちの未来を案じるべきでしょうね」

　さりげなく日米の両カンピオーネに毒を吐きながら、アニーはつぶやく。

　彼女の視線の先には、サルと化した人々の狂態があった。

「このエリアの人口は一〇〇〇人前後らしいわね。そのほぼ全員と、外部から訪れた人々が猿化しているはず。……実は以前、これと似た事件を経験したことがあるの」

「神様の起こした事件ですか？」

「ええ。数年前、ロスの自然公園に月と獣けものの女神アルテミスが顕けん現げんしたときのことよ。あのとき女神は何百人もの人間を鹿しかや熊くま、猪いのしし、豚ぶた、狼おおかみ、鳥類などに変身させてしまったの。スミスによってアルテミスは倒されたけど」

　アニーは目を伏せ、物もの憂うげにささやいた。

「変身した人々は元に戻らなかった。人間としての生を捨てて、獣として生きていくことになってしまった。今回もその危険があると思うわ」

　新たな問題に気づき、護堂は絶句した。

　斉天大聖を倒せばサルたちも人間に戻るだろうと、なんとなく思っていたのだ。だが、それは希望的観測に過ぎないようだった。

第４章　黒き英雄現れ、大聖は鋼の真価を示す

1

日につ光こうを訪れて二日目の午後六時過ぎ。

護ご堂どうはさっきの旅館で、改めて男湯に入っていた。あんな有り様では入浴した気にならなかったのだ。もちろん女子たちに『絶対入るな』と厳命するのも忘れなかったが。

「それにしてもあいつら、無茶苦茶やりやがって……」

男湯は露天ではないが、窓越しに中ちゆう禅ぜん寺じ湖こを眺められる。だが、もう夜なので景色は楽しめない。護堂は代わりに秋の星空を見上げていた。

……ぼんやりするうちに、さっきの混浴を思い出してしまった。

「く、くそっ。雑念を捨てなきゃダメだ。色しき即そく是ぜ空くう、空くう即そく是ぜ色しき、般はん若にや波は羅ら蜜みつ多た、羯ぎや諦てい羯ぎや諦てい、波は羅ら羯ぎや諦ていだっけ……？」

肌色の記憶を振り払うべく、うろ覚えのお経きようを口にしたときだった。

「玄げん奘じよう三さん蔵ぞうも漢かん訳やくした般はん若にや心しん経きようですか。ある意味で斉せい天てん大たい聖せいとも縁深き神しん咒じゆを唱となえ、無の境地を目指すとは――ふふふ、趣向ですね」

この声、月げつ琴きんを思わせる伸びやかな響きは世にふたつとないはず。

　振り返ると、浴よく槽そうの縁ふちに絶世の美少女が腰かけていた。

「わたくしがここまで近づいても気づかぬとは、度どし難がたい未熟。猛省しなさい、草くさ薙なぎの王おう」

　上から目線で申しつけるのは、たしかに羅ら翠すい蓮れん。羞しゅう花か閉へい月げつの美貌、見まごうはずもない。

　魔教教主は浴衣ゆかたに似た前合わせの衣ころもをまとっていた。生地がとにかく薄い。汗ばめば玉の素肌が透けて見えそうなほどに！

「教主!?　何でここにいるんですか!?」

「無論、あの石いし牢ろうを抜け出たからです。……草薙王、羅翠蓮はできもしないことをできると言い張る愚ぐ物ぶつではありません。わたくしを侮あなどりましたか？」

　じろりとにらまれて、護堂は冷や汗を流した。

「い、いえ。こんな短い時間で脱出できたんだなって、驚いただけで」

「そうであるなら、妥だ当とうな感想かもしれませんね。実のところ、あの牢ろう獄ごくを完全に破ったわけではないのです。わたくしはただ抜け道を作り、そこから外へ出たに過ぎませんから」

「つまり脱獄したってことですよね。……破ってるじゃないですか」

　素そ朴ぼくな感想を口にすると、教主は柳りゅう眉びをきりりと吊り上げた。

「なんと浅せん慮りよな。わたくしは武ぶ林りんの至し尊そん。虜りよ囚しゅうの憂うき目めより脱するときは牢獄を粉ふん砕さいし、堂々と正門より出るのが慣ならい。こそこそと鼠ねずみのごとく獄を去るなど、許されません！　今日はあなたの様子を見に来ただけ。あとでまた石牢に戻ります！」

　この人はどうして無駄にプライドが高いのだろう？

　思わず、生あたたかな目で教主を見つめてしまう護堂だった。

「納得はできませんが、おっしゃることはわかりました。じゃあ、何で風呂場に？」

「何か問題でも？　わたくしはあなたを見に来たと言いました。そのあなたが湯につかっていた。湯殿に入るのは当然でしょう」

「いえ。俺が風呂から出るのを待ってもいいと思います。それに、その格好は？」

　教主のまとう薄い衣ころも。細いくせに胸と腰のまわりは十二分に盛り上がった肢し体たいを、隠すどころか一層引き立てている。



「何と愚おろかしい問いでしょう。湯殿において厚着をする者などいるはずがありません。草薙王、わたくしを莫ば迦かにしているのですか？　——もしや」

　護堂の顔を見て、教主は何かに気づいたようだ。

　いやな予感がした。彼女がこちらの意を正確に汲くみ取るとは思えない。

「わたくしを見下すがごとき、その目。つまり、こう言いたいのですね？　『我は身に寸すん鉄てつも帯びず、一枚の薄布すらまとわず貴様の前にいる。同じ振る舞いをできぬとは怯きよう懦だもいいところ。王を名乗るのもおこがましい惰だ弱じやく者ものめ』と！」

「そんなアホなこと、一秒たりとも考えちゃいません」

「くっ……その目をまだやめませんか。よいでしょう。この羅翠蓮、武勇のみならず度量と胆力においても至し極ごくであると示しましょう」

　羅濠教主は衣の帯に手を伸ばした。わずかにためらってから、帯を解いてしまう。

　しゅるしゅるという衣きぬ擦ずれの音。ぱさり。薄布が落ちる。

「ななななな、何をしてるんですかッ!?」

「おたがいに身を守るものは何もありません。肚はらを割って話をいたしましょう。……倭わ国こくではこのような交わりを『裸身はだかの交つきあい』というのでしたね？」

　と、教主は湯船のなかに入ってきた。

　寒かん蘭らんのごとき肢体を間近で、しかも余すところなく目撃し、護堂は取り乱した。あの剛ごう力りきがどこに潜ひそんでいるのか不思議なほど華きや奢しやだった。

　まさに花か顔がん柳りゆう腰よう。しかし、形よく巨おおきな乳房が思い切り存在を誇示している。

　その先端に散る桜色の蕾つぼみが、何と可か憐れんなことか。くびれた腰つき、そこから下へと至る丸みのなまめかしさは、深しん山ざん幽ゆう谷こくに咲き乱れる鬼おに百ゆ合りを思わせた。花弁の奥にひそむ蜜みつの芳ほう醇じゆんさを否いや応おうなく想起させる。

　一いつ糸しまとわぬ教主の艶えんな風ふ情ぜいに、護堂はごくりと生なま唾つばを呑み込んだ。

「……草薙王。あなたを害するつもりはありません。警戒せずとも大丈夫です。今度はあなたが度量を示すべきでしょう。その鋭い瞳を逸そらしなさい」

　羅翠蓮は右の腕で乳房を隠し、湯にひたる。象ぞう牙げのごとき肌がほんのり朱色に染まる理由は、おそらく湯の熱さだけではない。

「……わたくしのような処女おとめに対しては配慮をするものです。そ、そのようにぶしつけに見つめるのは非礼でしょう」

「わわ、わかりましたっ！」

　一糸まとわぬ佳か人じんに訴えられて、護堂は窓の外に視線を固定した。

「ふう……。なかなかによい湯ですね」

　星空を眺めながらの入浴が、武ぶ林りんの至し尊そんたる気概をやや緩ませたのか。いつもより穏やかな声だった。そして、わずかに艶つやっぽい。

「そ、そうだ。東とう照しよう宮ぐうでは助けていただいて、ありがとうございます」

「かまいません。あの折にも申しましたが、わたくしにも思おも惑わくがありました。……ところで、斉天大聖は『弼ひつ馬ば温おん』の呪じゆ法ほうを解いたようですね」

　さすが道家の頂点にも立つという羅翠蓮。

　すでに気づいていたようだ。やはり彼女はただの世間知らずではない。

「はい。猪ちよ八はつ戒かいと沙さ悟ご浄じようまで助っ人に呼んだらしくて、いろいろ厄やつ介かいになってます」

「なんと、大聖はそこまで……。ならば草薙王よ、わたくしの名みよう代だいとして戦えと指示しましたが、どうです？　己おのれの手に負える相手だと思いますか？　この羅濠、あなたが泣きつくのを許してもよいのですよ？」

「……それって、どういう意味ですか？」

「ふふふ。先日は我が誉ほまれのためにあなたを救いましたが、やはり斉天大聖は我が仇きゆう敵てきにして無む双そうの英雄神。わたくし自身の手で葬ほうむる機会を見逃すのも惜しいと思ったのです」

　身もフタもないというか、素直というか。

　せっかく大立ち回りをするチャンス、不意にするのが惜しくなったようだ。教主の思惑を悟って、護堂は肩をすくめた。これは神との戦いから逃げ出すチャンスだ。

　危険と責任の全てを彼女に押しつけて、この地を去れる——。

　しかし、ひかりはどうなる？　サルになった人々はどうなる？　何より護堂自身はどうなのだ？　この戦いを途中で放り出すことができるのか？　答えは決まっていた。

「せっかくですけど、今さら遅いですよ。こいつはもう、俺の戦いです。あのサルとは俺が決着をつけます。あなたは牢ろう屋やのなかで決着がつくのを待っててください」

「……ほう。羅濠の出る幕はなしと言うのですね？」

　羅濠教主の雰ふん囲い気きが変わった。鋭い闘気が美貌に宿る。

　彼女は胸を隠すのはやめ、白い裸身を惜しげもなくさらした。高まる闘志が恥じらいに勝ったのだ。護堂を真っ向から見み据すえる。

「ありません。あなたはあの牢ろうに残った時点で、あいつと戦うチャンスも俺に寄よ越こしたんです。やっぱり返せって言うのなら、まず俺と先に戦ってください」

　もちろん教主の恐ろしさは身にしみて知っている。

　だが、ここで譲ってはいけない。そうだ、草薙護堂は斉天大聖と戦いたい。そのためにベストを尽くすのだ。

「あなたは不思議な王ですね。闘争を恐れ、惰だ弱じゃくな論を振りかざすかと思えば、獅し子しの猛たけ々だけしさをいくさ場で示し、抜け目のない狐こ狼ろうの狡こう猾かつさも隠し持っている」

　と、教主はあでやかに微笑ほほえんだ。

「ふぬけた清せいと油断ならぬ濁だくのいずれも併あわせ持つ、行く末定かならぬ少年……さて、羅翠蓮は如い何かに振る舞うべきか？」

　教主はどう出る？　怒りにまかせて襲ってくるか？　大たい人じんぶって譲ってくれるか？　取引でも持ちかけてくるか？

　目をすがめる教主の姿に、さまざまな展開を考える。

「ならば草薙護堂、わたくしを今より『お姉さま』と呼びなさい。よいですね」

「…………はい？」

　予想外の申し出に、護堂は一瞬、思考停止してしまった。

「ただ請こわれたからといって譲っては、羅濠の権威が傷つくというもの。しかし、相手が義兄弟の契ちぎりを交わした者であれば、話はべつです」

　教主は意気揚よう々ようと胸の裡うちを語る。そうだ。彼女は異様にプライドが高いのだ。

「そして、こうも考えました。わたくしをたびたび出し抜くほどの少年。その芽をここで摘つむより、きちんと教え導いて英雄・大だい侠きようとして育て上げてこそ武林の至尊であろうと。……そ、それに、あなたとはすでに肌を見せ合ったほどの間柄」

　いきなり教主の物言いから怖さが消え、彼女は思い出したように胸を隠した。

「無む体たいに打ち倒すには、少々情が湧わきすぎました。そういうわけですので義兄弟の契りを結び、義あ姉ねとしてあなたを導きましょう。義弟おとうとよ、わたくしを十分に敬うやまい、孝こう養ようを尽くすように」

　桃園の誓い、『我ら生まれたときはちがえど、死ぬときはいっしょ』というヤツか。

　そんな無茶な。だが続きを聞いて、護堂は思い直した。

「わたくしもまた義弟を愛し、十分な庇ひ護ごを授けましょう。また倭わ国こくにおけるあなたの主権を尊重し、無む闇やみに口出しはしますまい。これでよいですか？」

　羅翠蓮は微笑した。風雲雷雨が去り、日差しが甦よみがえったかのような可か憐れんさだ。

　義姉云うん々ぬんは余計だが、願ってもない言葉である。

「は、はい。それでお願いします、教主っ」

　即座にうなずくと、恨うらめしげにじーっとにらまれた。何がまずいのだろう？

「弟よ。姉に対して、その呼びかけはなんですか？　教えた通りに改めなさい」

「え!?　お、おおお——お願いします、姉さん」

　さすがに『お姉さま』は無理だった。

　超名門お嬢さま学校の生徒ではない草薙護堂には、これが限界である。

「……わたくしという姉の至し極ごくに対しては、最上の敬意を払うべきでしょうに。まあ、今のところはそれでよいでしょう。精しよう進じんを重ねなさい」

　どんな精進をしろというのだ？　護堂は頭を抱えたくなった。

「わたくしはふたたび石牢に戻り、雌し伏ふくいたします。立ちなさい、弟よ」

　ふたりは立ち上がった。教主は腕で乳房を、護堂はタオルで下を隠しながら。

　次の瞬間、義姉弟の契りよりも衝撃的な攻撃にさらされた。教主は護堂に密着して、いきなり接せつ吻ぷんしてきたのだ。

「おまえに方術をかけます。おとなしくしていなさい」

「――!?」

「おまえの気概は天あつ晴ぱれですが、敵神が三柱もいるのであれば不利は明らか。おまえが尋常ならざる神気にさらされたとき、姉がどこにいたとしても感じ取れるように術を施ほどこしました。決戦の時には、わたくしも必ず駆けつけましょう」

　桜桃さくらんぼのごとき唇くちびると白い柔やわ肌はだが貼はりつく感触に、護堂は全身をこわばらせた。

　佳か人じんにして義姉との接触は、二〇秒ほどで終了した。

「い、今の行為を他言してはなりませんよ。義弟とはいえ男児とこのようにふれ合ったと知られては、処女おとめにあるまじき振る舞いと後ろ指をさされましょう。わ、わたくしの名誉のためにも――よいですね！」

　念を押した直後、羅翠蓮の姿は霞かすみのように消え去った。

　護堂はのぼせた頭を冷やすため、冷水の浴槽へと飛び込んでいった。

2

　護ご堂どうが思わぬところで義姉を得たあと、旅館の大部屋で夕食になった。

　部屋数一〇程度の小さな宿には仲間たちしかおらず、貸し切り状態だ。旅館のスタッフも宿泊客もサルとなり、仲間の多い大通りの方へ出ていったようだった。

厨ちゆう房ぼうの設備と食材を見てエリカが、

「このまま腐らせたり、サルの餌えさにするのはもったいないわ。有効活用しましょう」

と言ったので、祐ゆ理りとリリアナが調理することになった。

引き払う前に代金は置いていこう。ひそかに決心しながら、護堂も厨房を手伝った。エリカと恵え那なは戦力外、アニーはお客さん扱いということで、妥だ当とうな配置だろう。

……ちなみに米国からの客人は、せっせと働く護堂をちらちら見つめていた。

要注意人物の動向をたしかめようとする、警戒心も露あらわな視線である。どうも彼女は『草くさ薙なぎ護堂＝イコール女の敵』という認識でいるらしい。

そんな監視の下、護堂はいくつかの料理を作り終えた。これでも得意料理めいたレパートリーもあるのだ。もっとも、ほとんどが祖父や母に仕込まれたもので、もっぱら酒に合わせることを前提とした品々だったが。

「……こういうのを見ちゃうと、一杯やりたくなるよねー」

恵那のつぶやきは、護堂の手による皿を見てのものだった。

ヒメマスの刺身と塩焼き。皮はべつにして、塩を振って軽く炙あぶった。鮭さけといっしょで、ここがパリパリして美う味まいのだ。川かわ海え老びのパスタも作ってみた。オリーブオイルでニンニク、鷹たかの爪つめと共に小さな川海老をたくさん炒いためてボンゴレ風にし、パセリも散らしてある。

「エリカじゃあるまいし、妙なこと言うな。でも、清せい秋しゆう院いんもいける口だったんだな……」

「あら。これから戦いになるかもしれないのに、わたしはアルコールなんて飲まないわよ。だけど、日本酒と白ワインが欲しくなる匂においね。ビールでもいいけど」

エリカの感想に恵那がうんうんとうなずいている。

　もっと普段の弁当作りなどに役立つ料理を覚えるべきなのか。その方が高校生らしくていいかもと悩む護堂であった。一方、リリアナと祐理はマスのムニエルやワカサギの唐から揚あげ、山さん菜さいの炊き込みご飯などを真っ当に作っていた。

　尚なお、護堂は羅ら濠ごう教きよう主しゆと会談したことを報告していなかった。

　風呂場でいろいろあったとはさすがに語りにくい。それよりも皆としておきたい話がある。

　食事と片付けが終わったところで、声をかけた。

「ところでリリアナ、あの視覚を飛ばすって術はまだ使えないのか？」

「いえ。斉せい天てん大たい聖せいの勢力圏に入ったおかげで、その内部であれば問題はないはずです。あの術が必要なのですか？」

「大聖のヤツを見つけるのに使えるのかなって思ってさ」

　不思議そうなリリアナに答えてから、護堂は祐理に目を向けた。

「俺の体調も回復したし、大聖との戦いをこれ以上遅らせる必要はない。……ただ、ヤツとの戦いでは『剣』が絶対に必要になると思う」

「そのためには斉天大聖がいかなる神か、見極める必要がありますね」

　静かに祐理がささやいた。

「ああ。でさ、俺は昨日からあれこれ考えていたんだけど——」

「アニー・チャールトン、すこしいいかしら？」

　いきなりエリカに呼ばれて、赤毛のアメリカ人女性は意外そうな顔をした。

「わたしたちは一時的にチームを組んでいるけど、全ての情報を共有する必要はないわ。むしろ、こういう機会に情報が漏ろう洩えいするのを防ぐべきだと思うのだけど、どう？」

「……あたしがいると、話しづらいことがあるというのね」

　言こと霊だまの刃やいばは草薙護堂のいわば切り札だ。その秘密を守ろうとするエリカの気き遣づかいに、アニーは察しよく腰を上げてくれた。

「俺は昨日から考えてたんだ。みんなと——エリカや万里谷やリリアナと、これからどうつき合っていけばいいのかって」

　客人がいなくなったあとで、改めて護堂は言った。

「つまり、わたしたちとあなたの関係を見つめ直していたのですね？」

「ついに覚悟を決めたのね、護堂。それで結論は出たの？」

　リリアナとエリカの言葉にも、迷いなくうなずく。

「ああ。いろいろ悩んだけど、ようやく吹っ切れたよ」

「誰を正式な奥さんにするとか、誰をお妾めかけさんにするとか、きちんとするつもりなんだねっ。じゃあさ、恵那と祐理はどうなるの？　やっぱり、ふたりまとめて囲ってくれるの!?」

「え、恵那さん、そんなこと訊いては駄目です。はしたないですっ」

「…………清秋院。おまえ、何を言ってるんだ？」

　色めき立つ恵那、それをたしなめながらもそわそわする祐理。

　その様子に護堂が首をかしげると、なぜかきょとんとした顔に囲まれてしまった。

「俺は今まで、神様と戦うのをぎりぎりまで避けようとしていた。でも、そろそろ肚はらを据すえなくちゃいけない。俺は多分、他の連中……それこそドニのアホとかヴォバン侯こう爵しやくみたいに、ろくでもない男になると思う。今朝、万里谷にも言われたけど、俺はこれからもきっと神様たちと何度も戦って、いつ死ぬかもわからない暮らしをするんだろう。それでも——」

心の裡うらを語りながら、闘志が湧わき上がってくるのを感じた。

そうだ。これこそ我が本領。神を殺せるから戦うのではない。神々に抗あらがい、打ち倒さんという志こころざしを持つ人間だからこそ、そのための力を得たのだ。

「それでも、俺が神様たちと戦うにはみんなが……エリカもリリアナも万里谷も、みんなが必要なんだ。俺につき合うってことは、おまえたちの命も危険にさらすってことだ。それでも俺の仲間のままでいいか？」

いつしか護堂は微笑していた。獰どう猛もうに口の端を曲げる、獣けものの笑み。

それは、闘争の喜き悦えつを抑おさえきれないゆえにこぼれる、王者の徴しるしであった。

「おまえたちを守るとか、絶対に死なせないとかは口が裂けても言えない。むしろ言わなきゃいけないのは、俺といっしょに死んでもいいかってことだ。それに、みんなの助けを受けるときはいつもみたいにあれをしなくちゃいけない」

少女たちは呆ぼう然ぜんとしていた。無理もない。こんなバカバカしい要求をするような男、愛あい想そを尽かされない方が不思議だ。だが、それでも言わずにはいられなかった。

今までのように、なし崩しで巻き込んではダメだと痛感したからだ。

「俺がろくでもないことを望んでいるってのはわかる。イヤならすぐここを出て、逃げてくれていい。俺がいない方がいいなら、しばらく席を外すから——」

「ねえ護堂。勿もつ体たいぶって全員の前でしたい話って、それ？」

エリカに口をはさまれた。不機嫌そうに眉まゆをひそめている。

「わたし、前に誓ったわよね？　世界が滅ぶときまで、ずっとあなたといっしょだって」

「わたしも騎士として生しよう涯がいを共にすると、ナポリで忠誠を捧ささげました」

「私だって今朝、護堂さんか私のどちらかが生を終えるまでごいっしょしたいと申し出て、お答えを待っているところです。なのに今更、そのようなことをおっしゃるのですか？」

　リリアナにも憮ぶ然ぜんとつぶやかれ、祐理に至ってはひさしぶりに夜や叉しゃ女めのごとく怒りを露あらわにしている。恵那も「あー期待して損しちゃった」と肩をすくめた。

「あ、いや。今までもそういうことはあったけど、その場の勢いみたいなのだったし。だから改めて意思表明とか最終確認をしようって思ったんだけど……」

　予想外の反応にさっきまでの闘志は消え、腰が退ひけてしまう護堂だった。

　最近しみじみ思う。神様よりも女の子の方が怖い、と。

「護堂、ひとつ質問していい？　わたしたち三人……そうね、あと恵那さんとかもいっしょにいたとして、全員が絶体絶命のピンチだとするでしょう？」

「あ、ああ」

　唐突にエリカに訊たずねられて、護堂はたじろいだ。

「あなたは誰かひとりだけ助けられるの。じゃあ、誰を助ける？」

「うーん……。全員だな。全員まとめて助ける」

　即答したら、三人の少女はため息をついた。恵那だけが「さすが王様、そうこなくっちゃ！」と喜んでいたが。

「だから、ひとりしか駄目なの。必ず選ばなければいけないのよ？」

「そんなのを選ぶことなんてできない。だから全員でいいよ。変なことを訊くヤツだな」

「誰を選ぶのか一瞬たりとも迷わない護堂の方が変だと思うけど。

ま、いいわ。それでこそわたしたちの王様ですものね。あなたの異常性と器うつわの大きさを証明する尺しやく度どのひとつと割り切って、あきらめてあげる」

　とエリカが言えば、リリアナ、祐理の両名がそろってうなずいた。

「さっきも言ったけど、わたしはみんなよりも先に永遠の忠ちゆう誠せいを誓い、あなたの『加護』を身ごもった女ですもの。その程度は内助の功を示さないとね」

「加護、だと？　もしかして、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの事件のときか」

　エリカの宣言を聞きとがめたのはリリアナだった。

「あのとき使われたという『少年』の化け身しんだな？　草薙護堂に詳細を聞いてもはぐらかされるし、エリカはとぼけるしで、ずっと秘密にされていた——」

「秘密というよりは秘め事かしら」

「秘め事!?　まさか、またエリカさんといやらしいことを護堂さんが!?　そうです、この間おっしゃっていた永遠の忠誠というのはまさか!?」

　エリカの微笑に妖あやしい色香のフレーバーが加わると、祐理が愕がく然ぜんとした。

「ええ。あれをするとき、護堂といろいろとね♪」

　可愛かわいらしい笑顔でエリカに目配せされ、護堂は思わず天を仰あおいだ。

　尚、恵那からは『うわー。さすが王様、男前じゃん』的な目を向けられ、リリアナには『あなたはやはり、そういう方なのですね』と悟ったような顔をされた。

「あのときの護堂、まるで戦っているときのように荒々しくて、強引で、力強くて素敵だったわ……。だから、わたしはいいの。あなたのために喜んでこの身を捧ささげるわ。でも——」

　うっとりとつぶやいたエリカは、急に表情を引き締めた。

「その前に、訊いておきたいことがあるわ。護堂は恵那さんのことも、わたしや祐理といっしょに愛人として抱え込むつもり？」

「いや。それはさすがに考えてないぞ……」

　うんざりしながら答える。しかし、当の媛ひめ巫み女こから苦情が入った。

「ええっ!?　王様ひどいよ！　この間も言ったじゃない、祐理といっしょに恵那の面倒見てって。……あ、でもそうか。ゴメン。考えてみれば、いきなり過ぎるお願いだったもんね」

　恵那は何かに気づいた様子で、いきなりうなだれた。

「あ、ああ。わかってくれるか、清秋院」

「うん。でも大丈夫。王様が恵那のことを可愛がってくれるまでおとなしくしてるから、気が向いたらいつでも呼んで。べつに恵那はご正室になりたいとか言わないし、日陰の女のままでもいいんだ。王様の都合のいいように扱ってよ」

「嫁入り前の女の子がそんなことを言うんじゃない！」

　能天気な自然児のくせに、やけにしおらしい申し出だった。

　護堂は頭を抱えた。そういえば恵那は、祐理をも凌しのぐ大やまと和なでし撫子ことして教育されたらしい。だから骨こつ董とう品ひん級きゅうに古めかしい男女観を持つのかもしれない。

「俺のどこが気に入って、そんなことを言うんだ!?　もっと自分を大切にしろ！」

「大切にしてるから、いちばん好きな殿との方がたと添そい遂とげたいんだよ。王様は強いし、男前だし、恵那との相性もよさそうだし……。初めてキスして、初めて肌を見られた人だし……」

　ポッと頬ほおを赤らめながら、恵那が告白する。

　すかさずリリアナが『それ見たことか』という目つきになった。

「聞きましたか、草薙護堂？　このように、あなたは自覚のないまま女性を籠ろう絡らくする才能をお持ちなのです。おそばで気を配る者が必要だという進言に耳をお傾けください」

　何てことだ。神との戦いを前に決意を新たにし、皆との結束を高めようとしたのに。

　大いに弱った護堂へエリカが追い打ちをかけた。

「わたし、言ったわよね？　愛人はわたしと祐理のふたりしか許さないって。なのに、半年も経たないうちにリリィや恵那さんまで搦め捕って……。とんだドン・ファンだわ。——そうだ護堂、なし崩しは駄目だって自分で言ったわよね？」

「あ、ああ」

「あなたが恵那さんを愛人に迎えるのなら、そのことに文句を言う気はないわ。でも、いつもみたいになし崩しでやるんじゃなくて、わたしに断りを入れてからにして頂ちよう戴だい！」

　余よ所そに女を作るなら、まず自分にお伺うかがいを立てろ。

　放ほう蕩とう亭主の手た綱づなを握ろうとする、正妻さながらの通達であった。

「そうなったらわたしは思いっ切り拗すねてあげるから、どうしてもそうする必要があったんだって言い訳して、いちばん愛しているのはおまえだとか、ちゃんと言うのよ？　それができないなら、恵那さんを愛人にするのは許さないから。どう？」

　魔王に挑みかかる女王のごとく、エリカは宣告してきた。

　その様子を他の三人も興味津しん々しんの体ていで見ている。どうしてこんなことに？　護堂が愕がく然ぜんとしたとき、不意に祐理が立ち上がった。

　窓へ駆け寄っていく。しばらく外を見て、おもむろに振り返った。

「……斉天大聖さまがお目覚めになられました。この地にまもなく降こう臨りんされるはずです」

　と、霊視力で得た託たく宣せんを告げる付録つきで。

　それを聞いて、護堂はすぐに心を切り替えた。エリカはじめ女の子たちに感じていた気き後おくれが全部吹き飛んだ。自分でも驚くほどスムーズな変化だった。

「大聖の様子を見に行こう。みんなも準備してくれ」

「戦われるのですか、草薙護堂!?」

　リリアナの質問にかぶりを振る。それはまだ時期尚しよう早そうだ。

「いいや、まだ戦うつもりはない。あのサルと戦うための武器がまだないからな。……だから万里谷、おまえに頼みがある」

「は、はい」

「斉天大聖がどんな神様か霊視して欲しいんだ。一刻も早く『剣』が欲しい」

　この指示に祐理はハッとして、恥ずかしげにうつむいた。

「それですと、大聖さまの神格を霊視できたとしても、そのあとで護堂さんと……」

「あ、ああ。そっちもふくめて頼む。俺は何としてでも大聖のところから逃げのびて、第二ラウンドで逆襲してみせる。——それと今朝訊かれたことへの答えだけどな、どこまででもついてきてくれ。俺がこんなヤツでもよかったらだけどな！」

「は、はいっ！」

　祐理が表情をぱっと明るくした。

　自分は多分、ろくな死に方をすべきではないのだろう——。

　心の隅で考えながら、護堂は旅館の出口へ歩きだした。結局、神様との戦いを前にしたら、女の子たちの都合など二の次なのだ。これまで常にそうだったように、戦うために、勝利するために、彼女たちに無理を強いてきた。

この性分は、死ぬまで変えられないかもしれない。

さっきエリカに突きつけられた問いへの答えも、どうでもよくなっている。うすうす自覚していた己の人格的欠陥と直面しながら、護堂は外へ出ていった。

3

男なん体たい山さんの頂いただきで、斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうはむくりと身を起こした。

といっても、姿形はあいかわらず万ま里り谷やひかりである。空を見上げれば、星がきれいに瞬またたいている。半日ほど寝ていたようだ。

ごつごつした山の地面を寝床に、みごと熟じゆく睡すいしてのけた。彼は石より生まれし神しん猴こうにして剽ひよう悍かんなる武人もののふ。衣食住にあまり快適さを要求しないのだ。

「さて、我が王国はどんな案あん配ばいかのう？」

千せん里り眼がんなど使わなくても、純粋に視力だけで奥おく日につ光こう一帯をひととおり見渡せる大聖は、下界を眺めてみた。

男体山のふもと、中ちゆう禅ぜん寺じ湖この周囲に広がる街並み。

そこから北上すると戦せん場じようヶが原はらの高原。やがて奥おく湯ゆ本もとの温泉街が見える。ここも湯ゆノ湖こという湖のそばにできた街だ。それらの集落にはさまざまなサルが集まり、半はん端ぱに人間くさい暮らしを営いとなんでいた。斉天大聖の神しん威いはこの地の隅々にまで届いているようだ。

にもかかわらず、彼はあまり面白くなかった。

「いまいち静かというか、活気に欠ける感じじゃのう。何とかならんものか？」

頭をひねり、猿知恵を出そうと努める。思いつかないので逆立ちをしたり、とんぼを切ってみる。ややあってポンと手を打った。

「考えてみれば、かつての我が民たみ、我が王国は天軍とのいくさに備えて、もっと血けつ気きに逸はやっておった。あやつらに足りぬのはそういう覇は気きかもしれんて」

思い立ったが吉日。斉天大聖は黄金の雲を呼び寄せた。

とんぼを切って飛び乗り、地上へ急降下させた。その速さ、まさに稲いな妻ずま。只ただ人びとの目には黄金の閃せん光こうが駆け抜けたとしか見えない早はや業わざだった。

魔王カンピオーネといえども万能・無敵ではない。

特に若手に属する者たちは皆、何らかの弱点を抱えている。草くさ薙なぎ護ご堂どうもそうなのだろうと察して、アニーは旅館を出ていった。他の王の秘密を嗅かぎまわる趣味はない。

ぶらぶらと中禅寺湖のほとりを散歩する。このとき天より閃せん光こうが降くだるのを見た。

サルの多い中心街へ墜おちていく。アニーはすぐに駆け出した。

物陰に身を隠しながら現場に近づくと、厄やつ介かいな光景を見ることになった。

「君子、終日乾けん乾けんし、夕べに惕てき若じやくたり。厲あやうけれども咎とがなし。或あるいは踊りて淵に在り。飛ひ竜りゆう天てんに在り、大人を見るに利よろし。亢こう竜りゆう悔くい有り。群竜、首かしらなきを見る！」

言こと霊だまを唱となえるのは、黄金の雲に乗る少女。

雲は地上一〇メートルほどの高さに浮遊し、多種多様なサルたちが集う中禅寺湖の街並みを見下ろしていた。

「乾けんは元おおいに亨とおり、貞ただしきに利し！」

万里谷祐理の妹を乗っ取った斉天大聖・孫そん悟ご空くうにちが

いあるまい。

　地上のサルたちは、かの猿さる神がみを天てん女にょでも仰あおぎ見るように伏ふし拝おがんでいる。しかし、大聖の言霊が進むにつれて、彼の眷けん属ぞくに変化が生じたのだ。

　無節操に集められた世界各地のサルたち——。

　彼らの形ぎよう相そうが変わった。目を険しく吊つり上がらせ、牙きばをむき出しにする。

　怒りと警戒心、そして殺気に満ちた顔つきであった。しかも、サルたちの姿まで微妙に変わっていく。たとえば、あるニホンザルの爪つめは短刀のような長さに伸びた。あるオランウータンの体たい躯くが倍近くにまでふくれ上がり、凶暴そうな巨体となった。

　あるチンパンジーの口が大きく裂け、そこから滴したたる唾だ液えきは道路に落ちるとアスファルトを溶とかしていた。唾液が強酸になったようだ。

　全てのサルたちが殺気立ち、凶暴さを増していた。

　まわりにいる仲間を威い嚇かくしたり、攻撃をはじめたりしている！　噛かみついたり爪を突き立てたり、口から吐はき出せるようになった強酸や火か焔えんを吹きかけたり！

　悲喜劇的だが平穏だった猿王国は、一瞬にして血なまぐさい空間となってしまった。

　しかも、そのうちの一匹が隠れていたアニーの前へやってきた。

　爪が刃物のように鋭くなったテナガザルだ。

　キシャアアアアッ！

　恐ろしい声で啼なくなり、凶暴化したテナガザルは襲いかかってきた。まさか、人を見つけたら襲えと指示されたのか!?　アニーは後ろに跳びのいて呪じゅ文もんを唱えた。

「古き五ご芒ぼうの星よ、我を庇ひ護ごせよ！」

　五芒星を指先で描き、護身の結界を作る。

テナガザルは見えない障しよう壁へきにぶつかって怯ひるみ、情けない声で啼いた。

魔術師としてのアニーは中の上程度の腕前だが、呪力だけなら超上級者も凌りよう駕がする。このくらいの敵に後おくれを取る心配はない。

不可視の障壁で身を守りながら観察する。

目の前のテナガザル、そして近くにいたサルたちはアニーの方へ寄ってきて、闘志と殺意をむき出しにする。透明な壁に向かって突進してくる。

どうやら人間に対して、ひどく攻撃的になっているようだ。

空で言こと霊だまを唱となえる斉天大聖の姿を、アニーはにらみつけた。神々はあいかわらず傲ごう慢まんで人を玩おも具ちやにする。世界を恣ほしいままに変化させ、ただの遊戯場に堕だ落らくさせてしまう。人の世界は人のためにあるはずなのに——。

姿を変えるか？　力なき人々を救い、庇護する黒衣の妖よう人じんに。

アニーはこの思いつきをすぐに捨てた。

まだ早い。ジョン・プルートー・スミスがまず協力者に事件を調査させるのは、無ぶ精しようをしているわけではない。彼が戦闘時に使う権能は主にふたつ、『変身』と『魔銃』だ。しかし、どちらも制限事項を伴ともなう。

考えなしに権能を振るおうとしても、すぐ八方ふさがりになる。状況を見極め、ここぞという場面で登場し、効果的に戦わなければいけない。

ここでアニーの携帯電話が震え、着信を報しらせた。

空港の携帯ショップでレンタルした日本国内用の製品だ。かけてきたのは、もうひとりの神殺しだった。チームへの帯同が決まったとき、番号を交換し合ったのだ。

　アニーは旅館に戻り、草薙護堂たちと合流した。

　彼らは斉天大聖の出現を知っていた。霊視の託たく宣せん、魔術による探査の結果だろう。

　その後、彼らと共に斉天大聖の降臨したメインストリート——国道一二〇号線を目指した。

　途中、狂乱したサルたちに襲われたりもしたが、このメンバーで不覚を取るはずがない。危なげなく追い払いながら現場付近に到着する。

　猴こう王おうのまわりでは凶暴化したサルたちが暴れ、跳ね回り、騒ぎ立て、実に賑にぎ々にぎしい。

　建物の陰に隠れながら、アニーたちは偵察をはじめた。

「どうだ、万里谷祐理？　何か啓示を受けたりしたか？」

「いいえ、まだです。やはり、こんなに遠くてはダメなのかもしれません……」

　リリアナの確認に、祐理が憂ゆう鬱うつそうにささやいた。

　このチームは現在、斉天大聖の神しん格かく解かい析せきを第一の目的としている。どうやら、それが草薙護堂の能力と関係するらしい。

「祐理が神の素す性じようを霊視するときはいつも、彼らにもっと接近した状態だったわ。やっぱり、遠くから眺めているだけで成果を得ようとするのは、虫がよすぎたみたいね」

「霊視ってのは、私利私欲が絡からむと途端に降りてこなくなるからねー」

　エリカの指摘に、恵那が訳知り顔で言った。

「虎こ穴けつに入らずんば虎こ児じを得ず、か……」

　つぶやいたのは神殺しのチャンピオン、草薙護堂だった。

「仕方ない。俺が大聖のところに行く。神様たちは俺たちカンピ

オーネが姿を見せると、いつも普通の人間は眼中に入れなくなるだろ？　そいつを利用させてもらおう」

「危険だわ、護堂。わたしもついていく」

「エリカがいたって危険はたいして変わらない。もっといいやり方を考えよう。何かいいアイデアはないか？　俺がまずいことになったら、あとを頼みたいんだ」

　草薙護堂は愛人たちと討議して、計画を練りはじめた。

　己が率そつ先せんして危地に踏み入り、愛人である少女たちに極力配慮する。これはジョン・プルートー・スミス——すなわちアニーが協力者に求めるのと真逆の行為だ。

　彼はこれからどうするつもりなのか？　好奇心を刺激されるアニーだった。

4

　ひかりの体を支配する神しん猴こうめざして、護ご堂どうはゆっくり歩いていった。

　一応、丸腰ではない。上着のポケットには、エリカが鉄の札カードに変形させた魔剣クオレ・ディ・レオーネを入れている。

　中ちゆう禅ぜん寺じ湖このほとり、メインストリートの交差点。

　辺りにたむろしていたサルたちが、人間である護堂を見て色めき立った。

　凶暴な視線、威い嚇かくの表情と動作、さらには人肉への食欲まで突き刺してくる。のんきに人間の猿さる真ま似ねをしていたサルたちとは思えない荒々しさだ。

「ええい、うるさい！　おぬしら静まれ、そして散れぃ！」

　黄金の雲に乗るひかりが、空中から一いつ喝かつした。

途端にサルどもは蜘く蛛もの子を散らすように逃げていく。これで一対一。斉せい天てん大たい聖せいは媛ひめ巫み女こ見習いの肉体を操り、ひらりと地上に飛び降りた。

「王国も築いたし一眠りもした。次は運動不足を解消したいと願っておったら、神殺しの方から来てくれるとは……。ありがたい話じゃのう！」

ひかりの声で、斉天大聖が告げる。

護堂の心身はすでに戦闘態勢を整えた。戦うための力がみなぎっている。

……しかし妙だ。護堂はひそかに首をかしげた。

東とう照しょう宮ぐうで大聖が宿していた莫ばく大だいな神力、かつて遭そう遇ぐうした全ての神を凌しのぐパワー。あれを感じなかった。無論、強壮な神であることはまちがいないのだが……。

「ははは、おぬしもすっかり本ほん復ぷくを遂とげた様子だのう。我が花か果か山さんにて天軍を迎え撃った故事に倣ならい、ここで一勝負と参ろうぞ。いやだと申しても逃がしはせぬぞ」

「ふざけんな。そんなケンカ、誰が買うか！」

護堂は言い返した。疑問はひとまず脇わきに置こう。今すべきは時間稼ぎだ。

「おまえ、弼ひつ馬ば温おんとかいう術を解いたんだろ？　だったら、もうひかりの——今使っている巫女さんの力は必要ないはずだ。いいかげんにそろそろ返せ！」

「なんの、この巫女めにはまだまだ役立ってもらうつもりじゃ」

ひかりの顔で斉天大聖がにたりと笑う。

齢よわい一二。中身は神様のくせに、本来の年齢よりも稚ち気きあふれる笑顔だった。

「おぬしはずいぶんと巫女にご執しゅう心しんのようじゃ。ならば、こやつを我われが握っておる限り、おぬしは我から離れられまい。ふふん、取り返したくば腕ずくで言うことを聞かせること

じゃ。そうれ、血湧き肉躍る遊びを早はようはじめるといたそう！」

　斉天大聖の手にいきなり鋼はがねの棒が出現した。もちろん如によ意い金きん箍こ棒ぼうだ！

「花果山水すい簾れん洞どうの主、斉天大聖・孫そん悟ご空くう推すい参さんなり。おぬしの名乗りを聞こうか！」

「草くさ薙なぎ護ご堂どうだ！　言っとくけど、そんな長ったらしい肩書きはないからなッ」

　ひゅん。如意金箍棒が無造作に振り回された。まあ、やはりこうなるわけだ。

　飛びすさって避ける護堂へ、鋼の棒が強襲を重ねる。

「我、孫行者の如意金箍棒は神しん珍ちん鉄てつを鍛きたえし業わざ物ものなるぞ。森しん羅らを震わせ碧へき空くうを驚かす一条の鉄棒、いざ御ご披ひ露ろうつかまつらん！」

　最初の一撃でさえ十二分に速かった。時速一六〇キロの剛速球すら超えるかもしれない。

　だが、棒のスピードがどんどん増していく。その動き、まさに閃せん電でん。猿えん猴こうの敏びん捷しようさと稲いな妻ずまの速さが渾こん然ぜん一いつ体たいとなっている。

　見えない！　かつて戦ったペルセウスを思い出す。

　白き閃光の動きを披露した美び々びしい英雄。彼に勝まさるとも劣おとらない速さ。こんな相手と普通に渡り合えるはずがない。護堂は『鳳おおとり』の化け身しんを使った。

　高速の攻撃を受けたときのみ使用できる、神速跳躍の力だ。

　しかも、あることを試こころみる。義兄弟の契ちぎりを交わした佳か人じんとの戦いで気づいた用法だ。

『鳳』の使用中は、護堂の感覚も加速する。周囲の全てがスローモーションで動いているような、奇妙な感覚に陥おちいる。

　この減速した世界で普通に動き回れるのは護堂だけ。それがいつもの『鳳』。

　だが、今回は自みずからの速さをほとんど抑おさえながら動いた。

　如意金箍棒がスローで突き込まれる。先端がゆっくり護堂の喉のどに近づいてくる。対して護堂は動かない。微動だにしない。『鳳』のスピードもオフにする。そして、あと一、二センチで喉のどを抉えぐられるというとき、オンに変える。

　超加速。『鳳』のスピードが体に宿る。だが、使うのはほんの一瞬。

　それだけでいい。それだけ猶ゆう予よがあれば、如意棒による突きをかわせる。護堂の体はほんの一〇センチほど横にズレ、みごと攻撃を空振りさせた。

「…………ほう」

　大聖がつぶやいた直後、攻撃のペースがいきなり上がった。

　如意金箍棒が唸うなりをあげ、火花の散るような連打がはじまった。

　円えん弧こを描きながら、あらゆる角度から護堂の体を襲う。香ホン港コン製武ぶ侠きよう映画で、少しよう林りん僧そうが見せる棍こん法ぽうを彷ほう彿ふつさせる。しかし数百倍は速い。

　疾しつ風ぷう迅じん雷らいの連続攻撃。その全てを護堂はさっきの要領で避けた。

　羅ら濠ごう教きよう主しゆとの戦いで緩かん急きゆうの重要性を知った。常に最高速で動く必要はない。必要なときだけ神速を発揮すればいい。その発見が生んだディフェンスだった。

「うむ、孫さまの金箍棒をよく防ぐ！　それでこそ魔王の端くれ——おわっ」

　誉ほめる大聖、つまり万ま里り谷や家次女の足首に、護堂は己の右足を近づけた。

『鳳』のスピードはオフにしたままだ。あと一〇センチで届くというところでオン。神速の足払いがみごとに決まる。

「ぬうっ。なかなか足癖が悪いようじゃ。ははは、善よき哉かな。よき立ち回りじゃ！」

　転倒こそしなかったものの、たたらを踏みながら大聖は笑う。

　これも緩急の使い分けを覚えた恩恵だった。常に最高速で動き続けていた以前は、繊せん細さいな動きはできなかった。敵を攻撃しても、五〇センチ離れた場所の空気を殴るだけだった。

　だが途中までは普通の速さで動き、最後のところだけ加速。

　このやり方なら、今まで無理だった精度の高い動きができる——。

　しかし、斉天大聖の余裕がイヤな感じだった。護堂の神速と対たい峙じしても、ひかりの顔には『まだまだ本気じゃない』雰ふん囲い気きが濃厚に漂っているのだ。

　合図はまだだろうか？　すこしずつ焦あせりをつのらせる護堂だった。

　斉天大聖に護堂が向かっていく一方で、少女たちも行動を開始していた。

　湖みずうみのほとりにある何かの記念碑に隠れながら、神と神殺しの様子をうかがう。

　脱出時の足を確保するため、アニーには単独行動を頼んだ。今ここにいるのはふたりの大騎士とふたりの媛巫女、計四人であった。

　となれば、やはり場を仕切るのは『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』。エリカは旧友に言った。

「リリィ。わたしたちは突破口を作って、みんなの脱出と護堂の救出を成功させる役目よ」

「わかった。……だが、霊視の件は本当に大丈夫なのか？」

リリアナは心配そうに祐ゆ理りを見ていた。

自みずからが強く知りたいと思うことは上う手まく視みえない。これは霊視術の不ふ文ぶん律りつだとエリカも聞いている。祐理もよく「霊視できるかどうかは天の采さい配はい」と言う。

異様な霊視成功率を誇る彼女が口にすると疑わしい言葉だ。しかし、祐理は己にそう言い聞かせることで、無意識に霊視を呼び込む率を高めているのかもしれない。

「どうにかしてみます。……前にも私自身の意思で啓けい示じを得たことが何度かありますので、それと同じやり方をすれば大丈夫かもしれませんし」

「望んで霊視を得た？　いくら万里谷祐理でも、それはさすがに信じがたいぞ」

リリアナの反論を否定したのは、媛巫女筆頭である恵え那なだった。

「そうか。幽世かくりよで覚えたやり方だね、祐理？」

「はい。あれは『虚空の記憶』がたゆたう幽世だからこそ容易に行える技。現世うつしよではかなりの負担がかかると思います。でも、やり方はそれほど変わらないはずなんです」

旅館を出る前、祐理は巫女装しよう束ぞくに着替えていた。

精神の集中を高めるためだろう。皆の注目を浴びながら、媛巫女は言こと霊だまを唱となえた。

「昔、大おお唐から国くにの子、春の山に入りて帰らざりければ、其その親たずね入りて、わが子わが子と喚よべども逢あわず歎なげき死にて、魂こん魄ぱく鳥ちようと転じ、春は山に鳴めいすなり――」

胸元で手を組み合わせ、目も閉ざす。

容よう姿し端たん麗れいな巫女が一心に祈き念ねんする姿は、一いつ幅ぷくの絵になりそうな可か憐れんさだった。

「色しき即そく是ぜ空くうだよ、祐理。己の心を幽世の在り方に近

づけて、御み魂たまを研とぎ澄すませるんだ」

「それは日本の呪じゅ術じゅつの心得？」

　アドバイスを聞きとがめたエリカに、恵那は簡潔に語った。

「色は空くうと異ならず。空も色と異ならず。色すなわち空なり。空すなわち色なり——この世の形あるものは全て幻まぼろしのようなもの。本当は形がないのに、あるように見えてるんだぁっていう観かん音のん様の教え。幽世って、そういう場所だからね」

　そのとおり。媛巫女の言う幽世を、欧州の魔術師はアストラル界と呼ぶ。

　肉体・物質よりも精神と霊体が上位に立つ世界なのだ。

「ほんのすこしでいいから色即是空の境地に至れば、幽世にいたときのように霊視を使えるはずだよ。祐理は向こうに行ったこともあるから、コツはもうつかんでいるだろうし。……まあ、だいぶきついとは思うけど」

　能天気な自然児だが、教養に富み、諸しょ芸げいにも熟じゅく達たつしたお嬢さま。

　その片へん鱗りんをかいま見せた恵那に、エリカは軽く眉根を寄せた。優美さに欠ける行為。だが、この媛巫女筆頭は『紅き悪魔ディアヴォロ・ロッソ』にとって最大の雄ゆう敵てきになりそうな予感がしたのだ。

「ところで清せい秋しゅう院いん恵え那な。きついといえば、あなたの神がかりはどこまで当てにできる？」

　不意にリリアナが口をはさんだ。

「魔女としての勘かんで言わせてもらうが、神獣や半神に比ひ肩けんする能力を得る術だ。心身に相当な負担がかかると思っているのだが」

「リリアナさん、いい線ついてくるね。うん、あれを使うと恵那もだいぶきついんだ」

　朗ほがらかに笑っていたが、返答の内容は軽くなかった。

「大体、フルマラソンをハイペースで走り切るくらい？　集中力も結構すり減らすんだよね、あれやると。一度使ったら、一週間は間を空けろって言われてる。やっちゃったら最悪、命の保証はできないとか。でも、必要なときに出し惜しみはしないから心配御無用だよ」

　荒あら行ぎよう・苦く行ぎように慣れ親しんだ太た刀ちの媛巫女ならではの言葉である。

　エリカが調べた限りでは、日頃から俗気を心身に溜ため込まないようにもしているらしい。彼女がしょっちゅう深しん山ざんに入るのは、街に居続けていると神がかりを使えなくなるからだろう。

　だが、清秋院恵那の強みは神がかりだけではない。

　エリカの知略に拮きつ抗こうする野生の勘。人じん心しん掌しよう握あく術じゆつにも搦からめ捕とられないマイペースぶり。

　何より、あまり女を感じさせない言動。そのくせ容姿もスタイルも極上の美少女。男の友人のノリで護堂と親しくなり、しかし、ふとした拍ひよう子しに女であることを感じさせて、彼の寵ちよう愛あいをものにするかもしれない。

　騎士としても女としても端たん倪げいすべからず、厄やつ介かいな敵手だった。彼女のことでさっき護堂にも詰め寄ったがはぐらかされた。あとできちんとさせなくては。

　決意しながら、エリカはもうひとりの騎士を連れて巫女たちから離れた。

　これから仕込む術には、かなり集中しなくてはいけない。リリアナと共に儀式を執とり行い、万全の準備を行う。その成せい否ひに全員の命がかかっているのだ。

　草薙護堂と斉天大聖の戦いが白熱してきた。

　清秋院恵那の動体視力をもってしても、彼らの動きは見えない。速すぎる。棒を矢や継つぎ早ばやに繰り出す大聖と、それを紙かみ一ひと重えでかわし続けるカンピオーネ。もはや、心眼を会え得とくした武芸者でなくては見極めることはできまい。

それほどの遣つかい手て、帝都の師範代にも二、三人しかいないはずだ。

激闘の前で目をつぶり、一心に祈るのは媛巫女・万里谷祐理。彼女が視なければならないのは、斉天大聖・孫悟空の神格だ。

恵那は天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが手元にないことを残念に思った。

あの神刀も《鋼》の係けい累るい。同じ神族のことであれば、それなりに把は握あくできるはず。かつての相棒が手元にあれば、教わった知識を草薙護堂に伝えることもできたのに……。

だが、ないものは仕方ない。祐理にまかせるとしよう。

それにしても、この生き真ま面じ目めな霊れい眼がんの持ち主がここまでするとは。以前はもっと杓しやく子し定じよう規ぎに物事を考える女の子だったはずだ。

「……女は男で変わるものって、ばあちゃんが言ってた通りなのかなー」

草薙護堂の資料を読んだときから、面白い人物だと思ってはいた。

素そ朴ぼくな人柄。常識的な発言。平和主義を標ひよう榜ぼうするライフスタイル。だというのに、その行動はおかしい。言動共に型破りな恵那にしてみれば、生き別れの兄弟かと思うほど痛快な暴れっぷりだった。だが、優等生の祐理と気が合うらしい。

実際に草薙護堂の行動が巻き起こすハチャメチャぶりを目撃して、確信した。

彼こそ我が背せの君きみ。運命の男。

清秋院家の後継ぎとして、いずれ子を生なさねばならない彼女だが、己おのれにふさわしい男に会ったことはない。恵那の常識破りにオロオロしたり、怒るだけだったり、追つい従しようしたりするだけのヤツなどまっぴら御ご免めんだ。その点で、草薙護堂は他の連中とはちがう。

恵那をドキドキさせてくれる。こちらが予想だにしなかったこと

を平気でやってのける。

　女おんな癖ぐせの悪さは気にならない。清秋院家の息女として知る限りでは、もっとろくでもない漁ぎよ色しよく家かは歴史上（そして家系図上に）いくらでもいる。全然ましな方だ。

　彼にはまだ結婚の意思がないようだが、胤たねをもらうだけでもかまわない。

　魔王カンピオーネの能力が遺伝することはない。だが、その血筋である事実は呪術の世界ではなかなかに物を言う。欧州の魔術結社では、しばしばカンピオーネの血筋が創始者であったり総そう帥すいになったりする。

　たとえば《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》なども、十数代前の総帥は魔王のご落らく胤いんだったはず。ある意味で王族のように扱われるのだ。実は、その末まつ裔えいがエリカのブランデッリ家である。

　……というわけで、運命の出会いをはたした男の戦いを見守る恵那だったが。

「まずいよ。このままじゃ王様が不利になるよ。逃げるなら早くしたほうがいいよ」

　勝負所を見極める天性の勘が、恵那に教えてくれた。

　神速で戦う草薙護堂と斉天大聖。

　明らかに前者よりも後者の方が高速戦闘の経験が豊富だ。カンピオーネの動きを見切りはじめている。スピードは互角のはずだが、的確な読みで草薙護堂を追い詰めつつある。

　速すぎるため、かすかにしか見えない。だが、大まかな趨すう勢せいは理解できた。

　大聖が如によ意い金きん箍こ棒ぼうで右から殴りかかる——ふり。フェイントだ。横に飛んで避けようとした草薙護堂を、左の中段回し蹴りで迎え撃つ。この要領で揺さぶりをかけていく。

　右と見せて左。東と思わせて西。下を狙うふりで上。

　こうなると、ひかりの肉体を攻撃できない草薙護堂には逆転の目がない。このままではやられる。恵那は沙さ耶やの宮みや家の蔵から持ってきた日本刀の鯉こい口ぐちを切った。

　いざとなれば、神がかりで加勢する。

　スサノオの神霊を呼び込んだのは今日の昼間。短時間しか使わなかったが、それなりに負担にはなった。あのあと露天風呂ではしゃいでいられたのは、太刀の媛巫女として鍛きたえ抜いた心身があればこそだ。

　万全を期すなら一週間。できれば三日は間を空けるべきだという。

　——だが、使う必要があれば臆おくさず使う。魔王に仕える覚悟を固めた女なら、当たり前のことだ。恵那がすぅっと目を細め、神と王の戦いに割って入ろうとしたとき。

「……遥はるか遠くの山野、草原に憩いこう。鋼の系けい譜ふは剣の道。弓持て馬を駆り、荒ぶる想いを乗せて羊を追い、獲え物ものを狩る。これ、猛たけき者たちの謡うたういにしえの道なり」

　かすれる声で祐理がささやいた。

　目を開いて恵那を見つめ、うなずきかけてきた。

「やったんだね、祐理？　ひかりの体を取っていったおサルの正体、わかったんだね？」

「はい。ですから、もう大丈夫だと護堂さんに……」

　と伝えるなり、霊眼の媛巫女は前のめりに倒れ込んだ。

　あわてて抱き止めて、恵那は驚いた。祐理の体がおそろしく熱い。おでこをさわってみると、ものすごい熱が出ていた。

「現世うつしよで霊視を意のままにしようなんて無茶だもんね。やっぱりきつかったか。でも、よくやったよ祐理！」

　幼なじみに呼びかけながら、恵那は渡されていた道具を取り出した。

アニー・チャールトンの持ち物だという拳銃。細い銃身のリボルバーだ。これを撃って合図にしようというとき、予想外の光景を見ることになった。

フェイントで揺さぶられるようになってからは、避けきれなくなった。

護堂は二の腕を打たれ、肩を打たれ、ふくらはぎを打たれと、どんどん劣勢になっていく。やはり反撃できないのはつらい。すると、斉天大聖が動きを止めた。

「……そうか。おぬし、我の依より代しろをおもんばかっておるのだな」

護堂の不自然な戦いぶりに、さすがに気づいたようだ。

ひかりの体を乗っ取った猴こう王おうは、ぽりぽりとひかりの頬ほおをかいた。

「うーむ。まるで、我が小娘を人質に取ったかのような展開。いかん、いかんぞ。これでは我が悪党みたいに見えてしまうではないか！」

「みたいも何も、あんたは立派な悪党だよ！」

今さらバカを言う大聖に、護堂はついツッコミを入れた。

このサルとサルバトーレ・ドニ、どちらが上級のアホか悩ましいところだ。

「うむ。たしかに我はいろいろと悪さを行っておる。しかしじゃ、小悪党のように思われるのは心外もいいところ！　斉天大聖・孫悟空さまには、それなりに威厳が必要なのじゃ！」

意外と見栄っぱりのサルらしい。

呆あきれる護堂の前で、大聖は複雑な形の印を切った。

「どうにかして我の本地を顕あらわしてくれよう。我、無む垢く清せい浄じようなるを祈き念ねんいたす！　哈はァ！」

　ひかりの頭から金色の煙が立ちのぼりはじめた。

「六ろつ根こん清しよう浄じようなるがゆえに、我が五ご臟ぞうの神君は安あん寧ねいなり！　安寧なるがゆえに、天地の神と同根なり！　今こそ我が身、我が神格を清め給たまえ――あ痛たたたたっ！」

　煙はどんどん濃くなり、やがてサルの形を取る。しかも、そのまま実体となり、なんと金色がかった毛並みの猿えん神しんとなってしまった！

　身の丈たけ一六〇センチほど。例によって、黄色の『靠こう』をまとっている。

　猿が地上に降り立つと、ひかりの体は地に突っ伏した。

「さて、この巫女めも一応抑おさえておくとするかね」

　猿形――真の姿を取り戻した斉天大聖・孫悟空は、毛だらけの指を鳴らす。

　ひかりの体は小さな光の玉となり、大聖の口に吸い込まれた。

「くくく……喰くったわけではないぞ。腹のなかにしまい込んだだけじゃ。神殺しよ、巫女を救いたくば我の腹をかっさばき、拾い上げるがいいさ」

「――な!?　何が悪党みたいな真似はしないだ！」

　サル顔で笑う斉天大聖を、護堂は糾きゆう弾だんした。

「女の子にそんなことをしておいて、立派な悪党だろうが！」

「ははは、心外な申しようじゃのう。昨日言ったではないか？　我は凶きようを為なし、悪を顕す斉天大聖さまだと。小悪党っぽく見えるのがイヤなだけじゃ！」

　言いざま、斉天大聖が打ちかかってきた。

　速い！　左右の掌てのひらであっという間の一〇連打を叩き込まれた。

　九つめまでは『鳳おおとり』のスピードでどうにか避ける。だが、最後のは喰らってしまった。今まではなかった獣の——猿のしなやかさが、攻撃にさらなるキレを加えている。

　いや、それだけじゃない！

「くはッ！」

　大聖の掌で左肩を打たれて、護堂は驚嘆した。硬い!?　まるで鋼鉄だ！

　鎖さ骨こつはまちがいなく砕けた。激痛が左肩を襲う。

「火か眼がん金きん睛せいにして鉄てつ頭とう鉄てつ臂ぴ、銅どう背はい銅どう身しん——」

　謡う斉天大聖の右手に忽こつ然ぜんと剣が、左手に刀が顕れる。

　猴王は剣を自らの腹部にぐいっと突き刺した。かちんと音を立てて、剣は砕けた。

　刀で己の首を横よこ薙なぎにしようとした。ぱきんと音を立てて、刀は砕けた。

「我は天界の蟠ばん桃とうを喰らい、霊酒を飲み、仙せん丹たんを摂とったことで金きん鋼こうの体となった。そのうえ八はつ卦け炉ろの焔ほのおで灼やかれ、仕上げをいたしたのじゃ。刀とう槍そうで斬り裂かれようと斧おので割られようと、雷かみなりで打たれようとも傷ひとつ受けぬ」

　まさか不死身の——鋼鉄の肉体か!?

　サルバトーレ・ドニも所持する権能だ。あの不死身っぷりにはさんざん手を焼いた。

　このとき銃声が轟とどろいた。即時撤退せよの報しらせ。胸に痛みを感じながら、護堂はついに『鳳』のスピードを全開にした。

　間に合うか。胸の疼とう痛つうは『鳳』のタイムリミットが近い証あかしだ。

　神しん猴こうを振り払うべく、背を向けて走り出す。今まで注意

深くスピードを制御していたので、最高速を振り絞れるのが心地よかった。しかし——

「いかんいかん。もうすこしつきあってもらうぞ」

　ゾッとした。神速で走る護堂のすぐ隣を、斉天大聖が猿の姿で駆けている。

　全速力でないのは、向こうも同じだったか！　ダッシュでさらに大聖が加速し、護堂の前に回り込む。そのまま如によ意い金きん箍こ棒ぼうで一突き。狙ねらいはこちらの心臓。

　護堂は左右、もしくは後方にかわすのを諦あきらめた。もう間に合わない。

　この一撃を最小の被害で凌しのぐ法はただひとつ。前だ！　護堂もダッシュし、さらに加速。そして跳躍。飛とび膝ひざ蹴げりで、大聖の顔を狙う。

　ＫＯを狙ったわけではない。敵は鋼鉄の肉体、逆にこちらの膝が砕けてしまう。

　打って出ることで、すこしでも大聖が狙いを狂わせるように——。

　一か八かは功こうを奏そうした。護堂の心臓を串くし刺ざしにし、即死させるはずだった如意金箍棒は脇腹を貫つらぬく。重傷に変わりはないが、即死はまぬがれた。

　棒が引き抜かれると同時に、護堂は地面に突っ伏した。

　俺はもうダメみたいだ。おまえたち、あとはまかせた——。護堂が祈った瞬間、中禅寺湖の水面がやにわに爆発した。

　魔術師としてのエリカは、錬れん鉄てつ術じゆつを最も得意とする。

　これは錬金術から派生した戦闘用の魔術で、金属を操り、物体への魔力付与を要よう諦ていとする分野だ。金属系の術と相性のいい焔ほのおの術も、エリカは得意だった。

　対してリリアナは魔女だ。火と鋼の技よりも、丹たんを練り、動植物と意識を共有し、水と大地と天にまつわる術法を得意とする。

　だから、莫大な量の湖水を利用すると決めた時点で、メインの術者はリリアナとなった。

「視みよ。我われ、洪水を地に起こし、凡すべて命の息ある者を大地より滅ぼし命脈を絶たん。地におる者は皆死ぬべし」

　中禅寺湖のほとりで、魔女にして騎士が言こと霊だまを唱となえる。

「水はびこりて、大いに地に増しぬ。地上の高山、悉ことごとく溺おぼれたり」

　その横でエリカも合わせる。リリアナの詠えい唱しようを邪じや魔ませぬよう、控えめに、支えるように。

「地に動く肉なる者、鳥獣家畜、地に這はう諸々の蟲むし、人、皆死せり。すなわち命の息の通う者、凡て乾かん土どに在る者は死せり」

「大地の表に在る万ばん物ぶつを人より獣、這う者、蒼そう穹きゆうの鳥に至るまで、悉く拭ぬぐい去り給えり」

　これは魔術の儀式。複数の術者が合力し、ひとつの術を執り行うための法。

　難度の高い術法や完成まで時間のかかる術法、ひとりではまかないきれない呪力を必要とする術法など。そういう術をかける際に使われる技法だった。

「視よ。我、彼の者らを世と共に滅ぼさん！」

　銀髪の少女が仕上げの呪文を叫ぶ。

　中禅寺湖の水面にさざ波が立った。最初は岸辺に寄せる小さな波。だが、引いて戻ってくるときには倍以上強くなる。それを何度も繰りかえす。

　やがて岸壁を砕く嵐の海のように、波は荒々しくなった。

　荒波が洗うのは中禅寺湖の北岸である。すこし先にある道路では、護堂と斉天大聖が超高速で戦っている。やがて待ち望んでいた合図——拳銃の発射音をついに聞いた。

「今よ、リリィ。思い切りやりなさい！」

「言われるまでもない。湖の貴婦人よ、御身の末まつ裔えいたる魔女を守護し給え！」

　エリカの呼びかけにリリアナが応こたえた瞬間、湖面が一気にせり上がった。

　湖水は巨大な荒波となり、岸辺に殺到。

　湖の北岸に貼りつくように伸びるメインストリート、立ち並ぶ商店やホテル、食堂、公共施設など。それらが一気に洗われる。

　サーフィンで伝説級のビッグウェーブとされる波は二五フィート前後だという。

　一フィートは三〇センチ。つまり高さ七メートル前後。このときの大波は、高さ一五メートル近い水の壁となって陸地に雪な崩だれ込んだ。

　そこには神殺しを貫つらぬいた斉天大聖と、くずおれる草薙護堂も居合わせた。

　護堂の上着から鋼鉄の札カードがすべり出てくるのも予定通りだった。

第５章　媛たちに難が及び、二王は盟約を交わす

1

　カンピオーネや神々は、人間の使う魔術をほとんど受けつけない。ただし、経けい口こう摂せつ取しゅのような抜け道もいくつか存在する。リリアナとエリカが行ったのは、そのひとつだった。

　大津波を起こして、中ちゆう禅ぜん寺じ湖この目抜き通りも斉せい天てん大たい聖せいも一いつ気き呵か成せいに洗わせる。

　波を操って攻撃する魔術であれば、打ち消されただろう。だから、津波を起こしただけで放置した。直接の対象とせず、間接的に術の効果に巻き込む方法だった。

　あとは運まかせになるが、この方が確実に何らかの効果を見込める。

　そして、エリカとリリアナは飛ぶような速さで駆け出した。中禅寺湖の岸に沿って西へ向かう。目的地ではアニーが車を用意して待機中だ。

　護ご堂どうに関してはクオレ・ディ・レオーネに一任してあった。

　傷ついた護堂を救ったのはエリカの魔剣だった。

　大波に巻き込まれる直前、クオレ・ディ・レオーネは札カードから錨いかりのついた鎖くさりへと二度目の変形を遂とげた。この鎖が蛇へびのように襲いかかる。

狙いは斉天大聖の足首。そして、護堂の腹から引き抜かれたばかりの如によ意い金きん箍こ棒ぼう！

「な、なんと!?」

大聖が驚いていた。さすがの猴こう王おうも神殺しに痛打をあたえた直後。油断があったのかもしれない。獅し子しの鋼はがねが足あし枷かせとなった瞬間、護堂は根性を振りしぼった。

「だあああああっ！」

軽くはない手傷を負ったとはいえ、致ち命めい傷しようではない。『鳳おおとり』の速さを全開にして走る。

追撃しようとする大聖に、クオレ・ディ・レオーネが巻きついて邪じや魔まをする。神しん猴こうはいらいらした様子で鎖を断ち切ろうと、手刀を振り下ろす。ここで津波が来た。

「お、おおおおお!?」

斉天大聖が波に呑のまれ、流されていく。

これで時間稼ぎになるはず。護堂は神速のまま西に向かって走った。

クオレ・ディ・レオーネは不ふ滅めつの魔剣。しかも、召しよう喚かんの魔術で呼び戻すこともできるので回収は考えない。神速のおかげで、根性まかせに走るのは数秒ですんだ。

脇腹、そして肩の痛みはあいかわらず。心臓の疼とう痛つうも徐々に強くなってきた。

「大丈夫ですか、草くさ薙なぎ護堂!?」

合流地点に着くと、リリアナが出迎えてくれた。

拳けん銃じゆうで合図する役だった恵え那なも来ていた。彼女の腕のなかで、祐ゆ理りがぐったりしている。だいぶ意識が朦もう朧ろうとしている様子だ。

「王様、祐理はきちんとお役目を果たしたから、あとで誉ほめてあげて」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こが報告してくれた。

　一方エリカは、シルバーのＳＵＶを険しい目で見つめていた。

「ど、どうした？　何かあったのか？」

「先に来ているはずのアニーさんがいないのよ。代わりに……」

　問いかけた護堂にエリカが示したのは、車のボディだった。

　運転席のドアが紅あかく汚れていた。どす黒い紅色がシルバーの車体を彩いろどっている。

　出血だとしたら、汚れを作った犯人はかなりの重傷だろう。護堂が運転席に車のキーが差さったままだと気づいたところで、携帯電話が振動をはじめた。

「……お、俺の電話、見てもらえるか？　着信が来てるみたいなんだ」

　このタイミングでの連絡。胸騒ぎがする。ついに硬直がはじまったため、護堂はいちばん近くにいたリリアナに頼んだ。

「アニー・チャールトンからのメールです」

　騎士が携帯の画面を示す。『アニーは事故に遭あい負傷。当方にて回収せり。配慮無用　ＪＳ』という、そっけない文面だった。

「いろいろ類るい推すいさせてくれる内容だけど、詮せん索さくはあとまわしね。早く離脱しましょう。護堂の手当てをして、祐理を介かい抱ほうしてあげられる場所に逃げ込まないと」

　やはりメールを見たエリカが言った。

　この手の采さい配はいにはまちがいのない金髪の騎士に、護堂は目で訴える。しばらく頼む。まかせて、絶対逃げ切ってみせるから。アイコンタクトでのやりとり。

「誰か、運転できる人いる？　ちなみに恵那はダメなんだけど」

　力尽きた祐理と護堂を後部座席にすわらせたところで、恵那が訊たずねた。

「誰も免許を取れる歳としじゃないものね。……仕方ないわ。わたしが何とかしてあげる」

「待て。あなたは自動車の運転ができたのか⁉」

　運転席に潜り込んだエリカへ、助手席にすわったリリアナが訴えた。

「だったら、何でいつもあのメイドに運転をまかせているんだ⁉　お、おかげで以前、死ぬような目に遭ったじゃないか⁉」

　どうやらアリアンナの運転を体験済みらしい。

　旧友兼ライバルのもっともな感想に、エリカは華か麗れいに微笑ほほえんだ。

「あら、とてもかんたんな話じゃない。一、そもそも免許を持ってない。二、こんな無ぶ粋すいな乗り物、騎士の愛馬にふさわしくない。三、今日初めて運転する、だもの」

　最後に身をすくませる告白が出たところで、エリカはアクセルを踏み込んだ。

　一行を乗せたＳＵＶはすさまじい勢いで走り出す。車道には幸い対向車も先行車もいなかった。いたら、あっというまに事故を起こしていただろう。

「大丈夫よ。アリアンナや他の人たちが運転するの、いつも見ていたから。やり方はちゃんと知ってるわ。ここを踏めば加速して、こっちを踏めば減速するんでしょう？　あとはここを回してコントロール……うん、大体わかったわ」

　あろうことか、ほんの数分でエリカの運転は安定しだした。

　優美な姿勢で運転する姿は、ドライバー歴五年と言われても信用できそうだ。やはりエリカ・ブランデッリは並ではない。さりげなく見ているだけでやり方を学び、あっというまにコツをつかんでしまう。おそろしく器用で、センスに富む少女なのだ。

（交通法規は理解していないようだが、そこまで言うのは贅ぜい沢たくだろう）

　かくして、逃走手段の不安はなくなったのだが。

　ついに追跡者が姿を現し、一行に別種の不安と焦あせりをあたえるようになった。

「うわー……何ていうか、やること派手だよねー」

　恵那が後方を振り返って、つぶやいた。

　車を後ろから追いかけてくるのは、巨大な手だった。毛むくじゃらの、猿の手。振り向けば、巨大化した斉天大聖の姿が夜空を覆おおい隠していた。

『ふははははは！　そんなところにおったか、神殺しよ！　そうれ、逃がしはせぬぞ！』

　楽しそうな声が空から降ってきた。

　もはや万ま里り谷やひかりの声ではない。彼が猿えん猴こう神しん君くんであった頃と同じ声だ。

　その号も今や斉天大聖。晴れ渡った夜空の雲に頭がつくほど、天てん下か無む双そうの神猴は巨大化していた。ぐーんと長大な手をのばし、一行の乗る車をつかみ取ろうとする。

　エリカが巧たくみに車体を左右に振って、的まとを絞らせない。

　斉天大聖は何度か挑戦を続けた。のばす、つかめない。のばす、つかめない。

　だが、ついに指先がちょこんと車のテールランプにふれた。

　進行方向がズレる。安定が失われる。車は歩道のガードレールに突っ込んでいく。エリカはとっさにハンドリングで軌道修正。ブレーキを踏む。

　ぶつかったのは車体の左側面。衝撃が車と乗員を揺らす。

　正面からの激突は避けられた。だが勢いのついた車はスピン。幾度か回ったところで、ようやく止まってくれた。

　そのときにはもう、見上げんばかりの斉天大聖に追いつかれてい

た。

　ちょっと小細工をしたのち、アニーはしばらく身を隠していた。

　エリカ、リリアナ、恵那たちは負傷した二名を車に乗せて走り去った。斉天大聖もそれを追っていく。こちらはわざわざ雲を衝つくほどの巨体となって、だ。

「あのサイズにハッタリ以上の実戦的な意味はないと思うけど……要するに、彼は見栄っ張りで目立ちたがりな神なのね」

　斉天大聖・孫そん悟ご空くうのキャラクターを知り、アニーは肩をすくめた。

　もっと情報を集めたいところだが、今の状況ではそうも言えない。スタイルは重要だが、それであの少女たちを見殺しにしては本ほん末まつ転てん倒とうだ。

「……誕生、死亡。そして無限――！」

　アニーは静かに言こと霊だまを唱となえた。

　コスチュームと魔ま銃じゆうを召しよう喚かんし、一瞬にして着替えを済ませる術だ。

　黒き鉄仮面が彼女の顔を隠す。昆虫の複眼じみたバイザーが特徴的だ。格調高い青き衣装の上には、黒のケープが翻ひるがえる。

　腰のホルスターには鋼はがね色いろの大口径リボルバー。足下は鉄てつ鋲びようを打った黒ブーツ。

　ロサンゼルスの闇やみに君くん臨りんする魔王、ジョン・プルートー・スミスの出現だった。

　この瞬間から、アニー・チャールトンは存在を消す。ここにいるのは仮面の英雄。人を救う代わりに、民たみに賦ふ役えきを強しいる暴君。時間にルーズで自己演出過多のキザな貴公子。

　いつのまにか第二の天性となった性格が、首をもたげてくる。

　ブーツの足音を響かせながら、スミスは風ふう光こう明めい媚びな田いなか舎街まちをねり歩く。彼が目指すのは天を衝つく斉天大聖でもなければ、自動車の走り去った方向でもなかった。

　中ちゆう善ぜん寺じ温泉の中心街、大騎士たちの起こした津波で洗われた辺りだ。

　今は夜、ジョン・プルートー・スミスにふさわしき時間。空には三日月と秋の星座がきらめき、闇のとばりが広がっている。街を照らすのは街灯や家屋の明かりだ。

「冥めい王おうの名の下もとに命ず。夜を渡る獣の足を捧ささげよ。光よ、我が征せい路ろのみを照らすがいい！」

　言霊を唱え、権けん能のうを行使した。

　グリニッジの賢人議会が『超変身メタモルフオセス』と名づけた力。

『贄にえ』を捧げる代わりに、黒衣の英雄を異い形ぎよう・異能の存在に変化せしめる権能だ。人の造りし光を贄としたとき、ジョン・プルートー・スミスは豹ひように変わる！

　街から光という光が消えて、闇に落ちる。スミスの肉体はすでに豹。

　身を覆うのは黄色に茶の斑はん点てんを散らした毛皮。闇にきらめく瞳の色はエメラルド。

　駆ける。さっき自動車が走り去り、斉天大聖が追っていったアスファルトの道を一息に駆け抜ける。ほんの数十秒で数百マイルを走破する。

　それは『豹オセロツト』の変身体が持つ魔力のひとつだった。

　いいところに間に合った。草薙護堂たちを乗せた車が停止中。ガードレールにぶつかったようだ。天を覆う巨体のまま斉天大聖が手をのばし――不意に止めた。

　気づいたようだ。神と魔王が接近すれば、たがいの存在をすぐ察知する。

心身は勝手に戦闘態勢へ移行していく。

スミスは豹の変身を解き、黒衣黒面のコスチューム姿に戻った。



『我がこの地でまみえた神殺しはふたり……だが、そやつらとは匂においがちがう。なんと三人目がひそんでおったか！　ははは、戦う相手に困らぬのもなかなかに面白い！』

「もうご理解いただけたとは、話が早くて助かるな」

　もはや男の声色を作ることさえ造作もない。最初は意識して別人を演じていた。

　しかし、いつしか仮面をかぶるだけで性格が切り替わるようになった。

「斉天大聖よ……我が故郷にひそむ神々はあまねく我が名を知っている。その気があるなら、ジョン・プルートー・スミスの名を覚えておくといい」

　名乗りを上げ、鋼色のリボルバーを引き抜く。

　アーシェラとの戦いのあとで新しん月げつを迎えたため、六発の弾丸は再充じゆう填てん済み。

『ふむ。たしかてつはうじゃったな。ずいぶんと小さくなったものよ！　しかも、いやな気配がぷんぷんしおる。我らを屠ほふるための仕掛けに抜かりはないと見える』

　魔銃を見るなり、斉天大聖は興味深げにつぶやいた。

　さすが猿の神、鼻がきくようだ。しかも大聖の体が見る間に縮む。

　身の丈たけ一六〇センチ程度。サルよりも人間に近い体型だが毛むくじゃら。京きよう劇げきの衣装をまとい、如によ意い金きん箍こ棒ぼうを持つ。

　巨大な生物ほど機き敏びんさが失われる。あの超巨体では魔弾をかわせない。

　だから縮んだのだろう。ならば、もうひとりの神殺しはどうだ？　スミスは車の後部座席を眺めた。草薙護堂は体をこわばらせてシートにもたれかかっている。

　だが、目はまだ力尽きていない。戦う余力はなくとも、心は折れてないようだ。やはり、それでこそチャンピオン。この程度の窮きゆう境きようで打ちひしがれはしないか。

　スミスは仮面の下で、フッと微笑んだ。

　男に免めん疫えきのないアニー・チャールトンは草薙護堂を忌き避ひしているようだが、ジョン・プルートー・スミスとしては、さほど不快なキャラクターだとは思わない。

　多くの女人と愛を語らい、恋を楽しむ――。

　それも粋すい人じんのたしなみというもの。そんなこともわからないから、あの女はいつまでも独り身のさびしさを持て余すのだ！

　自らの分身をあげつらったところで、スミスは気づいた。

　まつろわぬ《鋼》たる斉天大聖。その神力が急速に高まりつつある。今まで対たい峙じした全ての神々を凌しのぐ強大さ。一体何だ、これは!?

　草薙護堂も切迫した目で、開け放たれた車の窓から神猴を見つめている。

「僭せん越えつながら、ここは私が引き受けよう。君たちは先に行き給たまえ」

「我が君に貸しを作られる……ということでございますね、ジョン・スミスさま」

　少女たちに呼びかけたら、運転席のエリカが返答した。

　ブランデッリ家の令嬢だというから、欧州魔術界では相当なセレブリティのはずだ。それをうかがわせる、優美な口調だった。

　プルートーの名をはぶいたのは、メールに記しるした『ＪＳ』の署名にちなんだのだろう。

「貸し？　いいや、我が協力者をここまで案内してくれた恩義への謝礼だ。貸し借りでいえば、これでプラスマイナスはゼロになるな」

聡そう明めいな美少女との気取ったやりとり。こういう会話は、ロスではなかなか楽しめない。

黒き仮面に表情を作る機能があれば、笑みを浮かばせるところだ。

「恩義に几き帳ちよう面めんでいることも我が流儀なのだよ。そして幸いにも、私はかの猿殿と比ひ肩けんする権能の持ち主でもある。まかせてもらえるかな？」

「もちろんです、スミスさま。いずれ我が君が改めてお礼を申し上げましょうが、この場はわたくしのみの謝しや辞じにて代えさせていただきますわ」

エリカ・ブランデッリは嗜たしなみを感じさせる微笑で口元を彩いろどった。

彼女たちを乗せた車が走りだす。加速。さらに加速。すぐに見えなくなった。

「くくく、我に比肩するとは大きく出たのう。よかろう、ならば孫さまの神通をしっかと見せてくれよう。これより従じゆう神しん顕けん現げんの大法を成じよう就じゆさせん！」

斉天大聖がほくそ笑む。その手の上に、ふたつの像が忽こつ然ぜんと現れた。

ひとつは猪いのししの頭を持つ鎧よろい武む者しやの像。ひとつは髪の毛を焔ほのおのごとく逆立てた鬼神像。

「宝ほう照しようは天地を含み、神剣は陰いん陽ように合う！
我・孫大聖は義兄弟の契ちぎりを以もつて、賢けん弟ていたちを顕あらわさん。出いでよ、二に弟てい・猪ちよ剛ごう鬣りよう！」

大聖が投げた鎧武者の像はすぐにふくれあがり、『まつろわぬ神』となった。

黒い毛並みの猪頭。牙きばを生やしているくせに愛あい嬌きようがある顔つき。肥ひ満まんした逞たくましい巨体は、黒い甲かつ冑ちゆうをまとう。

「出でよ、三さん弟てい・深じん沙しや神しん！」

　今度は鬼神の像が投げられ、神になった。逆立つ紅ぐ蓮れんの髪に、悪あつ鬼きの相。肌は蒼あお黒ぐろく、表情も陰いん惨さんそのもの。粗末な衣の上に、彼も青い甲冑をまとっていた。

「やれやれ。ようやくもとに戻れたでござるよ」

「おひさしぶりです、大だい兄けい、二に兄けい。察するに、身み共どもの仕事はそやつの始末でございますな」

　地上に降り立つなり二柱は口々に言った。

　猪剛鬣こと猪ちよ八はつ戒かい。深沙神こと沙さ悟ご浄じよう。そして孫悟空。これで三対一！

「久方ぶりに水軍の将として腕を振るうといたしましょう。――捲けん簾れんの将、能よく水軍を御ぎよし、怪を馘くびきり邪じやを逐おいはらい、竜を招いて雨を致す！」

　深沙神が唱えるなり、彼の足下から水が噴き出した。

　まるで間かん欠けつ泉せん。車道のアスファルトを割って出た水は、勢いよく天を衝つく。しかも、形まで変わっていく。長い胴、短い四し肢し、爬は虫ちゆう類るいじみた顔、頭には角つのも生えている。

　その形、まさしく竜。

　深沙神は水を操り、竜を生み出したのだ。

「かつて禁きん軍ぐんの将であった頃の武才をご披露いたしまするる。とくとご覧じなさいませ！」

　水竜の頭に乗る深沙神がうそぶいた。

　鎌かま首くびをもたげた竜の姿は実に威い風ふう堂どう々どう。まるで水の彫像だ。

「むむっ。三弟め、なかなか派手に決めたでござるな」

　今度は猪剛鬣が悔しそうに言った。

「それがし、またの名を九きゆう天てん尚しよう父ふ霊れい魁かい

宗そう師し含がん元げん太たい虚きよ天てん蓬ほう都と元げん帥すい真しん君くんと申す。すなわち太帝の元げん帥すいなり！　我が武勇のほど、北星のもと大いに示さん！」

　ハッタリの利きいた名前を叫ぶなり、猪剛鬣は巨大化をはじめた。

　身の丈たけ一五メートル近くにまでなる。しかも、阿あ修しゆ羅らのごとき三さん面めん六ろつ臂ぴ。

　つまり、顔面の右と左にひとつずつ猪の顔が増え、両肩から左右二本ずつ腕が増加した。六臂はそれぞれ剣けんと戟げき、斧おのと棍こん棒ぼう、弓と矢を持ち、黒ずくめの鎧よろい具ぐ足そくと衣をまとう。

　異様な姿形で猪剛鬣は一歩踏み出した。ズシン！　地響きが起こる。

「ついでじゃ！　さっきの者どもを追っていけ！」

　大聖が叫ぶなり、大地より二匹の巨猿が浮かび上がってきた。

　往路の登り坂でも遭そう遇ぐうしたサル型の神獣だ。二匹はさっと駆け出していく。

　巨体のくせに、実にすばやい。草薙護堂たちの武運を祈りながら、スミスはふたたび『豹ひよう』に変身した。しばらくの間は、幾度でも姿を変えられるのだ。

「実はさる筋から情報提供を受けていてね。君に加勢がいることは知っていた」

「ほほう。だから何じゃい？」

　豹の口でささやくと、斉天大聖はわずらわしそうに答えた。

「だが、なぜこのタイミングで呼び出すのか……いささか興味深い事実だ。私の見たところ、君は見栄っ張りで目立ちたがり。虚きよ栄えい心しんの強い神だ。これほど派手な決め手があるなら、どうしてもっと早くに見せなかったのか、とね」

　説得力のある解答も、すでに心のなかで見出している。

それが正しいとすれば、わざわざ三対一の状況で戦う愚ぐは犯せない。

貴重な月神アルテミスの矢は六発。その一発を犠ぎ牲せいにしなければならないが……。スミスは豹の口を開き、そこから魔弾を撃ち出した！

変身状態では、魔銃を使わずとも撃てる――否いな、逆か。

あの銃は生身でもアルテミスの権能を操れるよう、造られたのだ。

飛竜を思わせる蒼あお白じろき閃せん光こうが空へ飛びだす。三神たちが身がまえる。月神の矢が有する威力を見抜いたのだろう。だが、目的は彼らの打倒ではない。

魔弾を空中ではじけさせた。

さながら超新星の爆発。光が炸さく裂れつし、奔ほん流りゅうとなる。周囲一帯を白く染めあげる。

ただし、この炸裂は熱も衝撃も伴ともなわない。ただのフラッシュ、目つぶしでしかない。神々の視覚すら灼やく、世界最強の目くらましではあったが。

だが敵は神。聴覚・嗅きゅう覚かく・超感覚だけを頼りに追ってくるかもしれない。

逃走をはじめる前に、スミスは万全を期して『豹』の魔力を使った。

2

エリカは遠慮なしに車のアクセルを踏み、夜の国道一二〇号線を飛ばした。

追走してくる二匹の巨きょ猿えんには気づいていた。ときどきバックミラーに姿が映る。すぐに追いつかれはしないだろうが、す

こしずつ間が詰まっている……。

　大ザルたちは一〇メートルを超す巨体でありながら、軽快迅じん速そくな走りであった。

　普通、獣けものは持久走が苦手なものだがと、エリカは呆あきれた。毛皮でおおわれた生物は、汗をかいて体温の調節ができない。長く運動すると体に熱がこもり、すぐにへばってしまう。

　持久力では、実は人類が陸上哺ほ乳にゅう類るいの最高峰なのである。

「リリィ、飛ひ翔しよう術じゆつで逃げられると思う？」

「向こうが空を飛べなければ試ためすのもいい。だが、あれを使うと無防備になるからな……」

「なら、やめた方がいいよ。昨日、あのおサルがロケット花火みたいに飛ぶの見たから」

　エリカ、リリアナ、恵え那な。まだ健在の三人は短く討議した。

「迎え撃つ……しかないわね」

　ハンドルを握りながら、エリカはつぶやいた。

　峠とうげ道みちでは切り抜けるだけでよかった。だが迎撃となれば、死地に赴おもむくのと等しい。

　大騎士級の遣つかい手てでパーティを組み、綿密な戦闘プランを立てた上で戦っても、勝利——否いな、生還できる可能性は低い。神獣とはそれほどの敵だ。

「とりあえず、一匹は恵那が受け持つよ。神がかりを使えば互角くらいだと思う」

　あの霊力の連続使用は命に関かかわる。

　そうも言った太た刀ちの媛ひめ巫み女こは、当然のように請うけ合った。

「では、わたしたちは二対一か。これが決闘なら、不名誉のそしり

は免まぬかれないが」

「これは怪物退治ですもの。そこまでうるさく言われやしないわ。逆に、その程度の人数で勝ったら伝説的な偉業よ」

　銀髪の騎士が思慮深げに言ったので、エリカは肩をすくめた。

　スピードを上げる。振り切るためではない。向こうとすこし距離を取って、迎撃の態勢を整えるためだ。しばらく行くと駐車場が見えてきた。

　もうすこし先には渓けい流りゅうが流れており、コンクリートの橋が架かかっている。

　山中なのに、レストランやバス停もある。観光地のようだ。

「竜りゅう頭ずの滝たきだねー。ここからちょっと山に入ると、滝が観みられるんだ」

　きょろきょろ周囲を見回して、恵那が言った。

　駐車場に車を停とめた。降りるのはエリカとリリアナ、恵那の三人だけ。

　祐ゆ理りはいまだ朦もう朧ろうとしている。護ご堂どうも動けない。『鳳おおとり』使用後の硬直中なのと腹部を貫つらぬかれたのが堪こたえたのか、ついに昏こん睡すいしていた。

　ふたりは車中に残す。が、その前に。エリカは後部座席のドアを開けた。

　シートでぐったりしている愛人の唇くちびるにキスする。別れの接せつ吻ぷんというつもりはないが、これが最後になるかもしれない。ついでに治ち癒ゆの術もかけておく。

　昨日とちがい、相手の意識は混こん濁だくしているので文句は出なかった。

「う、ん…………」

　唇を放すと、護堂がうめいた。

「すこし休んでいて。なるべく早く、あなたのところに戻るつもりだから。恵那さんのことでもいろいろ苛いじめてあげるつもりだしね」

　耳元でささやき、耳たぶにキスしてやってから、車を離れる。リリアナと恵那が「抜け駆けされた！」という表情をしていたが、素知らぬ顔だ。

　そこへ二匹の巨猿がのっそり近づいてきた。まず恵那が最初に動いた。

「しめぢか原の朝霧に、たびのたもとを濡らしつつ……那な須すのしの原はるばると、けう白しら河かわの関せき越えて——清せい秋しゆう院いん恵那、いざ参る！」

　言こと霊だまを唱となえた太刀の媛巫女に、小なりとはいえ神の霊気が満ちる。

　恵那は守護神であるスサノオの神力をその身に宿したのだ。二匹の巨猿に注視される。彼女が自分たちにとっても脅きよう威いだと、おそらく認めたのだ。

「我は主の御名を告げ、世界の中心にて御身を讃たたえ、帰き依えし奉たてまつる！」

「サウルの剣よ、鷲わしよりも速く獅し子しよりも強き勇士の器うつわよ。今こそ我が手に来たれ！」

　呪じゆ文もんを唱え、エリカとリリアナはダヴィデの言霊を完成させた。

　それぞれの愛剣に言霊を宿らせる。クオレ・ディ・レオーネは巾はば広ひろの長剣へ、イル・マエストロは薙なぎ刀なたへと変形して真の姿を露あらわにする。紅のケープと青のケープを身にまとう。

「リリィ！　神獣を一匹、引きはがすわよ！」

「承知した。わたしは上から行く。あなたは下から攻めろ！」

　エリカは近い方の巨猿に走り寄り、足首にクオレ・ディ・レオーネの刃やいばを叩たたき込んだ。

憎悪と絶望の言霊を宿した魔剣は、無警戒だった巨猿の毛皮を薙なぐ。

青い鮮血がほとばしった。

じろり。足下の邪じゃ魔ま者ものに、凶暴な視線が向けられる。からかうように、エリカはちょこんと突きを放った。巨猿の足をさらに抉えぐる。

ガアアアアァァァァァッ！　エリカに報復しようと目を血走らせる。

このときリリアナが跳ちよう躍やくした。燕つばめのごときの身軽さで巨猿の膝ひざに飛び、そこを足場にふたたび跳躍。優ゆう雅がに宙を舞いながら、リリアナは空中でイル・マエストロを振るった。巨猿の左目に、薙刀となった匠たくみの魔剣が突き込まれる。

眼球を貫いた。グアアアアアァァァァンン!!

大絶叫。巨猿の残った片目が憎悪と憤ふん怒ぬで大いに濁にごる。

エリカと着地を決めたリリアナは、さっと身を翻ひるがえし、走り出した。とりあえず近くの木立のなかへ入ってから、本格的に疾しつ走そうをはじめる。

金髪と銀髪の騎士を追って、手負いの巨猿も木々の間に分け入っていった。

誰かが治癒の魔術をかけてくれたらしい。痛みがだいぶおさまっていた。

硬直も解けたようだ。目覚めた護堂は車内を見回した。隣に祐理がいる。車のドアにもたれかかり、ハァハァと息を荒らげていた。他には誰もいない——否。

窓の外に仲間のひとりを発見した。

日本刀を携たずさえた清秋院恵那が、巨猿を相手に立ち回りをしていた。

　巨猿が長大な腕を振り下ろす。さっと跳躍して、恵那が避ける。

　媛巫女が着地したのは巨猿の腕の上。そのまま駆け上がる。

　それこそ猿ましらのような軽けい捷しようさで腕の上を走り、恵那は巨猿の肩にまで到達した。刀を振るう。狙いはおそらく、大ザルの頸けい動どう脈みやく。

　このとき横殴りの突風が恵那を叩たたき、巨猿の肩から叩き落とした。

　偶然に吹いたものではない。神獣の霊力が呼んだ聖なる風だ。とんぼを切って着地する太刀の媛巫女。彼女を薙ぎ倒そうと、さらに風がうなる。

　よほど強いらしく、護堂たちが乗る車の窓はガタガタと震えていた。

「音に聞く、鼓つづみヶが滝たきをうち見れば……ただ山川のなるにぞありける——！」

　だが、恵那も言霊を叫んだ。彼女の周囲が無風になったようだ。

　スサノオの神力だ！　恵那の守護神は暴風暴雨の神、支配の神、鋼はがねの神。多彩な神力を所有する大神なのだ。今度は恵那が風を操る番だった。

　風がうなり、鋭さを増し、無数の刃となって巨猿を切り裂く。

　霊れい猴こうが苦く悶もんの咆ほう哮こうをあげる。だが、切り刻んではいても、致命傷ではない。

　人体をカッターで苛さいなむようなものだ。的確に急所を狙ねらわなくては、痛打にならない。数十以上の裂傷を負いながら、巨猿は恵那めがけて拳こぶしを打ち込んだ。

　シンプルな打ち下ろしのストレート。恵那はぎりぎりかわした。

　一見、互角。だが圧倒的にウェイトで上回る方が有利なのは明らか。それに、恵那の動きに精せい彩さいがない。神がかりを連続使用したせいで消耗しているのだ！

　加勢しようと護堂は外に出た。しかし、よろけて膝をついてしまう。

　そこで巨猿が大きく息を吐き出した。吐と息いきは圧縮された空気となって、恵那を襲う。

「ああああッ！」

　大きく吹き飛び、地面に叩きつけられて、太刀の媛巫女は悲鳴をあげた。

　闊かつ達たつにして快活な少女らしからぬ、切迫した声だった。恵那は刀を杖つえに、震える足で立ち上がろうとする。それを見た瞬間、護堂は気づいた。

　ウルスラグナ第六の化身『少年』が使用可能になっている――！

「な、何で急に!?」

「そのお力が目覚めるのは、あなたのために戦った者が大いなる危機に瀕ひんしたとき」

　いきなり祐理が、弱り切った声こわ音ねで訴えた。

　霊視による託たく宣せんか。愕がく然ぜんとする護堂へ、彼女は厳おごそかに通告する。

「東方の軍神より下か賜しされる加護は、死に抗あらがい、邪じやを祓はらうための力となりましょう。存分にご活用くださいませ…………」

　祐理はまたうなだれ、荒い息を吐き出す。

　恣し意い的に霊視を使った代だい償しようから、まだ回復していないのだ。そもそも放置したままで大丈夫なのか？　きちんとした治療が必要なのでは？

　感覚が研とぎ澄すまされる。今、『加護』が必要な者は何人いる？

　一、二、三、四……そんなにか。すこしの間にみんなそこまで追い込まれたのか。

護堂はせわしなくあえぐ祐理を見つめ、消耗した体で必死に巨猿と奮闘する恵那を見つめ、どこかで追い詰められているエリカとリリアナを想おもった。

——全員、こんなところで死なせたりはしない。

絶体絶命の窮きゅう地ち。敵は神の眷けん属ぞく。普通に考えたら助かるわけがない。でも助ける。死なせない。俺の勝負は、こんなところで終わったりはしない。その最後まで、おまえたちをつきあわせてやる。それが草薙護堂の望み、自己満足——。

ここで恵那が二度目のダウン。巨猿の大足で踏みつぶされそうになる。

護堂は迷わず飛び出した。『雄牛』のウルスラグナを使う。剛ごう力りきに剛力で対抗する化身。巨猿の大足を両腕で受け止める！

「お、王様……？」

「だあああああああああっ！」

恵那に見上げられながら、護堂は怪力を行使した。サルを思いっ切りぶん投げる。巨猿が空中できょとんとした顔を浮かべる。

さあ、どうやって仕留めよう？　そのとき、白き閃せん光こうが駆け抜けた。

さながら輝ける飛竜。光は巨猿の頭部を撃ち抜き、そのまま何ど処こかへ飛んでいく。まだ獲え物ものが残っていると言いたげな、直線的な軌道だった。

巨猿の肉体が砂となって崩れ去る。風に乗って運ばれていく。

スサノオの『風』を神がかりした恵那でさえ、巨猿を一撃で倒すことはできない。

護堂はある予感に駆られて、闇やみの奥を見つめた。光が発射されたとおぼしき辺り。そこには一匹の豹ひようがたたずんでいた。

　エリカとリリアナを追って、巨きよ猿えんが駆ける。

　大ザルたちは一〇メートルを上回る身長と、推定数十トンの体重を持つ。だが、大騎士たちに匹敵する機き敏びんさとスピード。振り切れない！

　かくして針葉樹や広葉樹が入り交じる山林のなかで、絶望的な戦いがはじまった。

　リリアナに片目をつぶされた巨猿は、スゥゥと息を吸い込んだ。

　ブワアッ！　一気に吐き出す。吐息は山林を蹂じゆう躙りんする暴風となった。木々の葉はまとめて吹き飛ばされ、枝々も付け根から折れる。

　大騎士たちも転倒させられた。立ち上がる間に、巨猿が間合いを詰める。

　エリカはクオレ・ディ・レオーネを、リリアナはイル・マエストロを構える。

　ダヴィデの言こと霊だまを宿した魔剣は神すら斬きり裂さく。しかし、みごと討ち取るには急所に刃やいばを突き立てねばならない。神獣相手にそれができるか——。

　巨猿が口を開く。喉のどの奥に紅あかい焔ほのおがともり、猛火が吐き出された。

「我が生まれし日よ、消え失せよ！」

「天上より主の顧かえりみられることもなく、光よ、これを照らすなかれ！」

　エリカとリリアナはとっさに耐火の対抗魔術を使った。

　焔や雷かみなりなど直接攻撃に利用しやすい自然現象には、それを防ぐ対抗魔術も充実している。もっとも、神々や竜が操るような焔を完全に消すことはできない。

　それでも、ふたりがかりで半分ほど火力を減らす。

　あとは大騎士たちのまとうケープの出番だ。バンディエラと呼ばれる衣ころもには、守護の魔力が秘められている。どうにか焔の熱を防いでくれた。

　だが巨猿は三度口を開いた。風、焔ときて、その次は紅い霧きり！

　霧に呑のまれた木々が急激に萎しおれだした。毒⁉

　エリカとリリアナは呪力を高め、魔性の毒に冒おかされるのを防ごうとする。だが無駄だった。喉と肺が内側から燃え上がるような、異様な熱さがふたりを襲う。

　さらに巨猿が右腕を振り上げた。

　ブゥンッ！　すさまじい勢いで叩きつけてくる。

　毒で弱った体にかわす余力はない。エリカはクオレ・ディ・レオーネを長方形型の大おお楯たてに変形させた。全身を覆おおいかくすほどのサイズである。

「くッ！」

　巨猿のロングフックを受け止めた大楯がひしゃげ、砕け散る。エリカも吹っ飛ばされ、広葉樹に叩きつけられた。だが、のびきった巨猿の右腕にリリアナが斬きりつける。

　薙なぎ刀なたとなったイル・マエストロにはダヴィデの言霊が宿っている。

　この一太刀は、巨猿の手首——動脈が走る部分を斬り裂いた。青い血がほとばしる。

　ガアアアアアアアアアッ！

　旺おう盛せいな戦意と生命力を撒まき散らすかのような、獣けものの雄お叫たけび。

　巨猿はリリアナめがけて、左手をハンマーのように振り下ろす！　まずい！

　毒霧で弱った青き騎士。飛ひ燕えんの身軽さもすでにないはず。

だが、リリアナはイル・マエストロをサルの手のひらに向けた。薙刀の刃がカウンターで突き刺さった。

　グアアアァァァァンン！　巨猿が泣きわめくように吠ほえる。

　だがリリアナの反撃はここまでだった。

　癇かん癪しやくを起こして、巨猿は右腕を振る。妖よう精せいのごとき肢し体たいが吹っ飛ばされた。

「く……はっ——！」

　地面を二転三転したリリアナは、血を吐きながら立ち上がろうとした。

　しかし、無理だった。彼女の青いケープも消失した。青地に黒のラインを入れた守護聖衣は、主の受けたダメージを軽減しきれなくなり、彼女の代わりに逝いってしまったのだ。

　エリカもリリアナも甚じん大だいに傷つき、まともに戦うこともままならない。

　このとき、思わぬ救いの手が駆け抜けた。

　天翔る白い閃光。白銀の竜にも似た光は、巨猿の側頭部をみごとに貫つらぬいた。

　あれだけ手て強ごわかった神獣が砂のように崩れ去っていく。救い主は誰だろう？　草薙護堂の権能であんな真ま似ねはできないから、やはり……。

　エリカはぼんやりと考えながら、地面にへたり込んだ。もう一歩も動けない。心身共に消耗し尽くしてしまった。隣でリリアナも同じようにしている。

　毒霧で体が蝕むしばまれたこともあって、ふたりはやがて意識を失った。

　山緑と紅葉、渓けい流りゆうが闇やみに呑み込まれた景色。

耳をすませば夜の森特有の物音が聞こえる。木々の梢こずえが鳴り、虫が啼なき、得体の知れない者どもがうごめく音だ。そのなかに一匹の豹ひようがひそんでいた。

「騎士たちについては心配要いらない。ここの大ザルを倒すついでに、彼女たちが担当している方も狙そ撃げきした。……手柄を横取りされたと言われなければいいのだがね」

諧かい謔ぎやくの味つけを加えながら、豹はささやいた。

美しいテノールによる気取った青年の声。やはり、と護堂はうなずいた。

「さて、改めて名乗る必要はあるかな、草薙護堂？」

豹が人間に変わる。漆しつ黒こくのケープと仮面を身につけた怪人に。

滑こつ稽けいなコスプレ……に見えないのは『本物』の迫力を持つせいだろうか。ジョン・プルートー・スミス。名前だけは何度も聞いていた男だった。

「いいや。その必要はない。……あんた、日本に来ていたんだな」

相手が年齢不詳のせいか、なぜか敬語を使う気にならない護堂だった。

さすがに自分よりは歳とし上うえだろうが……。だがアメリカ在住（国籍もそうかは謎なぞだ）のためか、黒衣の怪人も気にした様子はない。

「ああ。チャールトンが言っていなかったか？　私は怠なまけ者のように思われているのだがね。意外にも勤勉なのだよ」

笑いでくつくつと仮面を震わせながら、黒衣の怪人は言った。

「そのアニーさんは無事なのか？　怪我したみたいだけど」

「彼女はサルたちに襲われて負傷してね。治療のために避難させた。事件は最終局面——神々との対決という段階に入っている。助手の手助けはもう必要ないと、私は判断したのさ」

うなずく護堂に、ロスの英雄は告げた。

「さて、ひとつ報告しておこう。君たちが逃走したあと、私は斉せい天てん大たい聖せいとその従じゆう属ぞく神しん二柱と遭そう遇ぐうした。ひどいピンチだったが、どうにか切り抜けたよ」

三対一でよく逃げられたものだ。

賛嘆の視線を向ける護堂に、スミスは人の悪い笑い声を聞かせる。

「なに、戦うつもりはなかったからな。魔力で身を隠し、ひたすら逃げ回った」

スミスの姿がふたたび豹に戻る。黄色と茶の毛皮が闇に溶け込み、消え去った。

護堂は驚嘆した。国道沿いにぽつぽつと立つ街灯。その明かりで生じた影のなかから、豹となったスミスが出てきたのだ。

闇から闇、影から影を渡る魔力。なるほど、逃走にはおあつらえ向きの力だ。

超常の豹はすぐ黒衣の怪人に戻った。

「とはいえ、切り札をひとつ使う必要もあった。……まあ、鉄てつ壁ぺきの防御力を持つ敵に正面からぶつかるのも願い下げだ。出し惜しみはしなかったが」

どうやらスミスは、護堂と大聖の対決もチェックしていたようだ。

「《鋼》の連中は、鉄も溶かすような熱と焔に弱いらしいぞ。前に神様から聞いた」

「なるほど道理だ。いよいよとなったら、あれを使う必要があるわけか」

「当てがあるのか？」

「一応は。だが、君は大聖に囚とらわれた少女を救うつもりだと聞いた。その手を使うわけにはいかないはずだな？　そんな制限付き

で三柱の神と戦って、勝算はあるのか？」

「敵は三体……にはならないだろ。ただし、条件があるけど」

　答える護堂の目に、昆虫の複眼じみたバイザーが向けられた。

「条件？　興味深いな。聞かせてくれ給たまえ」

「あんたが俺に加勢しなかったら、だ。斉天大聖とは一対一で決着をつける。全部カタがつくまで、引っこんでいてもらえるか？」

　斉天大聖・孫そん悟ご空くうが絶大なパワーを誇示したのは二度。

　その状況を思い出せば、なんとなく原因の見当はつく。デタラメだとか割に合わないとか文句を言いたくなるが、敵は神。これくらいの理り不ふ尽じんはあってもおかしくない。

「……気づいていたか。なかなかめざとい」

　スミスが仮面を揺らして笑った。こいつも気づいていたか。

　あからさまに人を試ためすような雰ふん囲い気きだったので、そうだろうとは思っていたが。

「あんたは格好が変なだけで、まともな人かと思ってたけど、ちがうみたいだな。何ていうか、あまり性格がよくない。変人だ」

「残念ながら、君は人を見る目がないようだ」

　護堂の呆あきれた口ぶりに、スミスは気取りながら答えた。

「劇的な状況に然しかるべき衣装を用意するのは、洒落ウイットというものだ。私は変人などではない。いくつか譲れないこだわりを持つ、少々頑固なだけの男なのさ」

　こんな言い回しを流麗に使いこなす。

　芝居がかった男だと護堂は苦笑した。一度、彼が出演する舞台を見たくなってきた。

「もちろん、こだわりたい部分は他にもある。いいか、私はこう信じている。大いなる力を有する者の無関心は、意図的に為なす悪に

も等しい罪業であると！　大なる力を持つ者は大いなる責任、高貴なる義務もまた併あわせ持つ！」

　ジョン・プルートー・スミスがケープを翻ひるがえす。

　見る者の印象を計算した、いかにも舞台映ばえしそうな所作だった。

「チャールトンから聞いたが、君はいくつか私生活上の問題を抱えているそうだな」

「あ、あれはアニーさんが誤解しているだけで、特に騒ぐようなことじゃ」

「ごまかさずともいい。私は彼女よりも寛大な男だ。自由恋愛、大いに結構。重要なのは君が、複数の女を愛することにかまけて自みずからの責任を放棄したりせず、無関心の悪習にも染まっていないという事実だ。神との戦いの陣頭に立つ事実がそれを証明している」

　黒衣仮面の魔王。饒じよう舌ぜつな生ける伝説。

　世にふたりといない青年は、革手袋で覆われた右腕を差し出した。

「草くさ薙なぎ護ご堂どう、君はジョン・プルートー・スミスが盟めい友ゆうとするにあたって、さしたる障しよう碍がいも持たぬ少年のようだ。君の要請どおり、私はしばらく静観するとしよう。もちろん、私にふさわしい見せ場ができたときは、遠慮なく出しゃばらせてもらうつもりだがな！」

　もちろん否やはない。こちらも右手を出し、握手を交わす。

　スミスの手が思ったよりもやさしい感触だったので、護堂はひそかに驚いた。

　握手のあと、スミスの魔術で大騎士たちの居場所を突き止めてもらった。

　案内してくれと護ご堂どうが頼むと、スミスはパチリと指を鳴らした。

　革手袋をしているくせに、きれいな音だった。変な特技があるヤツ……と思ってから三〇秒ほど。バサリ。重いものを放り出す音がした。

　振り向くと、エリカとリリアナの体が地面に横たわっていた。

　意識もはっきりしないようだ。まるで病魔と闘たたかうように、せわしなくあえいでいる。

「アストラル界の妖よう精せいたちに頼んで、連れてきてもらった。……どうやら毒にやられたようだな。君のために戦った愛人たちをねぎらってやるといい」

「当たり前だ！　……けど、こいつらは愛人とかじゃなくてだな」

「なるほど。外聞が悪いので、普段はべつの呼び方をしておくわけだ。若いくせにいろいろと小知恵のまわる男だな！」

　からかうように言って、ジョン・プルートー・スミスは闇やみへ歩いていった。

　また豹ひように変わり、消え失せる。おそろしく強烈な男だったが、ここで感かん慨がいにふける余裕はまだない。草くさ薙なぎ護堂にはまだ、やるべきことが残っている。

　傷ついたエリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャール。

　すこし離れたところには、力尽きてうなだれている清せい秋しゆう院いん恵え那なと、いまだ意識のはっきりしない万ま里り谷や祐ゆ理りもいる。

　改めて護堂は『少年』の化身が使える確信を得ていた。

　東方の軍神ウルスラグナは英雄として地上に降こう臨りんするとき、輝く一五歳の少年に化身するという。幽世かくりよで倒れたエリカをこの化身で救った。今度もきっと役立ってくれるはず。

……だが、あれを使う＝イコール全員とあの儀式を行うということ！

やはりまずい。しかし、やらねば女の子たちを楽にさせてやれない！　護堂は彼女たちを助けたいと心の底から思った。不ふ甲が斐いない自分への怒りもこみ上げてきた。

こうなったら、なるようになれだ！　半分ヤケになって『少年』を使った。

逡しゆん巡じゆんや気き後おくれが消えていく。

穏やかな水面のごとく、心が澄み切っていく。

こういう気持ちを明めい鏡きよう止し水すいというのかもしれない。己を取り巻く全てが単純だった。

俺は何をつまらないことで迷っていたのだ？　前に自分で言ったではないか。迷うまでもない。全員を助ければいいだけ。

このときエリカが身を起こした。『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』には似つかわしくない、弱り切った動き。

しかし、これは草薙護堂のために戦った結果なのだ。

「……護堂、あの『加護』をまた使うのね？　それもみんなに？」

「ああ。必要なことだからな」

エリカは弱っているくせにツンと顔を背そむけ、拗すねた表情になった。

「何だよ、ずいぶん機き嫌げん悪そうじゃないか？」

「護堂とあれをするのはわたしだけ……わたしだけがあなたの力をこの身に宿らせるようにしないとって、ないしょで考えてたのに。あなたったら、また勝手にみんなを巻き込んで……。それにわたし、許可なく恵那さんを愛人にしないでって言ったわよね？」

「べつに、あれもこれもおまえの許可をもらう必要はないだろ」

わざとそっけなく言う。エリカはそっぽを向いたままだ。

「わたしは草薙護堂の愛人で未来の第一夫人、そして騎士でもある女よ。その程度の特権があって然しかるべきだわ。護堂の方こそ、もっとわたしを尊重して頂ちよう戴だい」

「尊重だって？」

「ええ。あなたがサルデーニャでカンピオーネとなって以来、ずっとそばにいたわ。時には結社からの指令に背そむいてまで。いつもあなたを守ってきたし、必要があれば純潔まで捧ささげたわ。なのに護堂ときたら、ずっと煮え切らないし、他の女とたいして扱いが変わらないし」

　エリカが怒り顔で愚ぐ痴ちをぶちまける。珍しい。

　華麗に振る舞いたがる彼女のことだから、ずっと溜め込んでいたのだろう。

　護堂は苦笑した。こういうエリカが可愛かわいかった。同い歳どしとは思えぬほど器量の大きな少女が、余裕をかなぐり捨てている。

　これだけ鬱うつ憤ぷんがあったくせに、そぶりも見せないとは。素直じゃないヤツだ。

「護堂、もっとわたしの話を真剣に——ん、んんっ」

　面倒だったので、エリカのあごをつまんでキスをした。

　彼女は唇くちびるを合わせながらジタバタしたが、本気ではない。腕力は向こうの方が強いのだ。本気だったらすぐに振り払われる。

　やがておとなしくなったエリカは、護堂の唇を貪むさぼるように味わいだした。

「……やっぱり『少年』を使ったときはいつもとちがうわね。こんな意地悪をして……」

「たいしてちがわないぞ。普段思ってても言えないことを、素直に話しただけだ」

　うっとりとした目つきのエリカにささやきながら、作業する。

　カンピオーネの呪じゅ力りょくを練り上げ、精せい錬れんし、聖なる軍神の『加護』と成す。

　キスを通して、目の前の少女に伝えていく。『少年』の化身には、対象へ口移しに『加護』をあたえる能力がある。授かった者は、しばらくカンピオーネと同等の頑強さを得る。呪力や霊力も爆発的にパワーアップする。

　しかし、受け渡し時に強烈な苦痛を味わわせてしまう。前回、あれだけ苦しませたのだ。すこしずつ送り込んでいく。「あ……」と小さくエリカがあえぐ。

「大体、おまえは前に誓っただろう。世界が滅ぶときまで俺のそばにいるって……。だったら、つまらないことでぐちぐち言うな」

「つまらなくないわ。あなたの一番であることは、わたしにはとても大切なことなのよ」

　何度もキスを繰り返しながら、ふたりはささやき合う。

「仲間に順番をつけるのは、俺のやり方じゃない。大切なのは誰がどのポジションをやるかだろ？　……まあ、おまえがどうしてもって望むなら、言ってやってもいいけど。おまえがいちばん大切なヤツだって。でも、おまえはそれで満足なのか？」

「……それはエリカ・ブランデッリのやり方じゃないわね」

　エリカの耳たぶにキスしながら言うと、誰よりも華麗な少女はあえぎながら答えた。

「おまえはどうせ、黙っていたってエースか四番に収まっているヤツだよ」

「そこは女王とか言って欲しいわね。野球なんてマイナースポーツ、よく知らないもの」

　ようやくエリカらしい言い回しが戻ってきた。

「護堂……もっと激しくしてみて。二度目のせいか、前よりつらくないの。あなたの力をもっと受け止めたい。わたしのいちばん深い場所に、わたしを守るあなたの『加護』を身ごもらせて欲しい。だから早く……」

「いいや。悪いけど、それはもうすこしあとだ」

　情熱的に訴える金髪の美少女に、護堂はかぶりを振った。

　エリカが落ち着いたのなら、他の女の子を見てやりたい。媛ひめ巫み女こたちは多分、騎士たちよりも状態がよくない。

「うん、もう……。いいけど、早くわたしの相手をして頂戴ね。わたし、自分の全すべてを使って護堂と通じ合いたいの」

　ちゅっとついばむようにキスしてから、ようやくエリカは身を離してくれた。

　改めて護堂は、並んで横たわる媛巫女たちを見た。

　神がかりによって消耗し尽くした恵那は、息も絶え絶えの状態だった。祐理の方もかんばしくない。自みずから望んで霊視を行った結果、彼女の脳と精神に多大な負担がかかったのだと、『少年』の力が教えてくれる。

　護堂は本格的にウルスラグナの化身を使いはじめた。

　精神を集中させ、臍せい下か丹たん田でんの呪力を守護救済の『加護』へと精錬させる。

　まず、太刀の媛巫女のそばで腰を落とした。

「だいぶ参っているようだな、清秋院」

「う、うん。ゴメン、これじゃあ王様の力になれないね……」

　護堂の呼びかけに、恵那がかろうじてという様子で答える。

「バカ言うな。もう十分、俺のためにがんばってくれただろ。今度は俺がおまえに力をくれてやる。でもな、これはただの力じゃない。おまえが——清秋院恵那が俺といっしょに地獄の底まで相乗りする覚悟がなければ、分けてやれないものなんだ」

　黒髪の巫み女この肩に手をかけながら言う。

「おまえが生きている間も死んだあとも、どんな神様より俺を優先させるなら、神にも悪魔にも運命にも、決しておまえを渡しはしな

い。おまえを俺のために生きさせてやる」

　選ばれし媛巫女たる恵那に、本道を捨ててでも俺を取れと。理り不ふ尽じんな要求をする。

「もしそうするなら、そのために必要な力をくれてやる。俺の仲間にしてやる。どうだ？」

　一生大切にすると誓う。必ず幸福にすると約束する。

　そんな真ま似ねは、やさしいだけしか能のないヤツらがすればいい。俺はちがう。王のために生き、王のために死す。呪のろいのような生を押しつける。

　神を殺あやめる者のそばにいるべきは、そういう生き方を受容できる人間だけなのだ。

「うん。恵那の剣も、力も、全部王様のために使うって誓う！　だから、エリカさんと同じように扱って！　王様のものにしてよ！」

　即答だった。清秋院恵那は、やはりエリカがライバルと見なす少女だった。

　熱に浮かされたように訴えながら、しがみついてくる。

「きちんとした奥さんとかでなくてもいいから、ずっとおそばにおいてね？　恵那は日陰の女でもかまわないし、実家にも文句は言わせないから……」

「バカ。そういうことは二度と言うな」

　護堂はちらりとエリカの方を見ながら言った。

　自称第一夫人候補は『好きにしたらいいわ』とばかりに肩をすくめていた。

「俺は仲間に順位をつけるのは好きじゃない。都合のいい女でいいとか絶対に言うなよ」

「う、うんっ。わかったよ、王様――んっ」

　いつまでも話しているわけにはいかない。護堂は恵那の唇を強引

にふさいだ。

　奔ほん放ぽうな自然児は、目を白黒させて受け入れた。

　こういう方面には祐理と同じくらい疎うといようだ。護堂は彼女のなかに舌を挿さし入れた。初めての感触にびっくりしたらしい。恵那の体が固まった。かまわず襲撃する。

　舌をなぶり、歯を舐なめ、唇を唇でなぞる。

　こうやって恵那との間に呪術の道——『加護』を伝えるための経路を作るのだ。

「あ、ああっ」

「痛むか、清秋院？　もっと弱くした方がいいか？」

「だ、大丈夫……っ。我が慢まんできるよ。で、でも、ちょっと怖い……」

　訴えながら、恵那が唇を開いた。

　驚いた。護堂の口のなかに、彼女から舌を挿し込んできた。

　やわらかな、固い部分をまったく持たない部位がおずおずと侵入してくる。護堂はそれを迎え撃ち、押さえ込み、からませ、睦むつみ合った。

「怖い、けど、絶対耐えてみせるから、恵那を好きなようにして！　恵那は王様の女なんだもの……ちゃんとお務めをはたさなきゃいけないんだもの……！」

　ひしと抱きつきながら、熱い接せつ吻ぷんをぎこちなく繰り返す恵那が愛いとおしかった。そして、思うさま蹂じゆう躙りんしたいという欲求が高まってきた。

　護堂はウルスラグナの『加護』をすこし、恵那の臍下丹田めがけて送り込んだ。

「あ……ああ——ッ!?」

　恵那の唇が短く絶叫し、護堂の唇から離れる。

　しかし、それもほんの十数秒。すぐに太た刀ちの媛ひめ巫み女こは主との接吻を求めてきた。

「こ、これで恵那は王様の女なんだよね？　エリカさんにもリリアナさんにも……祐理にも負けない、一人前の愛人……だよね⁉　もっと――もっと王様の力を感じさせて！」

　と、護堂の口を吸う。情熱的に、力の限り吸う。

　そんなやせ我が慢まんとわがままを、護堂は鷹おう揚ように受け止めた。マイペースなくせにこういうところでは意地を張る。そこが妙におかしく、愛おしかった。

「王様のなかに天叢雲あまのむらくもを感じる。やっぱりそこに眠ってたんだね。ふふっ、あの子、使ってもらえなくてイライラしてるよ。……ねえ、恵那はすこしよくなったから、そろそろ祐理もどうにかしてあげて……お願い……」

「言われなくても、そのつもりだ」

　護堂が言うと、恵那はすぐそばで横たわる媛巫女仲間に手を伸ばした。無理な霊視でダメージを受けた彼女の手に重ねる。祐理はまだ正気ではなく、朦もう朧ろうとしていた。

　恵那はよろよろと身を起こし、幼なじみの体も抱え起こす。

「王様……早くこの子も――」

　背後から祐理を抱きすくめて、恵那がうながす。媛巫女ふたりの美び貌ぼうが並ぶ。

　祐理はすでに永遠の従属を誓った身――改めて誓約を迫る必要はない。護堂は無造作に顔を近づけると、なかば意識のない祐理の唇を奪った。

　すこし強めに『加護』を送り込む。びくんと祐理の肢し体たいがのけぞった。

「あ……ご、護堂さんっ？　それに恵那さんも？」

　意識がはっきりしたようだ。唇から問いかけと共に吐息が洩もれる。それを己の唇でふさいでから、護堂は祐理の耳元にささやきか

けた。

「おまえを俺のものにする。いやじゃないな？」

「いっしょに王様の女になろう、祐理？　ちょっと苦しいけど、我慢してさ」

「は……はい……。もう、覚悟はできております。お好きになさいませ」

　ほてった体を護堂の前に開く祐理。

　恵那に支えられながら、生きつ粋すいの大やまと和なでし撫子こである少女はその身をゆだねてきた。

「どうだ万ま里り谷や？　苦しくないか？」

　幾度もキスを繰り返し、舌をからめ、唾だ液えきを交換し合う。

　初めてのときはぎこちなかった祐理も、すっかり慣れたようだ。

　エリカのような奔ほん放ぽうさはないが、ひたむきに護堂の動きに応こたえ、まめまめしく迎え入れようとしてくれる。ふたりは呪術のつながりで結ばれていった。

　そろそろか。護堂は呪力を『加護』に精せい錬れんし、祐理の奥深くへと注ぎ込んだ。

「————!?」

　護堂と唇を合わせていた祐理が、びくんと身を震わせた。

「すこし抑えた方がいいか？」

　相当に痛んでいるはずだ。しかし、麗うるわしい媛巫女はかぶりを振った。

「い、いいえ。痛くても大丈夫……耐えてみせます。あ、あなたの御力を、お情けをいただかせてください。私の体で、あなたを受け止めてみせます」

　潤うるむ瞳ひとみで祐理は訴え、護堂の唇を包み込むように接吻する。

粘ねん膜まくと粘膜が密着する感触が、おそろしく蠱こ惑わく的てきだ。護堂は大いに昂たかぶった。

「そ、それに、ずいぶんと意識がはっきりしてまいりました……。あなたの御加護のおかげです。お願いですから、もっと私に——」

涙ぐみ、悶もだえながら、けなげに言ってくれる。

気丈な少女が愛おしくなり、護堂は唇をずらして頬ほおに口づけした。

「お、王様……恵那の方にも、お願い……。恵那もずっと王様といる。だから——」

護堂の唇に、恵那が自分の唇を強く押しつけてくる。

不器用な求愛のしぐさ。奔ほん放ぽうな自然児だが、こういう方面ではいつのまにか祐理と差をつけられてしまったようだ。

しかし、その不器用さも愛おしい。護堂は彼女にも『加護』を送り込んだ。

「————んんっ!?」

恵那がうめく。やはり、相当な苦痛なのだろう。

「し、しっかりしてください、恵那さん……私もいっしょです」

恵那は痛みのせいで目を大きく見開いていた。その手を祐理が握りしめる。そのまま寄り添うように抱きしめる。

「う、うん。ふ、ふたりで王様の女になるんだものね。……あ、わかるよ。恵那は今、王様とすごく深いところでつながってる。天あまの 叢むら 雲くもの 劔つるぎ——あの刀とも、また通じ合える。……王様、天叢雲が言ってる。斉せい天てん大たい聖せいがいかなる神か、今こそ明らかにするときだって」

目に涙を浮かべながら、恵那が訴えた。

「化外の民たみをまつろわす鋼はがねの神族——その一柱でもある天叢雲が、大聖の神格を知る限り伝えようとしてくれている。祐理、いっしょに王様に教えてあげよう。恵那たちの旦だん那な様

に、神を斬きり裂さくための言こと霊だまをふたりで捧ささげよう！」

「はい。ふたりで護堂さんのために、力を——剣の刃を……！」

　媛巫女たちが唇を寄せてきた。それを迎え入れる護堂。

　祐理と恵那、ふたりを相手に接吻を交わす。三人の唇がひとつになり、溶け合わさる。

「斉天大聖・孫そん悟ご空くうさまは石より産まれし神しん猴こう。ここでいう『石』とはすなわち鉱こう石せき」

「鬧とう天てん宮きゆう——天界の宮殿で狼ろう藉ぜきを尽くした大聖は、顕けん聖せい二じ郎ろう真しん君くんによって捕らえられ、生きながら八はつ卦け炉ろに放り込まれるんだけど」

「四九日もの間、炉の焔で灼やかれても大聖さまは亡くなられず、新生を遂とげたのです」

「鋼の石より産まれた英雄を炉で灼き、打ち、鍛きたえ、仕上げる。これこそ大聖が《鋼》の剣神であると証する神話なんだ」

「今の世に伝えられる『西さい遊ゆう記き』は明みん代だいの小説本を原典としております。しかし、もともとは古き中国の、そして大陸の東西に散っていった民族が口伝えに遺のこしてきた伝承なのです」

　今、舌をからめている相手は祐理か、それとも恵那なのか。判然としない。

　それほど三人は見境みさかいなしに、それぞれを求め合っていた。

　護堂は祐理の唇を味わいながら、恵那の唇をもむさぼる。祐理と恵那がふたり同時に護堂の舌を探り、吸いつく。そうする祐理と恵那同士で唇を合わせてしまい、ふたりで護堂の唾だ液えきをすすり取ってしまう。

「ずるいわ、祐理と恵那さんばかり……。どうしてわたしをほったらかしにするの？」

　おざなりにしてしまったエリカに、後ろから抱きつかれた。

　護堂の背中に豊かな胸のふくらみが密着し、その存在を強烈にアピールする。首をよじって振り向いたら、エリカのキスで迎え撃たれた。

　口のなかの全てを吸い尽くされそうなほど濃厚で強烈な接吻。

　キスという言葉ではその淫いん靡びさを説明しきれないような交わりであった。

「護堂……そろそろいいでしょう？　あなたの加護を最後まで頂ちよう戴だい。わたしの方はもういつでも受け容いれられるわ。あまりじらさないで……！」

「エ、エリカさんだけなんてずるいよ。恵那も祐理も大丈夫なんだから、こっちだって！」

「護堂さん……どうか、あなたのご寵ちよう愛あいを私たちに――」

　三人の少女たちに唇を押しつけられながら、護堂は求めに応こたえた。

　ウルスラグナの『加護』を一気に高め、皆に振りまく。聖なる軍神の権能で、少女たちをいちどきに貫つらぬき、掌しよう握あくする。

「あ、ああああああっ。護堂さん！」

「王様、王様！　恵那は……恵那はこれで本当に、王様のものに――！」

「ま、またあなたの力がわたしのなかを満たしていくわ……大丈夫、前よりもつらくない。だからもっと、もっと強くあなたを感じさせて、お願い！」

　三人の少女たち――それぞれの臍せい下か丹たん田でんに『加護』が届いた。

　その感触に護堂がうなずきながら、もうひとり少女がいることに思い至った。

「エ、エリカ……万里谷祐理……清秋院恵那……み、みんな何という大胆な――はしたない真ま似ねをしているんだ!?　そ、そんなことを騎士として認めるわけには……」

　繰り広げられる儀式の気配で目覚めたらしい。

　リリアナ・クラニチャールが愕がく然ぜんとつぶやき、護堂たちの行為に見入っていた。

　毒に冒おかされているせいか、姿勢はわずかに半身を起こしただけ。視線も言葉も弱々しい。そんな銀髪の騎士に、護堂は手をさしのべた。

「リリアナも俺の騎士として、比ひ翼よくの鳥に、連れん理りの枝になると誓ったな？　だったら、こっちに来い。おまえにも、その立場にふさわしいものをくれてやる」

「ふ、ふさわしいもの!?」

「勝利と力だ。……俺は人並みの幸せとか思い出とかをくれてやることはできない。でも、俺についてくる限り必ず勝利させてやる。そのために必要な力もくれてやるし、俺の心をくれてやってもかまわない」

　護堂は体を押しつけ、全てを捧げている少女たちに目を向けた。

　皆が穏やかな微笑を浮かべていた。特に満ち足りた様子のエリカに目配せする。

「まあ、こいつみたいな物好きもいるから、そのうち結婚してみるのもいいかもな」

「し、しかし、わたしは騎士です。エリカのように愛欲に溺おぼれるわけには……。あなたの女性関係を管理するためにも、己おのれの視野を狭せばめるような行為に身を投じない方が――」

「リリィ、そんな肩かた肘ひじ張らなくてもいいのよ」

　つまらぬことで躊ちゆう躇ちよするリリアナへ、エリカがとろんとした表情のまま言った。

　それは要領の悪い旧友をフォローするための言葉だった。

「あなたは最良の騎士たらんとしているのでしょう？　だったら、わたしたちといっしょに儀式を受けなさい。今、草薙護堂に必要なのは神をも畏おそれぬ戦士。あなた、わたしや恵那さん、祐理に後おくれを取ったままでもいいの？　それでも第一の騎士と言い張れるの？」

「バカな！　わたしは誰にも後れを取るつもりはない！」

　リリアナが表情を険しくし、凛り々りしく言い切った。

「主が地獄へ赴おもむくというのなら、必ず最後までお供してみせる。バカにするな！」

「だったら早くこっちに来い。細かいことを気にするのは後まわしにしろ」

　護堂の叱しっ咤たで、ついにリリアナが近づいてきた。しかし、踏ん切りがつかないらしい。あと一、二歩というところで立ち止まる。

　そんな青き騎士を引き寄せたのは、恵那だった。

「ダメだよ、リリアナさん。王様がここまで言ってるんだから、素直にご寵ちよう愛あいを受けなきゃ」

「強制してはいけませんよ、恵那さん。こういうことは、ご本人のご意思が大切なのですから……。でもリリアナさん、私もみなさんもこうなったことを後悔してはおりません」

　祐理までやんわりと口添えした。桜のつぼみがほころぶように微笑んでいた。

「お、お待ちください、まだ心の準備が――んっ⁉」

　リリアナがまだ煮え切らなかったので、護堂はその口をキスで黙らせた。

「これから、かなりきつくなるぞ。覚悟しておけ」

　銀髪の少女は一瞬だけ怯おびえたが、こくりとうなずいた。

　体内で『加護』を精錬する。すこしずつリリアナの体内に送り込

んでいく。

「ん――ああああっ！」

　妖よう精せいのような美貌を苦痛で歪ゆがめながらの絶叫。

　護堂は、唇を通してゆっくりゆっくりと『加護』を送り込んだ。

「た、たしかにあなたの力強さが伝わってきます。で、ですがこれでは、皆とされていた行為とだいぶ勢いがちがうはずです」

「バカ、最初から強くすると苦しくなるぞ。みんな大変だったのを見ていなかったのか？」

「か、かまいませんっ。草薙護堂、どうかわたしの忠誠を試すと思って、ご遠慮はお捨てください！　第一の騎士がこんなところで後れをとるわけにはいきませんから……ッ」

　リリアナが痛みを堪こらえるためか、目をつぶりながら叫んだ。

　護堂は一瞬だけ青き騎士から目をそらし、エリカと視線を合わせた。やってもいいのか、だいぶ苦しそうだぞ？　でも、口で言ってわかる子じゃないし――。仕方ない。臍せい下か丹たん田でんへ向かう『加護』を加速させた。

「んっ、んん……あ、ああっ！」

　リリアナが悶もん絶ぜつしてしまった。護堂の口から口を離してしまう。

「ほら、言った通りじゃないか。ゆっくり進めていけばいいんだから、そんなに――ん!?」

　いきなり口をふさがれた。リリアナからのキスで唇を奪われたのだ。

　幾度も護堂の唇をついばみ、天使の羽根のようにやさしいキスを降らせてくる。

「い、いいんです。わたしはあなたの騎士ですから……この痛みに耐えることも、我が主への忠誠を示す行為。我が誉ほまれのひとつとなるのです」

せわしなく呼吸しながら、リリアナがつぶやく。

「エリカや他の女たちと轡くつわを並べながら、向こうよりも手心を加えられたとあっては、リリアナ・クラニチャールにとって一生の恥ち辱じよくとなるでしょう。だから、お願いです。わたしにもあなたのお情けをどうかご遠慮なく——。た、耐えてみせますから！」

しかし、言うほどそれがたやすくないのも事実。

どうしたものかと護堂が考えたとき、エリカがくすりと笑った。いつもの悪魔の微笑よりも、無邪気さがいくらか増している。小悪魔の笑顔だった。

「だったら護堂、さっき祐理と恵那さんたちにしたみたいに、わたしとリリィの面倒もいっしょに見て頂戴」

リリアナと護堂の間に自みずからの頭を割り込ませ、唇を押しつける。さっきよりもソフトな、唇を撫でるようなエリカのキスだった。

「おまえといっしょに？　ふたりともってことか？」

「ええ。それくらいできるでしょう？　わたしたちに順番をつけるのは嫌なのですものね。だったら、平等に愛して、平等に面倒を見てもらわないと」

悪魔の入れ知恵がどういう意味か、すぐに理解した。

護堂はリリアナの肩をつかみ、ぐっと引き寄せる。妖精めいた東欧系の美貌と、小悪魔めいたエリカの美貌が目の前に並ぶ。ここで恵那が口をはさんできた。

「そういう話なら、恵那たちだって無視しないでよ。ほら祐理もこっちに」

「あ、恵那さん、引っ張らないでください！　……もう、みなさんはしたないです。あまりこういうことを妄みだりにされるのは感心できませんが……」

恵那も護堂に抱きついてきた。あろうことか、祐理まで幼なじみに促され、いっしょにしがみついてくる。慎つつしみ深い大やまと

和なでし撫子こであるはずの媛巫女は、口では皆をたしなめながら、熱に浮かされたような瞳と顔で、護堂を誘うように見つめていた。

　護堂は四人の少女たちに顔を寄せ、次々と唇を奪っていった。

　エリカにキスし、リリアナの唇にもキスし、祐理と恵那も十分にかまってやる。

　銀髪の騎士を中心に、他の三人とも代わる代わる接吻をかわし、『加護』をあたえていく。これならリリアナのプライドを守りつつ、手心も加えられる。

「あ……んっ。草薙護堂、こ、こんなところを誰かに見られたら、その、困ります。騎士として、このように乱れた行為に耽ふけっていては——！」

「悪いな。おまえの王様はこういうこともする男なんだ」

　あえぐリリアナに、護堂は突き放すように言った。

「おまえたち、こんなヤツについてくると誓って後悔したか？」

「ふふっ。わたしはどこまでもあなたといっしょよ。あなたの覇道どうにおいては剣つるぎとなり楯たてとなり、王として君臨するのを補佐する右腕となってみせるわ。そんなことをエリカ・ブランデッリに訊きかないで」

「恵那だって。そういう人だから、王様はいつも恵那をドキドキさせてくれるんだし！」

「私はあなたがどのような大罪人になろうとも、ずっとおそばにいるだけです……」

　エリカがうそぶき、恵那が朗ほがらかに言い、祐理がしっとりと微笑ほほえむ。

　そして、ついにリリアナも自分の心に素直になった。

「わ、わたしもです、草薙護堂！　わたしたちは連理の枝、比翼の鳥。あなたが神殺しの宿業を全まつとうするおつもりなら、わたしもあなたの閨けい房ぼうに侍はべり、全てにおいて王を補佐し、お

仕えしてみせます。お望みでしたら、どんなはしたない、背徳的な行為だって――！」

　今のリリアナは凛り々りしい騎士でも、やや粗そ忽こつで家庭的な少女でもなかった。いつのまにか彼女は、妖精の美と幻想的な魅力を宿す『女』の表情を浮かべていた。

「騎士としては困りますが……わたし個人としては、そ、そういうあなたも時には好ましく思います。もうつまらぬことで迷いはしません――ッ」

　ここからは混こん沌とんたる情景だった。

　四人の唇を並べ、どれも節操なく味わい、堪たん能のうする。

　どの唇が誰のものか、誰と舌をからめ、誰の唾液を舐なめ取っているのかも判然としなくなった果てに儀式は終了し、聖なる軍神の加護は少女たちに授けられたのである。



第６章　神と神殺し、両雄矛を交えて決戦す

1

　神殺したちを取り逃がしてから数刻が過ぎた。

　夜もとっぷりと更ふけていたが、斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうは眠気とは無縁である。

「ちぇっ。あやつら、孫さまをその気にさせておいて逃げ出すとは、薄情な連中じゃ！」

　黄金の雲を呼び出し、男なん体たい山さんの頂いただきまでひとっ飛び。

　漆しつ黒こくの下界を見下ろしながら愚ぐ痴ちる。猪ちよ剛ごう鬣りようと深じん沙しや神しんはいない。派手に神力を使ったせいで、彫像に戻ってしまったのだ。

「かくなる上は、次こそは逃さぬよう布陣を整えてから再戦と洒落しやれ込むかね。彼奴きやつらを招きよせ、囲いこみ、心ゆくまで戦うには……」

　雲の上であぐらをかきながら、大聖はつぶやいた。

「やはり、我が威いを見せつけてやるのがいちばんじゃろうて。小僧の神殺しがご執しゆう心しんらしい娘っ子は我が腹のなか……向こうから出てくるに決まっておる。黒い衣装のヤツも来ればよし。来なければ改めておびき出せばよし」

　思案のわりに、大おお雑ざつ把ぱな答えにいきつく。

天下無ぶ頼らいの神しん猴こうたる彼は、細やかな知ち謀ぼうとは縁うすい闘神なのだ。

「くくく、この地はすでに我が領土。そろそろ外に打って出るのも悪くはないて」

つぶやきながら、斉天大聖は体毛をつまんで引っこ抜いた。

口にふくんで噛かみ砕き、ぷっと吹き出す。これを何十回も繰り返す。数十、数百、数千の毛が風に乗って飛んでいく。

「无む妄ぼうは元おおいに亨とおり、貞ただしきに利よろし。其それ正にあらざるときは禍わざわいなり！　天の下に雷行き、物事に无妄を与う。先王以もつて茂さかんに時に対し、万物を育やしなう！」

言こと霊だまを唱となえ、己の神力を分身に託す。

さあ、まずはこの仕掛けが地に満ちるのを待とう。そのうえで領土を広げて猴こう王おうの威を神殺しどもに示し、決闘の合図としよう。

果か報ほうは寝て待て。眠気はなかったが、大聖は雲の上でごろんと寝ころんだ。

一方、斉天大聖の神力で石の牢ろう獄ごくと化した東とう照しょう宮ぐう。

魔教教主をも幽ゆう閉へいした異常事態を解決すべく、深夜だというのに働く人々がいる。

この区画を封ふう鎖さした機動隊の面々。警察関係者。魔術的手法によって異変を解消しようとする術師たち。そして、正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいのメンバー――。

彼らの本部となる仮設テントが設けられたのは、東照宮の表参道である。

そこには対策チームの重じゆう鎮ちんたる三名が詰めていた。

「ああっ！　今も師し父ふが石のなかに閉じ込められ、身も心も凍こごえておられると思ったら、僕は悲しくて夜も眠れないッ。天よ、心あらば師父の代わりにこの弟子――陸りく鷹よう化かにこそ艱かん難なん辛しん苦くをあたえ給たまえ！　……おっと、僕のターンか。リバースカード、オープン。『ここがあの人のハウスね！』を使用。さらにコンボで『あんな女が奥さんなんて認めない！』だ」

　前半は大声で。後半はぼそっと周囲にのみ聞こえる声で。

　発言者は陸鷹化。携帯ゲーム機をタッチペンで操作しながらのひとり芝居であった。

「そいつを喰くらうのは勘かん弁べんだな。ぼくは『この泥棒猫、あの人に二度と近寄らないで！』で防御しよう。……ねえ陸りく少しよう侠きよう、今の寸劇に何か意味があるのかい？」

　やはり携帯ゲーム機をいじりながら、沙さ耶やの宮みや馨かおるは言った。

　深夜四時近くだが、身だしなみに隙すきはない。さわやかな白いジャケットと開かい襟きんシャツにコットンパンツ（すべて男物）を着ている。

「もちろんあるさ。……うちの師父は異常なんだ。石牢に閉じ込められながら、地獄耳で外の音を聞いていても不思議じゃない。これもアリバイ作りの一環だよ」

「そうかもしれないと思えてしまうところがすさまじい話ですね……」

　陸鷹化のコメントに応じたのは、甘あま粕かす冬とう馬までである。

　いつもの背広姿。ただしセーターにカーディガン、袢はん纏てんまで着て、マスク着用。防寒および対風か邪ぜ装備で固めている。

「げふんっ（ずずーっと鼻をすする音）生徒会バトルマンガで一三人衆になってもおかしくないアブノーマルですからねー、あの方……それはそうと、私のターンですか。ここはエンチャント『警察介入：レベル３』を発動しておきましょう」

「くっ……！　ストーカー属性のカードは能力値が三分の一になるだと!?」

「陸さんのカードはこれで全て雑ざ魚こになります。残る敵は馨さんのみですが……」

「おっと甘粕さん、ぼくの手札には場に出ている全てのカードを自殺させる『人間失格』がある……と言ったら信じるかい？」

「さて、どうでしょうね。馨さんはすでに二枚、あれを使用されている。いくらあなたでも、諸もろ刃はの剣つるぎを三枚も仕込んでおくとは思えないのですが……げふんげふん！」

「ふふふ、ぼくを見くびってもらっては困るな。……でも、今のところは『わたしのお腹なかにはあの人の子供がいるの！』で陸少佚に追い打ちをかけておこう」

「僕を狙い撃ちか!?　舐めるな、全てのストーカーを生いけ贄にえに捧ささげて『ミザリー』召しよう喚かんだ！」

　携帯ゲーム機の通信機能を使った三つどもえの対戦。



　戦い（暇ひまつぶしともいう）が白熱する傍かたわらでは、まじめに働く人々もいる。

「うーん……タメね。この石せき化か、並の方術じゃ解けそうにないネ！」

「あいやー。教主さま、生き埋めになったままか!?」

　濁だく音おんを上う手まく発音できない独特のイントネーション。

　陸鷹化が横よこ浜はま、新しん宿じゆく、池いけ袋ぶくろ、秋あき葉は原ばらなどから呼んだ香ホン港コン陸りく家けの舎しや弟ていたちが、救出活動に従事している。方術の専門家だという七、八名の男たちだった。

「本当なら、委員会の縄なわ張ばりに国外の部外者を入れるなんて言ごん語ご道どう断だんなんですけどねー」

「いいじゃないか。ひとつ借りってことにしておくぜ？」

「香港陸家の御おん曹ぞう司しにそう言われたら渡りに船だけど、実際のところはどうなんだい？　ぼくには無駄な努力に思えて仕方ないよ」

「今さら何言ってんだい。あんなのムダもムダ、大ムダに決まってるだろ。ありゃー人間の方術でいえば奇き門もん遁とん甲こうの一種らしいけど、神様が仕掛けたもんだぜ。うちの舎弟しやていごときでどうにかできるものか。はなから期待なんざしちゃいないよ」

「うわー……この人、責任者のくせに自分で言っちゃいましたよ……」

「駄目なら駄目でもともと、委員会の人材を救出作業以外に回せるし、ぼくらとしても言うことはないけどね。ただ、今回の事件では人じん海かい戦術に意味がないし――」

　馨はタッチペンを止めた。胸騒ぎを覚えたのだ。

　媛巫女で最も霊視力にすぐれるのは万ま里り谷や祐ゆ理り。しかし、実は沙耶宮馨も同じ能力を備えている。第一人者ほどではない

が、それなりに長じていた。

「げふんッ。どうしました、馨さん？」

「ちょっと、いやーな感じがしてね。何かよからぬことが起きそうな」

「そいつは聞き捨てなりませんな。念のため小細工をしておきますか。げふんっ」

　甘粕はポケットナイフを取り出し、石化した地面にガリガリ漢字を刻きざむ。

　その直後、馨は巨大な呪力が駆け抜けるのを感じた。

　おそろしく微び細さいな何か——神の力を宿した何かが、風に乗って飛んでいく！　しかも、すぐ近くで変化が生じていた。

　香港陸家の方術家たち。夜中だというのに警備に当たっていた警察関係者たち。

　彼らの姿がサルになっていた。

　ニホンザル、テナガザル、チンパンジー、オランウータンなど、雑多な種類の猿えん猴こうに。しかも、爪つめや牙きばが異様に長かったり、不気味なほど体格が大きかったりと、やけに凶暴そうな印象だった。

　サルたちは正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいのふたりと陸りく家け御おん曹ぞう司しを見るなり、殺気をみなぎらせた！

　彼らが猛たけりにまかせて襲いかかってくる寸前——

「吾われ奉たてまつる九きゅう天てん玄げん女によ、急きゅう急きゅう如によ律りつ令りよう！」

　口こう訣けつを唱えたのは甘あま粕かすである。大地に刻まれた『変へん化げ六ろく陰いん』の字が呪力を放つ。

　彼は地面に手を当てるなり、そこをめくりあげた。まるで布でも置いてあったかのように、石の地面はぺろんとめくられ、カーテンよろしく三人におおいかぶさる。

途端に彼らの姿は消え失せた。否、消えたように見せかけた。

「けふんっ。これも奇門遁甲……ま、私程度の手て慰なぐさみですがね」

「いやいや。いつもどおり役に立ってくれたよ」

部下の功績を馨は誉ほめそやした。

サルたちは三人を見失っていた。きょろきょろと辺りを見回し、匂においをかいで、行方ゆくえを追おうとしている。彼らのすぐ近くにいるというのに。

奇門遁甲——忍びの技として、日本にも伝来した中国呪術である。

身を隠し、消え失せ、一瞬にして遠方へ現れる。火か遁とん、水すい遁とん、土ど遁とんなどともいう。忍びの末まつ裔えいである甘粕にとっては、お家芸とも言える術だった。

「天あま津つ風かぜ、雲のかよひ路吹きとじよ……をとめの姿、しばし留とどめむ」

隠行の呪術に守られながら、馨は物見の術を使った。

視覚を空高くへ出張させ、鳥の視点から下界を俯ふ瞰かんする。欧州の魔女も似たような術を使えるが、あちらは視力自体は強化されない。

増幅された馨の視力は、日につ光こう市街の模様を望遠鏡のように見渡した。

夜明け前の静かな小都市。道行く人など滅めつ多たにいないはずの頃合。しかし、すっかり寝静まっているはずの家々から、のそのそと出てくる影を見た。

ドアや窓を器用に開け、あるいは乱暴に破って外へまろび出てきたのは全てサル。

まちがいなく斉せい天てん大たい聖せいの眷けん属ぞくに変化させられた元人間であろう。

闇は夜明け前が最も暗くなるという——。

その深き闇を妖あやかしのサルどもが徘はい徊かいする。滑こっ稽けいかつ不気味な情景だった。

馨は高みからの偵察を続けた。

ざっと眺めた限り、周辺の市街は全て斉天大聖の掌しよう握あく下かに落ちたようだ。

東とう武ぶ日光線の路線沿いを眺めてみる。線路と並行して大だい谷や川がわが流れ、ゴルフ場や緑豊かな公園なども設けられている。徳とく川がわ家いえ康やすの家か臣しん、松まつ平だいら信のぶ綱つなによって植林された杉並木と共に旧日光街道も延びている。その先には上かみ今いま市いち、下しも今いま市いちの駅があり——。

「……どうやら、ＪＲと東武線の日光近辺は斉天大聖の影響下にあるようだね。今市の辺りはおかしなことにはなっていない。時間の問題かもしれないけど」

馨は術をやめ、観測結果を報しらせた。

現在、日光入りしている正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいと関連機関のメンバーは三〇人前後。あとの人手は地元警察などから供出してもらった。

少数しか招集しなかったのは、この状態に陥おちいることを危き惧ぐしたからだ。

その代わり、選えりすぐったエージェントたちはサルに変化することもなく、各自の判断で効果的に行動してくれるだろう。懐ふところ刀がたなである甘粕冬馬のように。

しかし、その連中が総力を結集しても、神を前にしては蟷とう螂ろうの斧おのだ。

「今はまだ夜明け前ですからいいですけど、時間が経たつと厄やっ介かいですよ。この異変を揉もみ消すにはかなりの労力が必要になるでしょう」

「まったくだ。じゃあ、ぼくらはそっち方面の準備も進めるとしよ

うか」

　唯ゆい一いつ無む二にの切り札ジョーカーは、やはり草くさ薙なぎ護ご堂どう。魔王カンピオーネ。

　適材適所、無駄な努力はしないスマートさが身上の馨は、部下のコメントに軽く応じてみせた。そして、陸りく鷹よう化かが耳を澄ませているのに気がついた。

「陸りく少しよう侠きよう、何か聞こえるのかい？」

「……ああ。時間の問題だとは思ってたけど、ようやくだ。あんたたちには聞こえないか？　石を割る音――ぶち砕き、引き裂いて、木こっ端ぱ微み塵じんにする音がしているぜ」

　陸鷹化のささやきに、正史編纂委員たちは顔を見合わせた。

　そんな物音、まったく聞き取れない。しかし、魔ま教きよう教きよう主しゆの直じき弟で子しは清せい秋しゆう院いん恵え那なに匹敵するほど鋭い五感を持つのかもしれない。

　いずれにしても、事件が佳か境きようを迎えたのはまちがいなさそうだった。

2

　夜明け近く。草くさ薙なぎ護ご堂どうを叩たたき起こしたのは沙さ耶やの宮みや馨かおるからの電話だった。

『という感じで、ついに下界の方も斉せい天てん大たい聖せいの脅きよう威いにさらされている次第です。それと、陸りく少しよう侠きようがちょっと面白いことを言っています。一応、お教えしておきましょう』

　緊急事態というわりに、平静な声での現状報告だった。

『では、こちらも立て込んでおりますので、またあとで』

「……ええと沙耶宮さん、それだけでいいんですか？」

　護堂は自分から訊たずねてしまった。『大聖に勝てるのか？』とか『そっちはどうなっているんだ？』とか、いろいろ言いたいこともありそうなものだが。

『どうぞ馨とお呼びください。ええ、ぼくはとっくにあなたに――護堂さんに下げ駄たを預けていますからね。今さらジタバタしませんよ。事態が切迫していることも、あなたなら当然ご理解していらっしゃるでしょう。急せかしたところで意味なんてありません』

　さりげなくフレンドリーな呼び方に切り替えながら、馨は言った。

　信じた人間に全すべてを委ゆだね、じっくりと待つ。緊急時になかなかできることではない。沙耶宮馨は、繊せん細さいな美び貌ぼうに似合わぬ剛ごう胆たんさを持つようだ。

『そうそう。いつか護堂さんには、ぼくの悪だくみを聞いて欲しいと思っているんです。きっと楽しいですよ。そういうわけですから、おたがい無事に再会したいものですね』

　意味ありげな言葉を最後に、電話は切れた。

　いよいよ決着をつけるときが来たようだ。護堂はまわりを見回す。仲間の少女たちは、全員目を覚ましていた。今いるのはホテルのロビーである。

　神しん獣じゆうから逃れたあと、竜りゆう頭ずの滝たき近くのホテルにもぐり込んだのは数時間前。

　従業員も宿泊客もサルに変身して外に出たらしく、無人だった。結界の術で防備を固めてもらい、ここで休息することに決めた。決戦に備えて気力と体力を回復させるためだ。

　食事を摂とりシャワーを浴び、ロビーに寝具を運び込んだ。

　追撃に備えて、全員いっしょに眠ることにしたのだ。結局、数時間の仮眠しか取れなかったが、コンディションは悪くない。

　護堂はロビーのソファにすわり、皆に顔を向けた。するとエリカが隣に腰を下ろす。

寄り添うように、ではない。完全に密着し、体重を預けてくる。

エリカは珍しく覇は気きに乏とぼしい、蕩とろけるような表情で護堂を見つめていた。

いつものように戯たわむれ半分に愛あい撫ぶしたりはしない。おたがいの感触を確かめ合うようにただ体をくっつけるだけ。ある意味では普段以上に愛情あふれる行動だった。

次いで、祐ゆ理りと視線が合う。

容よう姿し端たん麗れいな媛ひめ巫み女こは、恥ずかしげに一瞬だけ目を伏せた。しかし、すぐにしっとりと微笑ほほえみかけてくる。隣にいるエリカなど目に入らないかのように陶とう然ぜんとしていた。そして、毅き然ぜんとした思し慕ぼのようなものが見受けられた。

いつもとはまた異なる美しさだ。つぼみがついに花開き、一箇の女として覚かく醒せいを遂とげたというような……。

恵え那なも今までと趣おもむきが異なっていた。

護堂を前にして、もじもじと落ち着かない感じだった。恥じらっている。護堂の視線をまともに受け止めかねている。その姿には得も言われぬ可か憐れんさがあった。

いつもの明朗快活、ざっくばらんな恵那ではない。

自らの性別に無む頓とん着ちやくであった彼女が、ついに女である己おのれに気づき、戸惑っているような。

そして、リリアナも態度がおかしかった。

女騎士らしい、凛り々りしく生き真ま面じ目めそうなところは変わらない。

しかし、表情や動作のはしばしに柔らかさが目立つ。清純な色香とでも呼びたくなるような瑞みず々みずしさも。護堂に向ける視線には、情愛の絆きずなで結ばれた者へのみ投げかける、共犯者めいた何かが秘められている。何だろう、これは？

いつかエリカが言っていた、ボディガード兼任の愛人めいた雰ふ

ん囲い気きではないか！

「ところで草薙護堂、先ほどの一件ですが……」

　不意にリリアナが言った。

　舌の上で素敵な思い出を反はん芻すうするような、うっとりとした口調だった。

「あの儀式では申し訳ありませんでした。つい興奮して取り乱してしまいました。じ、次回以降は冷静に、品位を持ってあなたを受け入れてみせます。第一の騎士たる者として必ず」

　いきなり誓約されて、護堂はのけぞった。

　例の儀式が終わった直後、明めい鏡きよう止し水すいの心持ちは消え去り、俺はどうしてあんな真ま似ねを——と、動揺が押し寄せてきた。それを今まで、無理やり押さえつけていたのに！

「み、みんなに伝えておきたいんだけどさッ。俺はあのとき、明らかに普通じゃなかったと思うんだ。きっとウルスラグナの権能が、俺を暴走させた結果じゃないかと——！」

「たしかに普通じゃなかったけど、暴走ではないと思うわ」

　溶けたアイスクリームのように甘い口調でエリカがささやいた。

　護堂の耳に唇くちびるを寄せて、睦むつ言ごとのように。

「何て言うのかしら？　いきなり人格が変わった感じでもなかったし、そう……今の護堂が何年か時を経へたら、あんな風に成熟していそうな立ち居振る舞いだったわよ」

「そうですね……。普通のときの護堂さんを改めて拝見しますと」

　祐理も思慮深げに言った。

　はしたない金髪美少女の振る舞いにも目くじらを立てない。護堂を見つめる瞳ひとみには確固たる何かが秘められており、それが彼女を揺らがせないのだと思わせられる。

「護堂さんは私たち——いえ、女性全般へ不自然に遠慮をされてい

る気がします。あのときはそういう思い切りのなさが一切なく、自然に振る舞われている感じでした」

「あー、なんかわかるな。恵那も男の子はちょっと慣れてないところあるしね」

　とてつもなくフランクなはずの媛巫女筆頭が、はにかみながら言った。

　口調がどことなく艶つやっぽい。いつもより微妙に女らしい。

「王様がこれから女の子に慣れていったら、多分ああなるんだよ。ふふっ、楽しみ」

「現時点ですでに怪物フエノメノであるというのに、まだ成長の余地が残されているのか……」

　リリアナが賛さん嘆たんの吐と息いきを洩もらした。

「さすがは我が主君と仰あおいだ御方。並の器量ではないな」

「あんなふうにわたしたちを手た折おったのだもの。責任を持って、最後まできちんと愛してもらわないとね。……まあ、どうせいつもみたいになし崩しでそうなるんでしょうけど」

「だよねー。死ぬまで面倒見て、囲ってくれなきゃ王様じゃないもんね」

「このような場所であまりそういうことをおっしゃらない方がよろしいのではありませんか？もちろん、私も護堂さんにそのつもりでいていただきたいと願っておりますが……」

　エリカが幸せそうにつぶやき、恵那もうなずき、祐理は皆をたしなめてから意思表明する。

　これはもしや袋ふくろ小こう路じ？　それとも人生の岐き路ろ!?

　護堂は愕がく然ぜんとしつつも、目下の懸けん案あんについて口にした。

「み、みんな。儀式とか加護のことはひとまず脇わきに置いてだな。斉天大聖からひかりを取り返すためにミーティングしようっ。

今日が正念場になるんだし……」

「あら、その必要はないと思うけど」

　あっさり異いを唱となえたのはエリカだった。

　彼女はようやく護堂から体を離し、いつもの利発さを示した。

「護堂はもう斉天大聖を斬り裂く『剣』を手に入れたし、わたしたちも『加護』を受け取っている。二柱の従じゆう属ぞく神しんを顕けん現げんさせないための策もある。ここまで条件がそろった以上、やることはひとつだけよ」

「うん。わかりやすく真っ向勝負。それしかないよね」

　エリカと恵那、チーム一の知性派と野性派が同じ結論に達していた。

　ふたりはおたがいをちらりと見合う。優雅な微笑と不敵な微笑が交こう錯さくする。ライバル同士の静かな競争の構図がそこにはあった。

　ともあれ、ふたりの意見は正しい。ここまで来たら、下へ手たな考えは休むに似たりだ。

　リリアナに目配せする。魔女にして騎士は即座にうなずいてくれた。ここ数カ月のつきあいで、ついに彼女とも無言の連れん携けいが取れるようになっていた。

　夜明け前の濃のう密みつな闇やみ夜よ。

　空を漂う黄金の雲に寝転びながらも、斉天大聖は気をゆるめてはいなかった。

　己おのれの神力が近隣一帯に行き渡ったのを感じる。男なん体たい山さんを中心にした、花か果か山さん水すい簾れん洞どうもかくやという彼の王国。人間どもは知性を失い、サルとして野性を取り戻しつつある。

「こやつらを使うて、人間どもの領土に攻め入るのも悪くない。

……お、ついに参ったか」

　視線を感じて、斉天大聖は身を起こした。

　これは人間の道どう姑こが使う術。誰かが視覚を飛ばし、孫そん悟ご空くうさまを眺めている。こんなもの、鼻息ひとつで吹き飛ばせるが……。

　無論、そうはしない。どうせ神殺しの誰かがやらせているはずだ。

　大聖はサルの顔でニタリと笑い、神通力で衣装を改める。舞台役者の扮ふん装そうから革かわの鎧よろいに。

　重い鋼鉄製の具ぐ足そくではなく、軽い胸当てと籠こ手て、脛すね当あてだけの防備。軽けい捷しよう無む比ひな猴こう王おうに似つかわしい、剽ひよう悍かんな戦いくさ装しよう束ぞくであった。もちろん如によ意い金きん箍こ棒ぼうも忘れはしない。

　雲に乗って飛ひ翔しようし、領土を見て回る。

　男体山と中ちゆう禅ぜん寺じ湖こ。広大な湿原である戦せん場じようヶが原はら。その北にある小さな湖みずうみ、湯ゆノ湖こ。

　いろは坂ざかを飛び越えて、新たに領土とした日光市街の上空も飛ぶ。

　石せき牢ろうに変えてやった東とう照しよう宮ぐう・二ふた荒ら山さん神じん社じや・輪りん王のう寺じ、全体にこぢんまりとした印象の街や、大だい谷や川がわの上も飛んでいく。

　……闇におおわれた街のなかを、サルどもがのそのそ徘はい徊かいしている。

　惰だ眠みんをむさぼっている間に、あるいは夜明かしをしている間に変化し、猴王の眷けん属ぞくとなった人間どもだ。部民を見下ろしながら、斉天大聖はＵターンした。

　戦場はあそこがいい。思い切り暴れられそうだ。

　そうと決めるなり雲を蹴け散ちらしてひとっ飛び。目的地にはすぐに到着した。

「好よし、好よし。ここらがよかろうて。哈ハァ！」

　かっこつけて叫ぶなり、雲の上から飛び降りた。

　斉天大聖が選んだのは戦場ヶ原であった。緑と紅葉であざやかに彩いろどられ、高地の自然で満たされている。渓けい流りゆうや散策路などにも事欠かない。

　そして、南の方角から青い光が飛んできた。飛翔の魔術だ。

　草薙とかいう小僧と連れの女どもが、眼前に降り立つ。やはり最初に来るのはこいつか。斉天大聖・孫悟空はうなずいた。

3

「くくくく……おぬしひとりか、草くさ薙なぎの。よければ仲間の神殺しを呼んでくる間、待ってやってもいいのだぞ」

　少女たちを人数にふくめない、斉せい天てん大たい聖せいの物言い。人間など視界に入っていても眼中にないのだろう。護堂はすかさず反はん駁ばくした。

「あんたの相手ぐらい俺ひとりで十分だ……それに、ひとりでもカンピオーネが増えたら、どうせあんたも子分を呼ぶんだろう？」

「何じゃ、気づいておったのか。さすが、勝負事にまつわる勘かんは鋭いのう」

　斉天大聖・孫そん悟ご空くうのとてつもないパワーを二度も見た。

　これまで遭そう遇ぐうした全すべての神を超える圧倒的強さ。しかし、今の神しん猴こうにはそれがない。

　無論、神じん通つう広こう大だいな軍神であることは向き合うだけでわかる。純粋な戦闘力だけならアテナやペルセウスをも凌しのぐと思われる。

　だが、それを考慮したうえでも、東とう照しよう宮ぐうと中ちゅう禅ぜん寺じ温泉で目撃した力は異常だった。

「俺たちカンピオーネは神様に会うと、すごい力がわき上がってくる。多分、それと同じなんだろ？　あんたたち神様は俺たちカンピオーネとの戦いで数的不利に陥おちいったとき、それをくつがえすための力が込み上げてくる——」

「左さ様よう。神殺しの魔王を討うち、地上に平安を取り戻すは我ら神々の天命」

　護堂の当てずっぽうに、斉天大聖は重々しくうなずいた。

「条件が整えば、おぬしらを滅めつするための力を天地と星々から引き出せるのさ。全ての神にできる芸ではない。然しかるべき権威と武ぶ勇ゆうを所有する、わずかな剣神のみの権能よ。……ま、この孫そんさまであれば造作もないことじゃがね！」

「平安を取り戻すって、バカ言うな！　あんたが揉もめ事を起こしてるんだろ！」

「魔王の分際で、この程度の遊びにがたがた申すな。人間の五万や一〇万、このような島国のひとつやふたつ、消し飛んだところで地上の平穏に影響するはずもなし」

　理にかなったツッコミは、鼻で笑い飛ばされた。

「遊びでひかりを人質にしたり、この土地の人たちをサルにすんな！　姿の変わった人たちは滅多なことじゃ戻せないって聞いたぞ!?」

「人が人でのうなっただけよ。天地星せい辰しんの運行には毛ほども影響は出ぬ。……それよりもおぬしらじゃ。おぬしら神殺しがひとり増えるごとに、地上は麻あさのごとく乱れ、現げん世せと幽ゆう冥めいの均きん衡こうは失われていく。人間どもは神と世界の理に従うべきじゃというのに、その分を忘れ、我ら超越の存在に楯たて突つこうとする……」

　ついに斉天大聖・孫悟空は静かな殺気を瞳ひとみに宿し、如によ意い金きん箍こ棒ぼうを構えた。

「ゆえに、おぬしらを一いつ掃そうすることこそが我ら神々の正義

であり使命。どうれ草薙の、御ご託たくはここまでにして存分に打ち合おうぞ！」

「ああ。あんたに俺の――人間さまの意地を見せてやるよ！」

「ハ！　心はともかく、体はとうに人とも言えぬ怪物の分際で賢さかしらな！」

　朝焼けに包まれた戦せん場じようヶが原はらの一角で。

　ついに決戦がはじまった。やや離れたところで少女たちが見守っている。

　エリカ・ブランデッリ、リリアナ・クラニチャール、万ま里り谷や祐ゆ理り、清せい秋しゆう院いん恵え那な。さまざまな絆きずなでカンピオーネ草くさ薙なぎ護ご堂どうと結ばれた仲間であり盟めい友ゆうであり、生死を共にする者たち。

　護堂は彼女たちの前で『戦士』の力を使う。

　神を斬きり裂く言こと霊だまの刃やいば。その行使者たるウルスラグナ第一〇の化身に。

「斉天大聖・孫悟空といえば三さん蔵ぞう法ほう師しのお供。道教、仏教、中国シャーマニズム、さまざまな宗教・民間信仰の神霊が混こん淆こうして生まれた神だ」

　護堂の周囲に光の玉が満ちていく。

　一〇、二〇、三〇と加速度的に数を増していく光。これこそが言霊の『剣』。

「そして、あんたは《鋼はがね》の軍神でもある。猿えん猴こうの神でありながら、鉄にまつわる戦闘神――そのカラクリを解く鍵かぎは『西さい遊ゆう記き』の成立過程にある！」

「ふうむ……倶く利り伽か羅ら剣けんの同類か。智ち慧えより産まれし破は邪じや顕けん正せいの剣よな」

　数百の光球で埋め尽くされた空間のなかで、斉天大聖は冷静につぶやいた。

そんな彼めがけて、護堂は『剣』の一部を加速させた。

「『西遊記』は孫悟空を主役とする戯ぎ曲きよく、小説本、民間伝承をつなぎ合わせて誕生した、いわば孫悟空伝説の集大成だ。素材となった伝承には神話・民話であった物語も数多い。ここで重要なのは、中国の——漢かん民族の文化は常に外なる世界からの影響を受けていたことだ！」

幾いく筋すじもの光が斉天大聖を襲う。左右上下、四方八方から波状攻撃を仕掛ける。

しかし、孫大聖の敏びん捷しようなること閃せん電でんのごとし。全てをかわしていく。

「ははははは！　なかなかに厄やつ介かいそうな剣じゃが、当たらなければ何ともないのうッ」

大聖はとんぼを切って、黄金の雲に乗った。

縦じゆう横おう無む尽じんに飛ひ翔しようし、『剣』を次々とかわす。しかも、徐々に速くなっていく！

そうか。護堂は見抜いた。ウルスラグナの『鳳おおとり』とちがい、斉天大聖はいきなりトップスピードになれないのだ。だから、段階的に加速していく。

そうやって最高速に至ったとき、かの猴王は神速に達するはずだ！

「く——！　我は言ことの葉はを編あみ、降ごう魔ま調ちよう伏ぶくの神刀と成す。退け、斉天大聖！」

護堂は『剣』を増殖させ、加速させる。

だが間に合わなかった。斉天大聖の姿が消え、数百の『剣』は標的を失った。ついに神速の領域へ入り込んだ英雄を、光の刃は捉とらえられない。かすりもしない！

大聖が空高く上昇していくのが何となくわかる。

数十の剣光に追撃させる。しかし、振り切られた。速すぎる。自分もさんざん利用してきた神速の権能。敵に回すと、これほど厄や

つ介かいだったとは！

『立ち合いの最中だというのに、何をぼうっとしておるか！』

　遥はるか遠くから届くような、聞き取りづらい声。

　そして背筋を震わせる危険の予感。とっさに護堂は手近にあった『剣』を呼び寄せ、頭上を守らせた。直後、稲いな妻ずまのような何かが降ってきた。

　ガッ！　衝撃音。身軽な何者かが急降下し、飛び去っていった気配。

『むうぅぅぅ、今のを防ぐとは運がいい。しかし、二度目はあるかね？』

　ヒットアンドアウェイするつもりか？

　否いな。『戦士』の化け身しんには、敵を深く理解する能力もある。その力が教えてくれた。神速を得た大聖は、速すぎて止まれないのだ。そして、護堂の『鳳』と同じだ。繊せん細さいな動きができなくなっている。

　だから一撃加えたはいいが、その勢いを殺しきれずに飛び去っていく。

　だが、どうせすぐに舞い戻ってくるはず。二度目、三度目を防ぎ切れるだろうか？

　あからさまな劣勢。戦いを見守る少女たちに緊張が走る。

「……みなさん、あの人を守るためにどうぞ御助力をお願いいたします」

　最初に言い出したのは祐理だった。淑しとやかに頭を下げて嘆たん願がんする。

「私の授かった力では、あの人をお助けすることはできても、お守りすることはかないません。皆様の御力が必要なのです。どうか――」

　ぴんと背筋を伸ばして、決然たる表情で言う。

　祐理の美び貌ぼうは冒おかしがたい荘そう厳ごんさで満たされて、ひどく凛り々りしかった。

「あなたに頼まれるまでもないわ。草薙護堂はわたしたち全員の王。騎士の誇りにかけて……いいえ、わたしの愛にかけて、必ず彼を守ってみせる。そのためには利用できるものは何でも利用しないと。だから祐理、全力でわたしたちをサポートしなさい！」

　力強く応じたのは、もちろんエリカである。

　誰よりも華か麗れいで才気に富む美少女は、金髪を王冠のようにかかげていた。

「エリカごときに先に言われたのは口くち惜おしいが、そういうことだ。今のわたしたちはいつもとちがう。だが、草薙護堂を守護するために、全員の力をひとつにしなくてはならない」

　怜れい悧りな口調でリリアナが言う。

　自みずからの為なすべきことを深く理解した彼女は、涼やかに落ち着き払っていた。

「そうだね。神様に楯たて突つこうっていうんだもの、仲間同士でいがみ合ってる余裕はないよ」

　恵那は快活で、わずかに獰どう猛もうだった。

　鋭く中空を見つめている。彼女の五感は斉天大聖の気配を感じ取っているらしい。

「あら恵那さん。いがみ合うのはともかく、競争と競合はおたがいを磨き、切せつ磋さ琢たく磨まするために不可欠なものよ。そこで事なかれ主義に走る必要はないと思うけど」

「それもそっか。じゃあ、誰がいちばん王様のお役に立てるか、勝負してみようか」

「ふたりとも、今は口よりも体を動かすときだ！　万里谷祐理、これからはあなたを守り切る余裕はなくなると思うが、かまわないな？」

「はい。とっくに覚悟はできております。早くあの人を助けに参りましょう」

　エリカと恵那が目配せし合い、意味ありげに微笑み合う。

　それをリリアナがたしなめ、祐理と短く話をする。強いリーダーシップを持つ二名の陰に隠れがちだった両名が、自然と主導権を発揮するようになっていた。

　強烈な指揮者コンダクターの振るうタクトによって統とう率そつされる個性派集団。

　それもよいチームの形である。しかし彼女たちは今、メンバーのそれぞれが自分で考え、判断し、他の者を引っぱっていく——そんな形のチームに生まれ変わりつつあった。

「義なる勇士よ、この言こと霊だまを子のため父のため、同朋のために伝えよ」

　祐理が言霊をささやく。力の呪じゅ文もん。聖なる軍神の『加護』を解放するための鍵かぎ。

　その刹せつ那な、今までまとっていた巫み女こ装しよう束ぞくが一変した。

　十じゅう二に単ひとえを思わせる豪ごう奢しやな和装。羽は衣ごろもに似た薄布がその周囲にまといつく。だが、最大の変化は髪だった。祐理の髪はぬばたまの黒髪というには茶色味が強い。それが今、まぶしい輝きを放つ亜あ麻ま色の髪となっていた。

　そして瞳ひとみも、ガラス細工のごとき玻は璃りの色に——。

　護堂が幽世かくりよで出会った『媛』と同じ髪、同じ瞳の色合いであった。

「これらの聖句は強大にして雄弁なり。それゆえ全ての敵は我を畏おそれよ」

「全ての邪じや悪あくなる者は、我が身中に宿りし勝利ウルスラグナを畏れよ」

　エリカとリリアナも言霊を唱え、姿を変えていく。

　ふたりの身をおおうのは膝ひざまで届く長いケープ。色いろ遣づかいは対照的だ。

　金髪の騎士を彩るのは紅と黒ロツソネロ。銀髪の騎士を彩るのは青と黒ネラツズーロ。

　エリカの右手には逆棘状の歩兵槍フツトマンズ・ランス。左手には楕だ円えん形けいの楯たて。いずれもクオレ・ディ・レオーネが変形した武具だった。

　リリアナの手には銀製の長弓ロングボウ。イル・マエストロが変形した武具である。

「力よ、我らに降り給え。勝利のために、義を貫つらぬくべきことのために！」

　聖なる軍神への賛歌を締めくくるのは恵那だった。

　媛巫女筆頭の制服姿が白びやく衣え、緋ひ袴ばかまの巫女装束に改まる。そのうえに千ち早はやという薄手の上衣がかぶさる。頭には前天冠、かんざしが加わる。

　神かぐら楽舞まいでも舞うかのごとき、媛巫女としての正装であった。

「風ふくと梢こずえうこかし花散らし……あらふる神の、あらんかきりは！」

　十二単をまとった祐理がささやき、新たな霊力を呼び覚ます。精神と霊体を肉の束そく縛ばくより解き放ち、己の心を触手のように外界へ広げていく。

　エリカの心、リリアナの心、恵那の心が漠ばく然ぜんと読み取れる。

　草薙護堂と斉天大聖の偉大ともいえる強壮な意思が感じ取れる。

　精神感応——。祐理は今、プリンセス・アリスをも凌りよう駕がする精神感応者へと進化を遂とげていた。その感応力を用いて、心の目を研ぎ澄まさせる。

　これこそ観自在。羅ら濠ごう教きよう主しゆが『鳳おおとり』の

神速を見切るために用いた心眼の極意であった。

　……視みえた！　肉眼では決して見えない斉天大聖が飛ひ翔しようする姿を、祐理の心眼は捉とらえた。

　視覚情報をすぐさま他の三人に精神感応で伝達する。

　これによって祐理の心眼はエリカの、リリアナの、恵那の目となった。神速を見切る観自在の霊れい眼がん。その恩恵を受けて、まずリリアナが動いた。

　左ゆん手でで銀の弓をかまえると、右め手てに銀の矢が顕あらわれた。

　ひょうと射る。この一矢は銀の閃せん光こうとなった。

　このままでは確実に死ぬ。斉天大聖の第一撃を凌いだ直後、護堂は大いに焦あせった。

　成算のないまま闇やみ雲くもに『剣』を操ろうとして——驚きよう愕がくした。

『ぐおっ！　危ない危ないッ、なんと我が視えるのかね!?』

　銀の閃光が護堂の頭ひとつ上を飛んでいく。大聖の急降下を防いでくれたのか？

「草薙護堂、防御はわたしたちにおまかせを！」

「あなたは攻撃に専念しなさい！　必ずわたしたちが守り切ってみせるわ！」

　駆け寄ってきたのは、リリアナとエリカだった。天あまの 叢むら雲くもの 劍つるぎの事件でも見た聖騎士パラデイーノの衣装だ。そうか、『加護』を使用したのだ！

　うなずく護堂の前に、エリカが楯たてを構えて走り込んできた。

「くっ——ッ」

　ガン！　衝撃音が響き、楯ごとエリカが吹っ飛ばされた。

　どうやら斉天大聖の攻撃を受けてくれたらしい。すかさずリリアナが銀の矢を護堂の眼前に撃つ。その矢は空気を射ぬいた。

　しかし、おそろしく速い何かが離れていく。その気配を護堂は感じた。

　理屈はわからないが、彼女たちは斉天大聖の神速をある程度見切り、対応している！

『――護堂さん、私の精神を受け容いれてください！』

　いきなり耳元で呼びかけられた。いや、心に直接ささやかれた？

　これは祐理の心だ。加護の絆きずなで結ばれているため、護堂はすぐに理解した。ウルスラグナの権能が、媛巫女にプリンセス・アリスと同種の能力を授けたのだ。

　その思し念ねん波はを受け容れた直後、視界が変わった。

　祐理の至った観自在の境地。目の前の全てを視、見極める心眼の法。

　その恩恵を受けて、護堂も斉天大聖の神速を見切れるようになったのだ。閃電の神しん猴こうは雲に乗ってジグザグに、稲妻のごとく飛び回る。

　おもむろに上空より飛来し、如によ意い金きん箍こ棒ぼうを草薙護堂の脳天に落とそうとする。

　これを牽けん制せいするのは、リリアナの聖なる銀の矢。

　一矢ずつでは容易にかいくぐられる。銀の騎士の右手は、指の間に二本ずつ矢を挟はさんだ。都合八本の矢を一射で撃ち出す。

　これを幾度も続け、弾幕のように銀の矢を連射する。まさに矢の雨。

　しかし、斉天大聖は神速の空中機動でかいくぐり、護堂の真正面に飛び込んでくる。如意金箍棒が振り下ろされる。

　その凶器を受け止めるのは、エリカの楯であった。

　そしてエリカの槍ランスが、鋼鉄よりも硬い大聖の体を突き放す。

　いかに敵が神速でも、標的のそばに来なければ近接攻撃はできない。そうと割り切って護堂の防御に専念し、エリカはみごと役目を果たしてみせた。

　その後もリリアナは銀の矢で対空砲火を続けた。エリカも護堂を守り続けた。

『護堂さん、次はあなたの番です』

「……って、こんなことできるのかよ!?」

　思念波でささやかれた直後、何をすべきか精神感応で教えられた。一度も試したことのない攻撃。もしかして、祐理はこれを霊視で知ったのか？

『はい、先ほど授かった啓示です。これなくして勝利を得ることはできないでしょう』

　厳おごそかに告げられて、護堂は飛び回る敵手を見上げた。

　――あのデタラメな速さを抑おさえるには、たしかにそれくらいの無茶は必要だ。

　覚悟を決めて、東の空を意識する。

　暁あかつきの空。薔ば薇ら色の曙しよ光こうを地上に注いでくれている方位。

　その先にあるのは太陽。ウルスラグナ第三の化身たる『白馬』の象しよう徴ちよう。

「我が元に来きたれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゆん馬めを遣つかわし給たまえ。駿足にして霊妙なる馬よ、汝なんじの主たる光輪を疾とく運べ！」

　民衆を苦しめる大罪人にのみ使える化身。草薙護堂の最大火力。

　それを解き放つための言こと霊だまを唱となえる。だが『戦士』をやめるわけではない。言霊の刃が必要なのは、まだまだこれから

なのだから！

　ふたつの化身をひとつに――。

　言霊の刃と太陽の焔ほのおをひとつに――。

「ぐ、ああああああああっ!!」

　脳が焼けそうだ。熱い。心臓が破れて全ての血が流出してしまいそうだ。護堂の体にずっしりと重い何かがのしかかってきた。両足を大地につなぎ止められた気分だ。

　それでも歯を食いしばり、護堂は完成させた。

「輝ける太陽の主ミスラよ、讃たたえらるべき者よ！　全ての敵を征服せんがため、最強なる我に千の光と千の剣をあたえ給え！」

　東天より来きたる太陽の輝き。いつものように大砲として使うのではない。

　戦場ヶ原の上空に浮かぶ、白き光球として顕けん現げんさせる。

　この地には今や、ふたつの太陽が君臨していた。護堂は『剣』たちを全て、ふたつめの白き太陽に向けて飛ばす。千の光こう刃じんが、白き恒こう星せいと融合していく。

『ぬおっ、新たな太陽じゃと!?』

　上空を旋回し、またも攻撃に移ろうとしていた大聖がうめく。

　護堂は新たな『剣』を発射させた。白き太陽からレーザーのごとく一条の閃光が走る。細い光剣は神速の美び猴こう王おうをとらえ、頭の上をかすめた。

『熱あつッ!?　我の動きよりも速い!?　バカな！』

　頭の毛を多少焦こがした程度だが、たしかにかすったようだ。太陽の具現たる『白馬』と融合した『剣』はまさしく光――光速の武器。

　これなら斉天大聖の神速にもスピード負けしないはず。このままいけるか!?

「くっ……エリカ、守りは全部おまえに頼んでもいいか？　俺にはもう無理そうだ」

「当たり前でしょう。わたしはそのためにここにいるのよ！」

　すさまじい熱さが護堂の頭を苛さいなむ。ふたつの化身を同時使用する負担は、想像を絶する烈はげしさ、苦しさだった。

　それを堪こらえながらの要請に、エリカはすぐに応じてくれた。

　一方、斉天大聖はジグザグの飛翔を続けて、空中を飛び狂っていた。リリアナが矢の雨を休まず撃うち、牽制しているからだ。姿は見えないが、恵那もここぞという局面のために控えていることだろう。かなりきついが、仲間たちがサポートしてくれる。

　ここで失敗するわけにはいかない！　護堂は必死に歯を食いしばった。

「万里谷、変身させられた人たちを助ける。誘導してくれ！」

『おまかせください。その上で後こう顧この憂うれいなく大聖さまを討とう伐ばつされるべきでしょう』

　祐理の精神感応が戦場ヶ原を飛び越え、奥日光一帯——そして日光市街など、かの猴王に支配された領域全てに満ちていく。

　救うべき人々、変化させられた人々を思し念ねん波はで探すためだ。

　そして護堂は、改めて言霊をつむいだ。

「中国の歴史には、常に遊牧の民、騎馬民族の影がつきまとってきた！　春しゆん秋じゆう時代の北ほく狄てき・西せい戎じゆう。戦国時代から長きにわたって中国を脅おびやかした匈きよう奴ど。中国北方を制した北ほく魏ぎ、その後こう裔えいである隋ずいや唐とうは漢文化を取り込んだ鮮せん卑ぴの血族だ。契きつ丹たん人じんの遼りよう、さらには元げん——モンゴルまで」

　白き太陽から、数千条の『剣』が放たれた。

　東西南北どころか三六〇度あらゆる方向に向けて、光速で飛んでいく。

「支配層だけじゃない。民間レベルでも、人種と民族の混こん淆こうは起こる。漢人と遊牧民の文化は複雑に入り交じっていく。当然、神々にもその影響は及んでいく」

　祐理の感応力が導いてくれるため、細かな狙いをつける必要はなかった。

　脳神経が焼き切れそうな今、それが心底ありがたい。

「そうして複雑に混淆ハイブリッドした神の典型――いや、最高峰がすなわち斉天大聖・孫悟空だ！」

　街を駆かけ、山を駆け、川を越えて谷を越えて野を飛び、また街に戻る『剣』。

　白き閃光は行く手をふさぐ壁や障害物もすり抜け、突き進んでしまう。その道中で斉天大聖の眷けん属ぞくであるサルたちを、区別なく片っぱしから斬り裂いていく。

「道教、仏教、密教など中国由来の文化とは異なる要素が、斉天大聖の神話には多い。その代表が『石より産まれ』『炉ろで灼やかれ』『鋼はがねの肉体を持つ』という一連の逸いつ話わだ」

　朝焼けのなか、聖なる閃光が駆け抜ける。

　不ふ埒らち千せん万ばんな猴こう王おうに代わる、新たな支配者の降こう誕たんを告げる光景だった。

「これらの神話は本来、《鋼》の英雄たちが有するモチーフだ。石から産まれ、炉で灼かれた結果、不死性――鋼鉄の肉体を獲得する。これはつまり『剣』の鍛たん錬れん過程なんだ。鉄鉱石を炉で溶かして鋼と成し、鋼を鍛えて剣とする。鋼の英雄とは、すなわち剣。その存在自体が『剣』である、生ける剣神のことなんだ！」

　太陽の『剣』に斬られた者たちは、斉天大聖の支配から解き放たれた。

　結果、彼らの姿形はもとの人間に戻る。

　ニホンザル、テナガザル、チンパンジー、オランウータン、マウンテンゴリラ等々――。

　多種多様なサルたちが瞬く間に消え、老ろう若にやく男なん女によさまざまの人間に生まれ変わっていった。全ての救済が終わるまで、ほんの四、五分だったかもしれない。光速の武器だからこそできた早はや業わざだった。

　祐理の精神感応を通じて、人に戻った彼らが倒れるように眠り込むのを感じた。戦せん場じょうヶが原はらにいながらにして、近隣一帯の人々を救った護堂は深く息を吐いた。

　そして、斉天大聖はすこしずつ減速していった——。

　何をするつもりだ？　護堂はいぶかしみ、エリカとリリアナに目配せした。騎士たちも油断なく目配りする。

　ついに神速を脱し、通常の速さへ帰還した大聖は、黄金の雲から飛び降りた。

　護堂の顔を正面から見み据すえて言う。

「草薙の、貴様……ええい人間ども、小物の分をわきまえよ。きえい！」

　矢を射いようとするリリアナ、進路を阻はばもうとするエリカに大聖は気合い声を放った。

　それだけで大騎士ふたりは吹っ飛ばされてしまった。

「くくくくく……我が眷属の全てを斬り、人に戻しおったか。なかなか——なかなかみごとな手並み。ふ、ふふふ、血をたぎらせてくれるのう……」

　火か眼がん金きん睛せいが燃えていた。紅あかき眼球と黄金色の瞳どう孔こうが爛らん々らんと輝く。

「我はおぬしの巫女をこのとおり、抱え込んでおる」

　斉天大聖の右手に、透明な玉が顕れた。ゴルフボール程度の小さな玉だ。なかには巫女装束を着た万里谷ひかりが横たわり、眠りについている。

「まあ、あれじゃ……。抵抗すればこやつをつぶしてしまうぞとか何とか、やろうと思えばいろいろ策も出てくるものじゃが」

　ぺろり。大聖はひかり入りの玉を呑み込み、唇を舐なめた。

「せぬよ、そんな真ま似ねは。かくなる上は心ゆくまで刃を重ね拳こぶしを交まじえ、我とぬしのどちらが強壮なるかを競うが肝要じゃて。さあさあ、さあさあ、いざ尋じん常じように勝負と参ろうぞ！　この娘っ子、返して欲しくば我の腹をかっさばくがいいさ！」

　如意金箍棒の先端を護堂に向けて、斉天大聖は叫ぶ。

「もともとそのつもりだ！　でも、こいつらもいっしょだ」

　己の隣に並び立つ紅と青の大騎士ふたり。精神感応の霊力で隣に寄り添うがごとくサポートする祐理。彼女たちを従えて、護堂はふてぶてしく言い返した。

「こいつらも俺の——あんたを倒すために必要な、俺の大事な仲間たちだからな。いっしょに戦って、いっしょにあんたを倒す。小物だなんて言わせない」

「女ごときにうつつを抜かしおって……まあいい、そやつらもろとも蹴け散ちらすだけよ！」

　大聖が如意金箍棒を大地に突き刺す。

　地面より浮き上がってくるのは、見覚えのある巨猿。しかも九匹！　大敵の出現にエリカとリリアナが息を呑み、祐理の精神がおののく。

（……絶対こうなる気がしてたんだ。王様、お願い。この子を——恵那の相棒をちょっとの間、貸して頂ちよう戴だい！）

　唐突に『声』を聞いた。右腕に宿る剣が中継する心の声だと、すぐに気づいた。

「相棒……って、あいつか！」

　その嘆願で護堂が思い当たるのは、当然あれしかない。

　もとの遣つかい手てと『加護』でつながっているせいか、いつもより明確に存在を感じる。右腕の力を抜き、使用権を渡そうと念じる。剣の名はもちろん——

「来きたれ天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ！　我が背の君より賜たまわりし御み劔つるぎを、今こそ振りかざさん！」

　唐突に風が吹き、高らかな声が響いた。

　風は巨猿たち——斉天大聖の眷属どもがたむろする前で渦巻き、その中心に巫女が現れる。

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こ・清せい秋しゆう院いん恵え那な。

　巫女装束の上に千早をまとった正装。その手にはなつかしい漆しつ黒こくの神刀。しかも、彼女の宿すスサノオの神力がいつもの倍近い！　ウルスラグナの加護による強化か！

「倭やまとは国のまほろば——たたなづく青あお垣がき山ごもれる、倭やまとしうるわし！」

　恵那の言霊で強風がうねる。破壊的な烈風となって巨猿を押さえつけ、自由を奪う。

「いやあああああッ！」

　裂れつ帛ぱくの気合いと共に、恵那は突っ込んだ。

　巨猿の自由を奪うほどの烈風のなかだが、さすがは嵐の神の申し子。風に押される敵に対して、彼女は凪なぎのなかを行くがごとし。

　軽やかに飛び込むと、巨猿の脛すね——弁べん慶けいの泣き所に相棒を突き込んだ。

　クアアアアァァァァァンンっ！　巨猿の絶叫。

　次いで、恵那はひらりと跳躍。高々と飛翔して天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを横に薙なぐ。この一太刀で、巨猿の頸けい動どう脈みやくはきれいに断たれた。そして消滅。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに急所を斬り裂かれ、竜にも匹敵する神獣は消滅していった。

　同じ要領で恵那は、続けざまに巨猿を斬り伏せていく。大ザルどもが遅まきながら効果的な対応を取ったのは、三匹目が斬ざん殺さつされたあとだった。

　巨猿たちが大きく息を吸い込んで、恵那の操る暴風をも吸い取ってしまう。

　ようやく風威はおさまり、神獣の群れも自由を取り戻す。恵那はこの不意討ちのために今まで隠れていたのだろう。いずれ参戦してくるだろう巨猿どもを、効率的に抹まつ殺さつするために。

　しかし、合計戦力では依然として不利。

　敵は六匹の巨猿と斉天大聖。先行きの暗い第二ラウンドのはじまりだった。

4

　高らかな闘争の響きが、万ま里り谷やひかりを覚かく醒せいへと誘いざなっていた。

　飛び交う閃せん光こうの刃やいば。謡うたわれる言こと霊だま。

「剣を神と見なす風習は、原げん初しよの遊牧騎馬民族が発明し、継承し、広めてきた文化だ」

　聞き覚えのある声。神を斬きり裂く言霊の謡うたい。

　これは草くさ薙なぎ護ご堂どう——ひかりの姉たちが愛する少年の声だった。

「その民族の名はスキタイ。遊牧と騎馬の文化を生み出した勇ゆう猛もう無む比ひなる民族だ」

　彼がささやくたび、白き太陽から閃光が放たれた。

　神を斬り裂く形なき刃。虚こ空くうを駆ける光速のレーザー。しかも、この恐るべき武器は十と重え二は十た重えに折り重なり、重厚迅じん速そくな連続攻撃を仕掛けてくる。

「スキタイが生み出したのはそれだけじゃない。彼らは製鉄にも長たけた民族だった。鉄に精通した彼らだからこそ、鋼はがねの剣神

たちをも生み出せたんだ」

　左右上下の四方向から同時に斬り込まれる。三連射が時間差で襲ってくる。

「スキタイの名を初めて歴史に残したヘロドトスは、スキタイの軍神アーレスを表すシンボルこそが剣。大地に突き立てた剣こそが、戦いの神の徴しるしなのだと書き残している！」

　複雑なる閃光のコンビネーションが猛威を振るう。

　しかし、ひかりの体はぎりぎりで避け続けるのだから、とんでもない話だった。

　黄金の雲に乗って天あま翔かけ、空中でステップを刻む。時にアクロバティックな曲芸飛行。時に最高速度を振りしぼる全力飛行。さまざまな技巧を駆使して、草薙護堂の攻撃を回避。光速をかわす異常な速さ、まさに神速といおうか――。

　単純なスピードでは光剣の方が上だろう。

　だが、絶対的な差ではない。飛行技術でぎりぎり埋められるくらいの速度差だ。

　……そうだ。草薙護堂と戦っているのはひかりではない。

　斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くう。万里谷ひかりは彼の体内に呑のみ込まれているのだ。

「不ふ動どう明みよう王おうの利剣もそのひとつだ！　『地に突き立つ剣神』のモチーフは洋の東西に散っていった。さらに、剣神の表ひよう象しようにはさまざまなバリエーションが生まれる！」

「ふはははは！　左さ様よう。まさにそのとおりじゃ！」

「たとえば炉ろで鍛きたえた剣を水で冷やす作業にちなんで、出生時に水につかる英雄が現れた。アキレスは冥めい府ふの水につかり、不死となった英雄だ。竜の血を浴びることで不死となる英雄ジークフリートもいる。あんたも――斉天大聖・孫悟空もそうだ！」

「うむ！　我にとっては蟠ばん桃とうと八はつ卦け炉ろ、仙せん丹

たんがそれに当たる！」

「スキタイに由来する剣神創造の物語をそのまま残していることこそ、孫悟空が鋼の軍神である証あかし！　道教や仏教だけでなく、遊牧騎馬民族の剣神すら取り込んで誕生した、最強の混淆種ハイブリッド！　それがあんたの正体だ！」

「よう見切った、草薙の！　じゃがのう、おぬし！」

　言霊をつむぐカンピオーネに斉天大聖は言い放った。

「光と言霊の剣……器用に扱っておるようじゃが、我にはわかるぞ。ははは、そいつを振るっている間のおぬしは隙すきだらけよ！　そんなざまで孫そん大たい聖せいの攻めを凌しのげるかな!?」

　うそぶくなり雲を加速させ、草薙護堂へ突進する。

　これまでは三人の少女たちが守ってくれていた。しかし、今その役目は――

「吾あ子こよ、近寄りて我に接せつ吻ぷんせよ！　嗚あ呼あ、汝なんじは主の恵み給える野の香りのごとし！」

　エリカひとりだけ。彼女は強化の呪じゅ文もんを唱となえながら、突っ込んできた。

　護堂と斉天大聖の間に割り込む。耐久力を強化させた楯たてで、如によ意い金きん箍こ棒ぼうの一撃を主の代わりに受け止める。

「くう――っ！」

　華か麗れいが身上の美少女が顔を歪ゆがませる。楯の上からでも相当な衝撃なのだろう。

　膝ひざが落ちかける。しかし、必死にそれを拒こばみ、主の守護を続けている。他のふたり――恵那とリリアナは神獣の群れと戦っていた。

　九体いた巨きよ猿えんも残り二匹。

　彼らは焔ほのおを吐き、暴風を吐き出して、神がかりした恵那を

突き放しにかかる。

　そこでリリアナが加勢に入る。矢で援護して、怯ひるんだところに恵那が斬り込む。あるいは恵那に気を取られた巨猿の急所を狙ねらう。連係で突き崩す戦法だった。

　この大ザルどもを野放しにすれば、たちまちカンピオーネに殺到するだろう。

　だから、ふたりで応戦しなくてはならない。そして、エリカひとりで護堂を守らなければならない。苦しい戦況であった。

「そう、スキタイの故こ地ちのひとつであるコーカサスでは……くっ」

「護堂!?」

　光を操る少年は立ちくらみを起こした。

　ウルスラグナ神より簒さん奪だつした一〇の化身を、彼はひとつずつしか使えないという。なのに、ふたつも併へい用ようしている。きっとおそろしい負担がかかっているのだろう。

　その隙に斉天大聖は自らの毛を二本引っこ抜き、針のように投げた。

　これが恵那たちと戦っていた眷けん属ぞく二匹のうなじに突き刺さる。

　があああああっ!!　巨猿たちは大いに昂たかぶった。咆ほう哮こうと共に一匹目は恵那に、二匹目は離れたところから矢を撃つリリアナに襲いかかる！

　その動きが今までよりも速い。一〇メートルを越す巨体が稲いな妻ずまのように走る。

「一ひと太た刀ち馳ち走そうつかまつる！　いやあああああっ！」

　一匹目が恵那の頭上に拳こぶしを叩たたき落とす。太刀の媛ひめ巫み女こはそれを横に跳んでかわし、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを一いつ閃せんさせる。神獣の拳は手首から切り落とされた。

　スサノオの神刀ならではの、すさまじい斬れ味。青い血が飛び散る。

　しかし、この血が恵那の体に降りかかり、燃えだした。油に火を投げ込んだように、巫み女こ装しよう束ぞくと千ち早はやを青く汚した鮮血は炎上したのだ。

「ああああああっ！」

　恵那の悲鳴。しかも、巨猿は残った左の手のひらを勢いよく振り下ろす。大ザルの手と地面との間に、媛巫女は挟はさみ込まれて悶もん絶ぜつした。

「くはっ⁉　くそっ……まだまだァ！」

　恵那が血を吐きながら、風を呼ぶ。

　つむじ風として巻き上げ、刃として研ぎ澄まし——鎌かま鼬いたち。

　無形無色の鎌は、巨猿の血管を斬り裂き、腱けんと脛すねを断つ。頸けい動どう脈みやくを深々と斬り裂く。巨猿は力なく啼なき、砂となって崩れ去った。

　勝利した恵那は、風で巫女装束にまといつく残りの焔を吹き払った。

　しかし、そこで限界になった。彼女はぐったりと地面に横たわったまま動かなくなる。

　もう一方のリリアナは、銀の矢で二匹目の突進を止めようとする。

　矢が巨猿の左目を射いぬく。肩に、分厚い胸板に突き刺さる。怒りと苦く悶もんの咆ほう哮こうがまき散らされる。しかし、そこまでだった。

　十分に接近した巨猿は右腕をぬうっと伸ばし、リリアナを掴つかみ取った。

　華きや奢しやな妖よう精せいの肢し体たいが、ゴリラに似た怪物の虜とりことなる。そして、リリアナを掴んだ手は渾こん身しんの

力を込めて、握り込まれた！

「くっ……彼かの者ら、主のモーセに命じ給えるがごとくミデアン人びとを攻め撃ち、ついに其その内の男子を悉ことごとく殺あやめけり。其の殺めし者の他にミデアンの王おう五人、剣つるぎにかけて殺めけり！」

　それでも呪じゆ文もんを唱となえるのは大騎士の矜きよう持じ。

　リリアナのあがきに応えて天より一筋の光が降り、青き騎士を照らす。

「ミデアンの婦女および童わらべを生け捕り、家畜と羊の群れと其の貨財を悉く奪い取り、住まいの邑まち々まちと村々を火にて灼けり！」

　キュアアアアアッ！

　なんと巨猿が苦しげに啼ないて、握り殺す寸前のリリアナを手放した。

「かくて彼の者ら、生け捕りしもの掠かすめしもの奪うばいしものを携たずさえ、モーセのもとに詣もうでけり！」

　リリアナは蒼あおき光に包まれ、荘そう厳ごんたる面持ちで弓を構えた。

　ただの武もの人のふにあらず――聖騎士パラデイーノにして聖人サント。そう呼びたくなる雰ふん囲い気きをたたえて、彼女は銀の矢をつがえる。

　巨猿の口から猛火が吐き出される。

　しかし、リリアナのまとう聖衣には焼け焦げひとつ生じない。

　焔を浴びながら放った一矢は、巨猿の口内に吸い込まれる。魁かい偉いな大ザルの体は砂となって崩れ、風に運ばれていった。だが、そこで限界になった。

　圧倒的な力を見せたリリアナもばたりと前のめりに倒れ、動かなくなる。

「リリィ……聖せい絶ぜつの言霊を使ったのね。ええ、今のわたしたちなら、たしかにあの秘儀だって使いこなせるはずですもの。——七人の祭さい司し、各々角笛を吹き鳴らし、甲かつ冑ちゅうのいくさ人はこれに先立ちて進軍す！」

　旧友の戦いぶりを見て、エリカも新たな呪文を口ずさむ。

　斉天大聖の攻撃を防ぎ続け、こちらも限界が近いようだった。足下がふらついている。槍ランスを杖つえにして、ようやく立っている。

　彼女の背後では草薙護堂が目を細くして、猴王の神速を追おうとしている。

「邑まちを七度巡り、七度目に祭司らは角つの笛ぶえを吹き、ヨシュアは告げたり。主はこの邑を汝なんじらに賜たまわれりと。生ける者、男も女をんなも若きも老いたるも分かちなく悉ことごとく刃にかけ滅ぼし、牛うし羊ひつじ驢ろ馬ばに至るまで及ぼせり！」

　地よりわき上がる紅あかい靄もやが、エリカの体を包み込む。

　靄はすぐに晴れ、紅き大騎士もまた雰囲気を変えた。やはり聖騎士パラディーノにして聖人セント。

　すっくと背筋を伸ばし、毅き然ぜんたるまなざしで神速の大聖をにらみつける！

「このジェリコに邑を建つる者、主の御前にて呪のろわるべし！　礎いしずえを据すえなば初うい子ごを失い、門を建てなば末すえ子ごを失わん！」

「ぬおっ!?　なんと娘よ、この孫さまに打って出ると申すか！」

　今度こそ草薙護堂の脳天を打ち砕かんと、急降下してきた斉天大聖。

　ひかりを呑み込んだ神しん猴こうは驚きよう愕がくしていた。彼とカンピオーネの間に割り込んだエリカが、槍ランスを突き出してくる。これまで主君を守るだけだったのに迎撃に転じた。そんな余力——否、能力などなかったはずなのに！

　そうか。大聖のなかでひかりはうなずいた。

今、リリアナとエリカが使った言霊。あれは大騎士たちに『聖なる殲せん滅めつの特権』をあたえる欧州魔術の最終秘儀。清せい秋しゅう院いん恵え那なの神がかりにも匹敵する力のはず！

ひかりの見守る前で、エリカの槍と大聖の振り下ろす如によ意い金きん箍こ棒ぼうは正面から激突した。

槍が砕ける。そして、神の武器である如意金箍棒も——。

伸縮自在、重量一万三千五百斤きんの鋼は、半ば辺りから吹き飛んでしまった。閃せん電でん神しん速そくの軍神が振るう武器を、只ただの人間が正面から砕いたのだ！

そしてこの一撃は、眠れるひかりの心にも衝撃をあたえてくれた。

テレビをボーッと観みているような感覚が消えた。意思と感情の復活。草薙護堂とその仲間たちを応援する気持ちが込み上げてくる。

——がんばって、エリカ姉さま！

ひかりの声援を聞いたかのように、聖騎士は動きを止めなかった。折れた槍を振るって、大聖に攻めかかる。しかし、軍神相手に武芸で勝てるはずはない。

槍はかわされ、折れた如意金箍棒を無造作に一いつ閃せんされた。

エリカ姉さまは大きく吹っ飛ばされる。地面に打ちつけられ、勢いよく何度も転がって、ようやく動かなくなる。意識も失ったようだ。如意棒をぎりぎり楯たてで受けたらしく、致命傷でなさそうなのはさすがだったが……。

誰よりも華麗な女騎士が、こんなに泥くさく主のために尽くそうとする。

その姿を見て、ひかりは切なくなった。神と神殺しはついに一対一。大聖さまが折れた如意金箍棒で打ちかかる。

護堂兄さまはかわそうとしなかった。両腕で頭や顔をかばう。

　その上から如意棒で、蹴けりで、拳で、好きなように打ちのめす大聖さま。

　でも、ときどきガードの隙すき間まを縫ぬうように指先で抉えぐろうとしたりする。そういうときだけ兄さまは必死に避けようと体をよじる。守ってばかりで、ちっとも攻撃しない。

　ただ兄さまの目は爛らん々らんと輝いて、打たれっぱなしなのに大聖さまを鋭くにらんでいる。

　狼おおかみみたいに獰どう猛もうな目なのに守ってばかり。どうして――!?

『護堂さんは最後の力を温存しているの。あなたを助けだすために』

「――お姉ちゃん!?　最後のって、どういう意味!?　それに、お姉ちゃんにこんな力はなかったはずじゃ……!?」

　思念波で語りかけられて、ひかりは驚いた。これはプリンセス・アリスも使っていた精神感応。姉はたぐいまれな霊視力者だが、精神感応者ではないはずなのに！

『その話はまたあとで。……護堂さんにはもう、ほとんど余裕がないの。あの『剣』を使う負担はとても大きいから、満足に操れるのは多分あと一回くらい。その一回を、あなたのために使うつもりなのよ、あの人は』

「そんな！　で、でも、あのままじゃお兄さまが殺されちゃう！」

　打たれても打たれても倒れようとせず。

　倒れて膝ひざをついても、すぐに立ち上がり、戦いを放棄しようとしない。そんな戦いぶりを見て、ひかりは訴えた。彼が傷つくのを観ていられなかった。兄さまだけでなく、エリカ姉さまにリリアナ姉さま、恵那姉さまもすでに倒れているのだ。

『……仕方ないわ、そういう人だもの。あの人は殺されそうになっても、ほとんど負けそうになっていても、絶対に戦いを投げ出さない。だから、もうすこし待っていて。あの人があなたを救いだすときを……。私もできる限り、お手伝いするから――！』

　確信と決意を込めて、祐理の思念は語る。

　絶望的な状況でも、神を相手にしてでも闘志を捨てない。戦う意志を捨てない。だからこそ彼は神殺し、神の権能を簒さん奪だつする魔王なのだ。ぎらぎらと燃えるカンピオーネの瞳を見て、ひかりの胸はドキドキしてきた。

　あんな状態でも戦いをやめない。それどころか勝とうとしている。ひかりと、大聖さまに苦しめられている人々のために戦っている。

　胸が熱くなってきた。じっとしてはいられない。ここで傍ぼう観かんしていたら女じゃない！

「……お姉ちゃん。わたしも戦う。何をしたらいいのかまだわからないけど、必ずあの人が勝つためにお手伝いしてみせる！　だから、こう伝えて。絶対勝つって信じてますから、最後まで戦ってくださいって！」

『ええ、わかったわ。……わたしもひかりを助けるために、できる限りのことをしてみます。だから、あなたもがんばって——』

　姉の思念と会話を終えて、ひかりは必死に考えた。

　自分の持つ霊力で、わずかでも神々に影響を及ぼせるのは禍まが祓はらい——呪術・呪力を打ち消す力だけだ。しかし、強壮なる神の力が相手では、ごくささやかな効果しか期待できない。

　どう使えば護堂兄さま……あの人の助けになるだろうか？

　防戦一方になりながらも、護堂は必死に持ち堪こたえていた。

　斉天大聖のような軍神との接近戦、まともに戦えば数秒でＫＯされるだろう。かといって『駱らく駝だ』は使えない。ひかりを救うまで『剣』を捨てられないからだ。

　しかし頭は今まで以上に熱く、割れそうなほどに痛む。

　化身ふたつの同時使用はもう限界だった。これ以上コントロールできない。

　今の護堂にできるのは耐えることのみ。

　だが、せめてもの反抗として『剣』を体内に宿し、大聖の打撃を跳ね返す防具とした。神の力を無効化させる武器なのだから、鎧よろい代がわりになるのではないか？　そう期待したのだが甘かった。打撃のダメージをそこそこ弱めてはくれたが、ゼロには程遠い。

　やはり、こういう消極的な用法には向いてないのだろう。とはいえ、この悪あがきがなければ、斉天大聖の殴おう打だでとっくに死んでいたはずだ。

「ははははは！　さきほどから妙におとなしいのう。どうした、もう刀折れ矢も尽きたか!?」

　倒しきれぬ状況に焦あせりも見せず、大聖は余裕で打ちかかってきた。

　真正面からの前蹴りで護堂を突き放す。折れた如意金箍棒で横合いから殴りつける。華麗な回し蹴りでテンプルを狙ってくる。

　サンドバッグになりながら護堂は耐える。耐える。耐える。

　まだだ。まだ大聖は隙を見せない。光速の『剣』で攻撃しても、ヤツはまた神速で回避してしまう。この神猴を調子に乗せて、隙を生ませる。

　確実に『剣』を当てられる瞬間。必中必勝の好機を待たなければ、勝ち目はない！

『護堂さん。今、大聖さまのなかにいるひかりと話をしました』

　耳元で語りかけてきたのは、祐理の思念だった。

『あの子、護堂さんが絶対勝つって信じていると……。だから、最後まで戦ってくださいと』

（何だ、意外に元気そうだな……。ったく、気軽に信じるとか言ってくれるなよ）

　文句をつぶやきながら、護堂は笑った。

　獰どう猛もうな戦士の笑み。窮きゆう地ちにあるほど闘志を燃やす男の顔。

　これこそ、かけられた期待と祈りを力に変えるチャンピオンの証あかし。ここで『戦うのはあくまで自分』なんて言っては、あまりに器うつわが小さい。勝利を信じると言われたら、そのとおりに勝ってみせてこそ真の戦士だろう。

『護堂さん、反撃に転じられるときはわたしもお手伝いします。ですから、どうぞ存分に御力をお振るいください！』

（ああ、わかった。当てにしている。でも、まだだ。まだ早い——）

　ひそかに祐理と密談していたとき、斉天大聖は唐突に手を止めた。

「ふむ、いつまでも壊れた武具で戦っているのも我が沽こ券けんに関かかわるな。どれ、ちょっくら直してみるかのう。——死生、命有り。富ふう貴きは天に在あり。主燈已に滅す！」

　口こう訣けつによって神通力が振るわれ、砕かれた如意金箍棒の破片が飛んでくる。

　あっというまに組み合わさり、結合し、神しん珍ちん鉄てつの棒はもとの姿に戻る。本来の威力を取り戻した神の武器を喰くらって、無事でいられるか——。護堂は慄りつ然ぜんとした。

　元通りになった如意金箍棒が脳天めがけて降ってくる！

　あれはかわせない。今度こそ死ぬのか!?　しかし、このとき護堂はひかりの声を聞いた。

『凶きようを浄きよめ、災さいを退け、厄やくを祓はらう——是これすなわち幸さいわいなる者の霊れい験げんなり。かくあれかし！』

　それは祐理の精神感応が伝える、斉天大聖の内より生じる心の声。

　禍祓いの霊力を振るい、神の支配から脱しようとあがく、幼い闘士の雄叫びだった。己の力が最も活いきる場面を狙い続けた少女の

抵抗で、予想外の出来事が生じた。

　砕けた。復活したばかりの如意金箍棒がふたたび砕け散った！

　結果、斉天大聖の一撃は虚むなしく空を切る。

　万里谷ひかりだけの霊力、禍祓い。神々の力も、ごく一部なら消去できる妖あやかしの力。

　媛巫女見習いが虜とりこにさせられた理由は、最後の最後で神の意表を突いた。あんぐり口を開けた斉天大聖のサル顔ときたら、なんと間抜けなことか——！

「今だ万里谷、仕掛けるぞ！」

『はい！』

　気づけば護堂は叫び、天に人差し指を突きつけていた。

　攻撃に転じるなら今しかない。白き第二の太陽から斉天大聖に向けて『剣』を放つ。すさまじい熱と痛みが護堂の頭に襲いかかってくる。

　痛痛痛痛痛痛！　脳が沸ふつ騰とうしそうだ！　だが、苦痛はすぐ半分ほどになった。

『き、きゃあああああああっ！』

　代わりに聞こえるのは、祐理が苦く悶もんする思念波。

　護堂にかかる負担を精神感応によって分かち合ってくれたのだ。しかし、カンピオーネならぬ媛巫女には相当な苦痛のはず——。

　苦しむ祐理、すでに倒れたエリカ、リリアナ、恵那。

　彼女たちにすまないと思う前に、護堂は猛たけ々だけしく誓った。みんなを苦しませた代わりに、俺は必ず勝ってみせると——。

　隙を突いて放った『剣』が、みごと斉天大聖の腹部を貫つらぬく！

「スキタイの故こ地ちのひとつであるコーカサスには、英雄バトラズの伝承が残っている。若き日の彼は、己おのれを鍛きたえるため

に進んで炉に入る。竜の群れを虐ぎやく殺さつし、その骸むくろを燃やして熱した炉のなかにだ。そうして灼かれた体をバトラズは海に入って冷やし、鍛たん錬れんは終わる。この結果、彼は鋼の肉体を得て不死身となる」

　大聖の肉と霊体を『剣』で切り分ける。ひかりを捜して奥深くに進む。

「これは斉天大聖・孫悟空の前半生と酷こく似じした伝承だ。スキタイの流れを汲くむ英雄と、ほぼ同系統の伝説を持つサル。孫悟空にスキタイの剣神としての相をあたえたのは、まちがいなく漢かん人じんに同化していった騎馬の民たちなんだ！」

　いた。見つけた。ひかりの存在を感じる。斉天大聖・孫悟空の巨大な霊体のなかにひっそり監禁された、ちっぽけな人間の少女。たしかに見つけた！

　護堂は突進し、斉天大聖の腹に手を突っ込んだ。彼女の体を引きずり出す。

「お兄さま、絶対助けてくださるって信じていました！」

　妹よりも歳とし下したの少女がしがみついてくる。

　巫女装束に包まれた体を抱き止めながら、護堂は大聖に言った。

「……たしかに返してもらったぞ。これでようやくハンデのない勝負ができるな！」



第７章　神々と神殺したち、激戦の果てに雌雄を決す

1

　めった打ちにされた護ご堂どうと、まさしく『腹をかっさばかれ』た斉せい天てん大たい聖せい。

　双方、倒れていてもおかしくない負傷である。それでも闘志が痛みを麻ま痺ひさせ、体を無理矢理に突き動かす。神と神殺しならではのデタラメだ。

　見守るのは救い出された万ま里り谷やひかりのみ。もうひとりの思念も感じなくなった。

『剣』の負担を分かち合ったせいで祐ゆ理りも限界を迎え、どこかで昏こん倒とうしているのだ。天空からは第二の太陽も消え失せ、頼るべき『剣』も残っていない。

「ひかり……体の方は大丈夫か？」

「はい！　兄さまの――みなさんのおかげで、わたしの方は何ともありませんっ」

「そうか……じゃあ、すぐに離れて避難しろ」

　自みずからが抱きかかえる少女に、護堂はささやいた。

「そんな！　わたしも兄さまの戦いをお助けしたいです！　他の姉さま方みたいに、どうか助すけ太だ刀ちさせてくださいっ」

「ダメだ。ここでおまえにできることは、もう何もない。それに」

　真しん摯しに訴えるひかりを冷たく突き放す。戦いはこれからが佳か境きようなのだ。

「ひかりにはみんなのことを頼みたいんだ。エリカもリリアナも清せい秋しゆう院いんも、離れた場所にいるおまえの姉さんも力を使い果たしている。あいつらを助けて、介かい抱ほうしてやってくれ」

「……そ、そうしたら、わたしも兄さまのお役に立てますか？」

「ああ。頼む、まかせられるヤツはおまえしかいない」

　九回裏、わずかに一点のリード。点差を死守するため、野手たちの奮起を促す——。なつかしい捕手時代の記憶が甦よみがえってくる。腕のなかの少女を仲間と見なして、大事な役目を託そうとした。ひかりの頭にぽんと手を置く。

　すると、一二歳の媛ひめ巫み女こ見習いは熱っぽく護堂を見つめた。

「はい……兄さまのお望みどおりにいたします。でも、必ず生きてお帰りくださいね。そうしてくださらないと、二度と兄さまのご命令には従いませんからっ。約束ですよ？」

「わかった。おまえがずっと俺の言うことに逆らえないようにしてやるよ」

　いい子だ……と誉ほめるように、小さな頭をくしゃくしゃに撫なで回す。

　すると、ひかりは幼い顔を寄せてキスしてきた。

「恵那姉さまたちからお聞きしています。兄さまに術をかけるには、こうするしかないって……。おつかれを癒いやすための術です。せめて、これくらいは……」

　ひかりは名なごり残惜おしげに、倒れているエリカに駆け寄っていった。

　ずいぶんと大人っぽい、女らしい表情をしていた。子供だと思っていたが、あの分なら頼りにできそうだ。今の術のおかげか、痛みもうすれてきた。

「ハッ！　そのざまで女といちゃつくとは余裕じゃのう、草くさ薙なぎの」

　今の一幕を斉天大聖が鼻で笑っていた。

「まだまだ勝負を愉たのしませてもらえそうじゃ。善ぜん哉ざい善ぜん哉ざい！」

「ダメージがあるのはあんただって同じだ。人をからかっていていいのか？」

「我には切り札があるのでかまわんさ。……ほれ。万一の備えはしておくものじゃのう」

　大聖の左手に、見覚えのある姿が忽こつ然ぜんと顕あらわれた。

　あれは《神祖》アーシェラの体！　しかし小さい。背丈が縮んでいて、まるで人にん参じんだ。こんな状態でも魔女は生きているらしかった。ハァハァと弱々しく息をしている。

　そんな極小の魔女に、斉天大聖はパクリとかぶりついた。

　ぎゃあああああ！　魂たま消げるような絶叫。神しん猴こうの牙きばとあごはかまわずバリバリ噛かみ砕く。『西さい遊ゆう記き』の人にん参じん果かさながらに、ごくんと呑のみ込んでしまう。

　直後、斉天大聖の体から力が——すさまじい神力があふれ出てきた。

「ふはははは！　ほれ、蛇へびの神を喰くらい、我はこのとおり精力を取り戻した！　ふたたび天下無双の孫そんさまに逆戻りじゃ！」

「あ、あの魔女を回収したのはこれのためかよ⁉」

　大聖は、またも神通力で如によ意い金きん箍こ棒ぼうをつぎ直し、稲いな妻ずまのごとく振るう。

　地面へ身を投げる護堂。その上を神しん珍ちん鉄てつの棒が駆け抜ける。

『剣』を失った以上、べつの化身にならなくては。だが『駱らく駝

だ』では空を飛ばれたら対抗できない。『白馬』も使ってしまった。他に武器はないのか!?

　…………。

　大聖の攻撃を避けながら、護堂は皮肉っぽい声を聞いた。

　……やっと己オレを求めたか。まったく世話の焼ける男よ。

　右腕に冷たい感覚が宿る。貸し出し中だった劍つるぎが戻ってきたのだ。この手にない間にも刃やいばを研とぎ、鋼はがねを鋭くして出番を待っていた新参の武器が。

　そこに如意金箍棒が襲ってくる。護堂は獣けもののように横に跳んでかわした。

「むっ。しまった、ちと力が入りすぎたか」

　標的の代わりに大地を抉えぐる鋼の棒。大聖がそれを抜く間に、護堂は息を整えた。

「……くそっ。おまえみたいに物騒なものを使う気はないっていうのに」

　愚ぐ痴ちが口をついて出る。しかし、口元には笑みに似た亀き裂れつができあがっていた。

　武器がなくとも戦うつもりだった。しかし、ないよりある方がマシというものだ。万に一つも勝ち目がない状態から、千に一つ程度の勝機を見み出いだした。これで燃えなくては神殺し——否、男ではない！

「くくっ、おぬしにも切り札はあるようじゃのう。愉しませてもらうぞ羅ら刹せつの王よ！」

　斉天大聖はとんぼを切って黄金の雲に乗り、空を駆け上がる。

　どんどん加速していく。ふたたび神速の領域に乗り込むつもりなのだ。

　護堂が手にした新たな武器で、あの速さは防げない。しかし、最後まで戦う。そのうえで勝利を掴つかむ。どんな窮きゅう地ちでも

己が勝つイメージを持てぬ者に、勝利は決して舞い込まない！

　護堂が絶望的な攻防に身を投じようとした瞬間——

　一筋の流星が空を駆け抜けた。

　天あま翔かける竜のごとき、青白き閃せん光こう。あれは黒ケープの戦士が操る魔銃の弾丸！

　黄金の流れ星と化した斉天大聖を追って、光の竜は飛ぶ。しかし、追いつくよりも先に獲え物ものは消失してしまった。神速の世界へ入り込んだのだろう。しかし、ジョン・プルートー・スミスの魔弾もすぐに消え失せた。こちらも神速に至ったのだ！

『ちっ。ならば、こうじゃ。哈ハ——！』

　消えたはずの斉天大聖の姿が、いきなり空中に大増殖した。

　一〇〇体以上の神猴が空を埋め尽くす。分身の術だ！　しかし、その分身は次々と爆発し、雲うん散さん霧む消しようしていく。神速の魔弾は全ての斉天大聖を撃げき墜ついせんと飛ひ翔しようしているのだろう。

　暁あかつきの空に焔ほのおの花が咲き乱れるような壮そう麗れいさであった。

『五ご行ぎよう相そう克こく、金きん克こく木もく！』

　分身が散さん華げしていく間に、大聖は口こう訣けつを誦しようす。

　すると神猴の体から稲妻が放たれ、眼前に迫っていた蒼あお白じろき魔弾とぶつかり合った。

　ついに魔弾は消滅。ただし、大聖と黄金の雲も通常のスピードに戻ってきた。おそらく、神速を使いながら他の術はかけられないのだろう。

「余計な手間をかけさせおって。もうひとりの神殺しめ、のこのこと参ったか」

「のこのこ？　いいや、ちがうな。私は君を葬ほうむるためにやっ

てきた。ジョン・プルートー・スミスの参戦は、君を冥めい府ふに導みちびく運命さだめの先ぶれと思うべきだ」

　遅れてやってきたのは、もちろん仮面のカンピオーネだ。

　倒れた少女たちは姿を消していた。ひかりが運び出してくれたようだ。この短時間で全員を動かせるほど力持ちでもないだろうから、治ち癒ゆの術でも使ったのだろう。

　いずれにしても、今ここに集つどったのは神と神殺し、その二種の存在のみ！

「ふん。大たい言げんを申す男よのう……我が弟たちを見たであろうに。どうれ、我ら兄弟の絆きずなを以もつて、神殺しどもを蹴け散ちらしてくれん！　北海より出でよ、我が賢けん弟てい・猪ちよ剛ごう鬣りよう！　西せい域いきより出でよ、我が賢弟・深じん沙しや神しん！」

　ジョン・プルートー・スミスの登場によって、斉天大聖の神力が爆発的に高まった。

　小さな像をふたつ、宙に投げ上げる。

「魔を討ち、鬼きを裂き、羅ら刹せつを屠ほふる剣神の宿星よ！　我に怨おん敵てき征せい伐ばつの利剣を授けよ！」

　ふたつの像が一気にふくれ上がり、姿を変えた。

　まず顕現したのは猪頭の巨漢。黒衣、そして同色の甲かつ冑ちゆうに身を包む。しかも登場と同時に巨大化して巨神となる。身の丈たけ一五メートルほど、そして三さん面めん六ろつ臂ぴ！

　次いで顕現したのは、蒼あお黒ぐろい肌と逆立つ紅い頭髪の鬼神。

　その足下より間かん欠けつ泉せんのごとく噴き上がるのは、水によって形作られた水竜！

「くくくく、今度こそ長めの出番を期待しておるでござるよ、兄者！」

「お呼びに応じて馳はせ参じました、大だい兄けい。何なりとお申

し付けを」

　顕現した猪剛鬣と深沙神が、ゆったりと飛ぶ斉天大聖の背後で吠ほえる。

　三柱もの神を前にして、護堂は仮面の助っ人に言った。

「来てくれたのはありがたいけど、人数が合ってないぞ。三対二じゃ不利は変わらない」

「その程度の暗算、君に教わるまでもない」

　後輩から指摘されて、スミスはオーバーに肩をすくめた。

「しかし、ひとりよりふたりがいい……という言葉もある。今回のような場合、特に当てはまる箴しん言げんではないかと思う。何より私も見せ場は欲しい。こういうおいしい局面を独り占めする気だとしたら、君はずいぶんと気前の悪い男だ。侮ぶ蔑べつに値あたいするな」

　軽やかな饒じよう舌ぜつに、護堂は苦笑を誘われた。もっと恩着せがましいことを言っても許される場面なのに、この言いぐさ！

　目の前のコスプレ趣味人に対して、不思議な親しみを覚えた。

「あんた流に言うなら、こうだな。ジョン・プルートー・スミスは草薙護堂が仲間と認めるに当たって、何の障しよう碍がいもない男だ——ってところか」

「おやおや。君はこんな得体の知れない男を信用する気か。後悔しなければいいが！」

　護堂と肩を並べて神々を見上げながら、スミスも軽口をたたく。

　打てば響くようなやりとりが、奇妙に心地よい。こいつと俺は、口惜しいことにそこそこ気が合うようだ。意外な相性のよさを確認して、護堂はニヤリと笑った。

「余計なお世話だ。俺は運がいいから、仲間選びで後悔したことは今までもないし、これからもきっとない。ああ、それとな」

　沙さ耶やの宮みや馨かおるとの電話を思い出す。

　陸りく鷹よう化かが聞いたらしい物音。その意味するところはひとつだ。

「ひとりよりふたり、ふたりより三人……っていうのを知ってるか？」

　石せき化かした東とう照しよう宮ぐうの敷地内で、ついにその変化は起きた。

　まず吹き飛んだのは、社やしろの中ちゆう枢すうと呼ぶべき本ほん殿でんと拝はい殿でん。爆薬でも仕掛けてあったように、轟ごう音おんと石片をまき散らしながら崩壊していった。

　次いで陽よう明めい門もん、さらに神しん厩きゆう舎しや、五ご重じゆうの塔とう、そして一いちの鳥とり居い。

　続けざまに爆発していく。もともと斉天大聖に石化させられて、復旧はかなり難しいと目されていた。とはいえ重要文化財があっさり破壊されるのを見て、沙耶宮馨は「こりゃ参ったね」と賛嘆し、甘あま粕かす冬とう馬まは「思い切りがよすぎますな」と瞑めい目もくした。

　ただひとり平静なのは陸鷹化。最後に一の鳥居――日光東照宮の入り口ともいえる門が爆散するのを見て、今までずっと手近に置いていた包みを取り上げた。

　砕けた石の粉ふん塵じんが煙のごとく立ちこめるなかへ、彼は即座に入っていった。

「どうぞ、師し父ふ。お着替えをお持ちいたしました」

「ご苦労。おまえもすこしは気が利きくようになりましたね。誉ほめてあげましょう」

「勿もつ体たいなきお言葉、かたじけのうございます」

　白い煙に浮かび上がる美少女の影に、陸鷹化は恭うやうやしく荷物を差し出す。柳りゆう腰ようの佳か人じんがぱちりと指を鳴らせば、それだけで着替えは終わった。

「――北ほく冥めいに魚うおあり、その名を鯤こん！　その大いなる、幾千里なるやを知れず。化して鳥となり、名を鵬ほうと為なす！　奮ふるい立ちて飛べば、鵬翼、垂すい天てん之の雲くものごとし！」

　口こう訣けつが叫ばれると、地上はいきなり翳かげった。雲が陽光をさえぎったのではない。

　巨大な聖鳥――大たい鵬ほう金こん翅じ鳥ちようが飛んできたのだ。この鳥が頭上を飛び去った瞬間、佳人は影のように消えた。

「これで役者はそろったわけだ。ぼくたちも決着を見届けに行かないと駄目かな？」

「特設リングサイド席に命の保証はないでしょうけどねェ」

　沙耶宮馨は腹心と軽口をたたきながら、うなずき合った。

2

　戦せん場じようヶが原はらの上空を巨大な聖せい鳥ちようが飛ぶ。

　翼よく長ちようでいえば、おそらく数百メートルはある巨きよ躯く。雄ゆう渾こんにして雄大な飛び姿を、護ご堂どうは呆ぼう然ぜんと見上げた。こいつはきっと、最後の参加者を乗せているにちがいない。だが、ここまで目立つ乗り物でなくともよいではないか。

　はたして巨鳥の背より、麗れい貌ぼうの天てん女にょが飛び降りてきた。身にまとうチャイナドレス風の衣装がメリハリのある体つきを引き立てている。

　明めい眸ぼう皓こう歯し。彼女の美を前にすれば花は恥じらい、月はその輝きを自みずから閉じるであろう。

　舞い降りる羽毛のように着地を決めたのは、もちろん羅ら翠すい蓮れんである。

「待たせましたね大たい聖せい、そして我が弟よ」

　彼女の呼びかけに、斉せい天てん大たい聖せいが口を挟んできた。

「ほう。弟じゃと？」

「ええ。ここにいる草くさ薙なぎ護堂はわたくし羅翠蓮の義弟。あなたの兄弟たちと同じです」

「ハッ！　それがしどもと同じとは大きく出たわい」

「ならば、まとめて蹴け散ちらし、義兄弟の契ちぎりごと葬ほうむり去るのがよろしいかと……」

　斉天大聖の義弟たちもうそぶいている。

　猪ちょ剛ごう鬣りようは好色そうに教主の姿をじろじろ見下ろしながら。深じん沙しゃ神しんは竜の頭上で雄お々おしく決めている最中なのに、尚も陰いん々いん滅めつ々めつと。対して羅翠蓮は余裕の微笑を見せる。

「ふふふ、どちらの義兄弟が強壮なるか、ここで雌し雄ゆうを決するのは悪くない趣向です。おまえもそう思いませんか、弟よ」

「あ、いや、俺たちだけじゃなくて、もうひとり参加者もいるわけで……」

　護堂としては、ただ事実を口にしただけなのだが。

　じろり。義姉にして覇は道どうの先せん達だつから、剣けん呑のんなまなざしを向けられた。

「おまえは姉弟水入らずの立ち合い、初めての共同作業に得体の知れない男を交ぜるつもりなのですか!?　愚ぐ昧まいな。それはわたくしという姉に対する侮ぶ辱じよくであり冒ぼう涜とくです！」

　得体の知れない男とは、ひどい呼び方であった。

　仮面に黒マント、舞台役者のような衣装の該がい当とう人物は、ぼそりとささやいた。

（ほう……姉、か。出会って数日でそこまで取り入るとはな……。女性を籠ろう絡らくすることにかけては、やはり君はすさまじい手て管くだを持っているらしい）

（取り入るとか妙なことを言うなッ。すこし黙ってろ！）

　ジョン・プルートー・スミスに返答してから、護堂は言いつくろった。

「つまり、あれです。敵の神様が三体もいるなんて滅多にない状況なのに、俺たちの方がひとり足りないのも、みっともない話じゃないですか」

「みっともない？」

　羅翠蓮が反応した。プライドの高い彼女は、この言葉にやはり弱いようだ。

　ここで『寡か兵へいを以もつて多た勢ぜいを討うつは武ぶ門もんの誉ほまれ』と言われれば、反論の余地はない。しかし、これはむしろ見栄っぱりの理屈ではないか。天てん上じよう天てん下げ唯ゆい我が独どく尊そんの羅翠蓮、プライドは高くとも見栄っぱりではない。……と、期待したい。

「敵の大軍には同じくらいの陣容を整えて戦わないと、面メン子ツに関かかわるんじゃ」

「なるほど、一理ありますね。よいでしょう、ここは進言を容いれ、同数の兵を以て戦いましょう。大将軍、大元帥たる者同士が大軍を率いてまみえるは武の正道。——ですが弟よ、おまえの振る舞いにはひとつ不満があります」

　じーっと文句を言いたげに教主が見つめてくる。彼女は何を言いたいのだ？

「ふ、不満？　俺、何か悪いことでも……？」

「もちろんです。わたくしは武の至し極ごくにして、至上の崇すう敬けいを捧ささげられて然しかるべき姉。そのような貴人に対して、ふさわしい呼びかけをせよと教えたばかりなのに……」

　詠えい嘆たんされてしまった。まさか、今あれを言えと⁉

「お、おおおおおおおお…………姉、さん……」

「お姉さま、です。覚えの悪い子ですね。いいでしょう、いずれ義弟の道の何たるかをおまえに教示し、研けん鑽さんさせてあげます」

　羅翠蓮はきっぱりと言ってから、もうひとりの神殺しに向き直った。

「察するに、あなたが亜ア米メ利リ加カ国の『王』ですね？　我が姓せいは羅ら、名は翠すい蓮れん、字あざなは濠ごう。これよりの仕合において、我が陣中に加わることを許します。羅濠と共に戦いなさい！」

「……それはご丁てい寧ねいに。ジョン・プルートー・スミス、微力を尽くしましょう」

　上から目線の共闘要請へ、黒衣の王は無難に応じた。

　どうやら二〇〇歳オーバーの魔教教主より、年齢不詳の青年の方が大人だったようだ。安あん堵どした護堂はふたりの『同族』と肩を並べて、三妖神と向き合った。

　巨大化した三さん面めん六ろつ臂ぴの猪ちよ剛ごう鬣りよう。

　騎獣である水竜に鎌かま首くびをもたげさせ、その頭に乗る深じん沙しや神しん。

　そして、この二神を率ひきいる斉天大聖・孫そん悟ご空くう。黄金の雲に乗る彼はふたたび上昇し、空へ舞い上がっていく。ついに三対三の決戦がはじまった。

「くくく。では、それがしから相手を選ばせていただこうか！　鄙ひなにも稀まれな、嫦じよう娥がのごとき神殺しよ。天てん蓬ほう元げん帥すいでもある猪剛鬣さまにはおぬしこそがふさわしいわい！」

「……そういえば、あなたは北天の守護星神でしたね」

　劣れつ情じよう交じりの視線を向けられて、武ぶ林りんの至し尊そんは眉まゆをひそめた。

「美び猴こう王おう・孫そん悟ご空くうの側近といえば、辟へき邪じやの神たる天蓬元帥神・猪ちよ悟ご能のう。野や猪ちよより出いでて家か猪ちよに変じ、広く民たみの間で流る布ふした神格。とはいえ、ここまで浅ましき身に成り果てるとは、なんと嘆かわしい」

野猪とは日本でいう猪いのしし、家猪は豚ぶただ。

斉天大聖の知識を得たとき、従属神たちについても護堂はある程度学んだ。

天蓬元帥としての猪悟能は、もともと北ほつ極きよく紫し微び大だい帝てい（北極星を神格化した神だ）に仕えていた武神である。その信仰が最も隆盛したのは、おそらく隋ずいから宋そうにかけての時代。三面六臂に被甲武装した姿を、画家たちも好んで描いたともいう。

小説や戯ぎ曲きよくにもよく登場するうち、『西さい遊ゆう記き』の猪ちよ八はつ戒かいとも結びついた。

それだけ人気のある神だったのに、こんな助すけ平べいになりはてて——。怒りに火がついたらしい。羅翠蓮の肩から陽かげ炎ろうが立ちのぼり、黄金の仁に王おう尊そんが一体、顕れる。

巨大化した猪剛鬣にも劣らぬ体格で、逞たくましい裸形を露あらわにしている！

「一いつ勁けい即そく至し！　大たい勁けいを以もつて小しよう邪じやを制す！」

教主が口こう訣けつを叫ぶと、背後の仁王尊が猪剛鬣の巨体を抱え上げてしまった。

「ぬ、ぬおおおおおおっ⁉　なんという大力！」

ブンッと猪剛鬣をぶん投げる仁王尊。まるで砲丸投げのフォームだった。

好色な巨神は遥はるか彼方へ投げ飛ばされた。

ズン‼　地響きが轟とどろく。仁王尊を従えて、羅翠蓮は倒れた巨神へ駆けていく。猪剛鬣は巨体のわりにすばやく立ち上がり、六臂に武器を呼び出した。

　一段目の両腕は剣と戟げき。二段目の両腕は斧おのと棍こん棒ぼう。三段目は弓と矢。

　黒衣黒甲の猪頭神と、黄金の仁王尊を率いる羅翠蓮。巨体同士の戦いが開始した。

「竜よ、あの者らを蹴散らしなさい。——おん、あふるあふるさらさらそわか！」

　いきなり水がはじける。

　深沙神の乗る水竜が体の一部をほどき、地上に振りまいた。

　護堂とジョン・プルートー・スミスはとっさに跳とび退のき、この攻撃を避けた。水は強烈な水流となって戦場ヶ原を斬り裂いていく！

　むきだしの岩や生い茂る樹木などを、紙のように断ち切る水。

　まるでウォーターカッターだ。護堂の横で、スミスが感心したようにつぶやいた。

「仏教にベースを持つ鬼神の類たぐい……というところか。あの手の姿形だから、もっと単純に力押しで来るかと思ったのだがね。なかなか芸が細かい」

　深沙神は鬼形。見るからに恐ろしげな顔と、凶きよう猛もうそうな肉体を持つ。

　言われてみると、もっともな感想に思える。ただし、陰いん々いん滅めつ々めつなくせに知的な風ふう貌ぼうを持つため、あまり暴力的な印象はないのだが。

「深沙の神は古来、幾いく多たの沙しや門もんに修行の道案内をしてきた導者。しかしてその前身は、人を殺あやめ、殺せつ生しよう戒かいを犯す罪人の神……」

　竜の上で深沙神がほくそ笑んだ。

「そして身み共どもは天界の水すい官かん大たい帝てい殿にて捲けん廉れん大将の位くらいをいただき、四し海かい竜りゆう王おうを率いたこともございます。この程度は昔とった杵きね柄づかという

ものでーー」

「ああ、水部だか雷部だかいう、道タ教オの分類か」

　水部とは、道教の天界における水軍神の詰める部署だ。教授の魔術でカンニングした護堂ほどではないが、スミスも他国の神話にそこそこ通じているようだった。

「ならば、私も芸を披ひ露ろうするべきだな。ーー冥めい王おうの名の下もとに命ず。天を落とす黒き翼を捧ささげよ。空よ、我がためだけに胸きよう襟きんを開け！」

　スミスが言こと霊だまをささやくと、地面が揺れ出した。

　かなり激しい地震。地面にひびが走り、大きく揺さぶられる。揺れる大地の上で、変身がはじまった。黒衣の怪人は黒き魔鳥に変じながら巨大化した。

　翼長一〇メートルほどの怪鳥となって、朝焼けの空へ駆け上がっていく。

「さあ、我が変化の秘ひ奥おうをとくと味わうがいい。ついてこれるかな!?」

「聞いた風ふうな口を！　身共も見くびられたものでござりますな！」

　急上昇していく黒き魔鳥を追って、深沙神の水竜も飛ひ翔しようする。

　空へ、空へ。駆け上がる魔王の黒翼と、水より成る神秘の聖竜。

　だが地上はあいかわらず激しく揺れている。元凶はおそらく米国のカンピオーネだ。

　彼の権能は『贄にえ』を捧げることで成立するとエリカたちから聞いた。この地震も犠ぎ牲せいのひとつなのだろう。最初の揺れほど激しくないが、震度でいえば３か４に相当しそうな地震が断続的に襲ってくる。

　しばらく続きそうな気配だった。なんて傍はた迷めい惑わくなヤツ！

　自分のことは棚上げして護堂は呆あきれ、揺れる地面の上で斉天大聖と向き合った。

「ふふん。さあて、我らもはじめるとするかね。準備はいいか、草薙の？」

「ああ。どこからでも来い。あんたを返り討ちにしてやるよ」

　黄金の雲から飛び降りてきた大聖に、護堂はうそぶいた。

　ウソだ。準備はまったく万端ではない。例の劍つるぎがあるとはいえ、閃せん電でん神しん速そくの神しん猴こうを相手にして対等に戦える化身はない。しかし、闘志は一向に衰おとろえない。たとえ敵の喉のど笛ぶえを噛かみちぎってでも勝利をたぐり寄せてやるつもりだった。

　……いや。本当に使える化身はないのか？

　奇妙な確信がある。己にはまだ武器があるという、わずかな確信。

　戦えと訴える声、斉天大聖を倒せという声もかすかに聞こえる。ああ、そうか。

　理解した護堂は、注意深く声をたぐり寄せた。

　ウルスラグナ第九の化身『山や羊ぎ』。今こそ真に掌しよう握あくした。

　群衆の想おもいを魔力に変えて、稲妻を操る祭司の力。ヴォバン侯こう爵しやくとの戦いでは死せる従じゆう僕ぼくたちの意志を力とした。だが、ただ意志を束ねるだけではそうそう使いこなせない。祐理と精神感応でつながったおかげだろう。この化身の本当の使い方を今こそ悟った。

　王の権けん威いを以もつて人々の意志を引きずり出し、まとめ上げるのだ。

　護堂は精神感応の触しよく手しゆを広げていった。戦場ヶ原を越えて奥おく日につ光こう一帯に、そして日光の市街へと。一万人以上いる犠牲者たちの精神に揺さぶりをかける。

そう、斉天大聖によって変身させられ、今は眠りについている人々の精神に。

彼らに悪夢を吹き込んでやる。平和に暮らしていたら、ある日突然サルになる。全て『まつろわぬ神』斉天大聖の仕し業わざだ。おまえたちは運よく助かった。でも、大聖はまだ消えたわけじゃない。

おまえたちをサルに変えた神様が憎くないのか？

おまえたちを玩おも具ちゃにして遊ぶ神様にムカつかないか？

おまえたち、俺に斉天大聖を倒してもらいたくはないか!?

精神感応力で人々の夢に分け入り、煽せん動どうし。彼ら群衆の意志を力ずくで束たばねる。この事件の犯人を教え、怒りをあおる。俺に力を寄よ越こせ、悪いようにはしない。俺に力を寄越せ、憎き大敵を必ず討ち取ってやる！

眠れる人々の夢に怒りが渦うず巻まき、斉天大聖への恐怖がふくれ上がるのを感じる。

そして、これこそが『山羊』の礎いしずえとなるのだ。ついに護堂の左手から雷撃が放たれる。

「言霊の技を以て不義なる者、邪じやなる者を征す！　これ勝利の天則なり！」

「む……ぬおっ!?」

斉天大聖はしなやかな身のこなしで電光をかわした。

だが、もう好きにはさせない。新たな力を得た護堂は、大敵を鋭くにらみつけた。

3

広大な湿原を舞台に、特撮映像さながらの肉弾戦が白熱する。

身の丈たけ十数メートル、三さん面めん六ろつ臂ぴの猪ちよ剛ごう鬣りよう。

迎え撃つ黄金の仁に王おう尊そんは、粗末な衣ころもで下半身をおおうだけの裸ら形ぎようだった。魔ま教きよう教きよう主しゆが方術で呼び出した長ちよう槍そうをたずさえ、穂先を猪剛鬣に向けている。中国において『武器の王』と呼ばれる槍は、羅ら翠すい蓮れんが最も好む得え物ものだった。

両者の戦いは丁ちよう々ちよう発はつ止し、一瞬のまばたきも許されない激しさで進む。

猪剛鬣は六つの腕にそれぞれ武器を持つ。

剣・戟げき・斧おの・棍こん棒ぼう・弓矢。それらを不思議な歩法と共に用いていた。仁王尊の周囲をぐるぐるとまわりながら攻めかかるのだ。

仁王尊との距離が遠いときは矢を撃ち、戟を振り回し、近づけば剣、斧、棍棒を打ち込んでいく（ちなみに戟とは、槍のごとく長い柄に『矛ほこ』と鎌かまに似た『戈か』を両方つけた武器である。矛で突き、戈で切り裂いて用いる）。

これを猪剛鬣は、残像を残すほどの超高速で行う。

すさまじい速さであった。五つの武器は途切れることなく仁王尊を襲い続ける。三面六臂がさながら三十面六十臂、六十面百二十臂に見えるほどであった。

だが、凌しのいでみせる魔ま教きよう教きよう主しゆの武ぶ功こうたるや、まさに神技。

絶えず円を描き続ける猪剛鬣とは逆に、輝ける仁王は立ち位置を変えない。円の中心に立ったまま、槍を振るう。

ひとつしかないはずの穂先が、千に分かれて見えるほどの連続突き。

打ち落とすのは、猪剛鬣の五つの武器たち。飛来する矢を撃げき墜ついし、うなる戟を払いのけ、剣をはじき、斧を打ち返し、棍棒を縫ぬい止める。

　楕だ円えんを描く猪剛鬣が仁王の背後にまわったときも、振り向いたりはしない。穂先の逆側――槍の石突きで背後からの攻撃を全て払いのけてしまう。

「くくく、そのむさ苦しい顕けん身しんでは、玉ぎよく砕さいの覚悟なしにそれがしを討うつことはかなわぬぞ。ここらで降こう伏ふくするのもよかろうて。それがし、おぬしの玉のごとき肌を愛めでて進ぜるゆえ……」

　元げん帥すい神しんは動きを止め、ふくみ笑いと共に告げた。

　これまで攻めていたのは常に彼。神技を見せていたとはいえ、羅翠蓮は防ぐ一方。わずかな間断もなく襲ってくる五武器を凌ぐため、攻勢に転じるゆとりがなかったのだ。

　しかし、羅翠蓮は柳りゆう眉びをひそめて言い切った。

「愚おろかですね、元帥。北ほつ極きよく紫し微び大たい帝ていに仕える大元帥神にふさわしき武勇、たしかに見せてもらいました。そして、見切りました。あなたはわたくしの敵ではありません。慈じ悲ひを乞こうべきは天てん蓬ほう元帥・猪剛鬣……あなたの方です」

「ハ！　なんと、バカげたことを言う！」

「本当にそう思いますか？　わたくしはあなたの底をすでに見極めております。この羅ら濠ごうとの一騎打ちを望んだのは失態でしたね」

　この大たい言げんに、なぜか三面六臂の軍神は三つの顔をわずかに引きつらせた。

　そして魔教教主は、黄金の仁王尊を消し去ってしまう。

「三面六臂を駆使する武功、まことにみごと。ですが、武ぶ林りんの至し尊そんたる羅濠は王おう者じや之の風ふうを以もつて、正面より打ち破りましょう。さあ、参りなさい！」

　敵が神であろうとも、上座から見下ろすのをやめない。

　これこそ羅翠蓮の真しん骨こつ頂ちよう。生身の体に寸すん鉄てつも帯びぬまま、武林の至尊は豪語した。

ジョン・プルートー・スミスと深じん沙しや神しんの戦場は空中であった。

すっかり夜も明けた、さわやかな早朝の空。今日はよく晴れそうだ。蒼そう穹きゆうに浮かぶ雲を次々と突き破りながら、スミスは高速で飛ひ翔しようする。

水竜の頭に乗った深沙神も、魔鳥の後方にぴったりとついてくる。

深沙神は生身である。そのくせ高速飛行の加重をものともしない。さすが神、生物としてありえないほど頑丈なのか、何らかの呪じゆ法ほうで身を守っているのか。

「八はち百ひやく流りゆう沙さの界、三さん千ぜん弱じやく水すい深ふかし、鵞が毛もう漂い浮かばず蘆ろ花か底に淀よどみて沈む！」

深沙神が言こと霊だまを唱となえると、空に浮かぶ雲同士がくっつき合った。

細長い形状に変わっていく。その表面がきらきらと輝き、透明に透き通り、程なく竜の形となった。雲と大気中の水分を集めて、新たな水竜を作ったのだ。

それも一匹ではない。次々と水竜は生まれ、深沙神が乗る分を合わせれば全部で九匹も！

「ほう、なかなか工作が上じよう手ずと見える！」

『魔鳥』と化したスミスは賛辞した。

九体もの水竜が入れ替わり立ち替わり、凶きよう猛もうそうな顎あごを開き、喰らいついてくる。

それを巧みな飛翔でかいくぐるスミス。黒き魔鳥は速度だけでなく、飛行の機敏さにおいても非凡であった。しかし、さすがに全ては避けきれず、ある水竜の長い頸けい部ぶに翼をかすめられた。仮面の王が真に驚きよう愕がくしたのはこのときだった。

かすっただけで翼が裂け、流血した。これは地上で見たウォーターカッターか。

水竜の体は全身が刃。ふれたもの全てを斬り裂く力があるのだ。

「これはこれは……ダンスに誘うのも命いのち懸がけということか！」

翼が傷ついては満足に飛べない。しかし、黒き魔鳥は翼を動かさずに飛翔する。

風に乗り急上昇、風から外れて急降下。海辺で風乗りをするツバメのごとく、あざやかに飛びまわる。そうして水の刃でもある水竜九匹の波状攻撃を避けていく。

だが、もちろんそれで逃げ切れるとはスミスも思わない。

「煙吐く鏡、テスカトリポカの徴しるしよ！」

漆しつ黒こくの両翼から灰色の煙が吐き出され、水竜たちにまといついていく。

この煙には呑み込んだものを毒で冒おかしたり、麻ま痺ひさせる呪力がある。普通ならこれで弱らせたあとで存分に料理できるのだが——

「千の邪じやよ、万の穢けがれよ！　水に逐おわれ、清められ給たまえ！」

負けじと深沙神も言霊を唱えた。

すると九体の水竜から蒸気が立ちのぼり、灰色の魔煙を浄化していく。呪的な穢れを祓はらう清めの神力だった。だがスミスは負けじと、魔鳥のくちばしを開いた。

そこから魔弾を放ち、深沙神本体を狙う！

飛ひ翔しようする水竜の一体。その頭上に乗る蒼あお黒ぐろい鬼神。

アルテミスの閃せん光こうが神を目指して駆ける。だが、魔弾の軌道上にべつの水竜が割り込んできた。創造主の身代わりとして頭

部を撃ち抜かれ、その水竜は雲うん散さん霧む消しようした。

　しかし、魔弾は進攻を止やめない。そのまま天あま翔かけていく。深沙神へと飛んでいく！

　次々と水竜が間に入り、次々と撃ち抜かれて霧散していった。

　残る竜は深沙神の乗騎と、もう一体のみ。そこで最後の水竜が蒼黒き鬼神をかばい、楯たてになり――魔弾を跳ね返した。水竜の体はいつのまにか凝ぎよう固こし、氷になっていた。

　水竜改め氷竜に弾かれた魔弾は、遥はるか空高くへと飛んでいった。

「ふふふふ……やっとその弾を打ち返す氷が造れました」

　深沙神が陰気そうに笑う。彼が乗騎とする竜も氷結し、氷竜に変じていく。

　いや――。それどころか大気中の水分を使って、新たな竜まで次々と造りだす。やはり水ではなく氷の体を持つ氷竜。ふたたび九匹もの大軍になった！

　スミスは魔鳥のくちばしを開き、またも魔弾を放つ。

　しかし、自みずから当たりにいった氷竜に弾はじかれて、やはり天高く明後日あさつての方向へ消えた。

「ふむ……呪法を跳ね返す氷の鏡か。なかなか厄やつ介かいな神力だ。だが、これはこれで好都合な展開かもしれないな」

　切り札を無効化されたくせに、スミスは余裕めかして言った。

「ほう？　と、申しますと？」

「いや、以前から不思議に思っていてね。……君たち神々の手強さは、必ずしも神としての権威や知名度に比例しない。なまじな大神よりもマイナーな小神がすさまじくしぶといケースもある。一体、何がその差を生むのか――確認するよい機会だと思ったのさ」

第九の化身『山や羊ぎ』の能力は、稲いな妻ずまを操ること。

ただし、敵とする者を民衆にも敵として認めさせねばならない。そして、近隣にいる人々から無差別に生命力を奪い取らなければならない。

前回使ったときの記憶を思い出しながら、護堂は雷撃を放った。

突き出した右手から、電光がほとばしる。イオンの異臭を放ちながら、強烈な大電流が斉せい天てん大たい聖せいに向かっていく。さらに空へ意識を向けることも忘れない。

さわやかな青空に雷雲を呼び、そのぶあついヴェールから雷らい霆ていを落とさせる。

「ちっ。バチバチと鬱うつ陶とうしいのう！」

前方と上方からの稲妻を避けながら、斉天大聖が舌打ちした。

普通ならば雷いかずちに灼やかれて大おお火傷やけどを負い、衝撃で吹っ飛ばされる。しかし、斉天大聖の鉄てつ頭とう鉄てつ臂ぴは帯電し、吹き飛びこそするが、ダメージ自体はなさそうだ。

大聖が接近し、如によ意い金きん箍こ棒ぼうで殴りかかろうとすれば、護堂が雷で突き放す。

幾度もその繰り返しとなった。電光を喰くらい、その衝撃で後方へ吹き飛ぶ大聖。しかし、ダメージを受けている様子はまったくない。鋼はがねの肉体がつくづく恨うらめしい。

「ええい、このままでは埒らちがあかんっ。――天てん驚きよう地ち驚きよう、急きゆう急きゆう！」

一六〇センチ程度だった神しん猴こうの背丈が倍近くになった。体の厚みも当然増える。

護堂の放つ雷を受けて、踏ん張る大聖。

膨ぼう張ちようした巨体は、その衝撃にも持もち堪こたえた。にやりとサルの顔が笑い、前進をはじめる。雷に伴う衝撃を、大型化することで凌しのぐつもりなのだ！

「くそ、だったら——」

　護堂は稲妻のエネルギーをボール型にまとめた。球雷を作り出したのだ。

　サイズはバスケットボール程度。絶えず小さく放電を続ける球体。これを斉天大聖に向けて叩きつける。ひとつだけではなく、五つまとめて！

「ぬ、ぐおおおおッ。小こ癪しやくな真ま似ねをしおる！」

　斉天大聖と激突した五つの球雷は、一気に電流を解き放った。大型化した敵を、数で押し返す算段だった。そこで神猴はいきなり元のサイズに戻り、横に跳んだ。

　そして繰り出すのは分身の術——。

　斉天大聖・孫悟空は二〇体以上に姿を増やし、一斉に護堂へ飛びかかってくる。

「邪じや悪あくなる者、我を打つ能あたわず！」

　雷雲より稲妻を落とす。自分の周囲三六〇度を雷で取り囲む。

　イオンの異臭が鼻をつく。だが、襲ってきた大聖は全て稲妻で薙なぎ払った——否いな。そう思った瞬間、天空より軽けい捷しよう無む双そうの神猴が飛び降りてきた。

　分身を目くらましにして、本体は上に飛んでいたのだ！

　振り下ろされる如意金箍棒。護堂は転げるようにして跳び退いた。

　そして、ふりだしに戻る。またも草薙護堂と斉天大聖は真っ向からにらみ合う。

　だが、敵はあまりに千せん変ぺん万ばん化か。いずれ何らかの奇策で打ち倒されてしまう——。護堂が危き惧ぐしたとき、右腕がうずいた。

　己オレを頼れと訴えている。丈ます夫らをの誉ほまれを示せと訴えている。

　フン。護堂は鼻を鳴らした。

「幽かく世りよでもそうだったけど、お節せつ介かいなヤツだな……。まあでも、その作戦はいただきだ！」

　斉天大聖に向けて、右腕を突き出す。

「ちっ……またバカの何とやらでバチバチするヤツかい」

「いいや、今度のはすこしちがうぞ。鋼の体を持つあんたに稲妻はそれほど効かないようだからな……。とっておきを喰くらわせてやるよ！」

　鼻はな白じろむ大聖にうそぶく。これが決まれば、勝利は草薙護堂のもの。はたしてどうなる？

「我は最強にして、全ての勝利を掴つかむ者なり！　全ての敵と敵意を挫くじく者なり！」

　言こと霊だまをつむぐ。聖なる軍神の権能に神刀の力を掛け合わせる。

　そう、神刀・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの力を！

　――化外の民をまつろわせ、その特質を我がものとする劍。草くさ薙なぎ護ご堂どうの佩はい刀とうとなった今は、主が傷つけた神の力を吸収して己おのが力とする。羅ら翠すい蓮れんとの戦いでは『竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』を吸収し、とどめの一撃となった。

　神との戦いがなければ武器として機能しない、何とも扱いづらい道具である。

　だが、この劍にはもうひとつ、面白い使い道がある。

「全ての敵は我を――勝利の化身こそを畏おそれよ！」

　雷雲より稲妻を呼び、落とす。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを収めた腕に。この劍のもうひとつの使い道。それは草薙護堂の権能を吸収して、新たな異能を発現させることなのだ！

「我は立ちふさがる全ての敵を打ち破らん！　全ての悪魔を打ち破

らん！」

　腕のなかに眠る神刀が雷電を吸収し、べつの力——磁じ力りよくを放ち出す。

　古き倭やまとにおける製鉄は、砂鉄を溶かすところからはじまった。そうして精せい錬れんした鋼はがねを剣に造り替えた。つまり倭の剣は砂鉄——磁じ鉄てつ鉱こうと呼ばれる金属なのだ。

　自然界では磁鉄鉱に稲妻が落ちて、磁力を宿す時がある。

　護堂と天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎはこの現象を再現した。膨ぼう大だいな電力、絶大な磁力、そして鋼がそろう今。

　ある奇跡が可能となる——！

「行け、斉天大聖！　宇宙の果てまで飛んでいけ！」

「う……ぬおッ!?　こ、この力は——!?」

　大電流を以もつて磁力を放つ、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの秘術・電でん磁じ鉄てつ鉱こう。

　磁石の性質はふたつ。くっつき合うか、反発し合うか。作り出した磁力を後者に用いて砲弾を——今回は斉天大聖・孫そん悟ご空くうを弾き飛ばす。

　金鋼の体を持つ神猴は、護堂の右腕が放つ磁力に囚とらわれ、空へ昇る。

　宇宙へ向けて飛び立つロケットさながらに、すさまじい速さで天へ駆け上がっていく。

　電磁力によって物体を加速させ、超高速で撃ちだすのが電磁砲レールガン。この原理を用いて、大質量を宇宙へ発射するのがマスドライバー。護堂はウルスラグナの権能と天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎで即席のマスドライバーを造り、鋼の神猴を蒼そう穹きゅうへ撃ちだしたのだ！

　地球の大気は下から対流圏、成層圏、中間圏、熱圏から成る。

　熱圏を突破すれば外気圏、そして宇宙だ。このままいけば、斉天

大聖を地球から放ほう逐ちくできる。しかも、超音速で飛ひ翔しようする物体には空力加熱が発生し、すさまじい熱に襲われる。さらに大気圏最後のエリア・熱圏は、二千度にも達する超高温の世界。

　あの大敵を倒すのにも十分な条件だと期待したいのだが、どうなる——!?

4

　燃える弾丸となって天へと昇る斉せい天てん大たい聖せい。

　神しん速そくによる移動に慣れた彼だが、こんな形での加速は初めての体験だった。

　実のところ神速とは『速く動く』能力ではない。『移動時間を短縮する』能力なのだ。『Ａ地点からＢ地点に時速数百キロで動く』のではなく、『Ａ地点からＢ地点までコンマ数秒で動く』力といおうか。物理的にスピードを速めるのではなく、移動に要する時間を歪ゆがめる能力なのである。ゆえに、もうひとつ初めての体験があった。

　超音速到達による空力での加熱、大気圏突破を試こころみることによる加熱である。

「熱あちちちちちちちっ!!　こいつはかなわん！　さすが神殺し、無茶苦茶やるわい！」

　燃え尽きる前に、地上へ戻らねば。神通力を振るい、電磁力の中和に努める。

　黄金の雲も呼んだ。とにかく地上へ向けて急降下だ。重力や地球の磁じ気きなど、己おのれをこの星につなぎ止める諸力にも帰還を手伝わせようとする。

「二に弟ていに三さん弟ていよ、おぬしらも合力せい！　我を大地に呼び戻すのじゃ！」

　幾いく万ばん里りを隔へだてようと、義兄弟の契ちぎりが意思を

通じさせてくれる。

　しかし、予想外のいらえが返ってきた。窮きゆう地ちにあるのは弟たちも同じだったのだ。

「観かん自じ在ざい菩ぼ薩さつ、行ぎよう深じや般はん若にや波は羅ら蜜みつ多た時じ、照しよう見けん五ご蘊うん皆かい空くう、度どーいつ切さい苦く厄やく、舎しや利り子し、色しき不ふ異い空くう、空くう不ふ異い色しき、色しき即そく是ぜ空くう、空くう即そく是ぜ色しき！」

　羅ら翠すい蓮れんが唱となえるのは般若心経。

　涅ね槃はんの境地に達した乙おと女めの謡うた声ごえは『竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』によって、魔風の衝撃波となる。

　呪じゆ力りよくは本来、無色無形無臭の実体なきもの。だが、羅翠蓮は権能を駆使して、ある性質をあたえていく。

「受じゆ想そう行ぎよう識しき、亦やく復ぷ如によ是ぜ、舎しや利り子し、是ぜ諸しよ法ほう空くう相そう、不ふ生しよう不ふ滅めつ、不ふ垢く不ふ浄じよう！」

　さらに気がふくれ上がっていく。風が威力を増していく。

「ちぃぃぃっ、女によ人にんの分際で小こ癪しやくな真ま似ねを！」

　何か恐るべき作業に集中する羅翠蓮へ、天てん蓬ほう元げん帥すい・猪ちよ剛ごう鬣りようは五つの武器を繰り出す。

　矢を放ち、戟げきに剣、斧おのと棍こん棒ぼうを続けざまに打ち込む。

　それらを阻はばむのは衝撃の風。

　三面六臂の巨神と教主のいる周辺を吹きすさび、あらゆる自然の創造物を薙なぎ倒している魔風が元帥神の武具を前へと進ませない。滅びの謡をつむぐ佳か人じんにさわらせない。気体でありなが

ら防壁となって、立ちはだかる。

「急きゆう急きゆう如によ、北ほく帝てい明めい威い口こう勅ちよく、律りつ令りよう！」

　猪剛鬣は言こと霊だまを唱となえ、渾こん身しんの膂りよ力りよくを振りしぼる。じりじりと五つの兵器が動き出す。羅翠蓮の肢し体たいへと近づいていく。だが、魔教教主の奥おう義ぎがついに完成した。

　魔風に光が混ざる。羅翠蓮の体から放たれる、黄金の光が風に溶けていく。

　これも『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』の生む顕けん身しん。黄金の仁に王おう尊そんではない。光は羅翠蓮と猪剛鬣の間で集まり、形を取り、巨大な掌しようとなる！

　我が心、空なり。しかし我が掌は凶きよう風ふう颶ぐ風ふうのごとく――。

「ふ、ふおおおおおおおおっ⁉」

「力は骨より発し、勁けいは筋きんより発す！　是これ、先せん天てん無む極きよくの一いつ掌しようなり！」

　猪剛鬣の巨体と同じほど大きな黄金の掌は、今、巨大な掌打となった。

　炸さく裂れつ――。三面六臂の巨神を真っ向から打ち、その顔面を、胴を、足を、ぐしゃりとつぶす。脳を揺さぶり、五ご臓ぞう六ろつ腑ぷを衝撃で貫つらぬき、骨を粉ふん砕さいする。

　そして、黄金の掌は猪剛鬣をわしづかみにして、握りつぶしにかかる。

「我が義弟は斉天大聖を天へ放ほう逐ちくしたらしい。義姉たるわたくしがそれに倣ならうのもまた一いつ興きよう。下げ劣れつなる軍神よ、天上へ失せなさい。目め障ざわりです！」

　陣頭に立って戦いながらも、広く戦場を見渡す。

　千里眼の巫ふ力りよくを持つ道どう姑こならではの異才を発揮し

て、羅翠蓮は言った。

　彼女の掌しよう打だが天を突く。すると大力を宿した黄金の掌は、猪剛鬣をバキバキと握りつぶしながら天空へと押し上げていった。

「があああああああああっ！」

　飛昇する猪剛鬣の絶叫が、むなしく天にこだました。

「……すごい。教主のバカ力はあんなことまでできるのかよ」

　天へ駆け上がっていく猪剛鬣と黄金の掌。

　デタラメも極まった光景を目撃して、護堂は感じ入った。自分と天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが即席のレールガンでやったことを、かの魔教教主は腕力と武芸でやってのけたのだ。

　護堂は羅濠教主のいる場所へ向かっている途中だった。

　ぐらぐら揺れる地面の上を、苦労しながら走る。

　目指す先は、更さら地ちになっていた。中央に立つのは、麗うるわしき魔教教主。まちがいなく魔風の権能を使ったあとだ。

「来ましたね、弟よ。見てのとおり、姉も陋ろう劣れつなる天てん蓬ほう元げん帥すいを駆く逐ちくしたところです。……おまえが斉天大聖をやりこめるのも見ておりました。まずはみごとと言っておきましょう」

　誉め言葉が投げかけられた。視覚を飛ばす魔術を用いていたようだ。

　しかし、誉めた割りに羅翠蓮の視線は険しかった。

「ですが、今さっき胡乱うろんなつぶやきを聞いた気がします。おまえがわたくしのことを『教主』などと、他人行儀な呼び方をしていたような……空耳かとも思ったのですが……」

　探るように見み据すえられて、護堂は慄りつ然ぜんとした。

　もしかして猪剛鬣の昇天を見たときの嘆声か？　あれが聞こえるとは、なんて地獄耳！

「念のため、今一度教えましょう。さあ『お姉さま』と呼ぶのです、弟よ」

「おおお、お……姉、さま……」

　促されて、ぎこちなく言う護堂。偉大なる義姉はかぶりを振った。

「いけませんね。他に並ぶ者なき、雄ゆう渾こんにして仁じん慈じあふれる至上の姉……天地をあたためる太陽のごとくおまえを照らす、至し尊そんの姉への敬けい慕ぼがこもっていません。わたくしを崇すう拝はいし、慈いつくしむ気持ちと共に『お姉さま』と呼ぶべきなのです。精しよう進じんを怠おこたらぬように」

　……レベルの高すぎる要求だった。話題を変えなくては！

「と、ところで、き――ね、姉さんはあまり苦戦しなかったみたいですねっ」

「無論です。あの猪ちよ剛ごう鬣りようは天てん蓬ほう都と元げん帥すい真しん君くんとはいえ、従じゆう属ぞく神しんとして顕けん現げんした身」

　教えたとおりに呼ばない護堂に、義姉は眉まゆをひそめている。

　だが、しばらくは勘かん弁べんしてもらうしかない。姉さんと呼ぶだけでもこそばゆいのだ。

「覚えておきなさい。『まつろわぬ神』の強さを決めるのは、神話においての強大さ、偉大さではありません。どれほど信仰が流る布ふしているかでもない。彼らの手強さを決定するのは、どれほど揺るぎない己を持つか――なのです」

　揺るぎない自己。つまり強固なアイデンティティーということか。

「他の何者にも依存しない心の在り方。己の欲するところをどこまでも――全ての人を滅ぼし、天地を造り替えようとも完かん遂すいせんとする意志。それこそが神の強さです。そして他の神に従属す

るということは、その相手がいなければ自らの存在を保てないのと同義」

　ウルスラグナ、アテナ、斉天大聖のことが思い出される。

　記憶を失っていた聖なる軍神は、真の己を取り戻して大いに強まった。ギリシアの処女神はゴルゴネイオンを取り戻して、強壮なる古き地じ母ぼ神しんとなった。名も気き概がいも失っていた猿えん猴こう神しん君くんは、封印を解かれて大英雄として再臨した。

　なるほど、そうだったのか――。納得して、護堂はうなずいた。

「じゃあ、深じん沙しゃ神しんと戦ってるスミスも今頃は……」

「余程の椿ちん事じがなければ、優勢でいることでしょう。ただし」

　羅翠蓮は鋭く天を見上げた。

「従属神は主の庇ひ護ごを受け、主は従属神の支援を受けて、より強大な猛威となるもの。この仕合、ここからがむしろ本番でしょう。弟よ、気をゆるめてはなりません」

　そういえば、右腕に眠る天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。

　あれを比較的たやすく倒せたのは、主のスサノオが幽かく世りよにおり、しかも戦いに無関心だったからだ。では、そうでないときはどうなるのか――。

「やはりアイデンティティーの曖あい昧まいな神は、十分な能力を備えていても最後の局面でのしぶとさ、打開力に欠ける――。想像どおり、と言ってもかまわないかな」

「ぐはっ……バカな!?　この矢はさきほど防いだはず――！」

　黒き魔鳥の姿で風に乗るジョン・プルートー・スミス。

　悠ゆう然ぜんと空を舞いながら彼が見下ろすのは、蒼あお白じろき魔弾によって胸を撃ち抜かれた深沙神。人間ならば、確実に心臓を射ぬいているはずだ。

「これが独立した神格であれば、舞い戻ってくるアルテミスの矢を素直に喰らってくれるはずもない。ありがとう、君のおかげで推測の正しさを確認できた」

　さきほど氷の竜に跳ね返された、ふたつの魔弾。

　宇宙めざして遥はるかな上方世界へと飛び、しかし、その途中でＵターンして地上に舞い戻ってきたのだ。氷竜たちは折り重なるようにして楯たてになり、反射しようとする。二発の魔弾のうち一発はどうにか跳ね返せたが、もう一発は防ぎ切れず、深沙神は撃ち抜かれた……。

　一ひと月つきに六発しか撃てない月神の魔弾。それだけに一発の威力がすさまじい。

　全弾まとめて撃ち放てば、カリフォルニア全土を七日間決して消えない焔ほのおで呑み込み、灼き尽くしたうえで、あとには雑草すら二度と生えない荒野を生み出すという。

　それほどの武器なのだ。跳ね返す程度で無力化はできない。斉天大聖のように、消滅させられなかった時点で深沙神の敗北は決定的だった。

「くっ……ならば！」

　氷竜の頭上で撃ち抜かれた深沙神は、その手より水流を放った。狙うのはもちろん空を舞う黒き魔鳥。この反撃を、スミスはひどく大胆に防いでみせた。

「悲しいな。君の悪あがきは美しくなさすぎる。私の手並みを際きわ立だたせるだけだ」

　狙われた魔王は空中で変身を解いた。

　黒き魔鳥から黒衣黒面のジョン・プルートー・スミスに。

　体のサイズが大幅に小さくなったため、深沙神の攻撃は素通りしていく。そのままケープを翼のごとくはためかせて落下。墜おちながら改めて魔銃を構え、深沙神を撃つ。

「ぬぐはっ——！」

　今度は腹をぶち抜いた。くずおれる深沙神。六発の魔弾もこれで残り一発のみ。だが、三神の一角を崩せたのだから是ぜとしよう――。

　地上へ落下しながらスミスがひとりごちたとき、唐突に斉天大聖の声が響いた。

『二に弟ていに三さん弟ていよ、おぬしらも合力せい！　我を大地に呼び戻すのじゃ！』

「承知いたしました、大だい兄けい！　残された身み共どもの力を全て託しまする！　今こそ三神一体となって、羅ら刹せつどもを討ち滅ぼすとき！」

　何!?　驚きよう愕がくするスミスの目の前で、捲けん簾れん大将・深沙神の姿はほどけた。

　光る砂のごとく細かい粒子となって、上空を目指す。

　黄金の掌と共に昇天する天蓬元帥・猪ちょ剛ごう鬣りょう。

　やはり義兄の声を聞いた彼も、いよいよ観念することに決めた。

「くぅぅぅ、口惜しや。酒に博ばく奕ちに女！　乳ちち尻しりふともも！　まだまだやるべきことは数多いというのに、この体ていたらく！　だが背に腹は代えられん。兄者、今参りますぞい！」

　掌に握りつぶされていた猪剛鬣の巨体もほどけた。末まつ弟ていと同じように光る粒子となって掌の拘こう束そくを逃れ、空を翔かける。目指すは兄貴分のいる天上の方角！

　そして、斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くう。

　超電磁砲の弾丸となって宇宙を目指す神しん猴こうは、真しん言ごんをひたすらに誦しようす。

「貪とん狼ろう、巨こ門もん、禄ろく存ぞん、文もん曲ごく、廉れん貞じよう、武む曲ごく、破は軍ぐん！　北天の七しち星せいよ、

霊れい験けんかくあれかし！」

　そこに従属神二柱の神気・精せい髄ずいが馳はせ参じる。それを取り込み、神通力を高める。

「蛇よ、竜よ、血と骸むくろを我に捧ささげよ。焔ほのおよ、鉄を灼やいて鋼はがねと成せ。鎚つちよ、鋼を打ち、刃と成さしめよ。清せい冽れつなる水よ、刃を冷やせ！　全ては我が剣神の性さがを高めるために！」

　より揺るぎない己を得るために、剣神としての原点に立ち戻る。

　剣として為なすべきことを定め、それに必要な力をかき集める。

　我が討つのは魔王ども。我が斬り裂くのは羅ら刹せつども。斉天大聖・孫悟空はこれより修しゆ羅らに入いり、破は邪じや顕けん聖せいの御み劍つるぎとならん！

　大いなる力が心身を満たしていく。

　剣神としての使命を再確認し、古き盟めい約やくへの批ひ准じゆんを表明したためだ。

「哈ハ――――――――ッ！」

　斉天大聖はついに電磁力の呪じゆ縛ばくを断ち切った。

　遥はるか眼がん下かに倭やまとの国土を見下ろしながら、如意金箍棒をその手に呼ぶ。

　いよいよ反撃のとき。ニヤリと笑って巨大化する。まずは猪剛鬣と同じほどの大きさに。まだまだ丈を伸ばせるが、これ以上大きくなればすばやさが減じてしまう。

　次は、馳せ参じた義弟たちの番だ。

　猪剛鬣の精髄エツセンスを黒き猪に変化させる。ただし、今の大聖とも釣り合いが取れる巨大さで。その背にまたがり、騎獣とする。

　そして深沙神の精髄エツセンスを竜に変える。斉天大聖の背に沿うようにまといつき、号令あらば即座に敵を襲う体勢だ。

　これで三神一体、準備は万端。

　三妖神の体が白き焔に包まれ、流星となって地上に墜おちた。

　だいぶ日につ光こうから離れていたので、そちらの方角に軌道修正する。高熱に包まれながら成せい層そう圏けんを通過し、ついに対流圏へと帰還した。

　下界が見えてきた。男なん体たい山さん、中ちゆう禅ぜん寺じ湖こ、戦せん場じようヶが原はら、湯ゆノ湖こなど——。

　途中、黒き魔鳥の影を遠くに目撃した。

　神殺しのひとりが自分を追いかけている。いいだろう、すぐ蹴け散ちらしてくれる。

　ふたたび戦場ヶ原に降り立つ斉天大聖——。

　しかし今回は、衝撃で地形が変わった。黒き猪いのししにまたがり、竜を従えた斉天大聖の勇姿が大地を抉えぐり、土と緑と花々を吹き飛ばして、クレーターを穿うがったのだ。

　大穴の底で大聖は騎き獣じゆうの腹を軽く蹴り、地上に登らせた。

　黒き魔鳥も舞い降り、黒き衣の男に変化していく。地上では乙女と少年のふたり連れがこちらに駆けてくるところだった。

『さあて神殺しども、最後までつき合ってもらうぞ！』

　斉天大聖は眼下の宿敵たちへ快活に呼びかけた。

　かくして三人のカンピオーネは一体化した三神と対たい峙じした。護堂は『山羊』の化身のままである。祭司の力が、斉天大聖たちは三神一体になったと教えてくれる。

　騎馬の代わりに猪剛鬣が変じた黒き大おお猪じし。

　深沙神の変じた竜も、大聖の背後で長い胴をうねらせている。

　そして、スキタイにルーツを持つ鋼のサルは如意金箍棒を握る。

馬上試合に臨のぞむ騎士さながらの姿だった。ただし、サイズが尋常でない。身の丈十数メートルの、異相の騎士だ。

　斉天大聖の二の腕で毛が逆立ち、ロケットのように飛び立った。

　上空より無数の毛が飛来する。きらきら金色に輝き、人の背丈よりも長い。先端は針のように尖とがっている。こいつが刺されれば鉄板でさえ突き破られるはず！

「……まずい！」

　思わず護堂は叫んでいた。散開する王たち。針が大地に突き刺さる。あの調子で喰くらったら串刺しだ！　しかも、今のはただの第一陣。

　続いて撃ち出された針の弾幕が、空を覆いかくしてしまう！

「逍しよう遥よう遊ゆうにいわく、至し人じんに己なく、神しん人じんに功こうなし！　聖人に名なし！」

　羅ら翠すい蓮れんの謡が耳じ朶だを打ち、衝撃の魔風が数千本の針を吹き飛ばす。

　だが、そこで三位一体の妖神たちが動きはじめた。

　ガッ！　大地が揺れる。

　黒き大猪が斉天大聖を乗せて走り出す。激走する。疾しつ駆くする。その速さ、まさに疾風。あんな大きさなのに、目にも止まらぬスピードであった。

「忽たちまちにして全てを斬り刻む者よ、勝利のために来きたり給たまえ！」

　護堂は反撃に出た。ふたたび天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと稲妻で大磁力を生み、大聖の肉体を宇宙に撃ちだそうとする。だが、さっきよりも重量がとんでもなく増しているため、すぐには効果が出なかった。ダメだ、間に合わない！

　斉天大聖の駆る大猪がすぐそばまで迫ってきた。

　護堂、スミス、羅翠蓮を踏み砕かんとする猪の蹄ひづめ。もう

レールガンは通用しない！

「樹きを抱き山を撥はつして大力と成せ！　金きん鐘とうを重ねて鉄てつ布ぷの衫さんをまとうべし！」

　そこで魔教教主が飛び出していった。

　彼女の背より立ちのぼった陽かげ炎ろうが黄金の仁に王おう尊そんとなり、騎獣の突進を受け止める。さすがの膂りよ力りよくであった。だが、その瞬間に猪の背から斉天大聖が飛ぶ。

『哈————ァァァァ！』

　とんぼを切って仁王尊の背後に降り立ち、黄金色の背中を如意金箍棒で打ち据えた。

　グフッ！　仁王の凛り々りしい表情が歪ゆがむ。それでも後ろ蹴りを背後に見舞う。しかし蹴りは軽やかにかわされ、ふたたび如意金箍棒がうなる。

　バンバンバンバンバン！　軽快迅じん速そくなること、爆竹のごとし。

　炸さく裂れつ音が響く。あっというまに百打以上の連打が決まり、仁王尊はしたたかに打ちのめされた。とどめの一突き。黄金の裸ら形ぎようは為なす術すべなく吹っ飛ばされる。

　このとき地上から黒き影が飛び立った。

　ジョン・プルートー・スミスがふたたび黒き魔鳥に変身したのだ。

　地上戦では勝ち目がないと踏んだのだろう。だが、飛ひ翔しようする凶鳥を追いかけるものがいた。大聖の背後に控えていた長き蛇体——竜だった。

　魔鳥と同じ速さで飛び、魔鳥の進路をふさぎ、自由に飛ばせない。

　その間に、なんと大猪が空へ高々と跳んだ。竜と共に魔鳥を襲うつもりなのか？　だが、この跳躍は届かない。竜と鳥が相争う空の高みには、わずかに及ばない——。

　ここで斉天大聖も飛翔した。

　翼があるかのごとき、巨体の重みも感じさせない軽けい捷しようなジャンプ。

　如意棒を手にした神猴が目指すのは、空中の大猪。その毛皮を踏み台にして、もう一度飛翔する。かくして斉天大聖は魔鳥と竜の争う高みへと到達した。

　如意金箍棒の一いつ閃せん。

　キュアアアアアアアアアッ！　頸くびを打たれた魔鳥が絶叫し、墜落していく。

「くっ……さすが大聖……なかなか苦戦させてくれます……」

　護堂の前では、羅翠蓮が膝ひざをついていた。

　口から血の滴しずくがしたたっている。仁王尊の受けたダメージが彼女にも影響しているのだ。

「このうえは我が神功の全てを繰り出し、三位一体を突き崩してくれましょう……。護堂、姉の戦いぶりをしかと見届け、今後の糧かてとしなさい。よいですね？」

　傷ついても尚、勝利を求めて立ち上がろうとする。

　羅翠蓮の闘志、精神はまさにカンピオーネの典型であろう。エピメテウス——愚者の落とし子と呼ばれた者たちは、戦術も勝算も超えて猛たけり狂うことこそ本領なのだ。

　そして、彼女ならば本当に勝ってしまうかもしれない。

　この窮きゆう地ちをひとりで切り抜けてしまうかもしれない。

　だが、それではダメだ。護堂はかぶりを振った。『かもしれない』ではダメだ。

　俺は勝つ。そのためにできることを全てやる。草薙護堂の描いた勝利の絵図には、この女性の力が、傷つき地上へ墜落してくる青年の力が必要なのだ。

「――姐ねえさん」

　護堂は初めて彼女を、その呼称でなめらかに呼んだ。

「あれほど言ったでしょう、お姉様と呼びなさいと。おまえは本当に覚えが悪い……」

「姐さん。そんなこと、今はどうでもいい。あのサル野郎に勝つには、俺たちも三人で連係しなくちゃダメだ。ひとりで戦うなんて、言わないでくれ」

　乙女の目を正面からのぞき込み、真しん摯しに訴える。

「大体、初めての共同作業とか言ったのは姐さんの方だぞ。もう忘れたのか？　俺は、この戦いを絶対に勝利で終わらせたい。絶対にだ。そのためにできる手は全部打ちたい。だから、俺といっしょに戦ってくれ。一生のお願いだ」

「お、おまえはそこまで、この仕合に入れ込んでいたのですね」

　ならば早く言えばいいものをと、羅翠蓮は頬ほおを赤らめながらうなずいた。

「いいでしょう、義弟のわがままを聞くのも義姉たる者の務め。駄目とは申しませぬ。わたくしたちの絆きずなとすべき、この大勝負。何としてでも勝利しましょう」

　了承した姉貴分へ、すべきことをかんたんに指示した。

　時間もないし、即席のチーム。手順はできる限り簡潔にすべきなのだ。

　野球をやっていた頃、護堂は代表・選抜チームで練習や試合をする機会が多かった。しかも、守備の要かなめである捕手のポジションで。こういう仕切りには慣れていた。

「我が金こん剛ごう力りきの淵えん源げんよ、今こそ天地を引き裂く大たい勁けいを！」

　魔教の乙女が呼びかけ、黄金の阿あ吽うん一いつ対つい――二体の仁王尊が顕れる。

先せん鋒ぽうとなる彼女には、全力を振りしぼってもらわねばならない。それゆえの顕身ふたつの同時使用であった。

——銃火器が発達する以前、騎馬の兵団は後の戦車にも匹敵する武力だった。

その理由は、攻撃力と機動力における絶対的なアドバンテージだ。騎行することにより、歩兵よりも遥はるかに迅じん速そくな移動ができる。疾しつ駆くする馬に騎乗しての攻撃は、絶大なる突進力の恩恵を受けることになる。これに弓矢、卓越した騎兵戦術などの要素が加わり、多くの騎馬民族が東洋と西洋を席せつ巻けんしていく下地はできあがる。

そして今、巨大な斉天大聖が大猪に乗って、戦場ヶ原を疾駆する。

立ち向かうのは徒か歩ちの仁王尊が二体。歴史が証明した騎兵優位の大原則に、みごと抗あらがってみせる魔教教主の武功はまさに驚嘆すべきものだった。

斉天大聖を乗せた大猪の突進チャージ。

それを受け止める阿あ形ぎよう仁に王おう尊そん。しかし、猪の鋭い牙きばで脇腹を抉えぐられる。

阿形を踏み台にして、乗り手である神猴に襲いかかる吽うん形ぎよう仁に王おう尊そん。ひらりと跳躍して、必殺の掌打を繰りだす。

しかし、これは如意金箍棒で受け止められる。

大聖の背後に控える竜は、ここで吽形に牙きばをむき、喉に喰らいつく。

その間も下の大猪は突進を止めない。超絶の大力を持つ仁王尊と互角の力比べ。阿形は全身の筋肉を隆起させて、騎馬の動きを阻はばんでいる。

……全力だから隙すきができる。騎士たる斉天大聖は棒を一振り。

阿形仁王尊の頬ほお面づらをしたたかに打ち抜く。

持ち堪こらえてはいるが、劣勢だ。その間、護堂はひたすら呪力を高めていた。

敵のサイズが規格外なので、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎにも臨界点まで力を注ぎ込んでやりたいのだ。

しかし、その間にもやるべきことがある。護堂は倒れている青年に近づいた。

さっき魔鳥が墜落した辺り。草むらの上でうずくまり、しかし必死に立ち上がろうとしている仮面の王がいる。

「もしかして、もう戦えないってオチはないよな？」

「ボクシングなら、カウント８エイトというところだな。まだかろうじていけるだろう。奇跡の逆転劇を演じる前振りとしては十分だろうさ」

減らず口は健在だった。ならば、大丈夫だ。立ち上がろうとする男に護堂は手を貸さなかった。ジョン・プルートー・スミスも助けてくれとは言わなかった。

数秒後、ふたたび肩を並べたふたりはニヤリと笑みを交わし合う。

スミスの顔はもちろん仮面で見えないが、ふてぶてしく笑っているに決まっている。

こいつはまちがいなく、そういう男だ。

「君の練り上げている呪力、何か面白い仕込みをしているようだな。察するに、教主殿はそのための時間稼ぎか。……ふむ。意外と男に尽くす素質があるらしい」

「だから、妙なことは言うなっ。それより、俺はこいつでこれから仕掛ける」

胡乱うろんなことを言うスミスに、護堂はいちばんの重要事項を告げた。

「でも、とどめを刺すのはあんただ。前に言ってた、熱と焔ほのおの切り札を使えるか？」

「安心し給え、せっかくの見せ場を放りだすほど私は控えめな男じゃない。いつでもかまわんよ。……で、君にはどんな成算があるのかな？」

　護堂の語った内容に、スミスは仮面のなかで口笛を吹く。

　そろえた人差し指と中指をキザなしぐさで振り、返答代わりにする。――なかなかふざけたアイデアだ。よろしい、一口乗ろう、と。

　よろよろと頼りない足取りで、黒ケープの青年は離れていく。

　だが心配はしない。いつでもかまわんと言った男に、そんな失礼な真似はしない。だから護堂は天に右手を差し上げ、仕上げに入った。

「爰ここに須す佐さ之の男おの命みこと、国を取らんとて軍いくさを起こし、小さ蠅ばえなす一千の悪神を率そつす――」

　第二の権能なのか武器なのか。判然としない劍を呼び起こすため、言霊を唱える。

　権能というには、ときどき妙にお節介すぎる。武器というには、あまりに護堂の内部へ深く入り込んでいる。こいつを倒したときの状況が混こん沌とんとしていたせいだろうか。

「一千の剣を掘り立て、城じよう郭かくとして楯たて篭こもり給ふ――」

　……いい言葉がある。おまえも己オレを『相棒』と呼べばいい。

　右腕の奥でささやかれて、護堂はうなずいた。曖あい昧まいな関係をまとめる、よい呼び方だ！

「なら、行くぞ相棒。――天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ、抜ばつ刀とう」

　それは能力でも所有物でもない、共闘者への呼びかけだった。

　雄お々おしく応えるのは、仲たがいすれば力を貸してくれない可能性さえある相棒だ。

『応！　是これ所いわ謂ゆる、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ也。ちはやぶる千せん釼けん破はの鋼なり！』

　神刀・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎがついに鞘さやから抜き放たれた。

　天へ向けた右手の上に、白銀の光が集まりだす。まつろわぬ夷い狄てきの威いを奪い、我がものとする劍。羅ら翠すい蓮れんとの戦いでは『竜りゅう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』を模も倣ほうし、とどめの一撃で役立った。

　ならば今回は当然、斉天大聖・孫悟空の力——鋼の権能だ！

　護堂の頭上で白銀の光は実体化し、白銀の輪になった。



　大聖と同じ鋼で造られた金輪……名付けるならば、やはり『緊きん箍こ児じ』だろうか。観かん世ぜ音おん菩ぼ薩さつが孫悟空をこらしめるため、三さん蔵ぞう法ほう師しに贈った仏宝だ。

『今こそ南なん蛮ばん・北ほく狄てき・東とう夷い・西せい戎じゅうを滅ぼすときぞ！　外げ道どう覆ふく滅めつせよ！』

「言われなくともッ。行け、天叢雲！」

　右腕を振り下ろすや、白銀の輪は斉天大聖めがけて飛んでいった。

　伸縮自在の如意金箍棒と同じく、この輪もサイズは自在に操れる。大聖と同じく分身も行える。護堂は白銀の輪をまたたく間に巨大化させ、三つに分身させた。

　三つの輪は激しく戦っていた二体の仁王尊、三位一体の斉天大聖にぶつかった。

　しかし、命中と共に仁王尊たちは消え失せる。役目を果たした羅翠蓮がかき消したのだ。

『げ！』『やな予感がするでござるよ!?』『落ち着きなさりませ、大だい兄けいに二に兄けい！』

　三つの輪はそれぞれ斉天大聖、騎獣の大猪、まとわりつく竜に命中し、彼らの体を手て錠じようのごとく拘こう束そくしてしまう。孫悟空の頭を締めつける緊箍児よろしく、白銀の輪は三位一体の大聖たちを輪のなかに封じ込んだ——否！

　ただ一体だけ輪に抑えつけられるのを逃れたのは、やはり斉天大聖。

　ひらりと閃せん電でんの身のこなしで跳躍し、空中に逃れる。しかし、このとき蒼白い閃光が駆け抜け、大聖の額ひたいを撃ち抜いた。

『あ痛ッ!?』

　これはジョン・プルートー・スミス最後の魔弾であった。

直撃を受けても『痛い』で済む頑丈さにいっそ呆あきれるが、この衝撃で鋼の神猴もバランスを崩した。その隙に護堂は天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに命じ、獲物を逃した白銀の輪を飛ばす。今度こそ斉天大聖を虜とりこにしてみせた。

そのまま三つの輪を三妖神ごと、さっき連中が穿うがったクレーターのなかに飛ばす。

だが、拘束するだけでは勝ったことにならない。

そこに飛び込んできたのは黒き魔鳥である。逞たくましい翼が、羽毛が、焔ほのおを発していた。

「滅びのために、我が大業を数えあげよう——。我は終末を呼ぶ夜の斧おの。世界終結の幕を降ろす、黄よ泉みよりの使者！」

これこそ殲せん滅めつの焔。己の体を灼やくことで、皆殺しの力を得る変身体。

黒き焔が、斉天大聖と従属神を封じ込めた輪をも溶かしていく。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが生みだした金輪はどろどろと融ゆう解かいをはじめ、液状になった。

融解した鋼がクレーターを満たし、斉天大聖たちを呑み込んだ。

まさに大自然のなかの溶よう鉱こう炉ろ。無む敵てき不ふ朽きゅうの鋼が溶けていく。形を失っていく。斉天大聖も大猪も竜も、炉のなかでドロドロになっていく。

かつてアテナは語った——鉄をも溶かすほどの超高熱こそが剣神の天敵だと。

護堂が真っ先に思い浮かべたのは溶鉱炉だった。

だから殲滅の焔と天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを以もつて、連中の天敵を造り出したのだ！

《ぐあああああああぁッ！》

断だん末まつ魔まの叫び。ついに斉天大聖・孫悟空と弟分たちは融解していった。

　護堂とスミス、羅濠教主——三人のカンピオーネが完全勝利した瞬間であった。

終　章

　戦せん場じょうヶが原はらでの激闘が終わって十数分後。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうの日常への回帰は、沙さ耶やの宮みや馨かおるからの電話ではじまった。

『どうなるものかとハラハラしましたが、すばらしい勝利でしたね、護堂さん』

「え!?　俺たちの戦い、どこかで観みていたんですかっ？」

　護堂は思わず、無惨に荒らされた戦場ヶ原をきょろきょろ見回した。

　戦闘結果を報告する前に、開口一番に言われたからだ。

『決戦がはじまってからは斉せい天てん大たい聖せいの結界も吹き飛びましたからね。物見の術を使って、東とう照しょう宮ぐうから見物させていただきました。——最後、あなたの仕切りで王の方々が結束されるところも拝見いたしました。ご将来が楽しみになる、みごとな指揮ぶりでしたね』

「あ、いや。べつにたいしたことじゃ……。それより、被害の方はどうなりましたか？」

　変なところを誉ほめられて、護堂は冷や汗をかいた。

　あんな変人たちをまとめるのが上う手まくても、あまり自慢にはなるまい……。

『……被害ですか。まあ、東照宮の方は壊滅的な打撃ですね。復旧には年単位の時間がかかるでしょう。戦場ヶ原のクレーターは、どうごまかすか目下のところ検討中です』

　珍しく余裕のない、本気で悩んでいそうな磬の声だった。

　目の前で口を開けるクレーターの偉容を眺めながら、護堂は恐きよう縮しゆくした。煮えたぎっていた鋼はがねの溶解液もいつのまにか消失している。

　美しい湿原に脈みやく絡らくなく出現した、直径三〇〇メートルほどの大穴。

　ミステリーサークルと呼ぶには巨大すぎる……。

『サルに変身していた市民や観光客も各地で意識を取り戻しています。ぼくらは現在、彼らの心理的ケアをはじめたところです』

「心理的ケア!?」

『はい。保護された被害者の大半はサル化していた間のことを覚えていません。ですが、一部の人たちが言うんですよ。――サルの神様に出会ってサルに化ける悪夢を見た。その夢には恐怖の大魔王も出てきて、俺に手を貸さないとまたサルにされるぞって脅おどされたって』

　護堂はギョッとした。まさか『山や羊ぎ』であたえたプレッシャーのせいか!?

『おまけに東照宮にいたはずなのに中ちゆう禅ぜん寺じ湖こで目を覚ました、家で寝ていたのに外で起きたなんて不思議現象も起きていますからね。集団幻げん覚かくの発生でごまかすには、少々無理のある状態です。そこでぼくらは、催さい眠みん系けい呪じゆ術じゆつによる記憶改かい竄ざんに着手しています』

　とんでもない大事になっているようだ。

　護堂はひたすら恐縮し、そして忸じく怩じたる思いにとらわれた。

『事件被害者のケアと偽って集団催眠を実施し、偽いつわりの記憶を植え込みます。対象者は数千人にもおよぶ困難なミッションですが、みなさんが戦っている間に態勢を整えられました。何とかしてみせますよ』

　神様の情報が出回らないのはこういう努力の結果なのだなァとド

ラマを感じさせる言葉だった。もっとも情報は操作できても、リアルの痕こん跡せきはかんたんに消せないわけで――。

大地に穿うがたれた物的証拠の前で、電話を終えた護堂は嘆息した。

「どうやら、驚くほど被害はすくなかったようだな。すばらしいことだ」

「かねてよりの懸けん案あんだった斉天大聖の討とう伐ばつも終わり、爽そう快かいな気分です。護堂、それにスミスとやら、羅ら濠ごうと共に戦った労をねぎらってあげましょう」

などとのたまう魔王が、すぐ横にふたりもいたが。

ちなみに斉天大聖を倒しはしたが、誰も新たな権能を簒さん奪だつしてはいないようだ。やはり、最後は三対一の格好になったからか。

「では、私はそろそろ失礼しよう――。さらばだ」

「もう行くのかよ？　まだ後始末が済んでないぞ。手伝っていったらどうだ？」

仮面の王から唐突に別れを告げられ、護堂は思わず引きとめた。

共に戦ったのはわずかな時間である。だというのに、奇妙なシンパシーを感じさせる男であった。白状すると、すこし名なごり残惜おしい。

「残念ながら、それはジョン・プルートー・スミスのスタイルではないな。舞台の幕が下りれば俳優は引き下がるもの。戦い終われば英雄も魔王も消え失せるものさ」

キザな口調でスミスは答えてみせた。

こう返されると思っていた。予想が当たって、護堂は苦笑した。

「今回の礼に、あんたが困ったときはアメリカまで手伝いに行ってもいいぞ」

「願い下げだな。君のような災さい厄やくの申し子に来られては、

我が故郷にどんな悲劇が舞い込むか予測もつかない。絶対にやめてくれ。……まあ、来るなと言っても来るなら仕方ないが。そのときは私が責任を持って、君を監視するとしよう」

　黒の革手袋で包まれた右手が差し出された。

　それを握り返す。キザな貴公子ぶりに似つかわしい、やさしげな感触だ。

「麗うるわしき教主殿も、お健すこやかに過ごされよ。また御目にかかる日が来るかはわかりませぬが、ジョン・プルートー・スミス、できればあなたと矛ほこを交まじえたくはないものです」

　黒ケープの王は優美に一礼して、第三の王にも手を差し出す。

『まさか、わたくしとも？』という顔の魔教教主に、つい護堂は言ってしまった。

「姐ねえさん。ここでそれを無視するのは、大人としてどうかと思うんだ」

「な——!?　おまえはまた、そのような目でわたくしを！　わかっておりますッ。姉は処女おとめとして、素顔も定かでない者に手を許してよいのかと躊ちゆう躇ちよしただけです！」

　無理矢理な言い訳をしてから、羅ら翠すい蓮れんは握手に応じた。

　仮面の下で意地悪く笑っているであろうスミスは、手を放すなり変身をはじめる。黒き魔鳥となって舞い上がり、飛び去っていく。

（尚なお、帰りの飛行機で『あの子ったら、何度もあたしを意味ありげに見つめて……。あたしもつい楽しくて、あんなに馴なれ馴なれしくしてしまったわ。もしかして、彼との間に何か運命的な絆きずなが——。バカねアニー、彼は一〇も歳とし下したで、ひどい女好きなのよ。あたしにふさわしい相手じゃないわ。でも、もしかすると、万一ということも……』と、とある米国人女性は悶もん々もんと思い悩む。これは草薙護堂が知ることのない挿そう話わである）

　そして、三人もいた魔王がふたりだけになった直後。

「勝ったのね、護堂！」

　エリカの声だった。向こうから仲間の女子たちがやってくる。

　彼女たちもどうにか無事だったようだ。先頭に立つのはエリカ、祐ゆ理りもリリアナも、恵え那なもあとに続いている。

　驚いたことに甘あま粕かす冬とう馬まと陸りく鷹よう化かまでくっついてきた。

「げふんっ。いや、おつかれさまでした草薙さん。何かお手伝いできないかと東照宮から車を飛ばしてきたのですが、その間に決着がついたようで」

「僕らも玉ぎよく砕さい覚悟で神様と戦わずに済みましたし、万ばん々ばん歳ざいってところですねェ」

　ひさしぶりに顔を見る男性陣、そして少女たち。

　しかし、彼らは途中で動きを止めた。羅翠蓮が護堂の両肩に手を置いたからだ。

「では護堂、『弟』であるあなたを置いていくのは忍びないのですが、君子の交わりは水のごときもの。そろそろ潮しお時どきでしょう。姉は廬ろ山ざんに帰ります」

「……お」「と？」「う……」「と!?」「あ」「ねェ!?」

　エリカにリリアナ、祐理と恵那、そして甘粕、陸鷹化はそろって絶句している。



　魔教教主は無視して話を続けた。彼らの存在など眼中にないのだ。

「また逢う日まで、きちんと精しよう進じんしておきなさい。まず、わたくしのことを教えたとおり呼べるようになるのですよ。よろしいですね？」

「いや、べつに姐さんでいいじゃないか」

　威厳を込めて命じられたが、護堂は受け流した。

　この姉貴分とのつきあい方がわかってきた。常識の通用しない人だから、向こうのペースに呑のまれてはいけない。適度に自己主張しなくては。

「おまえは至し尊そんたる姉への敬意をないがしろにするのですか!?」

「大切なのは、何て呼ぶかじゃない。俺が相手をどう思ってるかだろ？　義兄弟の契ちぎりだっけ？　俺と姐さんはそういう約束を交わした仲間だ。その事実はこれからもきっと、俺たちが生きてる限り変わらない。それでいいじゃないか」

　羅翠蓮に対して、いつのまにか女性に対する気き後おくれを感じなくなっていた。

　多分、やたらと『姉弟』を強調されたおかげだろう。姉なら『女』じゃない。いくらでも遠慮なく口をきける。

「まったく……まあ、弟は多少やんちゃな方が可愛かわいいとも聞きます。特別に許しましょう。ですが、わたくしを姉と呼べるのは地上でおまえだけだという事実を忘れてはなりませんよ。よいですね？」

「ああ。そっちも元気でな。そのうちどこかで逢おう」

　このやりとりを最後に、羅翠蓮は護堂から離れていった。

　彼女のまわりで花びらが舞う。これは牡ぼ丹たんの花か。華麗な花はな吹雪ふぶきに包まれながら、義姉でもある絶世の佳か人じんは消え去った。

「はあ……何と、あの師し父ふがねェ……」

　感じ入ったように、今度は陸鷹化が進み出てくる。

「いや、我が師と義兄弟の契りを結ばれたようで、弟子陸鷹化、師し叔しゆくにお祝い申し上げます」

「師叔!?　変な呼び方をするなよっ」

　抱ほう拳けん礼れいをしながら恭うやうやしく頭を下げる少年に、護堂は文句をつけた。

「うーん、師父の義弟であれば、武芸の方でも目上筋になりますから、めったな呼び方はできないのですよねー。……じゃあ、叔お父じ貴きとかどうですか？」

「もっと悪いだろうッ。俺はヤクザの親分か！」

「天下無ぶ頼らいの武ぶ侠きようをまとめる師父は、ヤクザの大親分みたいなもんですよ。……ま、間を取って叔お父じ上うえあたりが妥だ当とうですかね。では叔父上、鷹化はこれにて失礼いたします」

　珍しく狷けん介かいさのない笑みを残して、陸鷹化も駆け去った。

　さすが軽けい功こう卓たく越えつ。一陣の風のごとく、あっという間に姿が見えなくなった。

　――おそろしく濃い連中と知り合い、思いのほか親しくなった。今回よかったのはそれくらいだな……と、護堂が伸びをしたところで。

「ねえ護堂、いつのまにか教主と親密になったのね。それも、本当に異様なくらいに」

　エリカが華やかな声音で問いかけてきた。

　しかし、なぜだろう？　その華麗さに一点の毒めいた濁にごりがあるような。

「異様ってことはないだろ。話してみたら、結構やさしい人だった

よ。……まあ傍はた迷めい惑わくだし、人里で野放しにしたらいけない人間だとも思うけど」

「で、そんな女性とあそこまで親しくなれたのね。教主は何て言ってたかしら？」

「たしか『弟』です。たった一日か二日でそこまでの関係になるだなんて、エリカさんのご指摘どおり、おかしいと思います。やっぱり護堂さんは——」

　祐理まで痛ましげに目を伏せる。

　この人の宿しゆく痾あはやっぱり完治が見込めないのだわと言いたげな顔だった。

「またひとつ、わたしの仮説を立証する証左が得られました。ほんのすこしでも目を離すと、その隙すきにあなたは決定的な仕事をやってのける。まさしく怪物ですね」

「すごいねー。もう男前すぎて、何て言ったらいいかわかんないや」

　リリアナも深くうなずき、恵那までが苦笑している。

　どうしたんだ、彼女たちは？　護堂はたじろいだ。べつに兄貴分や姉貴分が増えたっていいじゃないか？　どうしてこんなに微妙な反応を⁉

「もう、静かにしてくださいっ。お姉ちゃんも姉さま方も、すこし控えるべきですっ。兄さまは厳しい戦いを終えたばかりなんですよ。もう、そんなことにも気がつかないなんて！」

　思わぬ方向から助けが入った。今まで姿の見えなかった万里谷ひかりだ。

　媛ひめ巫み女こ見習いは缶コーヒーやお茶のペットボトルを抱えていた。

「みなさん、ちょっと女としてのたしなみに欠けると思います。——あ、兄さま、近くのドライブインまで行ってきて、自動販売機でいろいろ買ってきたんです。どれがいいですか？」

「本当か？　そりゃ助かる」

　年長者たちを一いつ喝かつした険しさから一転、ひかりは護堂に笑顔を向けてくれた。

　この寄り道のせいで姿が見えなかったのか。納得した護堂は、ひかりの心づくしを喜んだ。あれだけの激闘のあと、もちろん喉のどはかわいている。

　すると、ひかりは目を細め、慈いつくしむようなまなざしを向けてきた。

　年齢不相応な、妙に女っぽい表情としぐさだった。

「本当はお食事を作って差し上げたいなって思ってたんですけど、ここでそんなことはできませんから……。あ、私、結構お料理得意なんですよ？　お姉ちゃんには負けるけど、この歳なら十分すごい方だと思うんです。今度、私の作ったお弁当、食べてくださいねっ」

「べつにかまわないけど、俺たち学校がちがうぞ」

「そんなの、いっしょにお出かけすればいいだけですっ。たとえば来週の土日とか」

「その辺りは知り合いに頼まれてバイトが――あれ？　みんな、どうした？」

　いつのまにか周囲の雰ふん囲い気きが変わっていた。

　エリカは大げさに肩をすくめ、祐理は怯おびえるような目で妹と護堂を見つめていた。

　恵那は「ついにひかりも女になっちゃったかー。びっくりだなーほんと」と、らしくもない慨がい嘆たん口調であった。

「どうやら賭かけはわたしの勝ちですね、草薙護堂。一月どころか、半月も経たたぬうちに結果が出るとは意外でしたが……」

　そしてリリアナが意味不明なことを言った。

「しかし、過程はどうあれ勝ちは勝ち。リリアナ・クラニチャー

ル、今後は無二の股こ肱こうとしてあなたに仕え、第一の騎士として全てを捧ささげましょう」

へ？　突然の勝利宣言に、護堂は絶句した。意味がわからない。

困惑して、今や唯一の同性である甘粕を見やる。一体どういうことなのか？

「草薙さん……自分で掘った墓ぼ穴けつだから仕方ないですよ」

成り行きを静観していた忍者の末まつ裔えいは、爆笑したいのをどうにか堪こらえている表情だった。

「ひ、ひかり……あなた、どういうつもりなの!?　お、お父様やお母様が知ったら、一体どんなことをおっしゃるか、すこしは考えなさい！」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

顔を真っ赤にする姉に対して、妹の方はまさに泰たい然ぜん自じ若じやくであった。

「姉妹そろって兄さまにお仕えするって言えば、おじいさまとおばあさまは大喜びするに決まってるもの。そうしたら婿むこ養よう子しの父さまはたいしたこと言えないし、母さまものんきな人だから、あまり気にしたりはしないと思うよ」

ふふん。ちょっと勝ち誇るように、ひかりは笑う。

「姉さま方、そういうわけですから、これからもご指導ご鞭べん撻たつのほどお願いします。……あ、でもご安心くださいね。これでも私、最年少の末席にいる者として控えめに振る舞うつもりですから。特にエリカ姉さまには、姉ともどもよろしくお願いいたします」

「どうやら、処世術の素質は姉を遥はるかに上回っているようね……」

しみじみとつぶやきながら、エリカは隣にいる護堂に手をのばす。

ぐいっ。二の腕を思い切りつねり上げられた。

「痛ッ！　何するんだよ、おい!?」

「この程度のおしおきで済ませてあげるんだから、文句を言わないで頂ちよう戴だい。……それとも、一度くらい本当に刺してあげた方が後々のためなのかしら？」

　護堂の文句も取り合わず、『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』は思慮深げに言った。

　そして祐理、リリアナ、恵那、甘粕はなぜか深くうなずくのであった。

　神々と神殺したちの戦いから半日後。すでに日は沈んでいる。

　男なん体たい山さんの頂いただきに、ひとりの美少女がたたずんでいた。遥かな下界に目をやれば、点在する街の明かりが見て取れる。

　そして手元を見れば、くすんだメダリオンが目に入る。

　黄金と鉄より成る合金で造られた円盤。大きさは少女の拳こぶしほど。『剣』を思わせる意い匠しようがひとつ、表面に刻まれていた。

　少女はしばらく、この表面を見つめ続けた。

　すると意匠が増えた。ふたつめの『剣』がメダリオンに顕あらわれたのだ。

「ペルセウスに続いて斉天大聖も斃たおれ、彼らの鋼のみが地上に遺のこされた。かの大聖も、この世の最後に現れる英雄ではなかったのね……」

　クラシックドールのごとき金髪の美少女。年齢は一二、三歳か。かつて羅ら翠すい蓮れんにグィネヴィアと名乗った《神しん祖そ》であった。

「大聖があれを――魔王を滅し、世界を救済する力を呼んだときは、あるいはと思ったのだけど。『最後に現れる者』を最強の《鋼》たらしめる剣の宿星……あれを不完全とはいえ使いこなす辺

り、さすが中華の大英雄というべきなのかしら」

　ため息をつき、メダリオンをしまう。

　ここでグィネヴィアは、なつかしい気配を察知した。

「王子。いとすばやき御身も、闇やみにひそむ技には長たけておられぬようですわね」

「ふん。あいかわらず鼻の利きく魔女だな」

　火山岩の陰から出てきたのは、黒王子ブラックプリンスアレク。

　本名はアレクサンドル・ガスコイン。その名が示すとおり、仏蘭西フランス国にルーツを持つカンピオーネだった。

「貴様にどんな思惑があったのか、探ってみたかったのだがな」

「まあ怖い。……でも、申し訳ございません。この地での所用はひとまず終わりましたゆえ、グィネヴィアは郷く里にに戻ります。いずれまた、欧州でお逢いしましょう」

「ああ。さらばだ、ブルターニュの魔女よ」

　黒王子の神速でも、追いかけっこでは《神祖》にかなわない。

　それを熟知するからだろう、貴公子は無感動に言った。追うそぶりも見せない。黄金の光に包まれて、グィネヴィアは天空を飛ひ翔しようする。

「無駄足になったか。……それにしても、斉天大聖とかいうサルの強さは異常だったな。あの力の源みなもとは、一体何なんだ？」

　天翔る魔女を見送って、アレクはつぶやいた。

　三人ものカンピオーネがいると知り、昼間の戦いに介入する必要はないと判断した。だが、あの力の正体を見極めるため参戦してもよかったか——。

　そこまで考えて、アレクは肩をすくめた。

　もう終わったことだ。今さら気にしても仕方ない。いずれ差し迫った事情が出てきたときに、改めて探ればいいだけだと……。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

VII　斉天大聖

著者　丈月　城

２０１２年４月19日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
VII　斉天大聖」

２０１１年３月15日発行の第３刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット